

中津居館跡

(旧加陽和泉守居館跡)

2012

岩国市教育委員会

なか づ きよ かん あと
中津居館跡
か や いすみのかみ きよ かんあと
(旧加陽和泉守居館跡)

2012

岩国市教育委員会





中津居館跡全景(上が北)



大型建物跡 (SB100301)



寛保元年(1741年)(左)と明治2年(1869年)(右)に居館跡を描いた絵図 (資料編所収)

序

なかづきょかんあと か やいすみのかみきょかんあと
中津居館跡（旧加陽和泉守居館跡）は岩国市を流れる錦川の河口の三角州に立地する中世の居館跡で、現在、居館を囲む一辺100mを超す土壘の基底部がほぼ一周する形で残っています。地域の方からは「朝日長者」または「椿長者」の屋敷とも呼ばれ、屋敷にまつわる多くの言い伝えとともに古くから愛着を持って語られる遺跡です。また、学術的な面から言えば、大規模な平地の中世居館跡が良好に残っている希少な例であり、岩国地域の中世史を語るうえでも欠くことのできない重要な場所としてこれからも大切にされるべき遺跡と言うことができます。一方で、現在に至るまで本格的な調査が実施されておらず、近年の周辺地域の急速な市街化に伴い、開発事業との調整に必要な資料を整えることが急務となっています。

今回、遺跡の範囲、築造時期、遺跡の変遷等を中心とした遺跡の基礎資料を得ることを目的として、文化庁の補助を受けて、平成20年度より3カ年にわたる発掘調査を実施しました。

調査の結果、当初の土壘が幅10mを超える基底部を持つ大規模なものであり、特徴的な構造を持つことが確認されたほか、およそ700年前の14世紀前半代に建っていたと推定される大型建物の跡や、岩国地域で作られたとみられる中世の土器がまとめて出土するなど、岩国市と周辺地域の歴史に新たな事実がもたらされました。当時、洪水などの厳しい自然環境にあった河口付近の三角州にこのような巨大な館を築き、現代に至る発展の先駆けとなつた先人のたくましさには感服するばかりです。

本書は、今回の発掘調査の成果をまとめた記録であり、この報告書が多くの方々の目に触れ、埋蔵文化財についての認識を深め、学術研究や歴史教育の資料として広く活用されることを期待するものです。また、市民の皆さんのがこの遺跡について知るきっかけとなり、地域の宝として後世に伝えていくことができれば幸いです。

最後になりましたが、地元住民の皆さんをはじめとして、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力・ご支援を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財保護行政について、格別のご理解とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

平成24年3月

岩国市教育委員会
教育長 佐倉弘之甫

例　　言

1 本書は岩国市教育委員会が平成20～22年度に実施した、山口県岩国市楠町三丁目所在の中津居館跡（旧加陽和泉守居館跡）の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は国庫補助事業として実施し、国（文化庁）および山口県から補助金を受けた。

3 調査の組織は次のとおり。

事務局 岩国市教育委員会文化財保護課 課長 森脇信夫（平成20年度）
” 水野鉄雄（平成21～23年度）
主　　事 神崎　前（平成20～23年度）（主担当）
臨時職員 蔵中庸夫（平成21～23年度）
” 古室敦子（平成23年度）

技術支援 山口県教育庁社会教育・文化財課

主　　査 石井龍彦（平成20～22年度）
” 河村吉行（平成22～23年度）
文化財専門員 上山佳彦（平成20～23年度）（主担当）
” 岩崎仁志（平成20～21年度）
” 谷口哲一（平成23年度）

調査指導 文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官 坂井秀弥（平成20年度）
文化財調査官 近江俊秀（平成21～22年度）

4 調査にあたっては、山口県教育庁社会教育・文化財課の技術支援を得た。

5 調査にあたり、地権者をはじめ、地元自治会など関係各位の多大な協力・援助を受けた。また、以下の方をはじめ多くの方々の指導・助言を得た。

上田秀夫、大橋康二、小川國治、古賀信幸、鈴木康之、千田嘉博、松下孝幸、松下真実、松田順一郎、宮田伊津美、山田豊、和田秀作、財団法人山口県ひとつくり財団・山口県埋蔵文化財センター

6 本書中の方位は世界測地系による国土座標（第3座標系）の北で表示し、標高は海拔標高である。

7 本書で使用した土色の色調標記はMunsell表色系による（農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』）。

8 調査期間中、当遺跡の名称は「加陽和泉守居館跡（かやいすみのかみきょかんあと）」であったが、加陽和泉守は16世紀の人物であることから、遺跡の本質が誤って理解されるおそれがあると判断し、平成24年2月に所在地の旧地名の表記によって「中津居館跡（なかづきょかんあと）」に変更した。

9 出土遺物実測図の遺物番号は、写真図版の番号と対応する。

10 本書に使用した図面・写真類および出土品は、岩国市教育委員会文化財保護課に収蔵保管している。

11 本書中で使用した遺構略号は次のとおりである。

建物跡-SB 土坑-SK 溝-SD 柱穴-SP 集石-SS 発掘トレンチ-TR

12 本編および資料編に、近世身分制社会で形成された差別的表現が含まれている場合があるが、そのまま掲載した。これは差別を容認するものではなく、当時の封建的社會で使用された歴史的状況を正しく認識していただくためであり、差別問題の克服に資することを意図したものである。

13 本書の作成・編集は、山口県教育庁社会教育・文化財課の指導・助言を受けて岩国市教育委員会が行った。執筆分担はI・II〔神崎〕、III〔神崎（主）・上山〕、IV〔藏中（主）・上山〕、VI〔上山（主）・神崎・藏中〕である。本書中の挿図は藏中・古室・神崎が作成した。

本文目次

I	位置と環境	
1	地理的環境	1
2	歴史的環境	1
3	近世以降の土地利用と周辺の地名等	3
II	調査の経緯と概要	
1	調査に至る経緯	5
2	調査の経過と概要	5
III	遺構	
1	調査区の概要	9
2	居館内部	9
(1)	TR0901・TR1001	9
(2)	TR0903	17
(3)	TR1003・TR1003-2	18
(4)	TR0805	27
(5)	TR0801	27
3	土壘	29
(1)	土壘の現況	29
(2)	調査の方法	29
(3)	TR0902	29
(4)	TR1004	33
(5)	TR0802	38
(6)	土壘構造のまとめ	39
4	堀状遺構	41
(1)	土壘の外の現況	41
(2)	TR1002	41
(3)	TR0803	42
(4)	TR0804	46
IV	遺物	
1	出土遺物の概要	47
2	土器・陶磁器・土製品・瓦	47
(1)	弥生土器ほか	47
(2)	土師器	48
(3)	遺構出土・遺物包含層出土土師器	53
(4)	その他出土土師器	53
(5)	中世瓦質土器・陶器等	56
(6)	貿易陶磁器	58
(7)	SK090105 出土近世陶磁器	58
(8)	近世陶磁器 1～3	60
(9)	近世陶磁器 4	66
(10)	近世陶器・土器	66
(11)	土製品・陶製品	68
(12)	瓦	69
3	金属製品	74
(1)	鉄製品・鉄滓等	74
(2)	銭貨	74
4	貝殻・人骨	77
(1)	貝殻	77
(2)	人骨	78
5	遺物観察表	79

本文目次

V 関連分野報告・分析

1 加陽和泉守居館跡現地踏査所見 千田嘉博	89
2 弘中氏・賀屋氏と岩国地域—「中津居館跡」の築造主をめぐって— 和田秀作	91
3 中津居館跡の地形条件と堆積物の観察結果 松田順一郎	96
4 中津居館跡出土の中世人骨 松下孝幸・松下真実	108
5 中津居館跡における放射性炭素年代(AMS測定) (株)加速器分析研究所	117

VI 総括

1 遺跡の現況	121
2 発掘調査成果の概要	122
(1) 遺構について	122
(2) 遺物について	130
3 居館について	136
(1) 中津居館跡の構造と特徴	136
(2) 岩国地域における中津居館跡の歴史的位置づけ	140
(3) 居館の築造時期と変遷についての総合的検討	142
4 まとめ	146
(1) 発掘調査成果のまとめ	146
(2) 今後の課題と展望	147
(3) おわりに	148

VII 資料編

1 文献	153
2 絵図	159
3 空中写真・地籍図	170
4 関連年表	171

図版目次

- 卷頭図版1 中津居館跡全景（上が北）
- 卷頭図版2 大型建物跡（SB100301）出土状況
寛保元年(1741年)〈左〉と明治2年(1869年)〈右〉に居館跡を描いた絵図
- 図版1 中津居館跡周辺地域の地形（南から）
中津居館跡周辺地域の地形（西から）
- 図版2 中津居館跡全景（北から）
中津居館跡全景（南から）
- 図版3 TR0901 中世遺構面検出状況（東から）
TR0901 近世の瑞光寺関連建物遺構SB090101(北東から)
- 図版4 TR0901 SS090103 磐石痕・根石痕検出状況（南から）
TR0901 SS090102 根石痕検出土状況（北から）
TR0901 石 090105 根石痕・遺物出土状況（南から）
TR0901 SK090107（東から）
TR0901 SK090105（近世）（東から）
TR0901A 近世遺構面検出状況（東から）
TR0901C 近世遺構面検出状況（北から）
TR0901D・E 近世遺構面検出状況（東から）
- 図版5 TR1001 全景（北西から）
TR1001 東壁深掘り（北西から）
TR1001 SK090105 およびSS100101（西から）
TR0903 全景（南から）
TR0805 全景（東から）
- 図版6 TR1003 全景（北から）
- 図版7 TR1003 全景（南西から）
TR1003 全景（北西から）
- 図版8 TR1003-2 全景（南東から）
TR1003-2 全景（東から）
- 図版9 TR1003 SB100301-SP01（西から）
TR1003 SK100301-SP02（西から）
TR1003 SB100301-SP03（西から）
TR1003 SB100301-SP04（南から）
TR1003 SB100301-SP05（南東から）
TR1003 SB100301-SP06（南から）
TR1003 SB100301-SP07（南から）
TR1003 SB100301-SP07（手前）・SP08（奥）（北から）
- 図版10 TR1003 SB100301-SP09（東から）
TR1003 SB100301-SP10（東から）
TR1003 SB100301-SP11（東から）
TR1003-2 SB100301-SP12（東から）
TR1003-2 SB100301-SP13（東から）
TR1003-2 SB100301-SP14（東から）
TR1003-2 SB100301-SP15（南から）
TR1003-2 SB100301-SP16（南から）
- 図版11 TR1003 SK100309・SK100310・SB100301-SP03検出状況（西から）
TR1003 SK100310 土器出土状況（東から）
TR1003 SK100313 鉄滓出土状況（東から）
TR1003 近世遺構面検出状況（北から）
- 図版12 TR0902 全景（南東から）
TR0902 西壁（北東から）
- 図版13 TR0902 南端近世遺構検出状況（南から）
TR0902 上層集石および北端集石（南から）
TR0902 土壙充填石・北端集石（南から）
TR0902 北端深掘りおよび北端集石（南東から）
TR0902 西壁（北から13～17.5mの範囲）（東から）
TR0902 西壁（北から7～13mの範囲）（東から）
TR0902 西壁（北から3～9mの範囲）（東から）
TR0902 西壁（北から0～5mの範囲）（東から）
- 図版14 TR1004 土壙断ち割り西壁（北東から）
TR1004 土壙断ち割り東壁（北西から）
- 図版15 TR1004 西壁（北から12～15mの範囲）（東から）
TR1004 西壁（北から10～13mの範囲）（東から）
TR1004 西壁（北から7～11mの範囲）（東から）
TR1004 西壁（北から4～9mの範囲）（東から）
TR1004 東壁（北から8～14mの範囲）（西から）
TR1004 土器集積100401検出状況（東から）
TR1004 南壁および南端上面集石（北から）
TR1004 SK100401（東から）
- 図版16 TR0802 全景（北から）
TR0802 西壁（北から0～4.5mの範囲）（東から）
- 図版17 TR0802 集石上層（南から）
TR0802 集石上面（北東から）
TR0802 西壁（北から3～6mの範囲）（東から）
TR0802 土壙断ち割り（北から5～10mの範囲）（北から）
TR0802 西壁および土壙断ち割り（南から）
- 図版18 TR1002 全景（北から）
TR1002 土壙基底部検出状況（北から）
- 図版19 TR1002 土壙基底部検出状況（東から）
TR1002 東壁（北から18～21mの範囲）（西から）
TR1002 土壙基底部・南壁・残存土壙（北から）
TR1002 東壁（南西から）
TR1002 東壁（北から0～6.5mの範囲）（南西から）
- 図版20 TR0803 全景（西から）
TR0803 土壙基底部検出状況（南から）
TR0803 土壙基底部検出状況（南から）
TR0803 土壙基底部断ち割り状況（南西から）
TR0804 全景（南東から）
- 図版21 出土遺物1 SK100310出土土師器
- 図版22 出土遺物2 SK100310出土土師器
- 図版23 出土遺物3 土器集積100401出土土師器・その他土師器
- 図版24 出土遺物4 その他土師器
- 図版25 出土遺物5 鍋・貿易陶磁器・甕・擂鉢・火鉢ほか
- 図版26 出土遺物6 近世陶磁器
- 図版27 出土遺物7 近世陶磁器
- 図版28 出土遺物8 擾鉢・甕・土製品・瓦（近世）
- 図版29 出土遺物9 瓦（近世）・鉄製品・鉄滓・銭貨

挿 図 目 次

- 第1図 中津居館跡の位置と周辺の遺跡
第2図 中津居館跡周辺の地名
第3図 調査年次別調査区配置と現況写真撮影位置
第4図 遺跡全体配置・トレンチ設定図
第5図 TR0901実測図（近世後期～幕末・明治期遺構面）
第6図 SB090101実測図
第7図 SK090105実測図
第8図 TR0901・TR1001実測図（中世末期～近世遺構面）
第9図 TR0903実測図
第10図 TR1003実測図（近世遺構面）
第11図 TR1003東側拡張区実測図（建物跡検出状況および遺物包含層面）
第12図 TR1003・TR1003-2実測図
第13図 SB100301（大型掘立総柱建物跡）実測図
第14図 SK100310（一括廃棄土坑）周辺実測図
第15図 SK100310（一括廃棄土坑）実測図
第16図 SK100313実測図
第17図 TR0805実測図
第18図 TR0801実測図
第19図 TR0902集石上面実測図
第20図 TR0902実測図
第21図 TR0902近世遺構実測図
第22図 TR1004集石上面実測図
第23図 TR1004実測図
第24図 土器集積100401実測図
第25図 SK100401実測図
第26図 TR0802実測図
第27図 TR0802集石上面実測図
第28図 TR1002実測図
第29図 TR0803実測図
第30図 TR0804実測図
第31図 遺物実測図① 弥生土器ほか
第32図 遺物実測図② 一括廃棄土坑（SK100310）出土土師器1
第33図 遺物実測図③ 一括廃棄土坑（SK100310）出土土師器2
第34図 遺物実測図④ TR1004出土土師器（土器集積100401ほか）
第35図 遺物実測図⑤ 遺構出土・遺物包含層出土土師器
第36図 遺物実測図⑥ その他出土土師器1
第37図 遺物実測図⑦ その他出土土師器2
第38図 遺物実測図⑧ 中世瓦質土器・陶器等
第39図 遺物実測図⑨ 貿易陶磁器
第40図 遺物実測図⑩ SK090105出土近世陶磁器
第41図 遺物実測図⑪ 近世陶磁器1
第42図 遺物実測図⑫ 近世陶磁器2
第43図 遺物実測図⑬ 近世陶磁器3
第44図 遺物実測図⑭ 近世陶磁器4
第45図 遺物実測図⑮ 近世陶器・土器
第46図 遺物実測図⑯ 土製品1
第47図 遺物実測図⑰ 土製品2
第48図 遺物実測図⑱ 土製・陶製品
第49図 遺物実測図⑲ 瓦1
第50図 遺物実測図⑳ 瓦2
第51図 遺物実測図㉑ 瓦3
第52図 遺物実測図㉒ 瓦4
第53図 遺物実測図㉓ 鉄製品
第54図 遺物実測図㉔ 鉄製品・鉄滓等
第55図 遺物実測図㉕ 錢貨
第56図 大型掘立総柱建物跡（SB100301）配置図
第57図 居館内部・土塁・堀状遺構全体断面模式図
第58図 一括廃棄土坑（SK100301）と他の遺跡出土土器の法量分布図
第59図 中世平地城館跡の比較図

表 目 次

- 第1表 土壙断ち割りトレンチの層序ブロックと土壙構造の対応
第2表 出土貝類一覧表
第3表 遺物観察表（土器類）
第4表 遺物観察表（土製・陶製品）
第5表 遺物観察表（瓦）
第6表 遺物観察表（鉄製品ほか金属類）
第7表 遺物観察表（錢貨）
第8表 調査成果一覧表

I 位置と環境

1 地理的環境

なかづきょかんあと

中津居館跡は岩国市楠町三丁目に所在する。周辺は瀬戸内海に向かって開けた岩国市の中心をなす平野部で、2級河川錦川の河口に形成された三角州の頂部に位置する。

錦川（流域面積501km²、流路延長110km）は山口県と島根県の県境に近い中国山地に源流を発し、河口から約4km上流で今津川と門前川に分流して三角州を形成する。居館跡が位置する三角州が形成され始めるのは11世紀頃とされ、東側の大部分は近世以降の干拓と埋め立てによる。末端に岩国航空基地を有する。気候は瀬戸内海型気候に属し、一年を通じ穏やかである。

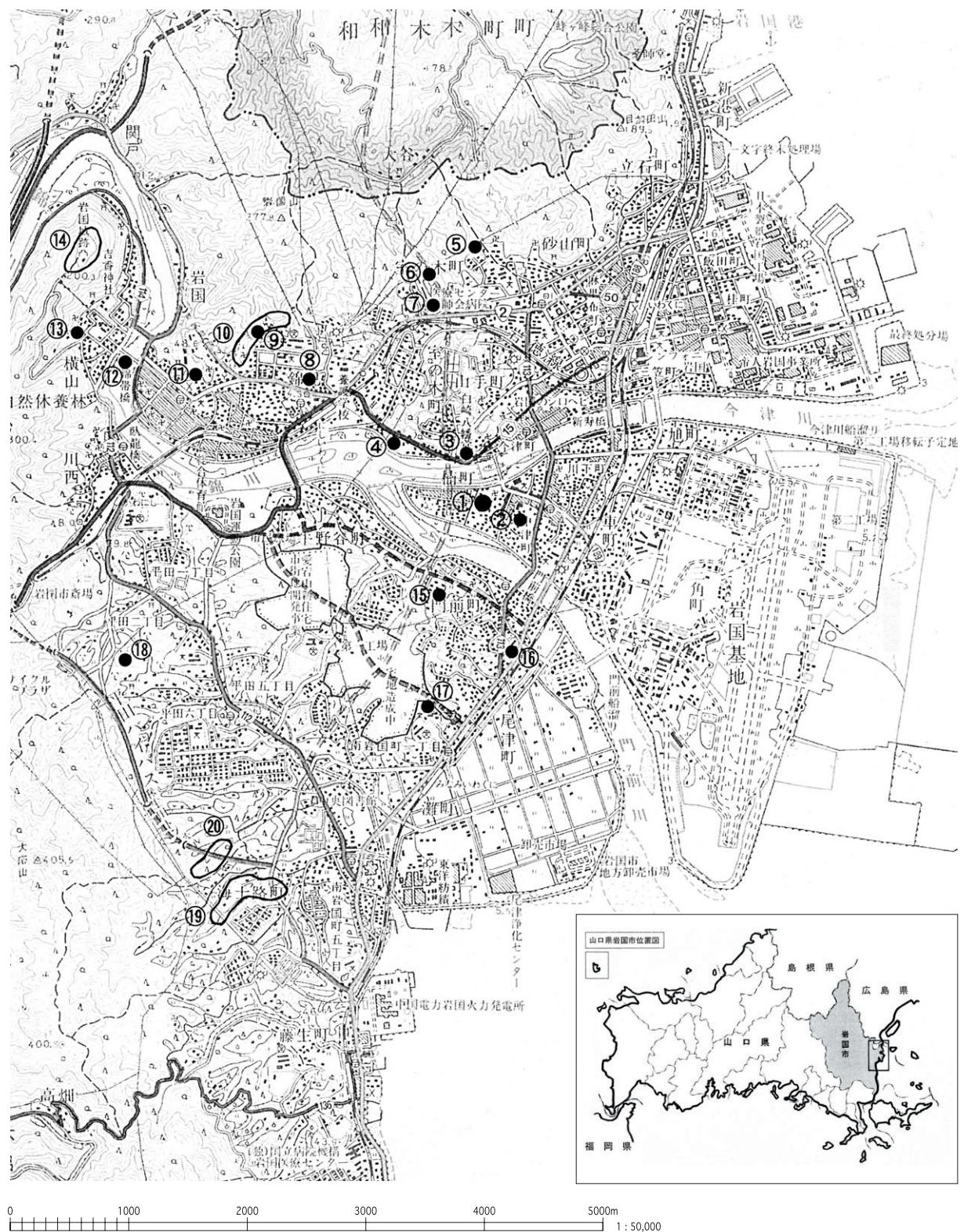
2 歴史的環境

錦川流域において旧石器時代の遺物は各地で散発的に採集されているに過ぎないが、錦川に合流する宇佐川上流の冠高原一帯は旧石器時代から石材に利用されたデイサイトの産出地として著名である。錦川上流の本郷盆地および広瀬盆地には縄文時代の遺跡が知られており、郷遺跡では多数の縄文土器片と石器、狩猟用落とし穴が確認されている。下流域では、平野部を望む丘陵に弥生時代の大円寺山遺跡および錦見遺跡、古墳時代の江臨寺谷横穴などが分布する。しかし、これらの遺跡に関する情報は乏しく、一帯の古代史像を描き出すには不十分といえる。

平安時代末期、平家に属し岩国（石国）氏を名乗る一族が岩国を拠点に周防東部に勢力を持っていたが、壇ノ浦の合戦を境に衰退し、代わって勢力を伸ばしたのが清繩氏（後の弘中氏）といわれる。清繩氏は建長2年（1250年）良兼のときに都濃郡の遠石八幡宮を勧請して八幡小社を創建し、さらに貞和4年（1348年）弘中兼胤が社殿を白崎山¹⁾に移し、社領を寄進して伽藍を整備した²⁾。以降、岩国荘の鎮守として最盛期には十二坊を有し代々弘中氏が宮司を世襲した。弘中氏の一族は山口を拠点とした守護大名大内氏に仕え、15世紀初頭の大内氏寺興隆寺の「供養勧進帳」及び「一切経勧進帳」には複数名が名を連ね、陶氏、杉氏らと並んで奉加額も多額であった。庶家の弘中武長は一時大内氏直属水軍の総司令官を務め、同じく庶家の弘中重勝は応仁の乱の際に大内政弘に従って上洛し、大内氏奉書の奉者を務めている。これらの事実から弘中氏の一族は大内氏家中の中枢を担ったと考えられる。

中世における当居館跡を取り巻く周囲の状況は、近世以降の史料から推測せざるを得ない。居館跡から門前川を挟んだ対岸に喜楽寺跡と伝える場所があり、現在もこの地域を門前と呼ぶ。喜楽寺は真言宗の大寺で弘中氏の菩提寺とされるが、天正年間に毛利輝元の命で本堂が解かれた後、海路で運ばれ、安芸広島の洞春寺に転用された³⁾。また上流の錦川左岸に、弘中氏の居城とされる亀尾城跡⁴⁾がある。大円寺山と呼ばれる標高36mの小山に築かれた連郭式の山城で、周辺に「城ノ前」「舟入」などの地名が残る。亀尾城跡の西600mには、厳島の合戦直前、陶晴賢の武将江良房栄が自刃した場所とされる琥珀院跡⁵⁾がある。琥珀院の1km西方の横山の永興寺は、延慶2年（1309年）大内弘幸の開基と伝えられ、大内義興と子の義隆の代に尼子氏攻略の拠点となった。また、厳島の合戦直前に陶晴賢が布陣し、その後の毛利元就の防長進攻においても弘治3年（1557年）まで拠点とされた。

弘中氏の所領支配における経済的基盤は、錦川および瀬戸内海の水運によってもたらされる通行税などが考えられ、当居館跡と白崎八幡宮、さらに対岸の喜楽寺を結んだ海岸線一帯は弘中氏所領の政治経済の中心地であったとみられる。弘中氏一族の惣領とみられる弘中隆兼は、弘治元年（1555年）陶晴賢と共に厳島で毛利元就と戦ったが敗れ、隆兼父子は自刃した。



- ①中津居館跡（旧加陽和泉守居館跡） ②穂田元清館跡 ③白崎八幡宮 ④関所山城 ⑤室の木貝塚
- ⑥室の木墳墓群 ⑦室の木遺跡 ⑧大円寺山遺跡・龜尾城跡 ⑨琥珀院跡 ⑩錦見遺跡 ⑪江臨寺谷横穴
- ⑫錦帶橋 ⑬岩国藩主吉川家墓所 ⑭岩国城（山上要害） ⑮喜楽寺跡 ⑯愛宕遺跡 ⑰深田ヶ浴遺跡
- ⑱平田城跡 ⑲海土路遺跡 ⑳海土路貝塚

第1図 中津居館跡の位置と周辺の遺跡

弘中氏に関する史料は断片的で今後さらなる研究が必要と思われる。

元就の防長進攻の序盤戦である弘治元年（1555年）10月の鞍掛城⁶⁾合戦の直後、元就は永興寺、小早川隆景は琥珀院、吉川元春は当居館跡に駐留⁷⁾しており、当時ここが重要な軍事拠点であったことがうかがえる。巖島の合戦を境に岩国は毛利氏の支配下となり、川内警固衆の一人であった賀屋和泉守武頼が当居館跡を管理下に置いたとみられる。当居館跡が近世以降の文献で「加陽（賀屋、賀陽）和泉守の屋敷」と呼ばれるのはこのためである。賀屋氏は、もともとは安芸武田氏の直轄水軍として太田川を中心活動していたが、天文10年（1541年）武田氏滅亡を境に毛利元就の直轄水軍に組み込まれていた。巖島の合戦後、慶長6年（1601年）に吉川広家が岩国に入封するまでの約45年間の内、賀屋氏による居館跡の管理がいつ頃まで続いたかは不明である。

慶長7年（1602年）吉川氏は城下の整備に着手し、当居館跡の西約1kmの錦川に堰を築き、それまで本流であった門前川の流れを堰き止めて今津川を本流とし河口に今津港を整備した。2代領主吉川広正は、万治3年（1660年）中津で自身の隠居屋敷と家臣の屋敷地の造営に着手し、寛文元年（1661年）に完成しここに移った⁸⁾。同2年（1662年）永興寺の石翁に命じて、当居館跡に瑞光寺を再興した。瑞光寺は応永12年（1405年）に没した大内弘世の娘の菩提を弔うために建立されたと伝えられ、弘中氏との関連も深い寺とみられるが、吉川氏入封の頃には廃寺同然の状態であったとされ、寺伝等は伝わっていない⁹⁾。寛文7年（1667年）に吉川興経の位牌を瑞光寺に移して以降は興経の菩提寺となり、以後も度々増加され、元禄12年（1699年）に興経の150年忌の時点で13石が増加され計30石となった。その後も瑞光寺は毎年、興経の忌日に領主の参詣又は代参を受けるなど、幕末まで吉川家の保護を受けたが、慶応2年（1866年）廃寺になり、薬師堂以外の建物は解体され、替わって藩の弾薬庫および大砲保管庫が置かれた。明治2年（1869年）に藩の命により、土壘を含む旧瑞光寺境内全域が詳細に測量され、分筆のうえ払い下げられた¹⁰⁾。

3 近世以降の土地利用と周辺の地名等

当居館跡は近世「中津村」に属した。中津は中州に由来するといわれる。17世紀中頃の中津村周辺の様子は寛文8年（1668年）の領内絵図¹¹⁾に見ることができる。ここでは「中津村」は「ナカヅ」と表記され、現在では同じ三角州を構成する「車村」との間に川が流れ、中津村が独立した州のように描かれる。享保期の絵図¹²⁾では開作がすすみ、中津村と車村はほぼ地続きとなる。中津村および車村で開作が本格化するのは17世紀中頃以降になるが、それ以前の州の末端は「姥ガ原」であり、「姥ガ原」の西の「下カウゲ」「エイガハナ」辺りまでは安定した土地が形成されていたとみられる。居館跡周辺では、居館跡の西に、寛文3年（1663年）に吉川広正が隠居屋敷および家臣の屋敷地を築いたことに由来する「御屋敷アト」の地名が見られる。また「中村」の辺りは、近世の地誌で、古者の話として吉川氏入封以前に市があったとされる¹³⁾。明治20年（1887年）の地籍図¹⁴⁾では、居館跡は字「河本」と字「背戸場」¹⁵⁾にまたがる。居館跡周辺で居館を直接連想させる地名は今のところ確認できない。居館跡の東の「大門」の地名は、中世末期に穂田元清の命で築かれたとされる館の跡に由来する。元清の館跡とされる方形の区画の東には「馬場」「船入」などの地名が見られる。



第2図 中津居館跡周辺の地名

参考文献

岩国市史編纂委員会 『岩国市史 上・下』 岩国市役所 1970年

『岩国市史編さん委員会』『岩国市史 通史編一 自然・原始・古代・中世』 岩国市 2009年

山田豊「賀屋一族について」(『岩国郷土史研究』第5号)2006年)

三

- 1) 白崎八幡宮の現在地であり、当居館跡と今津川を挟んだ対岸に位置する。
 - 2) 資料編 文献 1『白崎御宝殿棟札』
 - 3) 資料編 文献 3『萩藩閥閱録卷 54 入江七郎左衛門』毛利輝元書状
 - 4) 「一、古城山 亀尾城山。白崎八幡宮の大宮司弘中三河守居城の跡なり。弘治、巖島合戦に弘中討死して、城破却せしなるべし。」『享保増補村記』錦見村の項
 - 5) 「陶どの被仰者、さてハ丹後守、元就へ内通候て之儀ニ候哉、とて岩国琥珀院にて、丹後ニ腹を御切せ之由、承及候。」『森脇覚書』安芸攻略の事
 - 6) 山口県岩国市玖珂町谷津に在った山城。弘治元年（1555 年）11 月 14 日合戦時の城主は杉隆泰。
 - 7) 「其日、岩国永興寺まで御打入候。隆景様琥珀院、元春様中津かや和泉所御宿陳候。」『森脇覚書』防長進軍の事 資料編 文献 8
 - 8) 広正の隠居所及び家臣の屋敷地は寛文 6 年（1666 年）の広正の死後、寛文 12 年（1672 年）には年貢地に戻った。
 - 9) 資料編 文献 4『寺社由来記』、文献 6『享保増補村記』
 - 10) 資料編 絵図 4-④明治 2 年作成の絵図がその時の測量図。
 - 11) 資料編 絵図 1『御領内之図』参照。
 - 12) 資料編 絵図 2『享保増補村記 附図 中津村』参照。
 - 13) 資料編 文献 6『享保増補村記』、文献 7『玖珂郡志』参照。
 - 14) 資料編 地籍図 参照
 - 15) 近隣の和木町・柳井市にも「背戸場」の地名が有り、・河川に接する・開作地の上流付近に位置する、などの共通点から瀬戸に由来する地名か。

II 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

中津居館跡は18世紀の地誌「享保増補村記」に土塁の規模が示されるなど、古くから存在は知られていたが、学術的調査は行われてこなかった。平成9年に岩国市文化財審議会委員の棟安唯夫氏が文献をもとに現地を調査し土塁の規模を明らかにし、直後に山口県教育委員会および岩国市教育委員会が行った現地踏査によって、土塁の良好な残存状況が確認された。

平成19年4月に岩国市道路課より市道中津56号線（仮称）の計画について岩国市教育委員会文化財保護課に協議があり、遺跡の重要性を考慮し、県教育委員会を交えて事前協議を行った。その結果、道路計画は遺跡への影響が避けられないと見られ、事業主体である市道路課との調整のため早急に遺跡の規模、築造時期等、遺跡の基礎資料を得る必要が生じた。このため岩国市教育委員会では、文化庁の国庫補助金を受けて、平成20～22年度の3年度にわたり現地での調査を実施し、23年度に報告書作成を行った。なお、調査にあたっては山口県教育庁社会教育・文化財課の技術支援を受けた。

2 調査の経過と概要

発掘調査に先立ち、平成20年4月に調査候補地の選定を行った。調査地を選定するうえで、①居館内部の遺構の残存状況、②土塁の構造、③堀の有無、の3点について確認することを目的に現地踏査を行い、最終的に調査可能な候補地を絞り込んだ。調査は第1次（平成20年度）、第2次（平成21年度）、第3次・第3次追加調査（平成22年度）として実施した。

なお、調査は、遺跡の内容確認を目的とすることから、調査範囲の拡大や遺構の掘り込み等は必要最小限に留める方針で実施した。

第1次調査は平成20年7月28日に着手し、10月2日までの間に5カ所のトレンチ調査（TR0801～0805）を実施し、主な成果として、特徴的な土塁構造と、土塁から堀状に落ち込む痕跡が確認された。調査は連日の猛暑に見舞われ作業員の健康管理に配慮しながらの調査となった。9月20日に現地見学会を行い周辺住民など60人の参加があった。9月27日には川下供用会館で調査成果の報告会を開催し50人の参加があった。また、9月24日には調査現場に隣接する川下小学校6年生児童の見学会を行った。この見学会は以後22年度まで毎年実施し好評を得た。

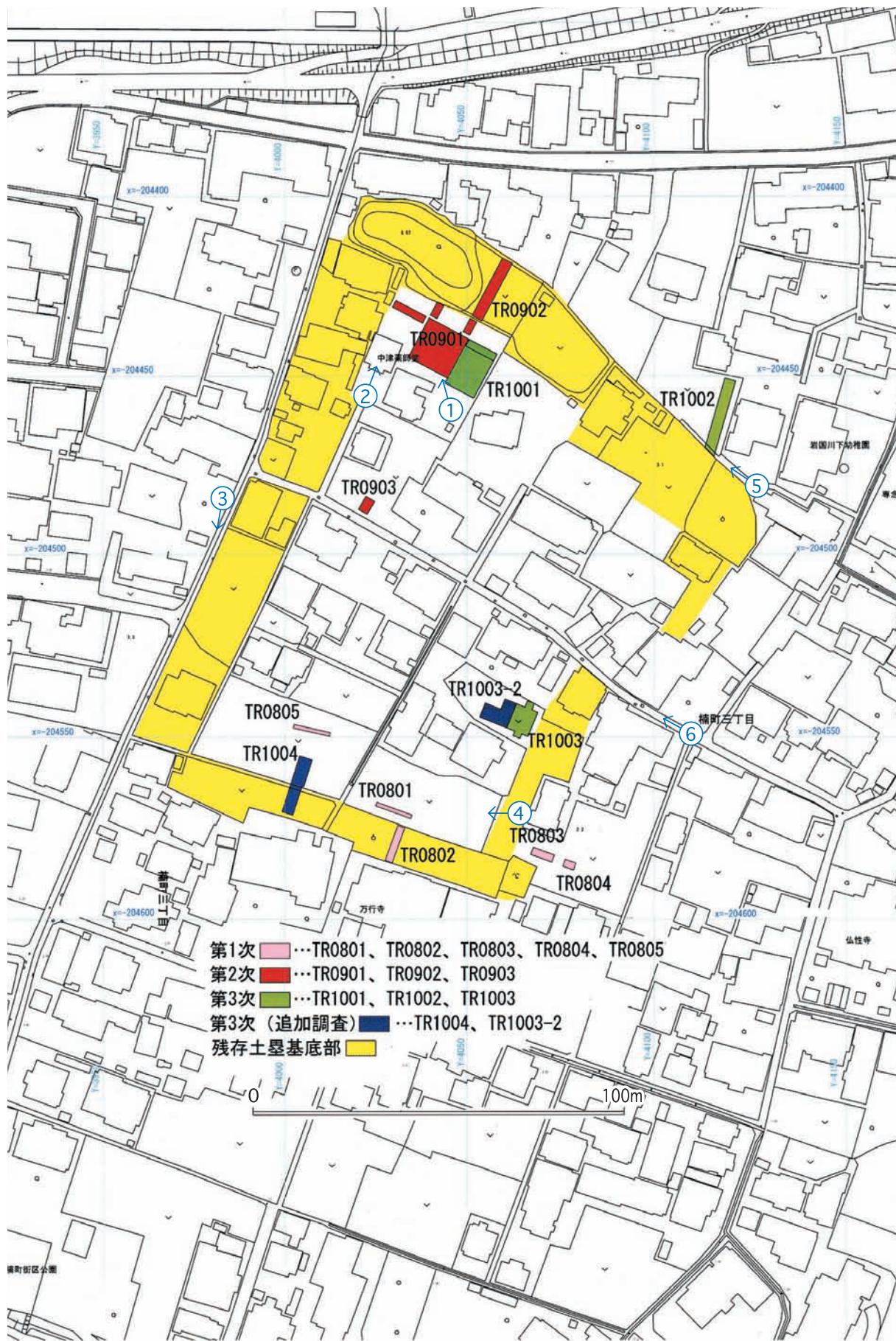
第2次調査は、平成21年5月25日から同9月4日の間、遺跡の北西地区を中心に、1調査区（TR0901）と2カ所のトレンチ調査（TR0902・0903）を実施



調査風景（第2次）



川下小学校児童の見学（第2次）



第3図 調査年次別調査区配置と現況写真撮影位置



①北土壘・北西隅



②中津薬師堂



③西土壘



④南土壘



⑤北土壘・北東隅



⑥出入り口(虎口)
こぐち

した。当初、TR0901 に於いて中津薬師堂横の空き地に幅 2m のトレーナー 3 本を設定し居館内の遺構の残存状況の確認を行ったが、より広範囲の情報を得ることが必要と判断されたため、トレーナーの規模を 10m 四方に拡大した。これに伴い作業の効率化を図るため 8 月 4 日から重機による表土除去作業を実施した。北土壘に設定した TR0902 についても、表土除去の一部に重機を用いた。TR0901 では、居館存続時期の建物の跡と見られる根石の跡が検出され、北土壘の TR0902 では、前年の南土壘同様に、土壘外側に花崗岩を大量に充填する築壘工法が確認された。8 月 7 日に周辺の地形を含めた遺跡の空中写真撮影を行った。8 月 22 日に現地見学会を行い 100 人の参加があった。

第 3 次調査は平成 22 年 6 月 7 日に薬師堂横の空地に設定した TR1001 から着手し、前年度調査区 (TR0901) と連続して遺構面の確認を行った。トレーナー内の表土除去に小型重機を導入し概ね計画通り調査が進捗したが、7 月 12 日から記録的な豪雨にみまわれ、トレーナー内に溜まった雨水は一時地表面に達する程であった。7 月 21 日からさらに 2 力所の表土除去に着手し、1 力所を堀の有無確認を目

的に北土壘の外に (TR1002)、もう 1 力所を居館内部の遺構の有無確認を目的に居館の虎口があったと推測される付近に設定した (TR1003)。TR1002 では明瞭な堀の形状は見られなかったが、土壘の土取りをした際にできたと見られる幅約 18 m、深さ約 1 m の窪みが確認された。虎口近くに設定したトレーナー (TR1003) では、8 月 25 日に建物の柱を支えた石（地下式礎石）が出土し、調査区を拡大して建物規模の把握に努めた結果、最終的に 1 棟の大型建物を構成する 11 箇の礎石が確認された。建物の規模は少なくとも 4 間 × 2 間（柱間 2.4 m）あり、さらに大規模なものと見られたが、周囲の構造物や土地の制約からこれ以上の調査は困難であり、10 月 19 日に埋め戻しを完了した。8 月 8 日に現地見学会を行い 80 名の参加があったが、居館内での大型建物跡発見に伴い 10 月 2 日に急遽 2 回目の現地見学会を行い 110 人の参加があった。当初の計画では、ここから成果報告に向けた作業に入る予定であったが、第 3 次調査の成果を重視し、県および文化庁との協議を経て、当初計画を変更し追加調査を実施することとした。

第 3 次追加調査は平成 23 年 2 月 4 日に着手し、南土壘で土壘から居館内部まで連続するトレーナーを 1 力所設定した (TR1004)。TR1004 では居館内部の中世遺構面と土壘盛土との間に同時期性が確認された。また、第 3 次調査で見つかった大型建物跡の規模を確認するために、建物跡が見つかった隣に調査区 (TR1003-2) を設けて調査を実施したところ、同じ建物を構成する柱穴が新たに 5 箇確認され、建物の規模は少なくとも柱間 2.4 m で 4 間 × 4 間 (9.6 m × 9.6 m) になると確認された。3 月 5 日に現地見学会を開いて、これらの成果を報告し 80 人の参加があった。埋め戻しにあたり、全面的に真砂土を 10 cm 程度敷きつめ、特に重要なと思われる遺構については入念に養生を行った。その上に被せるように掘削土を埋め戻して旧状に復した。

平成 23 年度は、室内で遺物整理作業を進め、遺物の実測・写真撮影等を行った。資料整理と並行し、近世～明治に廃絶後の居館の様子を描いた岩国歴史館所蔵の絵図 4 点を高精細カメラで撮影しデジタル化した。また、出土遺物の中から土器付着の煤をはじめとする 3 点の炭化物について、放射性炭素年代測定法を用いた年代測定を行った。撮影した絵図の画像、および放射性炭素年代測定の成果を含め、3 カ年の現地での発掘調査成果を整理し、本報告書を刊行した。また、岩国市立の博物館である岩国歴史館において 8 月 21 日～10 月 2 日まで当調査の速報展を開催し、出土品の展示および調査担当者による解説をおこなった。

なお、遺跡の名称「加陽和泉守居館跡」は平成 9 年の遺跡発見時に、岩国領の地誌「享保増補村記」から引用して付けられたが、加陽和泉守が築造主である可能性は極めて低く、築造主や築造時期について誤解を生じるおそれがあると判断し、平成 23 年度に遺跡名称の検討を行った。その結果、現在確認できる遺跡所在地周辺の旧地名で最も古い「中津」（読みはナカツ）を引用し、名称を「中津居館跡」に変更した。



現地見学会（第 3 次）

III 遺構

1 調査区の概要

調査では、①居館内部の遺構の有無および遺構の残存状況等の確認、②土壙の構造の確認、③堀の有無および規模の確認を目的に3年度の調査を行った。調査年度を区別するため、平成20年度に実施した調査を第1次とし、以降、21年度を第2次、22年度の6～10月の調査を第3次、22年度の2～3月の調査を第3次（追加調査）とした。トレンチ番号の最初の2桁は調査年度をあらわし、第1次調査ではTR08、第2次ではTR09、第3次および第3次（追加調査）ではTR10を付けた。トレンチ番号の後ろ2桁は同一年度内で着手した順に番号を付けた。個別の遺構は、土坑（SK）・柱穴（SP）・溝（SD）・石列および集石（SS）・石・土器集積などの遺構種別の略号の後ろにトレンチ番号を続け、その後ろは検出面が新しい物から順に2桁の通し番号とした。

（例）SP100301…SP（柱穴）1003（トレンチ）01（通し番号）

また、居館跡を構成する4方向の土壙について、土壙の位置から、東土壙、西土壙、南土壙、北土壙と呼ぶこととした。

調査によって検出された主な遺構は、大型堀立総柱建物跡1棟、土器一括廃棄土坑1基、土坑29基、溝4条、柱穴74個、土壙3カ所、集石7カ所、土器集積1カ所、堀状遺構2カ所、建物基礎石積（近世）1基、などである。

調査区周辺は2級河川錦川下流の河口に形成された三角州頂部付近に位置し、標高2.6～3m弱で概ね平坦である。周辺は地下水位が高く、標高約1m付近で湧水する。

以下、各トレンチの調査概要と個別遺構の特徴について述べる。トレンチの配置は第4図に示した。調査概要を述べるうえで、トレンチの主要な調査目的ごとに、居館内部、土壙、堀状遺構の順にまとめて報告する。また、それぞれの項目内では着手順に関係なく北から順に説明する。

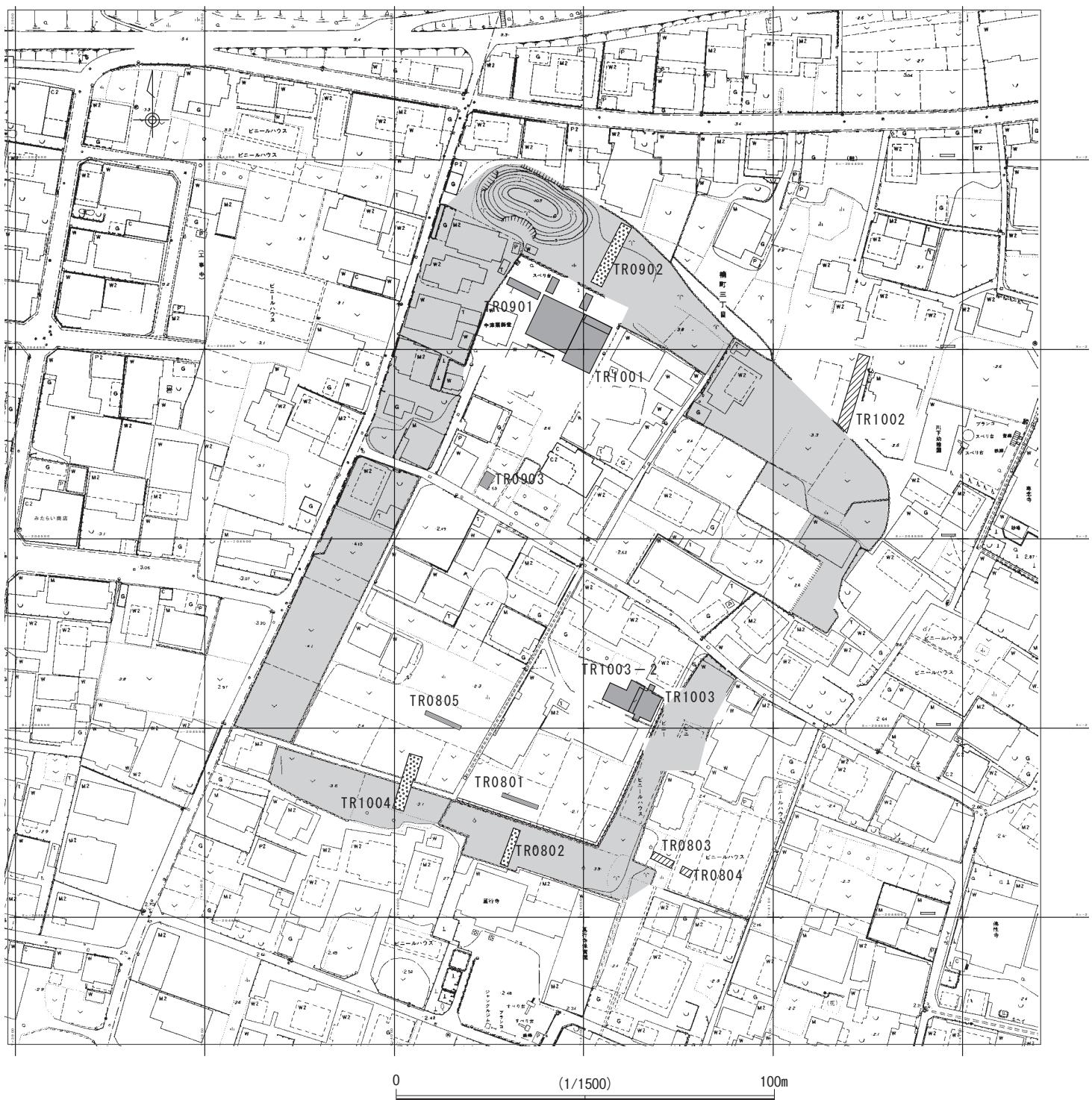
2 居館内部

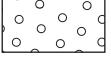
（1）TR0901・TR1001（第5～8図、図版3～5）

①調査区の概要

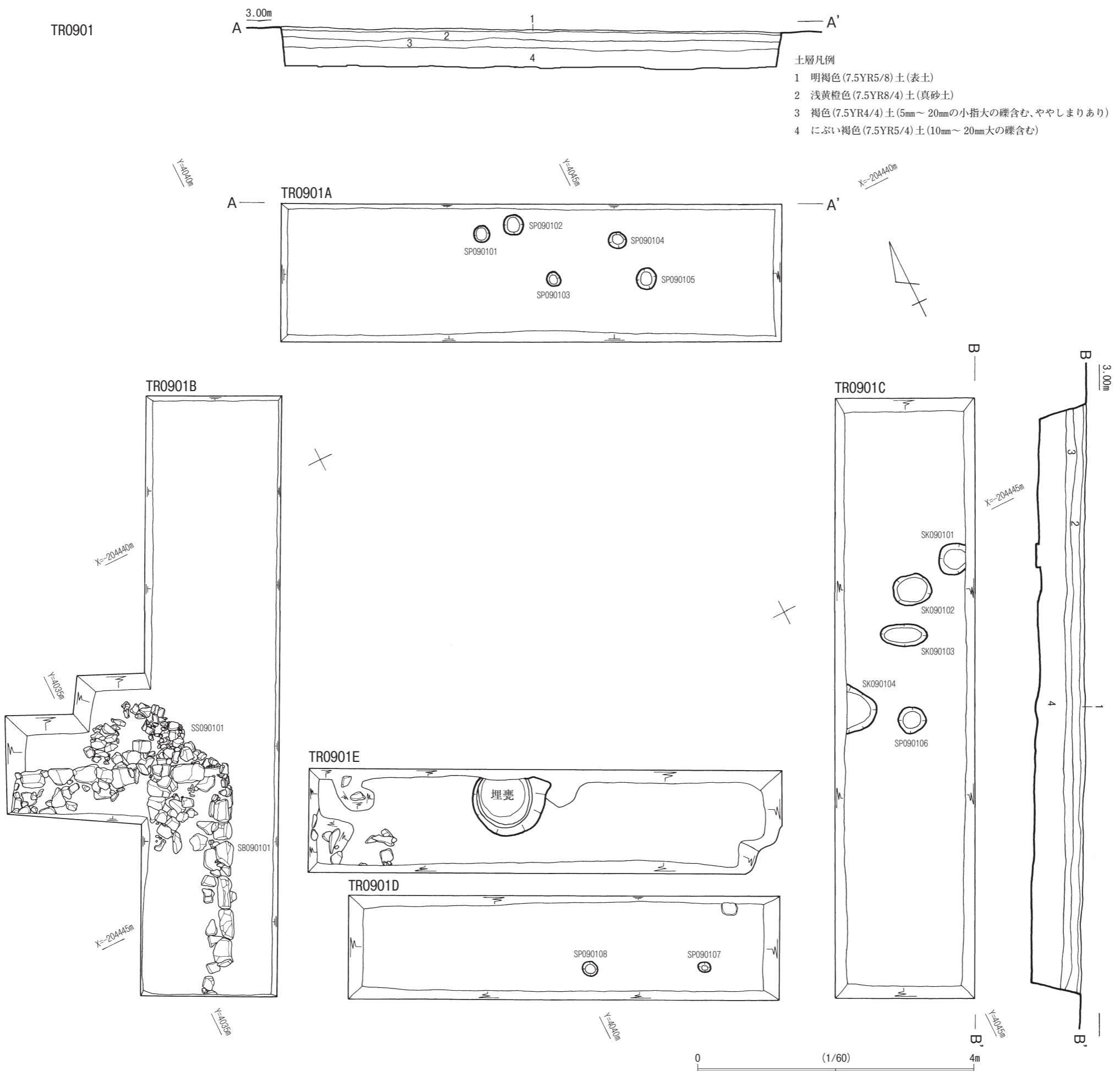
TR0901およびTR1001は第2次および第3次の2年度に分けて調査を行った。現在この場所は薬師堂¹⁾とともに市内の宗教法人が管理しており、畠や宅地に利用されておらず、まとまった面積が調査可能な場所であった。薬師堂は江戸時代の建築であり、幕末の瑞光寺廃寺の際、本堂などは解体されたが薬師堂は残された²⁾。瑞光寺を描いた近世の絵図では、薬師堂は本堂とともに居館跡の中心付近に描かれており、現在地である北西端の一角に移されたのは廃寺以降とみられる³⁾。明治2年（1869年）作成の旧瑞光寺境内の測量図⁴⁾では、薬師堂の東に廊下で繋がれた「僧居所」なる建物が描かれており、瑞光寺廃寺後も僧侶が残り薬師堂を管理していたことを示す⁵⁾。

第1次調査の前半では、調査区内にTR0901A～TR0901Eまで5本のトレンチ（幅2m）を設置し、近世～幕末・明治期にかけての瑞光寺の変遷と調査区内の層序の確認を行った。第1次調査の後半で、TR0901A～TR0901Eで囲まれた四角形のエリア（12m×11.5m）を掘り下げ、中世最末期遺構



-  居館内部…TR0801・TR0805・TR0901・TR0903・TR1001・TR1003・TR1003-2
-  土 墨…TR0802・TR0902・TR1004
-  堀状遺構…TR0803・TR0804・TR1002
-  残存土墨

第4図 遺跡全体配置・トレンチ設定図



第5図 TR0901実測図(近世後期～幕末・明治期遺構面)

面の検出を行った。翌年の第2次調査では、TR0901の東隣にTR1001（7m×12m）を設定し、中世遺構面の確認を目的とした調査を行った。以下に、近世後期～幕末・明治期と、中世末期～近世の2時期の遺構面検出段階に分けて調査状況を報告する。本文では中世末期～近世遺構面検出段階について、TR0901・TR1001の2ヵ所のトレンチをまとめて記述する。第8図はTR0901・TR1001の中世末期～近世遺構面検出段階の実測図を同一図面上に合成したものである。

②近世後期～幕末・明治期（第5図、図版4）

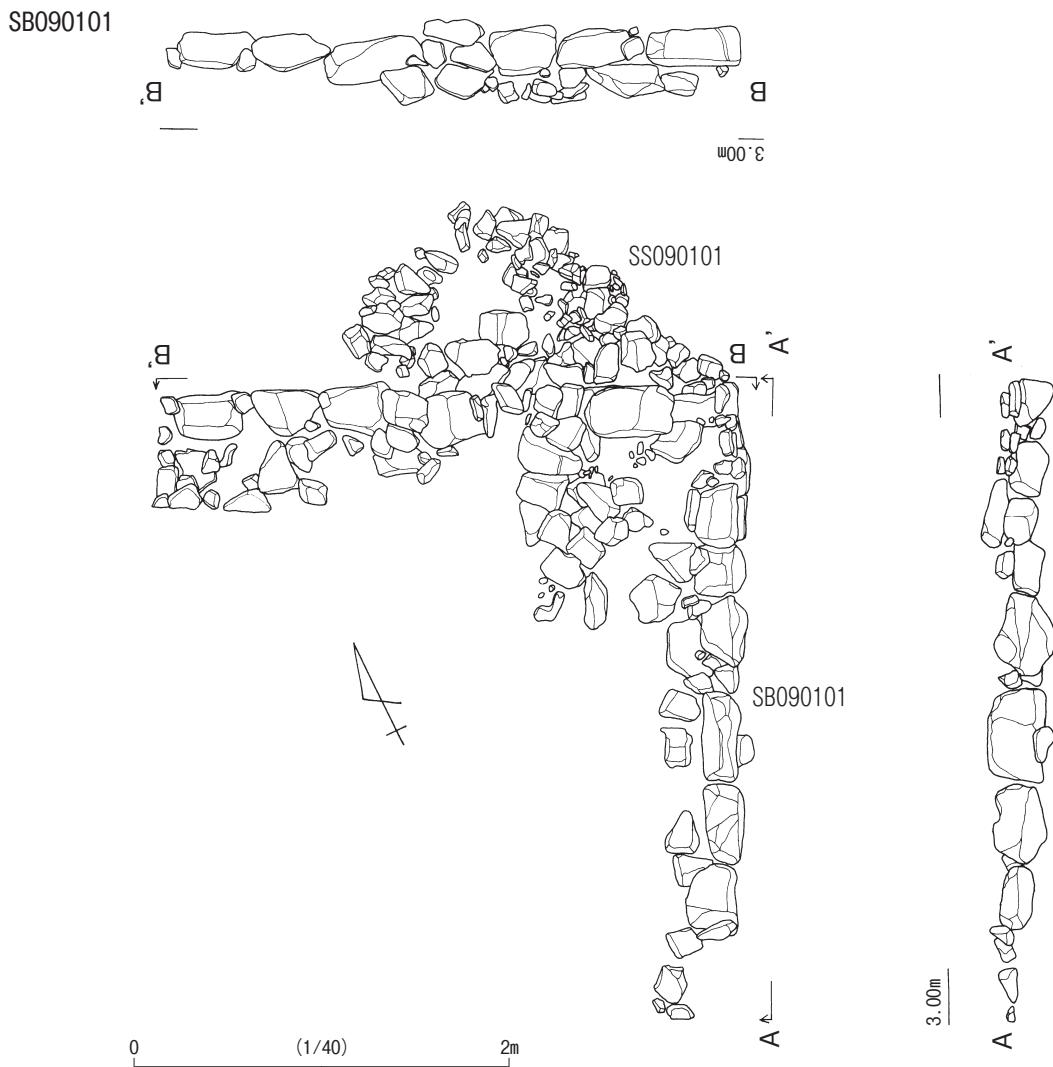
a基本層序

地表から-20cmまでは、近代の土地造成で運び込まれた真砂土を主体とする表土である。この表土の下は、0.5～2.0cm大の礫を少量含む褐色の土が堆積する。地表から-60cm（標高2.3m）付近に柱穴や土坑を伴う近世遺構面が確認された。

b個別遺構

建物跡（SB090101）・集石遺構（SS090101）（第6図、図版3）

TR0901Bの南西隅で石積みの建物基壇が検出された。検出された基壇は北東隅部分の東西3.1m、南北3.4mにあたり、縦2段の石積みで形成される。基壇上面の高さは地表から-15cm（標高2.7m）、



第6図 SB090101実測図

最下部は地表から -45cm（標高2.4m）付近に位置する。上面の高さは隣接するTR0901Eで検出された僧居所の検出面とほぼ同じである。立地から瑞光寺廃寺後に薬師堂が境内地の北西区に移されたときの遺構とも考えられるが、基壇全体の規模は不明であり断定はできなかった。基壇の北の標高2.3m付近には直径10cm前後の礫を用いた敷石状の集石遺構（SS090101）が検出されたが性格は不明である。なお、その後のTR0901全体の掘り下げ段階で、SB090101とセットになる礎石3個が南北方向に並んだ状態で検出された。

柱穴（SP090101～SP090108）・土坑（SK090101～SK090104）

TR0901A～TR0901Eにおいて、柱穴8個、土坑4基が検出された。いずれも近世から幕末にかけて瑞光寺境内となった時期の遺構である。SK090102からは磁器製の水滴（281）が出土した。

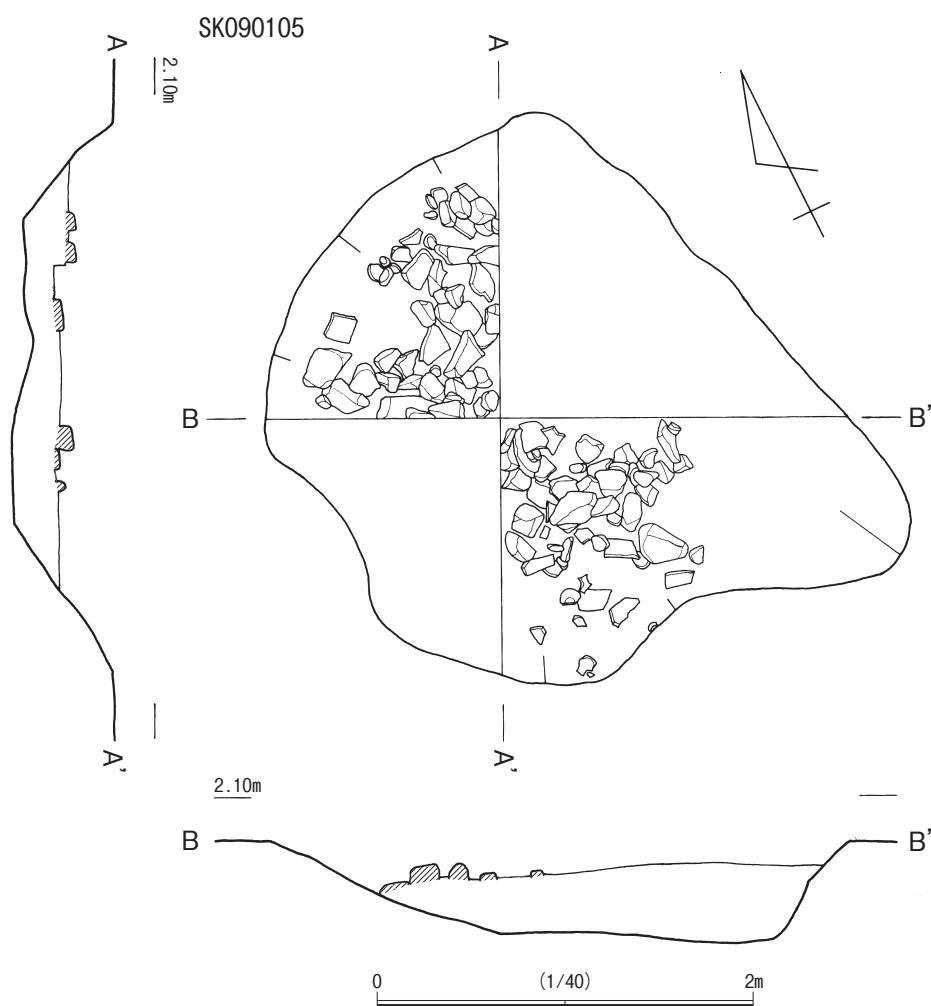
③中世末期～近世（第8図、図版3～5）

a基本層序

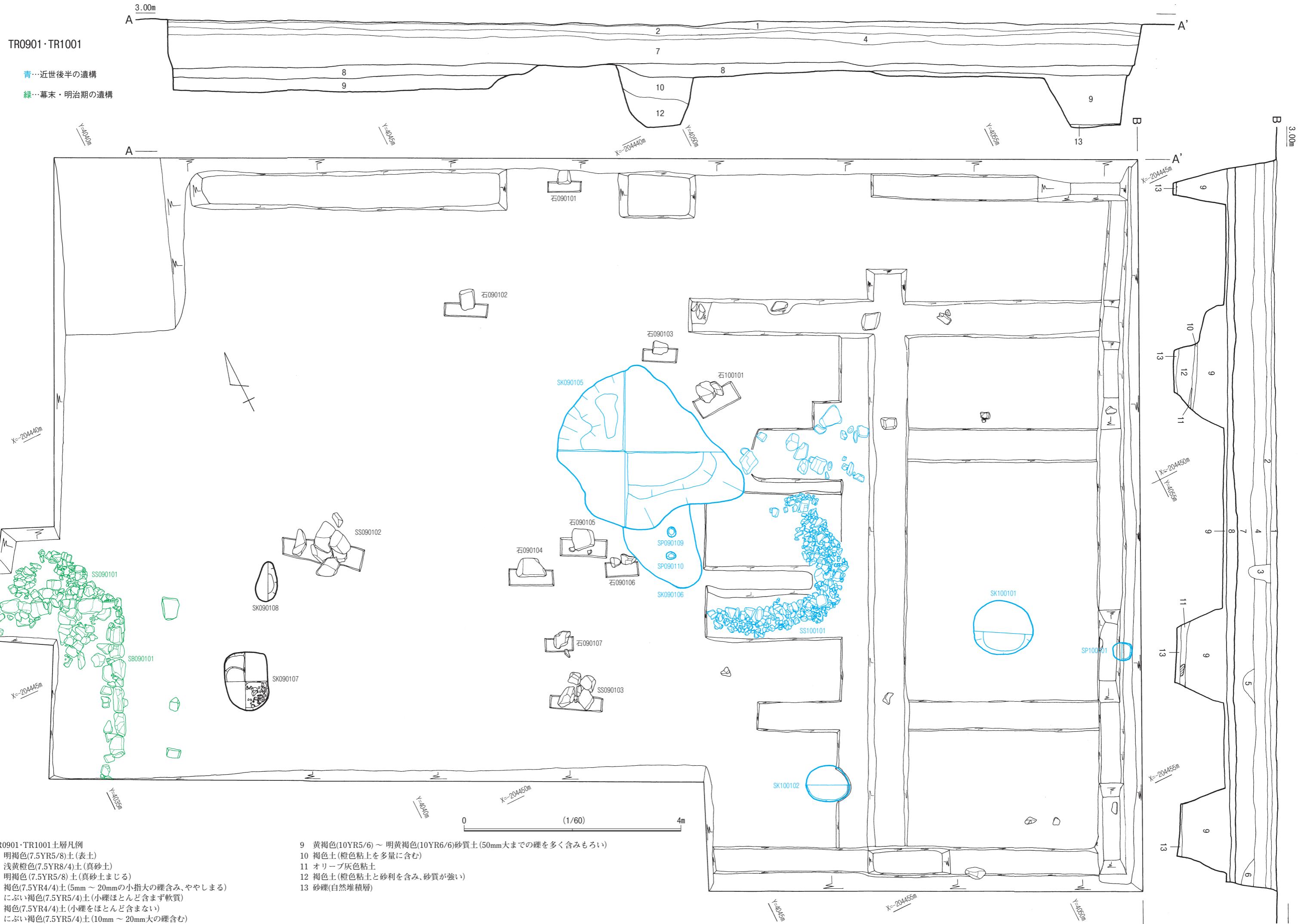
地表から -70cm付近までは、近世後期～幕末・明治期の説明で述べたのと同様の層序がみられる。地表から -80cm付近でにぶい褐色土層にやや大きめの礫が含まれるようになり、近世の陶磁器等を含まず土師器片など中世の遺物のみが出土する生活面となる。この生活面では一辺20～60cm大の花崗岩と、これらの花崗岩が複数個集まった集石が不規則に点在する。この調査区の特徴的な土層として、地表から -80cm付近に見られる橙色粘質土の塊を多く含む土層（第8図の10層）がある。この橙色粘

質土は「赤色風化土」と呼ばれる土壤⁶⁾で、西日本では高位の段丘に分布することが多く、人為的に運び込まれた客土とみられる。

TR0901・TR1001の中でも、北東寄りの一部の範囲に分布し、石090101の検出面周辺では多く確認されるが、石090102および石090103付近でやや少くなり、それ以外の検出面ではほとんど確認できなかったことから、この客土は定位置にまとめて置かれたとみられる。地表から -2 m（標高約 1 m）付近で自然堆積の砂礫層となり、この付近から湧水する。



第7図 SK090105実測図



第8図 TR0901・TR1001実測図(中世末期～近世遺構面)

b個別遺構

土坑（SK090105～SK090108・SK100101～SK100102）（第7図、図版4）

この調査区で土坑が計6基検出された。いずれも近世陶磁器や瓦の破片をふくむ近世の遺構である。SK090105（長径3.5m、短径2.4m、深さ60cm）からは主に瓦・礫・佐野焼の甕（324）・陶磁器（第40図）などが出土した。19世紀代の陶磁器が複数確認できるが、明治期の遺物と断定されるものは見つかっておらず、慶応2年（1866年）瑞光寺廃寺以前の廃棄土坑とみられる。

SS100101（第8図）

SK090105の南東でL字型の礫の集積が検出された。直径5～20cm程の礫が集まり、礫の間に近世の陶磁器や瓦の破片が混じる。陶磁器には18世紀初め頃と見られるものが含まれる（257・268）。遺構の性格は明らかではない。

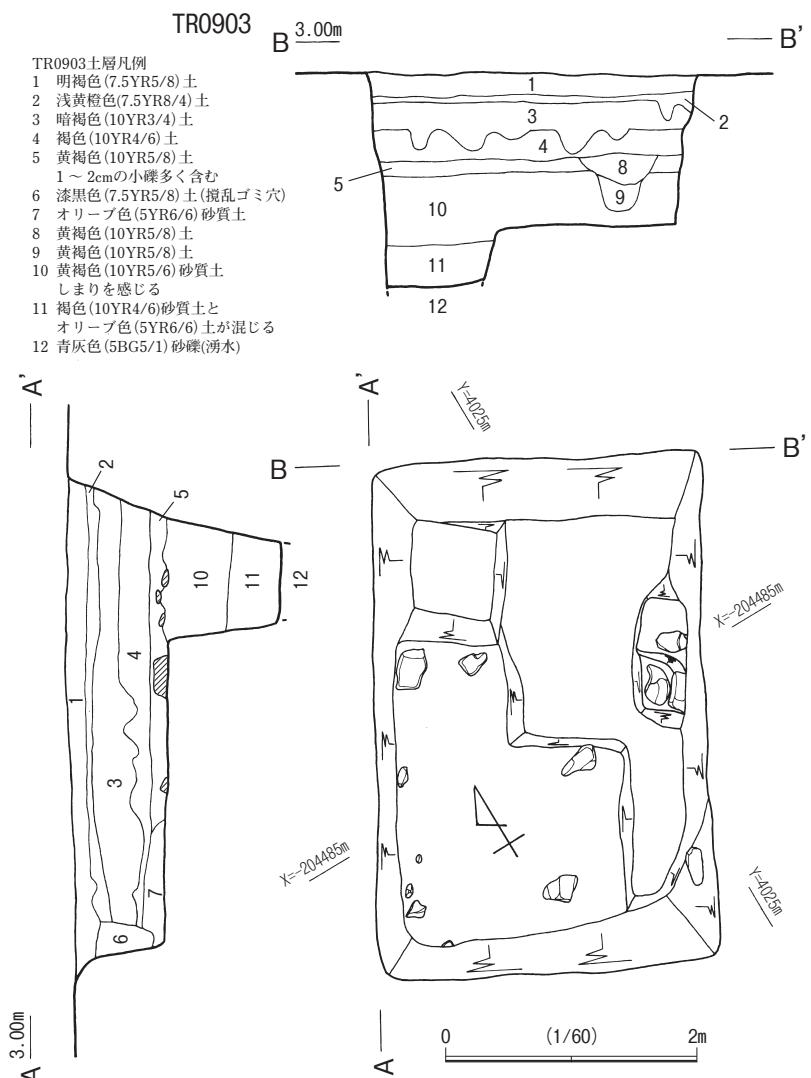
石および集石（石090101～090107・100101・SS090102・SS090103）（第8図）

石および3個以上の石が集まった集石（SS）が計10ヶ所検出された。使用される石は直径20～60cmの花崗岩で、石の上面は、地表から-70～90cm（標高2.1～1.9m）の間に分布した。等間隔で並ぶなど、個々を関連づける規則性は認められない。また、石の周囲を断ち割り調査により確認したが掘り方は検出されなかった。これらの石は居館が存続した時代に建物の礎石や根固めとして利用された可能性も考えられるが、必ずしも平坦な面を上に向けていないことなどから当初の据えられた状態を維持していないと見られる。SS090103（94）、石090105（87・88・89・90・95）、石090106（96・97・377・378）では、石の検出に伴ってそれぞれ土師器および鉄製品が出土した。

（2）TR0903（第9図、図版5）

①基本層序

現地表面から-80cm（標高1.8m、第9図の10層上面）付近で、人為的に持ち込まれたとみられる直径20～30cm大の礫とともに土師器片などの中世の遺物のみが出土した。居館に伴う遺構などは確認されていない。標高約1.4m（10層と11層の境付近）の黄褐色砂質土層には畑作の痕跡が見られる⁷⁾。



第9図 TR0903実測図

(3) TR1003・TR1003-2 (第10~16図、図版6~11)

①調査区の概要

調査区は居館内部の南東に位置し、東土壘に空けられた出入り口（虎口）に近い。この出入り口は、「くい違い」の形状を呈し、近世前期の絵図⁸⁾でも存在が確認できることから、当初からの居館の虎口の可能性が高い。第3次調査において、東土壘から3m離れた場所に長方形のトレンチ（TR1003、7×4m）を設定して調査したところ、近世遺構面（第10図）検出後、トレンチの最下層（標高約1m付近）で建物跡の礎石を3個（SB100301-SP05~SP07）確認した。この礎石の東側で、対応する礎石の有無を確認するために、当初のトレンチの東側壁の一部を限定的に四角く掘り下げる調査方法を取った。その結果、同様の礎石（SB100301-SP01~SP03）が確認されるとともに、SB100301-SP03の礎石上方に土師器の集積が確認できた（後に一括廃棄土坑を検出）ため、当初のトレンチを東側に約1m、西側に約2m拡張し、平面的に掘り下げて遺構の残存状況を調査した（東側拡張区の検出状況は第11図）。また、SB100301-SP05~SP07の南北の延長線上にもトレンチを拡張し（第12図）、南北それぞれに礎石（SB100301-SP04・SP08）を確認した。第3次調査終了時点で、SB100301の柱穴を計11個検出したが、建物跡はトレンチの外に広がることが確実であった。第3次（追加調査）において、TR1003の西隣にトレンチ（TR1003-2）を設定し建物規模の確認調査を継続した結果、新たにSB100301の柱穴5個を検出し、2ヵ所のトレンチで確認できた柱穴は計16個となった。以上の経緯からTR1003およびTR1003-2は同一年度内に2回に分けて調査したトレンチであり、連続性を重視して設定したものであるため、本文ではまとめて説明する。同様の理由から、第12図および第13図はTR1003・TR1003-2の2ヵ所のトレンチを同一図面上に合成した。

②基本層序（第12図）

地表から-20~30cmは最近まで耕作に利用された表土（第12図の1層）である。表土の下で、褐色土を主体とする近世中期以降の埋土（2層）が厚さ40~50cmの地層を形成する。この埋土の下、地表から-50~60cm付近（3-1・3-2層上面）に、柱穴・土坑・溝を伴う生活面が確認され、この生活面の出土遺物や、近世中頃の絵図⁹⁾との照合から瑞光寺境内期の遺構と判断した。さらに下層の地表から-0.7~1m（標高1.5m）付近で、柱穴・土坑・溝などを伴い、土師器片を中心とする中世の遺物が多数出土する中世遺構面（4層上面）が確認された。この中世遺構面では、大型掘立総柱建物跡（SB100301）の柱穴・一括廃棄土坑（SK100310）が確認され中世の居館に伴う遺構が濃い密度で存在した。TR1003の南東端付近では中世遺構面上に厚さ約10cmの遺物包含層（第12図の4-1・4-2層）の堆積が認められる。中世遺構面（4層上面）の下は、均質なシルトを主体とする自然堆積層（4層）となり、下層になるにつれてシルトから砂へと粒度が粗くなり、-1.2~1.3m（標高1m）付近で湧水する。湧水付近には、1~5cm大の小円礫を主体とする礫層（5層）が広がるが、礫層の上面は緩やかに傾斜し調査区内で高低差がある。

③近世遺構面（第10図、図版11）

第3次調査の当初に設定したTR1003において地表から-60cm（標高1.8m）付近に近世の遺構面（3層上面）が確認された。寛文2年（1662年）以降、幕末まで居館跡は瑞光寺の境内地となつたが、近世の絵図ではTR1003付近に瑞光寺関連の建物等は認められない。

a個別遺構**溝 (SD100301・SD100302)**

南北方向に2条の溝が検出された。いずれの溝も南北方向に直線的で、直近の東土壘とほぼ並行する。SD100301は幅約1.2m、深さ約50cmで、トレンチ南北の壁に溝の断面が明瞭に確認できた。断面には数回の掘込み痕跡が確認でき、一定期間維持管理されていたとみられる。溝の規模から一時的な施設とは考えられず、寛保元年（1741年）の絵図¹⁰⁾に描かれている水路に該当する可能性がある。

柱穴 (SP100301～SP100304) ・**土坑 (SK100301～SK100305)**

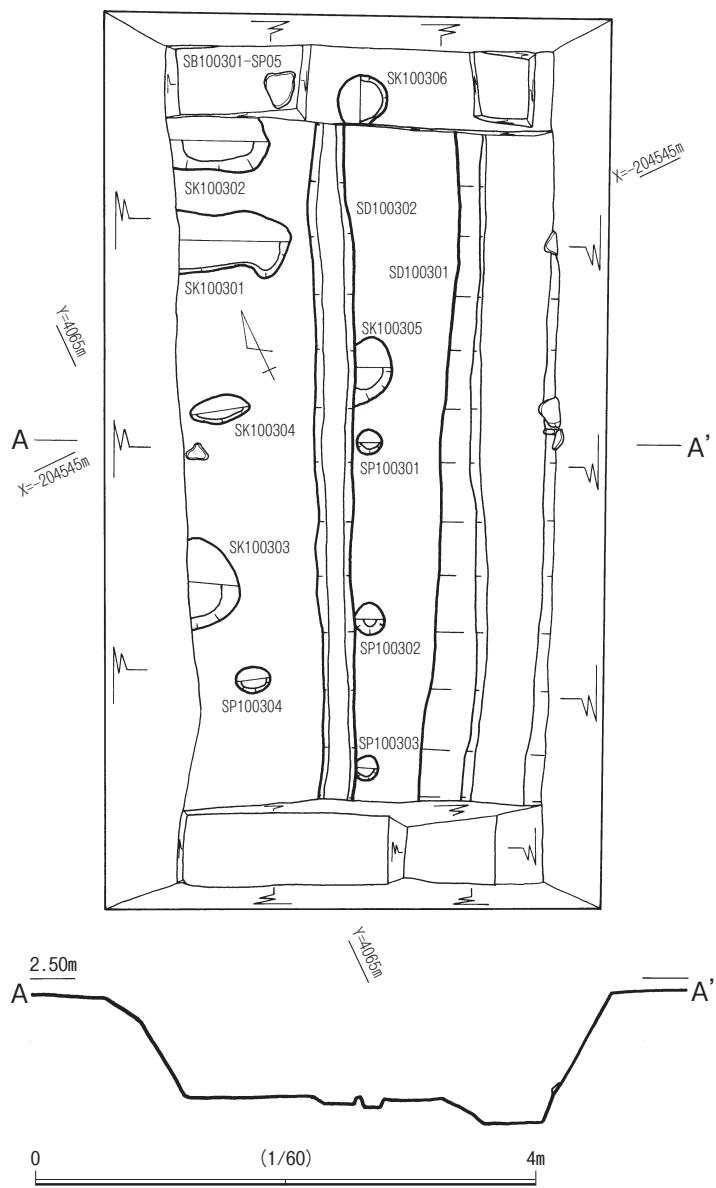
トレンチ内で柱穴4個と土坑5基が検出された。遺構の性格は明らかでない。

④中世遺構面 (第11～16図、図版6～11)**a遺物包含層 (第11・12図)**

TR1003南東の一部の範囲で、近世下層（第12図の3層下層）と中世遺構面（4層上面）の間に挟まれて、中世の遺物を多く含む遺物包含層（第12図の4-1・4-2層）が確認された。この遺物包含層は、地表から-1m（標高1.4m）付近に広がる黒褐色土および黄褐色土からなり、細かい炭化物と極粗粒の砂を多く含む。遺物包含層には杯（114）をはじめ、赤橙色系胎土の土師器片が多く含まれた。また、おおむね直径20cm以下の礫が集中的に分布した。

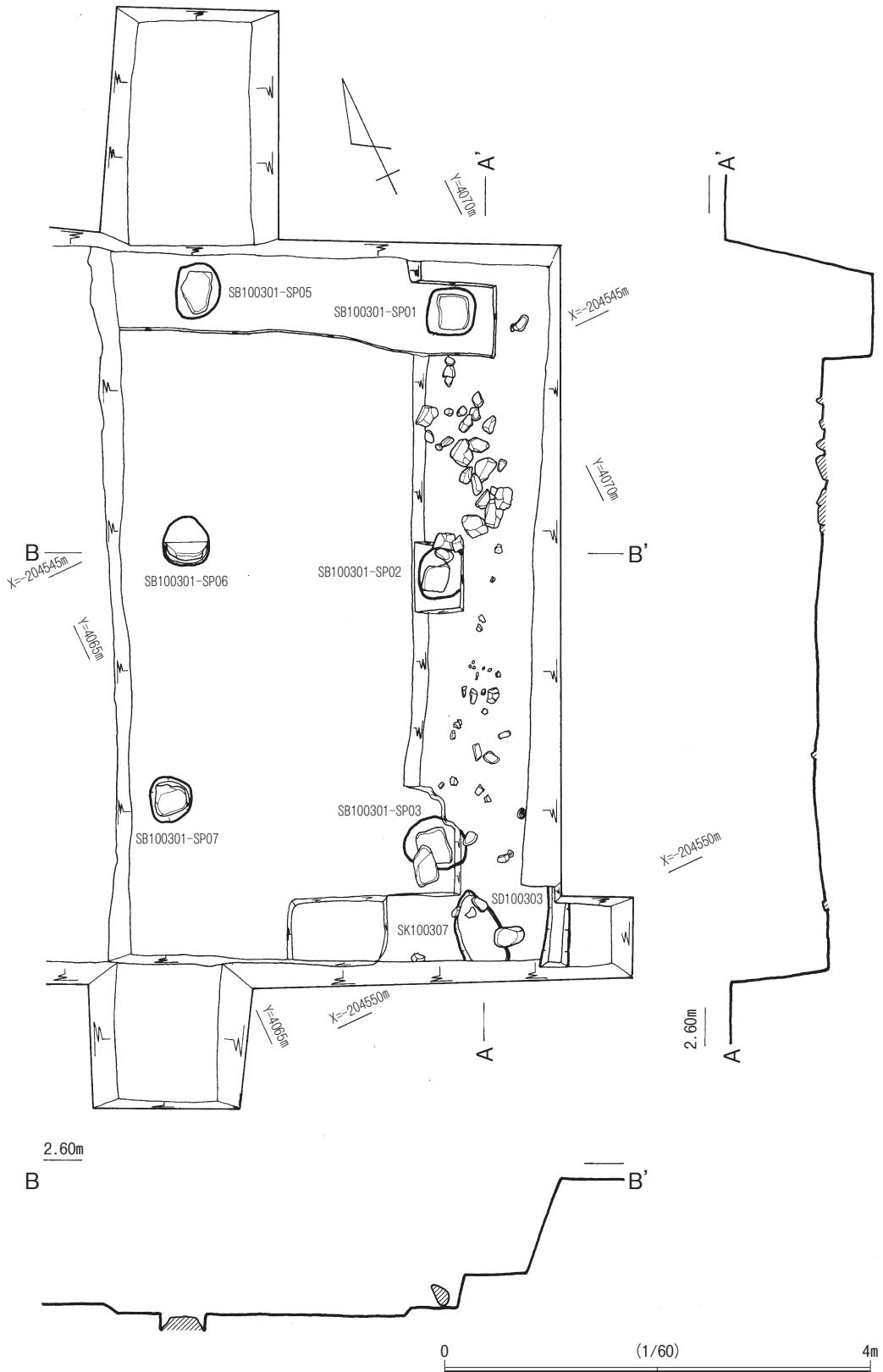
b個別遺構**大型掘立総柱建物跡 (SB100301) (第12・13図、巻頭図版2上・図版6～10)**

TR1003・TR1003-2で大型掘立総柱建物跡1棟（SB100301）を構成する柱穴16個が確認された。隣り合う柱と柱の中心を結んだ距離（柱間）は約2.4m（8尺）で、東西方向と南北方向に少なくとも4間の柱間がある。調査区の制約から全体の規模を確定することはできなかったが、トレンチ外の柱も想定すれば、一辺9.6m四方で面積92.2m²を超える建物と推定される。なお建物西端の柱穴（SB100301-SP15・SP16）より更に西の延長線上2ヵ所で掘り方および礎石の有無を確認したが、いずれの場所からも柱穴の痕跡は確認されず、SB100301-SP15・SP16が建物の西端と確定された。東方向および南北方向の延長については現存する土壘や既存構造物等による制約から最終的な建物規



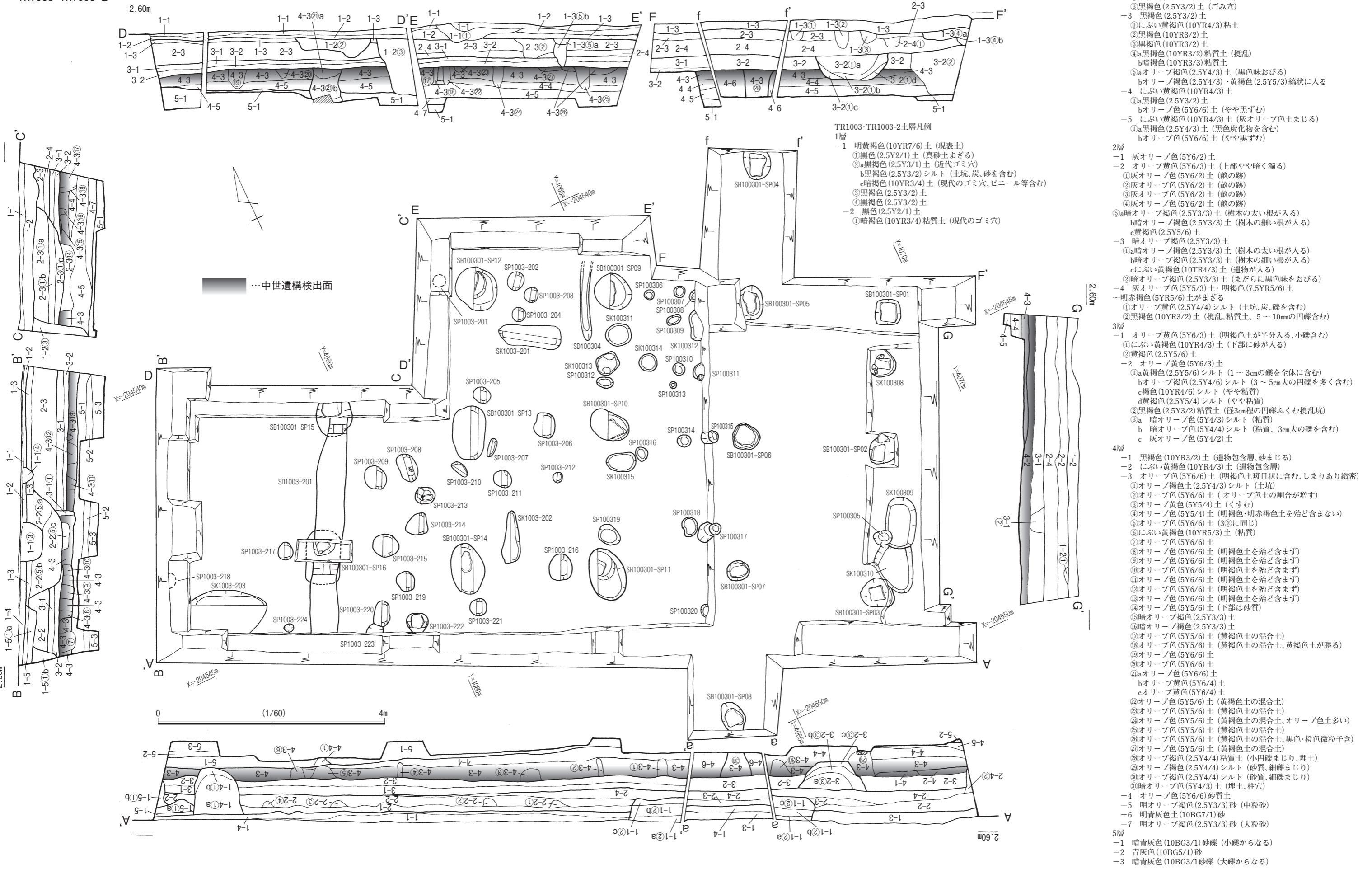
第10図 TR1003実測図(近世遺構面)

TR1003

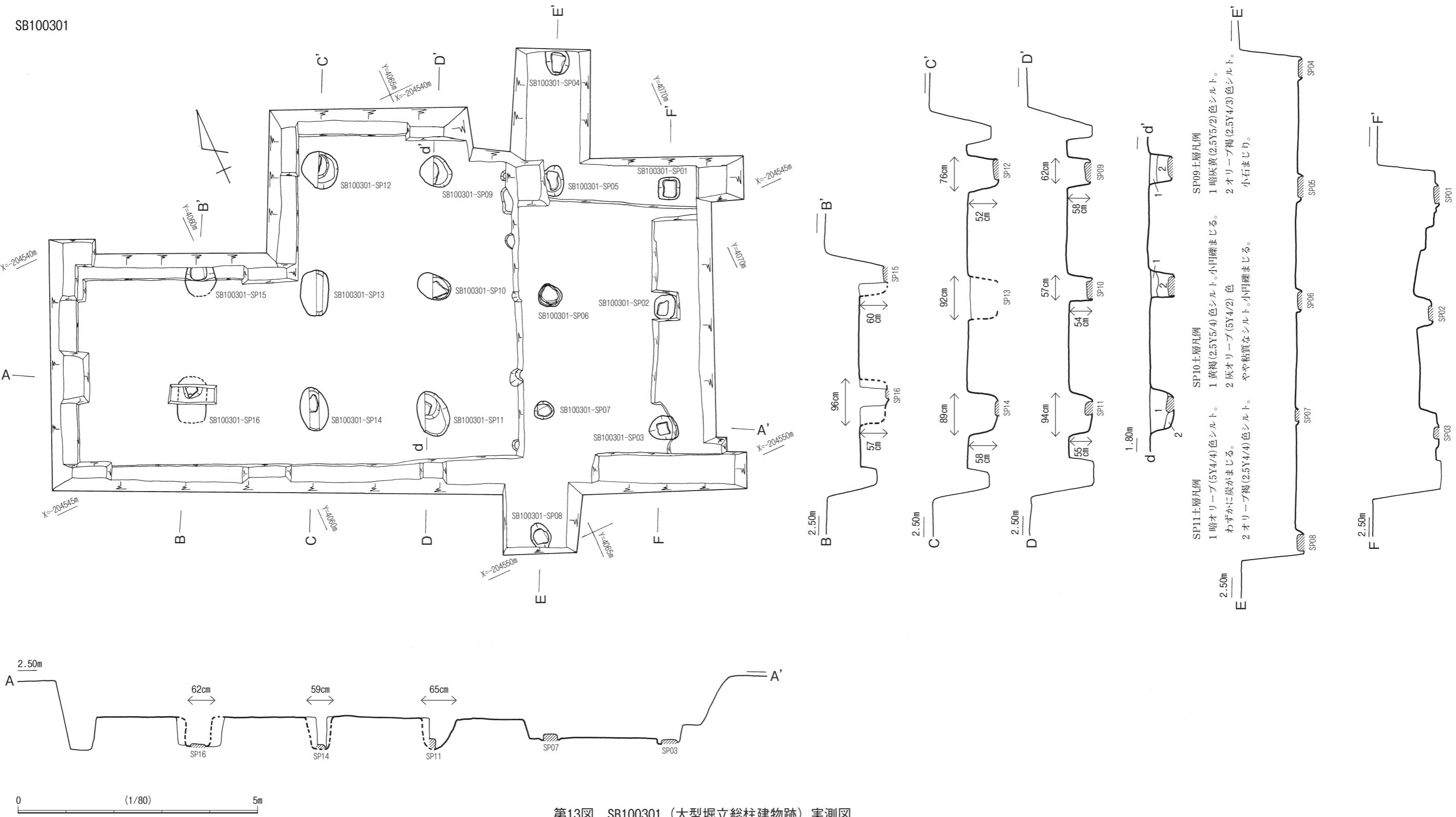


第11図 TR1003東側拡張区実測図(建物跡検出状況および遺物包含層面)

TR1003・TR1003-2



SB100301



第13図 SB100301 (大型堀立総柱建物跡) 実測図

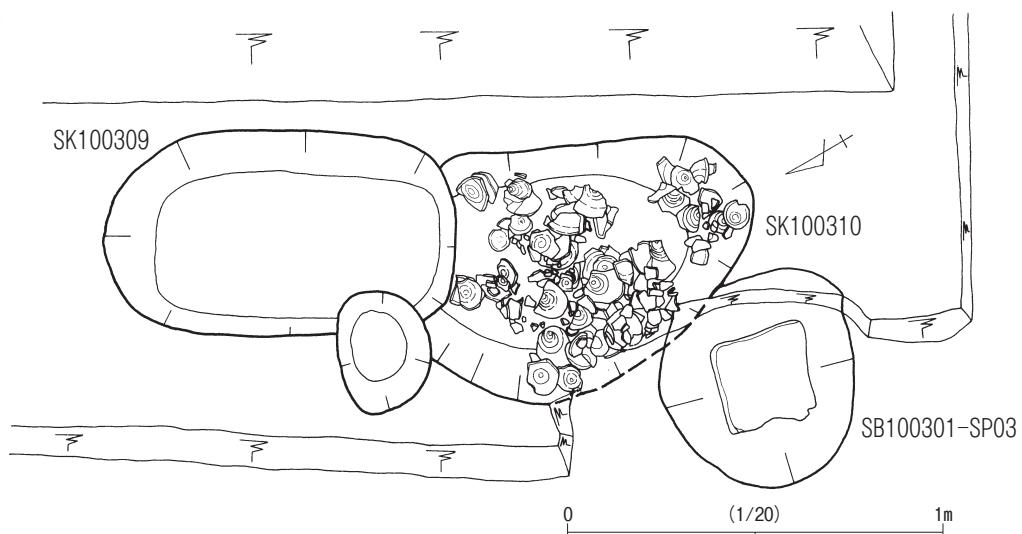
模の確定には至っていない。建物跡の柱穴（SB100301 – SP01~SP16）は中世遺構面を長径66~98cm、短径51~74cmの楕円形に、深さ52~60cmまで掘り下げられ、柱穴の底に地下式礎石¹¹⁾を据える。

（例：SP11 径98×65cm・深さ55cm、SP12 径78×74cm・深さ52cm、SP14 径92×59cm・深さ58cm）地下式礎石は一辺30~50cmの花崗岩を使用し、平坦面を上に向けて自然堆積の砂礫層に据える。中世遺構面と砂礫層との間は、砂を多く含むシルトと均質な砂からなる厚い堆積層であり、地下式礎石が位置する標高1.0m付近は現在の地下水位の上面とほぼ同じである。このような立地条件から、地下式礎石は柱の不等沈下を予防するための措置と推測される。SB100301 – SP02・SP03・SP08・SP09では、根固めに使用されたとみられる直径5~20cm大の礫が地下式礎石と柱穴掘り方周辺に残っており、建物廃絶後の状況を示すと考えられる（第11図・図版7上・9）。SB100301 – SP10（93）、SP14（91、110）、SP16（92）では土師器が出土した。また、SB100301 – SP02では、地下式礎石の平坦面の中心付近に柱根の接した痕と見られる直径約18cmの円形の変色がみられた（図版9）。SB100301 – SP03柱穴の掘り込み上面には、後述する一括廃棄土坑（SK100310）が被さる。SK100310の出土遺物には14世紀前半代の在地系土師器（4~69）や吉備系土師器椀¹²⁾（14・15）が含まれることから、建物が解体された時期はそれ以前と考えられる。建物の南北方向の主軸と隣接する東土壘の主軸はほぼ平行であることから、両者の間に時期的な相関関係が想定されるが、東土壘基底部と居館内部の連続性を確認する調査は行っていないため最終的な結論には至っていない。

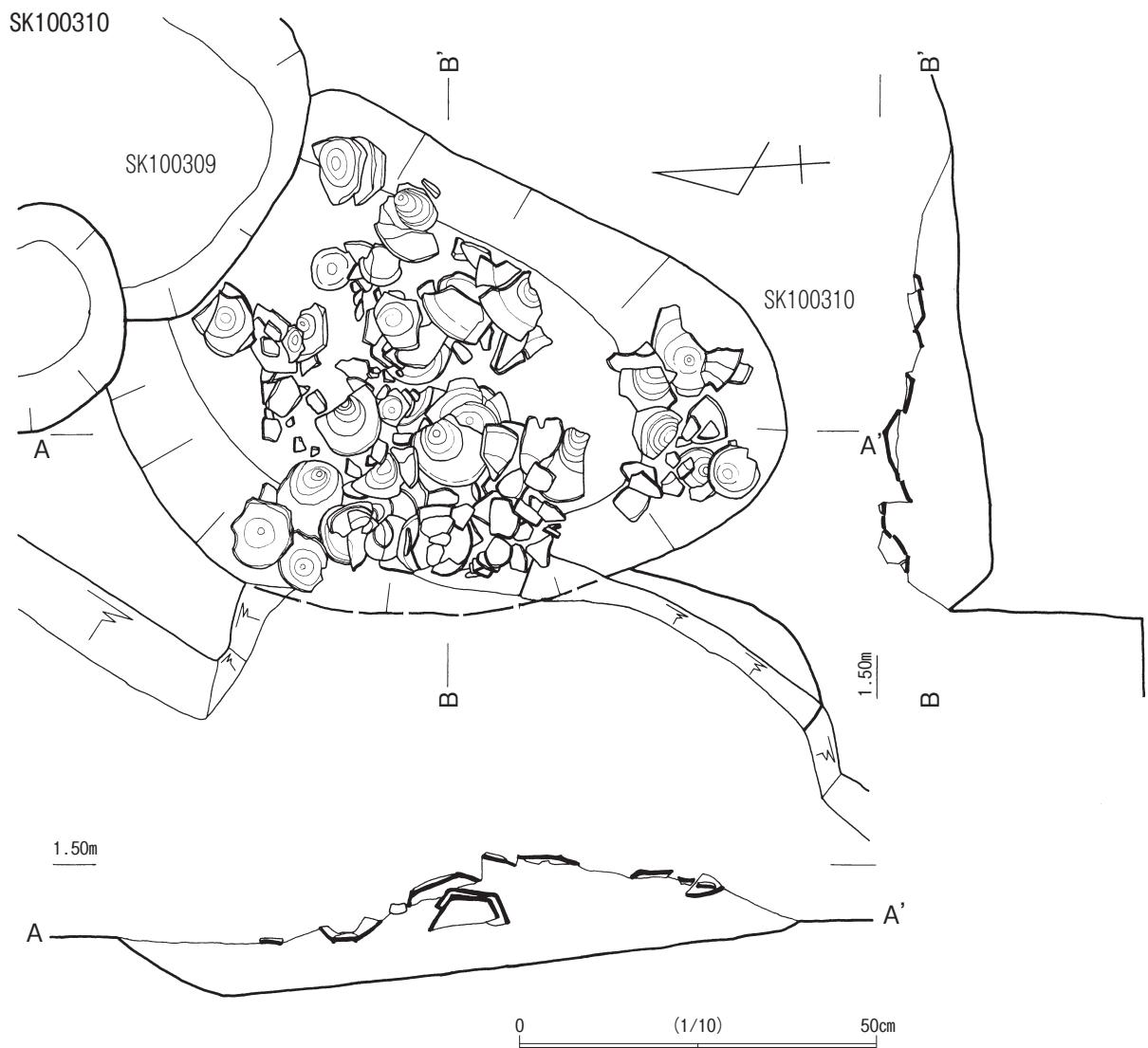
一括廃棄土坑（SK100310）（第14・15図、図版11）

TR1003南東部の遺物包含層（第11図）の直下で、少なくとも66個体の土師器の杯・小皿・椀を廃棄した一括廃棄土坑（SK100310 長径95cm、短径65cm、深さ約10cm）が検出された。一括廃棄土坑の西端は大型掘立総柱建物跡の柱穴（SB100301 – SP03）上面を切っており、建物が解体された後の遺構と考えられる。遺構の時期を示す遺物として、14世紀前半代に製作されたとみられる吉備系土師器椀2点（14・15）がある。出土遺物（第32・33図）の詳細は遺物・総括において検討を加える。

TR1003



第14図 SK100310（一括廃棄土坑）周辺実測図



第15図 SK100310(一括廃棄土坑) 実測図

土坑（SK100309）（第14図、図版11）

規模は長径95cm、短径55cm、深さ約15cmで、上記の一括廃棄土坑（SK100310）に隣接し、SK100309の南端がSK100310の北端を切っている。少量の土師器片（124）を含むのみで遺物をあまり含まないが、埋土に細かい炭化物を大量に含み黒色化する。この埋土を採取し、放射性炭素年代測定法（以下AMS測定法）による炭化物の年代測定を行ったところ測定値は1279calAD～1380calADの間に2つの範囲を示した¹³⁾。多少の誤差を見込んで14世紀代を中心とする時期幅に収まり、出土遺物から推定されるSK100310の時期、およびSK100309とSK100310との間にはさほど大きな時期的な隔たりがないと見られる認識とほぼ一致する。

土坑（SK100313）（第16図、図版11）

TR1003の中世遺構面で鉄滓（460・461）が含まれる土坑（SK100313 長径40cm、短径40cm、深さ約15cm）が検出された。建物跡（SB100301）の成立前後にこの付近で小規模な製錬が行われた可能性が考えられる。この土坑からは鉄滓のほかに土師器杯の底部（99）が出土した。

その他の土坑 (SK100308～SK100315・

SK1003-201・SK1003-203) (第12図)

中世遺構面の検出に伴って計11基の土坑が検出された。SK100315では土師器杯の底部(116)が出土した。

柱穴 (SP100306～SP100320・

SP1003-201～SP1003-224) (第12図)

中世遺構面の検出に伴って計39個の柱穴が検出された。SP1003-201では、土師器片3点(104・105・106)が出土した。

溝 (SD100303・SD100304・SD1003-201)

(第11・12図、図版7・8)

中世遺構面の検出で溝3条が検出された。SD1003-201は幅30～50cm深さ約20cmで、大型掘立総柱建物跡の西端の柱穴列(SB100301-SP15・SP16)を切って南北方向に伸びる。2ヵ所の掘り下げによって土師器片(121～123)が出土した。建物解体後の遺構であるが、遺構の性格は不明である。

(4) TR0805 (第17図、図版5)

①基本層序

居館内部の南西地区に、幅1m、長さ10mのトレンチを設定した。地表から-50cmまでは近世の遺物を含む褐色土が堆積し、繰り返し耕作された様子がうかがわれる。地表から-70cm(標高1.7m)のシルト層(第17図の6層)上面では近世の遺物を含まず、土師器片などの中世の遺物のみが出土する中世の生活面が検出された。標高1m付近で自然堆積の砂礫層となる。

②個別遺構

柱穴 (SP080501・SP080502)

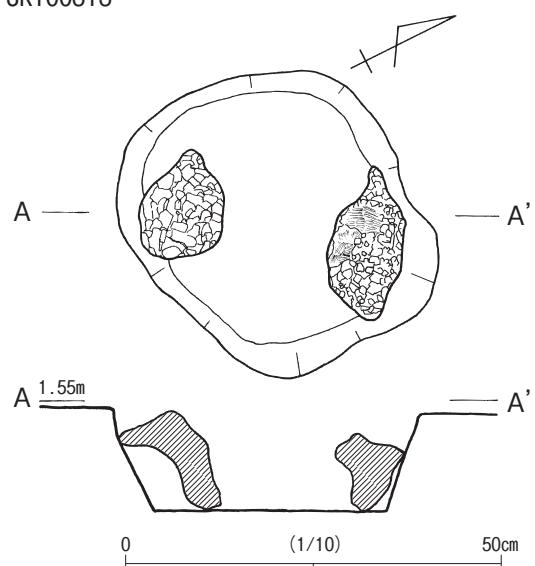
トレンチ中央付近で柱穴2個が検出された。柱穴は近世の陶器片を含んでおり、近世以降に上から掘り込まれたとみられる。

(5) TR0801 (第18図)

基本層序

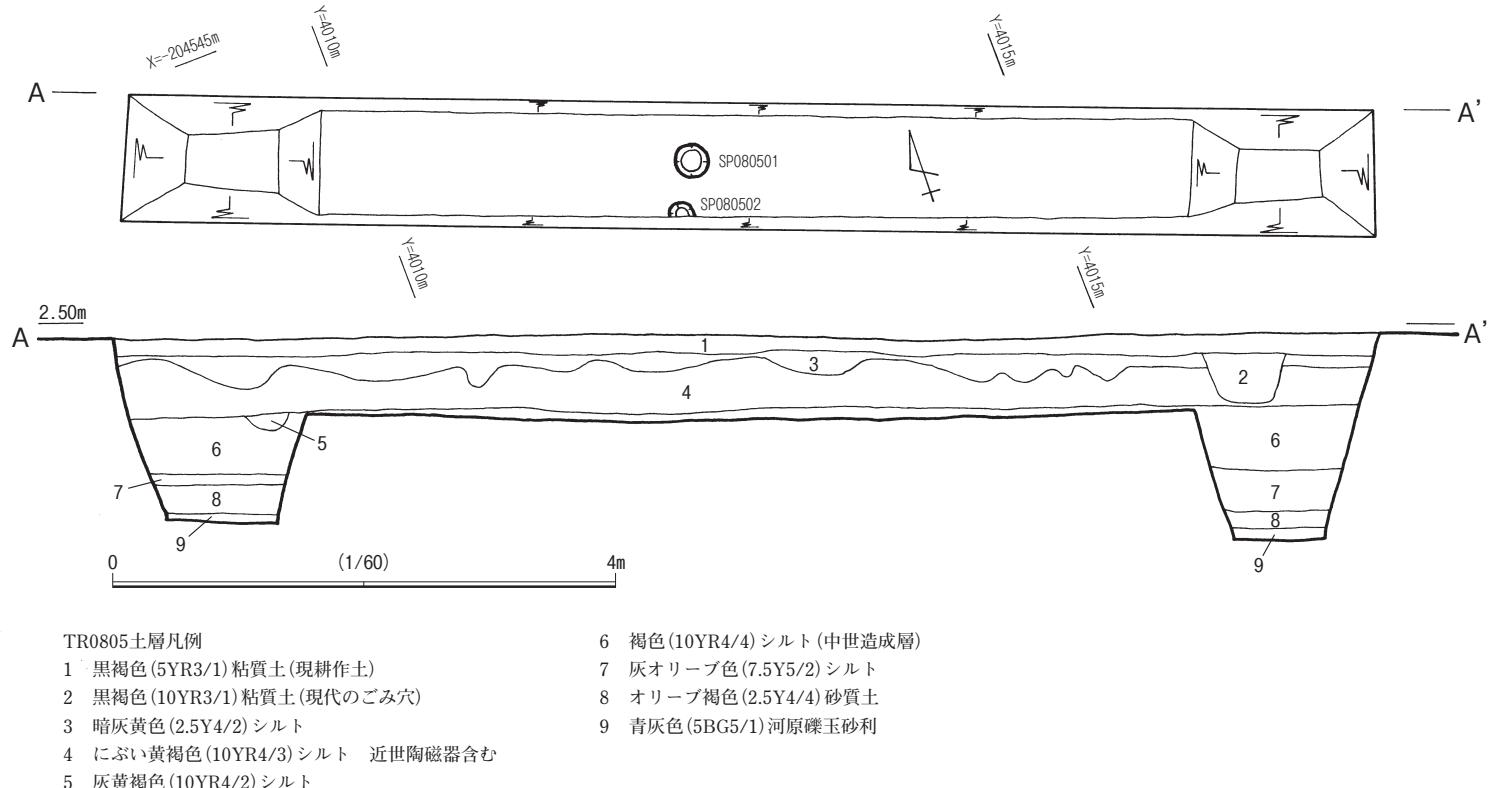
居館内部の南東区域に幅1m、長さ10mのトレンチを設定した。地表から-70cm(標高1.5m)までの黄褐色粘質土を主体とする層は表土および近世以降の搅乱である。黄褐色粘質土層より下のシルト層(第18図の8・10層)付近では、近世の遺物を含まず中世の土師器のみが出土する中世の生活面を検出した。標高1m付近で自然堆積の砂礫層となり、この付近から湧水する。

SK100313



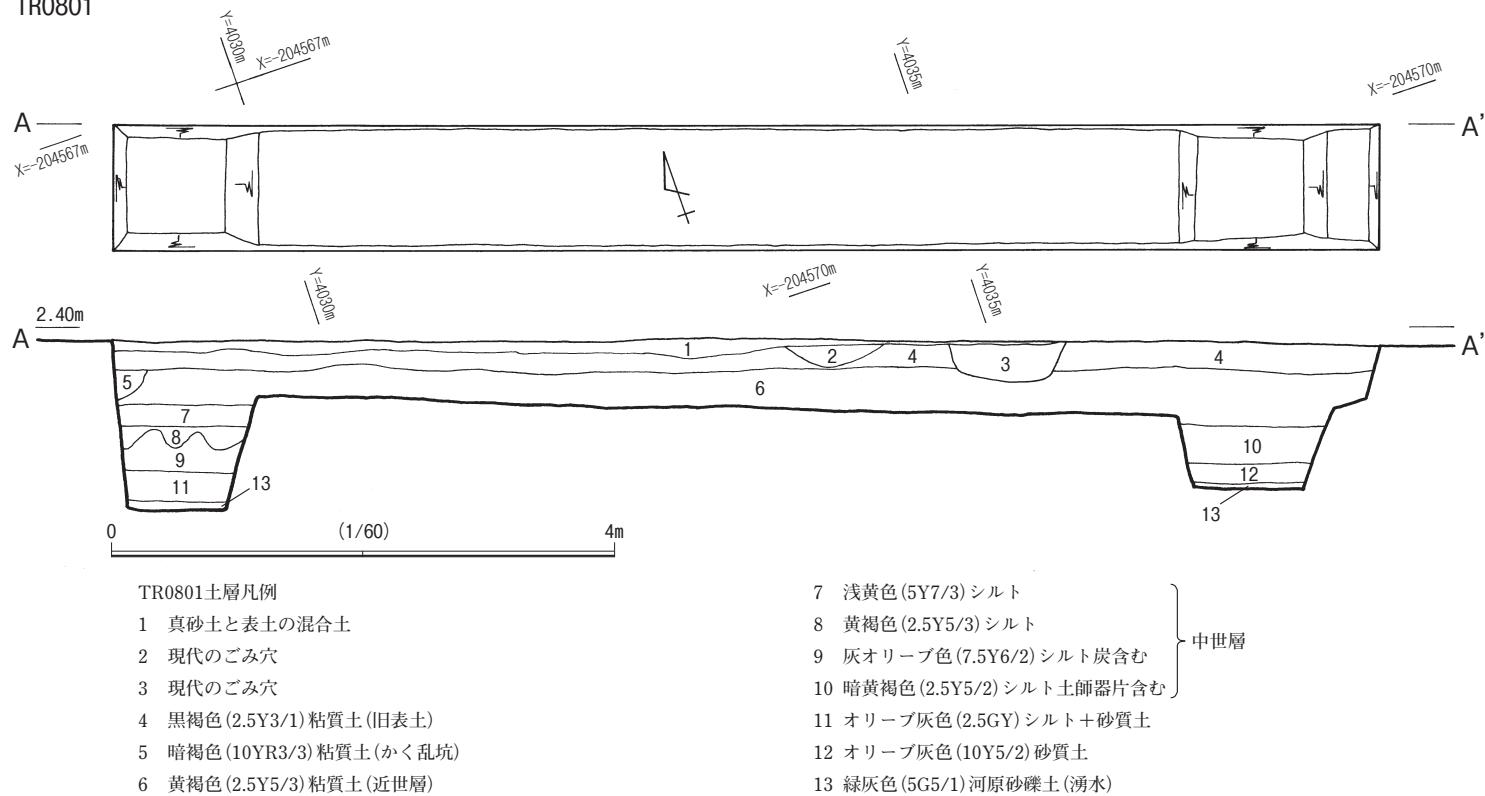
第16図 SK100313実測図

TR0805



第17図 TR0805実測図

TR0801



第18図 TR0801実測図

3 土壘

(1) 土壘の現況

中津居館跡の土壘は、ほぼ一定の幅で居館内部の区画を四周にわたって囲み巨大な台形を呈する。現状では、北西隅の一部を除いて後世に上部を削平されており、土壘上にできた平坦地は宅地や畠に利用されている。上部が削平されているものの、残存土壘は周囲の地表より一段高く、周囲との段差は大部分が内外面とも石垣によって保たれている。石垣は近世～近代以降の造作であり、土壘の構成部材として大量に用いられている岩石が転用されたとみられる。周囲と残存土壘の比高差は概ね1m前後であるが、北西隅だけは長さ約40mにわたってかまぼこ型の形状が残り、頂上付近の標高は9.9m、周囲との比高差は約7mある。地元住民はこの部分を指して「土一升米一升の丘」と呼び、往古の長者が屋敷を築く際、土一升を運んだ者に米一升を与えて築かせたと伝えられている。残存する土壘基底部の幅は4辺とも概ね15m前後で一定だが、北土壘では20mを超す場所もある。

(2) 調査の方法

土壘の構造の確認および居館内部と土壘との関係性の確認のため、北土壘1ヵ所（TR0902）・南土壘2ヵ所（TR1004・TR0802）にトレンチを設定した。いずれの場所でも複数の工程を経て段階的に土壘が築かれているため、以下の説明では土壘内の土層を構成素材や位置関係から10前後のブロックに大別して記した。なお、土層のブロック区分は現地での考古学的な表面観察に基づく現時点での解釈であり、今後の発掘調査・堆積学の所見等によって修正されていく可能性を否定するものではない。以下に個別のトレンチについて報告する。

(3) TR0902（第19～21図、図版12・13）

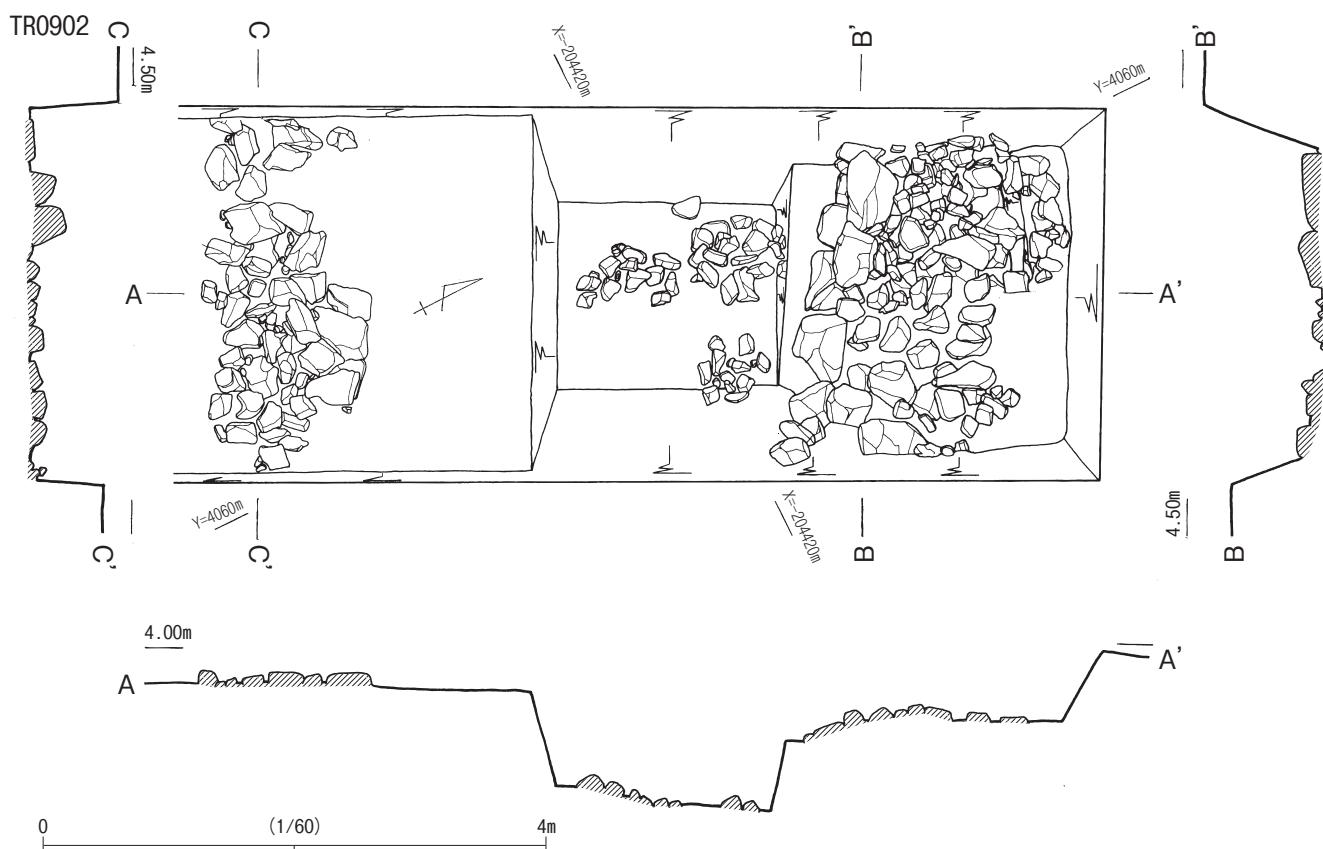
①基本層序

北土壘上に幅3m、長さ17.5mのトレンチを設定し土壘の断ち割り調査を行った。厚さ50～60cmの表土の下で土壘の盛土構造が確認された。土壘は砂質土・砂礫・シルトを積み重ね、土壘の外側を中心に花崗岩を用いて補強しながら築かれる。初期の盛土を中心とし、氾濫堆積物を土壘の一部に取り込みながら盛土を施し、徐々に幅と高さを増して最終的に幅15mを越す大規模な土壘を形成する。盛土構造は地表下0.3～2.5mで確認できる。標高1.4m付近から下は自然堆積層である。なお、上面は後世の削平や耕作により一定程度の搅乱を受けている。

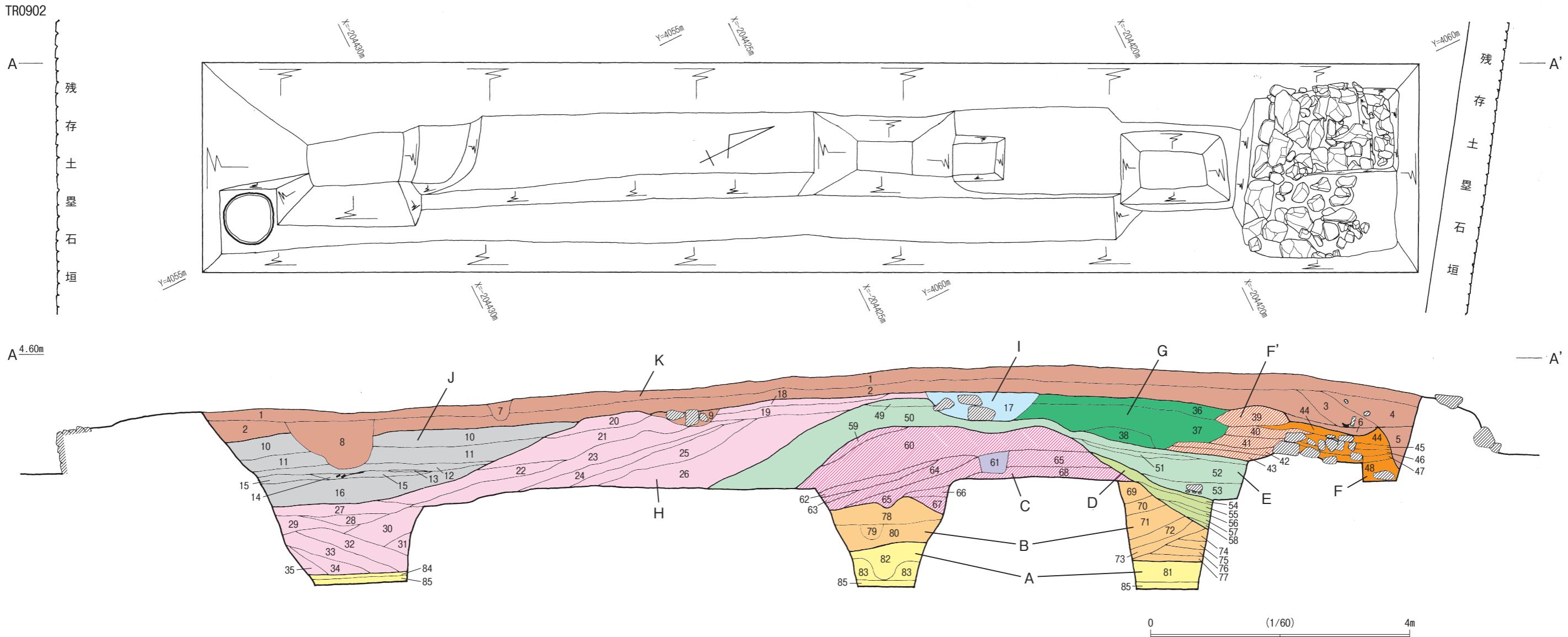
②土壘の構造（第19・20図）

土壘は砂礫・シルトなどの主たる構成材や位置関係から複数のブロックに分割が可能であった。1ブロックがひとつの築土工程または自然要因による局面を示し、このブロックの積み重なりで土壘が形成される。以下、個別のブロックについて説明する。第20図の最下層のAブロック（黄色）は自然堆積層である。Aブロックの上位に重なるBブロック（薄茶色）およびCブロック（桃色斜線）は最初に築かれた人工の盛土であり、残存土壘の北端から南へ7m付近の地表から-80cmを頂点とする（第20図の60層上面）。Bブロックは灰オリーブシルト、Cブロックは砂と大小の円礫を主体とし、B・Cブロックによる盛土の断面が椀を伏せた様なだらかな小山を形成する。Cブロックの中ほどに現れた掘り込みは、トレンチ東壁断面にも同様に現れ溝状の遺構と確認された。後述する南土壘の成果と照らし合わせて、矢板状の物を抜き取った痕の可能性が考えられる。Dブロック（黄緑色）は均質な

シルトからなる氾濫堆積層であり¹⁴⁾、B・Cブロックで形成された盛土に被さるように堆積する。後述の南土壘（TR1004・TR0802）では更に大規模な氾濫堆積層が確認できる。いずれのトレーニチでも、均質なシルトが厚い層を形成し、マンガンによる斑紋が見られる。Eブロック（緑色）はDブロック同様、氾濫堆積のシルトであるが、53層付近ではシルトの間に15~25cm大の角礫が入る（第19図中程の低い位置）。主となる構成素材はDブロックと差異はないが、Eブロックに角礫が入ることからふたつのブロックを一連と考えることが躊躇された。EブロックはCブロック盛土の上面（60層上面）を乗り越えて、居館内部に達しているように見える。Fブロック（オレンジ）は大型の花崗岩を集中的に充填した土壘外側の補強構造である（第19図北端）。FおよびF'ブロックは氾濫堆積層（D・Eブロック）の上に重なるように築かれ、大量の花崗岩を充填した厚い層が東西方向に続く。F'ブロック（オレンジ斜線）は大小の円礫を主体とし、Fブロックの内側に形成される。Fブロック同様、土壘外側の補強構造と見られる。Gブロック（濃緑色）は浅黄色シルトを主体とし、F・F'ブロックで築かれた土壘外壁の補強構造の内側に礫を含まない土を盛土する。Hブロック（桃色）は砂と大小の円礫で構成される非常に厚い盛土層である。このブロックはEブロック上面に重なっており、居館内部に向かってなだらかな斜面を形成する。Hブロックを構成する砂礫はAブロックの下層に豊富に存在する自然堆積層の砂礫と近似しており、土壘外の地面をさらって盛土として調達したとみられる。このため粘土質をほとんど含まず、積み上げて土壘の高さを出す目的には不向きである。Iブロック（水色）は砂質土の間にFブロックと同様の花崗岩を密に充填する。このブロックは同一標高上に東西方向の石列を形成し、（第19図南端）後世の土壘削平後に造作された可能性も残るが、元々の土壘構造の一部と見ることもできた。



第19図 TR0902集石上面実測図



TR0902土層凡例

- 1 明灰黄色(2.5Y5/2)シルト(表土)
- 2 黄褐色(2.5Y5/3)シルト(5cm程度の礫少量含む)
- 3 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルトと砂礫の混合土(20cm大の山石含む、近世磁器碗出)
- 4 にぶい黄色(2.5Y6/4)シルトと砂礫の混合土(2~5cm大の礫含む。15cm大の山石含む)
- 5 灰黄色(2.5Y6/2)シルトと砂礫の混合土(2~8cm大の礫含む。近世石積みの裏邊)
- 6 オリーブ黄色(7.5Y6/3)シルト
- 7 黄褐色(2.5Y5/2)粘質土(後世の掘り込み)
- 8 黑褐色(2.5Y3/1)土(現代のゴミ穴)
- 9 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト(大型山石含む)
- 10 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト(1~2cm大の礫微量含む)
- 11 にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト
- 12 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト
- 13 明黄褐色(2.5Y6/6)粗真砂土
- 14 オリーブ黄色(5Y6/4)シルト(瓦含む近世以降の攪乱)
- 15 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト(黄褐色鉄分含む)
- 16 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト
- 17 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土(大型山石含む)
- 18 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫(2~10cm大の礫少量含む) 近世の造成の可能性あり
- 19 灰黄色(2.5Y6/2)砂礫(2~10cm大の礫少量含む)
- 20 灰オリーブ色(5Y6/2)砂礫(2~6cm大の礫多く含む)
- 21 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂礫(1~15cm大の礫多く含む)
- 22 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫(1~15cm大の礫多く含む)
- 23 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂礫(1~15cm大の礫多く含む)
- 24 灰オリーブ色(5Y6/2)砂礫(1~15cm大の礫多く含む)
- 25 灰オリーブ色(5Y5/2)砂礫(1~15cm大の礫多く含む)
- 26 灰オリーブ色(5Y6/2)砂礫(1~15cm大の礫多く含む)
- 27 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルトと砂礫の混合土(1~4cm大の礫少量含む)
- 28 オリーブ黄色(5Y6/3)砂礫(1~4cm大の礫含む)
- 29 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂礫(2~8cm大の礫多く含む)

30 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫(1～15cm大の礫多く含む)
31 黄褐色(2.5Y5/3)砂礫(1～15cm大の礫含む)
32 灰色(5Y5/1)砂礫(1～10cm大の礫含む)
33 灰オリーブ色(5Y5/2)砂礫(1～10cm大の礫含む)
34 灰色(5Y5/1)砂礫含む(1～15cm大の礫含む)
35 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト(1～5cm大の礫少量含む)
36 浅黄色(2.5Y7/3)シルト
37 浅黄色(2.5Y7/3)砂質土
38 オリーブ灰色(10Y6/2)シルト
39 灰黄色(2.5Y7/2)砂礫(1～5cm大の礫多く含む)
40 オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂礫(1～5cm大の礫多く含む)
41 灰色(7.5Y6/1)砂礫(1～8cm大の礫多く含む)
42 オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト
43 浅黄色(5Y7/3)砂礫(1～4cm大の礫多く含む)
44 明オリーブ灰色(5GY7/1)シルト(大型山石を埋め込む)
45 灰オリーブ色(5Y6/2)砂礫(2～5cm大の礫含む)(大型山石を埋め込む)
46 オリーブ灰色(5GY6/1)シルト(大型山石を埋め込む)
47 灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂礫(大型山石を埋め込む)
48 緑灰色(7.5GY6/2)シルト(大型山石を埋め込む)
49 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(黄褐色の鉄分含む)
50 オリーブ灰色(10Y6/2)シルト(黄褐色の鉄分含む)
51 オリーブ黄色(5Y6/3)シルト(黄褐色の鉄分含む)
52 緑灰色(7.5GY6/1)シルト(黄褐色の鉄分含む)
53 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト(黄褐色の鉄分多く含む。15～25cm大の大型山石含む)
54 青灰色(5BG6/1)シルト(黄褐色の鉄分含む)
55 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(黄褐色の鉄分含む)
56 青灰色(5BG6/1)シルト(黄褐色の鉄分含む)
57 オリーブ灰色(5GY6/1)シルト(黄褐色の鉄分含む、1～3cm大の小礫少量含む)
58 オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト(黄褐色の鉄分含む)
59 灰黄色(2.5Y7/2)砂礫(2～8cm大の礫含む)

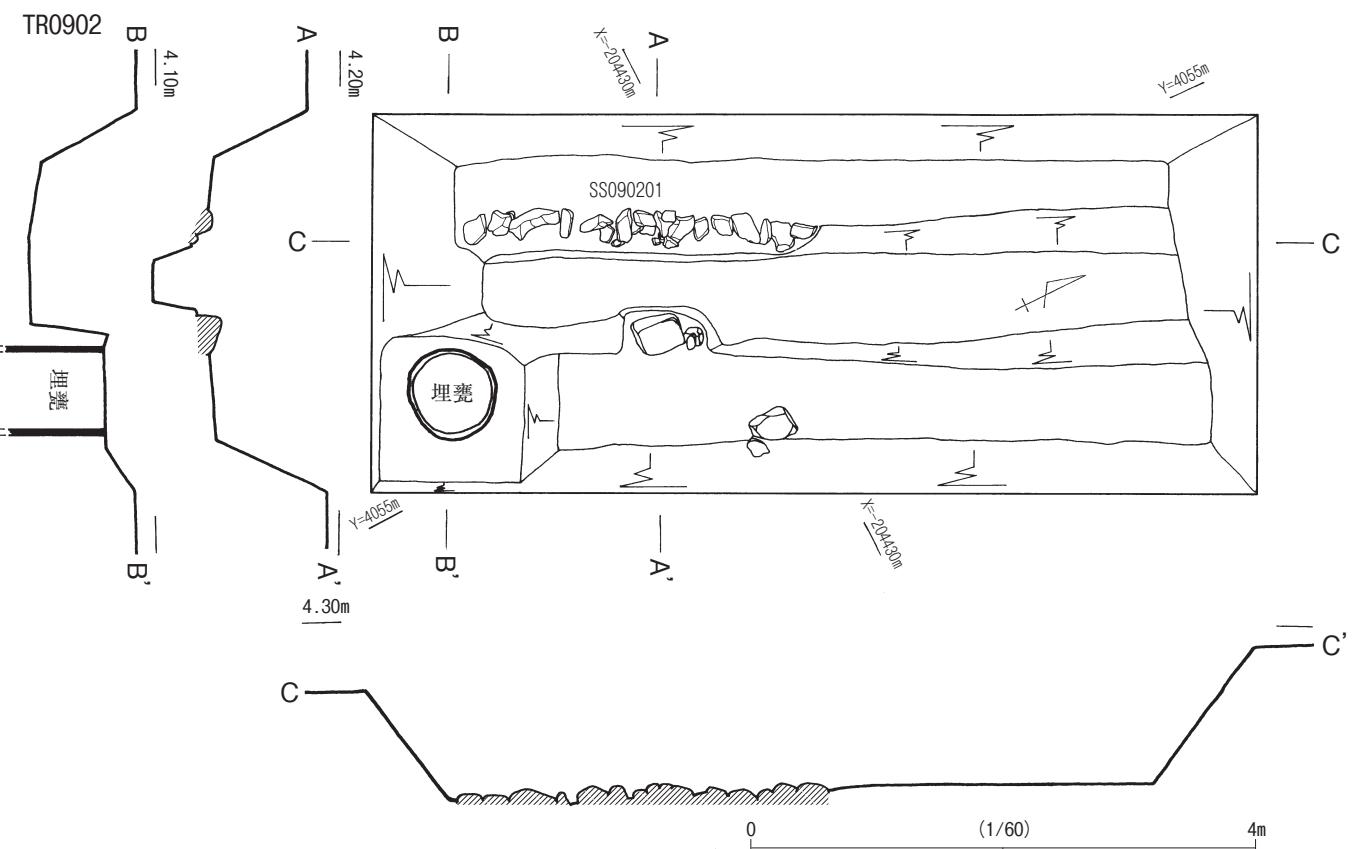
60 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルトと砂礫の混合土(1～10cm大の礫多く含む)
61 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルトと砂礫の混合土(小円礫多く含む)板抜き取り痕
62 浅黄色(2.5Y7/3)砂礫(1～5cm大の礫多く含む)
63 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(1～3cm大の礫少量含む)
64 灰色(10Y6/1)砂礫(1～8cm大の礫多く含む)
65 灰オリーブ色(5Y6/2)砂礫(1～10cm大の礫多く含む)
66 灰黄色(2.5Y7/2)砂礫(1～10cm大の礫多く含む)
67 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト
68 灰色(10Y6/1)砂礫(1～15cm大の礫多く含む)
69 オリーブ黄色(7.5Y6/3)シルト
70 オリーブ黄色(7.5Y6/3)シルトと砂礫の混合土(2～5cm大の礫含む)
71 灰オリーブ色(5Y6/1)シルト(黄褐色鉄分含む)
72 オリーブ黄色(7.5Y6/3)シルト(黄褐色鉄分含む)
73 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(黄褐色鉄分含む)
74 灰オリーブ色(5Y6/2)砂礫(1～8cm大の砂礫多く含む)
75 オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトと砂礫の混合土(2～5cm大の礫少量含む)
76 緑灰色(7.5GY6/1)シルト(黄褐色鉄分含む)
77 オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト(3～4cm大の礫少量含む)
78 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(黄褐色鉄分含む)
79 灰色(7.5Y6/1)砂礫(1～4cm大の礫含む)
80 オリーブ灰色(10Y6/2)シルト(黄褐色鉄分含む)
81 オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトと暗青灰色(5B4/1)砂礫(自然堆積)との混合土(1～5cm大の礫多く含む)
82 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト(3～10cm大の礫少量含む)
83 灰オリーブ色(5Y5/2)シルトと暗青灰色(5B4/1)砂礫(自然堆積)との混合土(2～10cm大の礫含む)
84 暗青灰色(5B4/1)砂礫と灰色(5Y5/1)砂礫の混合(1～15cm大の礫含む)
85 暗青灰色(5B4/1)砂礫(1～5cm大の礫多く含む自然堆積層)

A	…		黄色
B	…		薄茶色
C	…		桃色斜線
D	…		黄綠色
E	…		綠色
F	…		橙色
F'	…		橙色斜線
G	…		濃綠色
H	…		桃色
I	…		水色
J	…		灰色
K	…		茶色
矢板痕…			紫色

Jブロック（灰）は近世以降に土壘上部が削平される過程で構成された埋土である。Jブロックの13～15層（標高2.7m）では近世の遺構（SS090201）が確認されている。Kブロック（茶色）は表土および近代以降の掘り込みである。

③遺構（第21図、図版13）

トレーナー南端の地表から-90cm（標高2.9m）付近で南北方向の石列（SS090201）が検出され、付近から近世の瓦と近世の磁器片が出土した。建物の遺構とみることもできるが柱穴等は確認できなかった。南西隅で検出された円形の土坑は内面を土で塗り固められた埋甕の一種である。いずれも近世以降に土壘上部が削平された後の遺構である。



第21図 TR0902近世遺構実測図

④ TR1004（第22～25図、図版14・15）

①基本層序

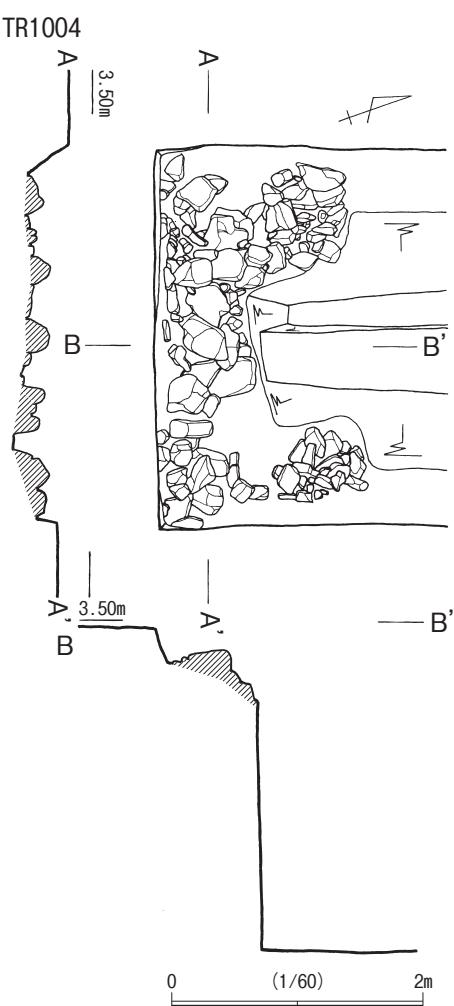
土壘と居館内部の関係を確認するために、土壘から居館内部までを横断するように幅3m、長さ15mのトレーナーを設定した。トレーナーの中央を境に、北側の低い土地が居館内部、南側の高い土地が土壘部である。居館内部は畑に利用されており、厚さ30cmの耕作土の下に、あまり遺物を含まない近世の土層が堆積する。標高1.5mより下層は自然堆積層（第23図の11・12層）となり、標高1mより下層で含まれる礫の割合が増すとともに湧水がはじまる。土壘部では、厚さ30cmの表土より下層で土壘の盛土構造が確認された。土壘盛土の下の標高1.5m付近では、居館内部と共に自然堆積層（11・12層）となる。トレーナーの南端ではこの自然堆積層が地下水位より下まで落ち込み、この窪みにおおい被さるように人工的に盛土して小山状の土壘（Bブロック）を形成する。

②土壘部

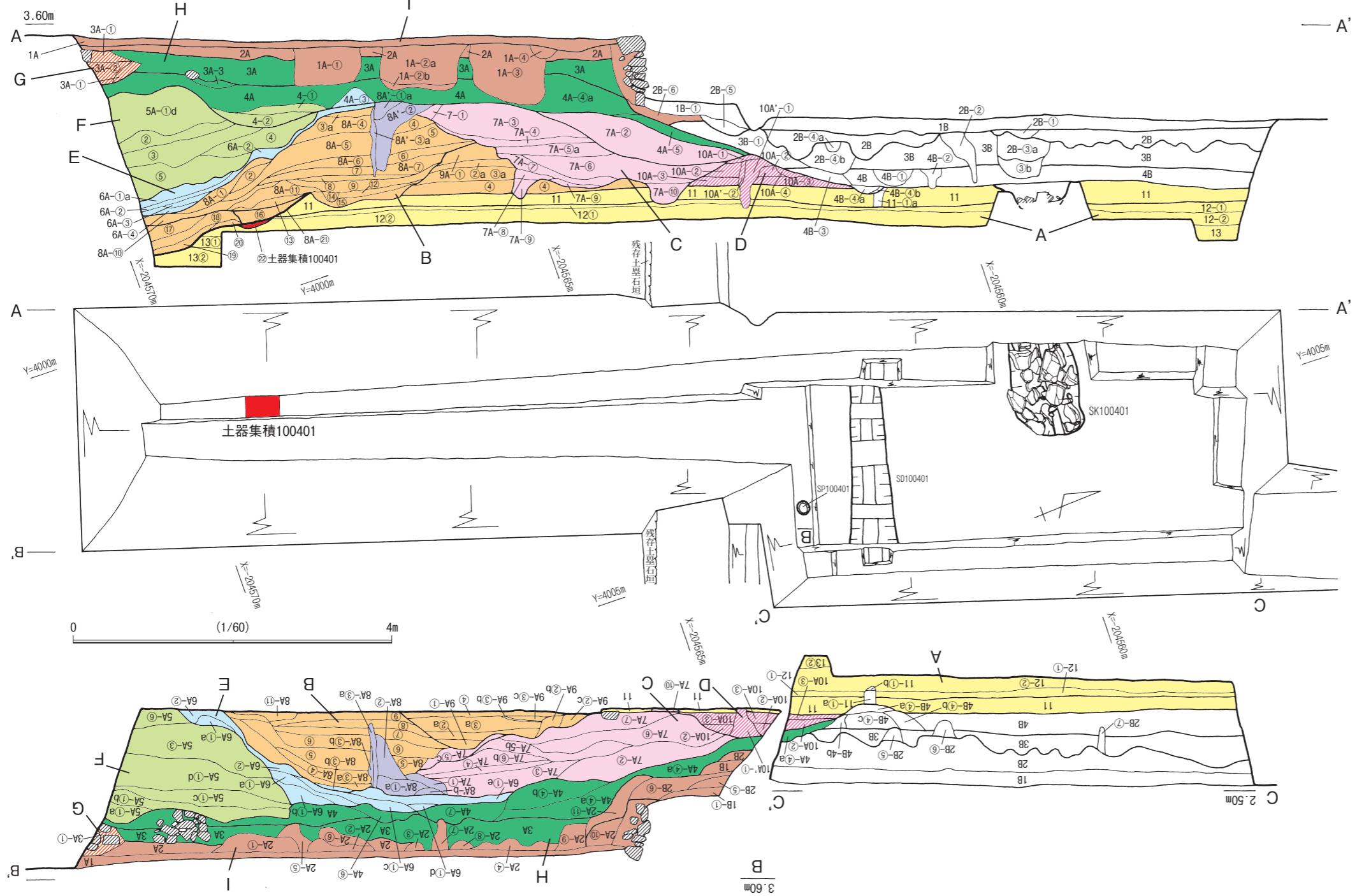
a土壘の構造

Aブロック（黄色）は自然堆積層で、砂礫→砂→黄褐色土の順に、下から上に次第に安定した地盤が形成される。標高1.4mの砂層（12-②層）では一部に人為的な攪乱の痕跡が認められる¹⁵⁾。トレンチの南端では、自然堆積層が深く落ち込む。Bブロック（薄茶色）は、初期の盛土とみられ、礫をほとんど含まない均質なシルトで構成される。水平方向に積み重なりながら、椀を伏せた様な形状になる。この内、9A層は築壘開始以前から存在した自然堆積の起伏とみられ¹⁶⁾、この起伏の上に人工的な盛土（8A層）が積まれている。トレンチ南側ではAブロックの深い落ち込みにBブロックの盛土が流れ込む。Bブロックの頂点から掘り込まれた縦坑（8A'層）は東西の壁で同様に確認され、矢板状の物を抜き取った痕跡とみられる。A・Bブロックの境目の一ヵ所で土器集積が確認されたがこれについては後述する（土器集積100401）。Cブロック（桃色）はおおむね5cm以下の小円礫を主体とする層と褐色土と小円礫が混じる層からなる盛土層である。Dブロック（桃色斜線）は褐色土を主体とした低い盛土で、構成する土壤はBブロックに近い。盛土の頂点にはBブロックと同様の縦坑が確認できる。全体の中の位置関係からCブロックの砂礫を土壘に投入した際、居館内への砂礫の流れ込みを防いだ土留めとみることもできる。Eブロック（水色）は小円礫を多く含む褐色土の層である。初期の盛土（Bブロック）外壁に不整形に分布する状況から、上位層の大規模な氾濫堆積物（Fブロック）の形成にともなってBブロック表面を削りながら形成された堆積層とみられる。

初期の盛土（Bブロック）とその後の氾濫堆積物（Fブロック）の間に長い時期差を示す痕跡は認められず、初期の盛土（Bブロック）の成立～氾濫堆積層（Fブロック）までの期間は長くないとみられるが、この点については今後の検討が必要である。Fブロック（黄緑色）は均質なシルトが厚く堆積した氾濫堆積層である。このブロックはトレンチ南壁よりさらに南に向かって厚く堆積する。Fブロックの上層（4A-①・②）では一部に直径20cm大の花崗岩が点在し、Fブロック堆積直後に人為的に充填された可能性がある。Gブロック（橙色斜線）は大型の花崗岩を大量に充填した土壘外側の補強構造（第22図）であり、後述するTR0802のFブロックに相当する。GブロックはFブロックの氾濫堆積層に被さりながら南に伸びるとみられるが、このトレンチ内では限定的な確認にとどまった。Hブロック（濃緑色）は褐色～オリーブ色土を主体とする土壘の盛土である。盛土層および氾濫堆積層によって形成された土壘の上部に厚く積み上げて土壘の高さを増す。Iブロック（茶色）は耕作土および近代以降の攪乱である。



第22図 TR1004集石上面実測図



TR1004土層凡例

土壌部

1A 褐色(7.5YR4/4)表土
1A-①黒色炭化物と褐色土が混ざる。赤く変色した土が下間に堆積
②a黒色炭化物と褐色土が混ざり合う。最下部に炭化物堆積
②b褐色土が熱でやや赤く変色したもの
③上下2層に分かれ。下部20cm程に黒色炭化物が層状に堆積
④褐色土に少量の炭化物混ざる

2A 褐色(7.5YR4/3)土耕作土
2A-①小円礫が混ざる。植物の根が入り黒色化
②1cm弱の植物の根が入り黒色化
③細かい植物の根と微細な石が入る
④細かい植物の根と5~1cmの小円礫が入る
⑤5cm前後の根が入り黒色化
⑥数cm前後の根多数と小円礫を含む
⑦上1/3は細かい根。中程は0.5~1cmの根が入り黒色化
⑧粒状が粗く乾燥しやすい為白色化
⑨堅くしまじ色調は橙色(7.5YR6/6)に近い
⑩小円礫(0.5~5cm)の集合体に上部と下部に褐色土が入る
⑪小円礫(0.5~1cm)が点々と入る。やや黒色味を帯びる

3A 褐色(7.5YR4/6)土さらさらした粒状。下部にオリーブ色土入る
3A-①円礫(0.5~5cm)主体

②オリーブ色土に若干の小円礫(1cm前後)が入る。
③褐色土に1~3cm前後の小円礫が入る

4A 灰オリーブ色(5YR6/2)土礫を所々含む
4A-①灰オリーブ色(5YR6/2)土の上に花崗岩片が乗る
②灰オリーブ色(5YR6/2)土に砂が大量に混ざり薄い縞状をなす
③灰オリーブ色(5YR6/2)土に円礫(1~4cm)が入り堅くなる
④a明褐色砂質土
④b 主体に上部に灰オリーブ色土が入る。軟質
⑤明褐色(7.5YR5/6)土1cm前後の小円礫が均質に入り堅くしまる
⑥灰オリーブ色土と明褐色~赤褐色土がL字状に縞の層序をなす
⑦ ク 右肩上がり ク

5A-①a灰オリーブ色土と明黄褐色砂が左肩上がりの縞をなす。
①b ク 右下はオリーブ色土が主となる
①c 中程で水平になり円礫を挟んで4枚に分かれる
①d ク 中程から南にかけてほぼ水平をなす
② ク が5枚以上の層をなす
③ ク 一部渦を巻いたような複雑な層をなす
④右半部は灰オリーブと明黄褐色の層序。左半部は砂円礫をまじえる
⑤十数枚が互層かつしゅう曲して下る
⑥灰オリーブ色を明黄褐色土と砂が10枚ずつ程度水平に堆積する

6A-①a明赤褐色(5YR5/8)土に1cm大の円礫がまざる
①b灰オリーブ色主体と明褐色土に1cm大の礫が均等に入る

①c ①bの上面に3~5cm大の円礫が並ぶ
①d明褐色土と灰オリーブ色土の均質な混合土。下部に縞も見える
①e dに比べ灰オリーブ色味が強い。0.5~2cm大の円礫が入る
②灰褐色(10GY5/1)の砂に2cm大の円礫が幾つか入る
③ほぼ円礫を含まない明赤褐色の砂層
④下から赤褐色土、緑灰色土、明黄褐色土からなる
7A-①灰オリーブ色土と明黄褐色土が入る。非常に堅締
②明褐色土に少量のオリーブ色と円礫
③大小の砂と円礫(0.5~5cm)の集合体。左上から右下に流れる
④灰オリーブ色土と明黄褐色土の混合土に③より少しうるが混ざる
⑤a ⑤bに円礫(0.5~5cm)が混ざる。縞主体
⑤b 灰オリーブ色土と明黄褐色土の斑目土。下部に2~3cmの円礫
⑤c 明黄褐色土に灰オリーブ色土が混ざる。下部に小円礫がたまる
⑥明黄褐色土に灰オリーブ色土の混合土に小円礫が均等に入る
⑦ ⑥層より円礫の割合が減る
⑧ ⑦よりさらに縞が減り、明黄褐色土と灰オリーブ色土が主体
⑨明黄褐色土と灰オリーブ色土の塊と1~2cm大の円礫が入る
⑩ ⑨と同様だが上半に2~3cmの縞、下半の縞は1cm程度

8A-①灰オリーブ色土に3枚の明赤褐色土が薄く縞状に入る
②厚みの一定しない明赤褐色土と灰オリーブ色土が交互に入る。
③灰オリーブ色土と明赤褐色土が均質に混ざり砂質を帯びる
④灰オリーブ色土と明赤褐色土の混合土。明赤褐色土が点々と入る

- ⑤ク ブロック状の大きさが5cm大のものもあり。総じて大
⑥ク ブロックがほとんどなくなる。円礫なし
⑦ク ブロックなし。⑥との境に5mm程の炭化物が所々入る
⑧ク 硬さが上層と異なりしまる
⑨ク しまる。黒色微粒子が点々と入る
⑩ク 灰オリーブ色土と明赤褐色土が包む紡錘状のブロックが連続する
⑪上辺と下辺に赤褐色味が強い。上辺の一部は砂状化
⑫ク 灰オリーブ色土に明赤褐色土(5YR5/6)があわせた状に入る
⑬ク オリーブ色土に明赤褐色土が点々と入る。しまりあり
⑭ク 灰オリーブ色(赤味)土を2層の砂が挟む。円礫2cm大が入る
⑮まだら目状が解消される
⑯灰オリーブ色土。明褐色土が若干混ざる
⑰緑灰色(10GY5/1)粘質土。やや砂質。明褐色土の影響を受ける
⑯緑灰色(10GY5/1)粘質土。
⑯暗緑灰色(7.5GY4/1)粘質土
⑲青灰色(10BG6/1)粘質土。木片出土
⑲暗褐色(7.5YR3/3)マンガン。板状に硬く固化する。土器に溶着
8A-①a灰オリーブ・明赤褐色に0.5~3cmの円礫が混ざる
①b 0.5cm前後の円礫が混ざる
②オリーブ褐色(2.5Y4/6)土に0.5~3cmの円礫が混ざる
③a灰オリーブ色土がブロック状に入り明褐色土と混ざる
③b ③aに1~3cmの縞が多く入る
9A-①灰オリーブ・明赤褐色土に黑色微粒子が少量入る。しまりあり
②a ク 黒色微粒子が欠け土器片が入る。しまりあり
②b ク 1~2cm大的縞が入る。しまりあり
②c 明黄褐色土に灰オリーブ色土がブロック状に入る
③a褐色(10YR4/6)土に灰オリーブ色土が数箇所ブロック状に入る
③b明黄褐色(2.5Y6/6)土の単層。しまりあり
③c灰オリーブ色土に明赤褐色土が筋状に入る。若干しまりあり
④③がよくしまる
10A-①明黄褐色(10YR6/8)土。上層との境に小縞が入る
②褐色(10YR4/6)土0.5~1cm大的縞が入りもうろこ
③黄褐色(2.5YR5/4)土微細な円礫混入。しまりあり
④褐色(10YR4/6)土に僅かに灰オリーブ色土が混ざる
10A'-①明黄褐色(10YR6/6)土に明赤褐色土がブロック状に入る
②縞含まず若干の灰オリーブ色土の混入が認められる。
11 黄褐色(10YR5/8)土。しまりが強く堅い
11-①a明黄褐色土と灰オリーブ色土の混合土がよくしまる
①b ①bはしまりなく柔らかい
12-①オリーブ褐色(2Y4/4)砂。ややしまりが残る
②暗緑灰色土と灰オリーブ色土がブロック状にまざる
13 青灰色砂礫 自然堆積の砂礫
①砂粒混じりの縞。やや粘性あり
②河床の縞。縞や大きい

居館内部

1B オリーブ褐色(2.5Y4/4)土耕作土。粒状粗くザラつく
1B-①黒色土、円礫など複合的にまざる。通常
2B オリーブ褐色(2.5Y4/3)土。しまる部分と脆い部分がブロック状なす
2B-①明黄褐色(2.5Y6/6)土にオリーブ褐色(2.5Y4/4)がまざる
②黄褐色(2.5Y5/6)土にオリーブ褐色(2.5Y4/4)がまざる。小縞含む
③a明黄褐色(2.5Y6/6)土に0.5~1cmの円礫が入る。
③bにぶい黄色(2.5Y6/6)土。灰オリーブ・明赤褐色土がブロック状に入る
④a明黄褐色(2.5Y6/6)土。灰オリーブ・明赤褐色土の変化したものが
④b明黄褐色(2.5Y6/6)土。下間に2~10cmの円礫が存在する
⑤明黄褐色(2.5Y6/6)土に灰オリーブ・明赤褐色土(径数cm)入る
⑥明黄褐色(2.5Y6/6)土に明赤褐色土(径数cm)ブロック状に入る
⑦明黄褐色土。黒く変化した部分あり。根菜の跡か
⑧褐色(10YR4/4)土と灰オリーブ色土がまじる。
3B オリーブ褐色(2.5Y4/6)土
3B-①明黄褐色(10YR6/6)土。0.5~3cm大的円礫を含む。3~5cmの根入る
4B 黄褐色(10YR5/6)土。よししまる。5mm前後の円礫を点々と含む
4B-①黄褐色(10YR5/6)土。灰オリーブ・明赤褐色土ブロック状に入る
②黄褐色(10YR5/6)土。橙色の粒子(5mm)がわずかに入る
③黄褐色(10YR5/6)土。灰オリーブ色土ブロック(5mm)が点々と入る
④a黄褐色(10YR5/6)土。下面には灰オリーブ・明赤褐色土が堆積
④b黄褐色(10YR5/6)土。明黄褐色(10YR6/6)に近い色調。
④c黄褐色(10YR5/6)土。色調が下層と好対象をなす。
⑤オリーブ灰色(10Y6/2~5/2)土と暗赤褐色(5YR3/6)互層に堆積

- A … 黄色 F … 黄緑色
B … 薄茶色 G … 橙色斜線
C … 桃色 H … 濃緑色
D … 桃色斜線 I … 茶色
E … 水色 矢板痕 … 紫色

第23図 TR1004実測図

b個別遺構

土器集積100401（第24図、図版15）

初期の盛土（Bブロック）の最下層で少なくとも11個体の土師器（70~80）を含む土器集積が検出された。土器は保存状態が良好でAブロックの緩やかな落ち込み斜面上に面的に分布する。土器が分布する面は自然堆積砂（12層）と盛土（8A~⑯）の境目にあたり、この境目に板状に層をなす固化したマンガンが、土器集積内の土器表面に付着する。土壙の築造開始時期につながる重要な一括土器資料である。この土器集積検出中の土壤に木炭の破片（長辺1~5mm）が少量含まれており、これを採取してAMS測定法による年代測定を行った結果、1304~1393calADの間を示した。¹³⁾

②居館内部

a基本層序

土壙の盛土構造下の自然堆積層（第23図のAブロック）は居館内部まで連続する。土壙はこの地盤の上に築かれており、Aブロック上面は居館の最も初期の遺構面とみられる。

b個別遺構

SK100401（第25図、図版15）

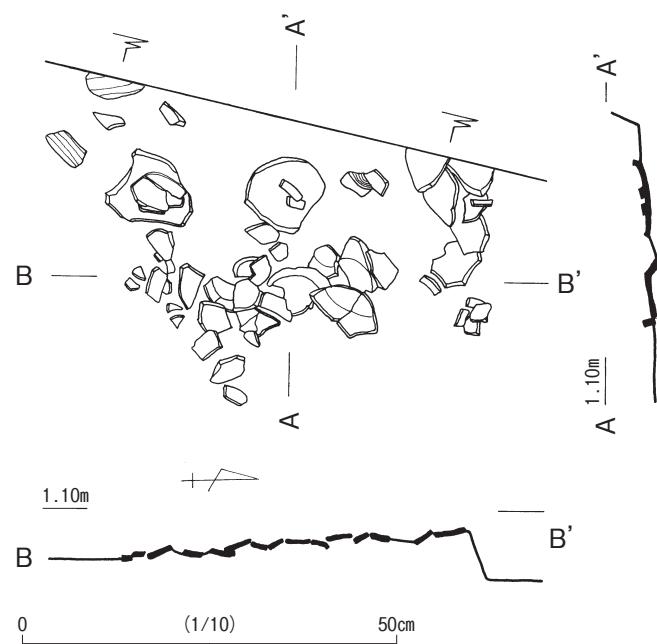
居館内部のトレーニング西壁付近で、花崗岩を中心とする大型の山礫が大量にまとめられた土坑が検出された。礫の入り方に何らかの意図は見受けられず、不要となった石をひとまとめて投棄したと推測される。

SD100401（第23図）

土壙盛土と居館内部との境目付近で、幅50~80cm、深さ約30cmの溝が検出された。溝は土壙とほぼ平行して東西方向に伸びる。盛土構造の最下層より約20cm上面から掘り込まれており、築壙後、一定期間が経過した後の遺構と見られた。

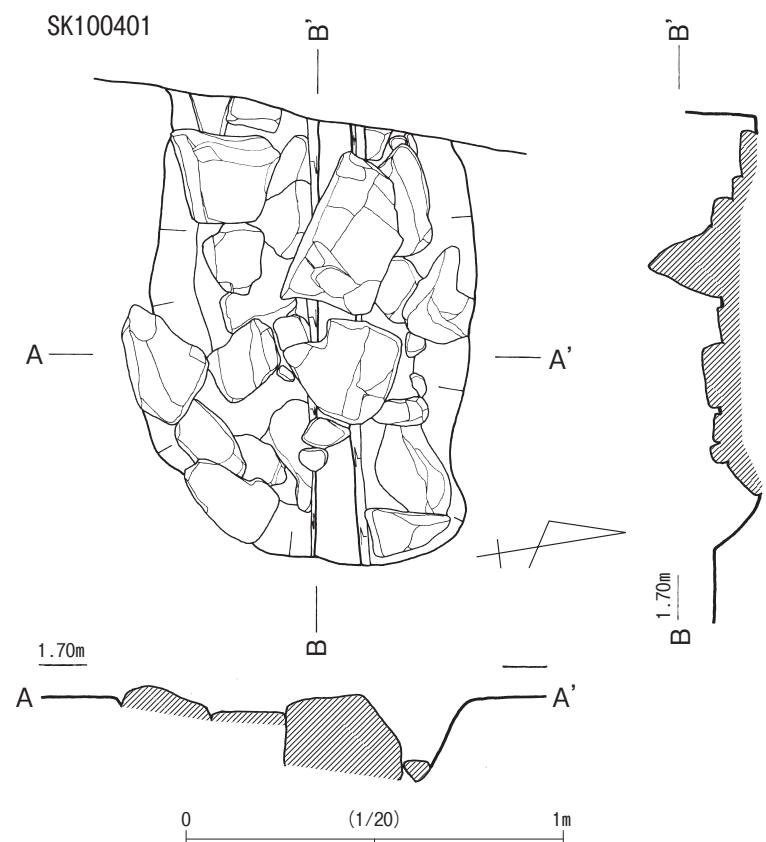
土壙と居館内部の境に設けた仕切り溝とみられる。

土器集積100401



第24図 土器集積100401実測図

SK100401



第25図 SK100401実測図

(5) TR0802 (第26図、図版16・17)

南土壌上に幅2m、長さ10mのトレンチを設定し断面調査を行った。

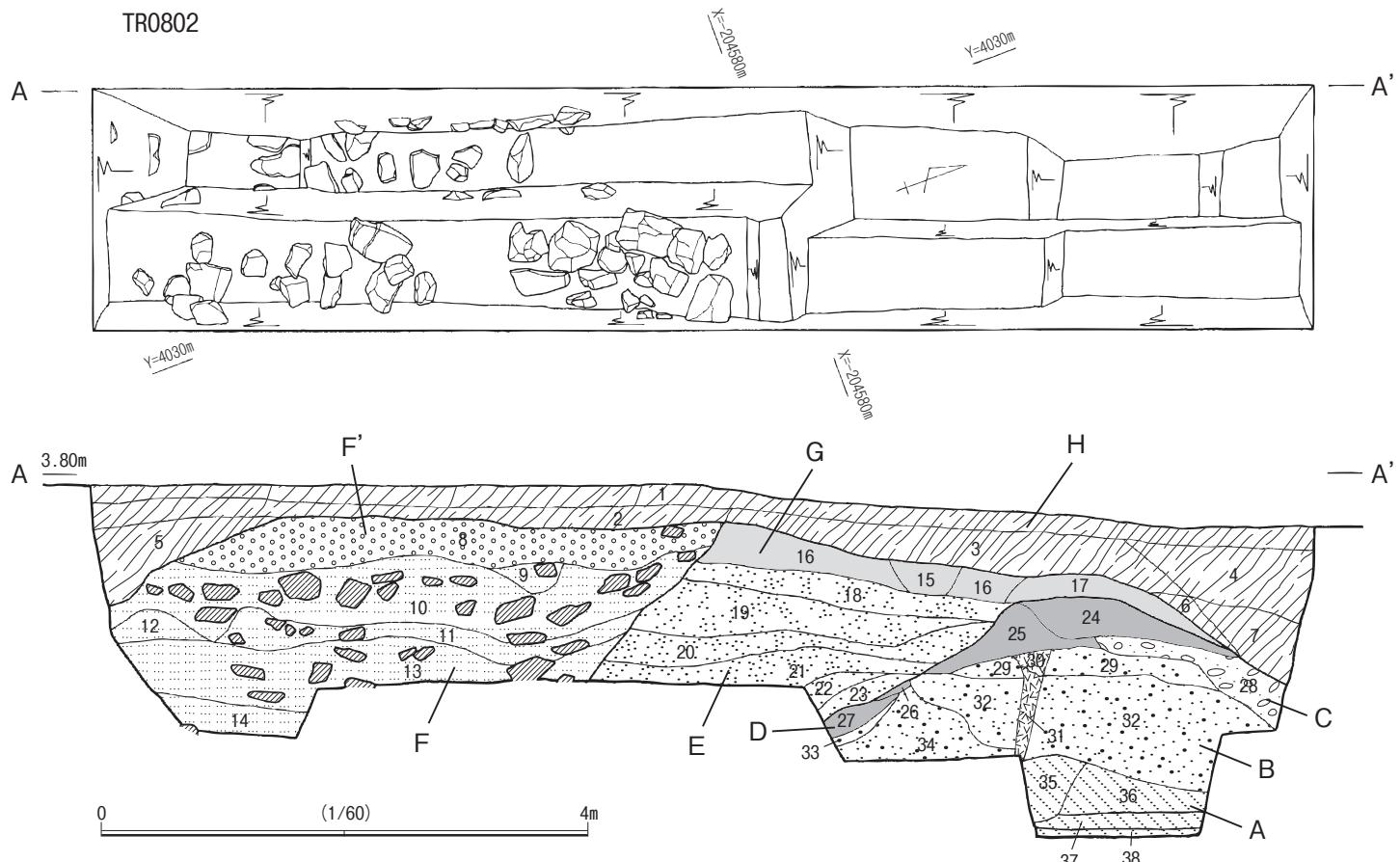
①基本層序

厚さ20~30cmの表土の下で、段階的な築堤工程を示す土壌の構造部分が検出された。標高1.3m付近（第26図の35・36層上面）より下は自然堆積層である。

②土壌の構造

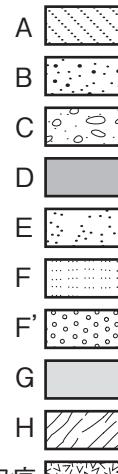
トレンチの最深部で確認された粘質土および砂礫を主体とするAブロックは自然堆積層（第26図の35~38層）である。この自然堆積層の上面で14世紀代の可能性がある土師器鍋の口縁部（219）が出土している。Bブロックは均質なシルトを盛った土壌の盛土である。

TR0802



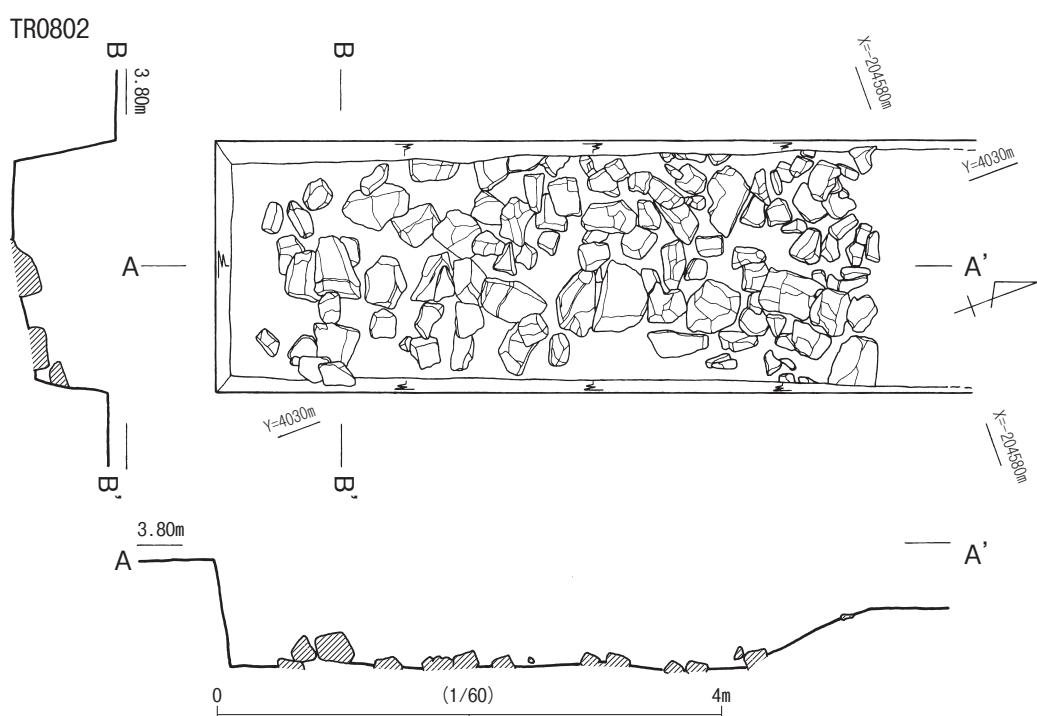
TR0802土壌凡例

- 1 黒褐色(7.5YR3/1)シルト(表土)
- 2 黄灰色(2.5Y6/1)シルト(1~5cm大の河原疊含む)
- 3 にぶい黄色(2.5YR6/3)シルト
- 4 褐灰色(10YR5/1)シルト(1~3cm大の小河原疊含む)石積み裏込め
- 5 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(1~5cm大の河原疊含む)石積み裏込め
- 6 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト
- 7 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土(石積み裏込め)
- 8 灰色(7.5Y6/1)砂礫土(1~5cm大の小河原疊多く含む)
- 9 灰色(10Y6/1)砂礫土(1~5cm大の小河原疊含む)
- 10 灰オリーブ色(7.5Y6/2)粘質土(15~40cm大の花崗岩充填 貝殻含む)
- 11 青灰色(5BG6/1)砂礫土(0.5~5cm大の河床玉砂利含む)
- 12 緑灰色(10G6/1)弱粘質土(2~5cm大の河原疊含む)
- 13 緑灰色(10G5/1)弱粘質土(15~30cm大の花崗岩充填)
- 14 緑灰色(5G6/1)弱粘質土(20~35cm大の花崗岩充填)
- 15 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
- 16 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土
- 17 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト
- 18 浅黄色(2.5Y7/3)砂質土(2~3cm大の河原疊少含む)
- 19 浅黄色(2.5Y7/3)砂質土
- 20 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土
- 21 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
- 22 灰色(7.5Y6/1)シルト(やや粘質)
- 23 灰色(10Y6/1)シルト(粘質度増す)
- 24 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト(貝殻含む)
- 25 灰色(5Y5/1)砂礫土(1~5cm大の河床玉砂利)
- 26 オリーブ灰色(5GY6/1)シルト
- 27 灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂礫土(1~5cm大の河床玉砂利)
- 28 灰色(7.5Y5/1)砂礫土(1~5cm大の河床玉砂利)
- 29 オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘質土(砂混じり)
- 30 灰色(10Y6/1)砂礫土(1~5cm大の河床玉砂利)
- 31 オリーブ灰色(5GY6/1)シルト
- 32 明灰黄色(2.5Y5/2)粘質土
- 33 緑灰色(7.5GY6/1)粘質土
- 34 オリーブ灰色(5GY6/1)粘質土
- 35 灰オリーブ色(5Y6/2)粘質土
- 36 灰オリーブ色(5V5/2)粘質土
- 37 緑灰色(10G6/1)粘質土
- 38 青灰色(5BG5/1)砂礫(河床疊)~湧水



第26図 TR0802実測図

盛土頂部には、TR1004と近似する抜き取り痕（30・31層）が確認できる。Cブロックは5cm大までの円礫を多く含む砂礫主体の盛土層である。Dブロックは砂礫とシルトを主体とし、上層の氾濫堆積層（Eブロック）が形成される際に影響を受けたとみられる堆積層である。EブロックはTR1004のEブロックと対応する氾濫堆積層である。FブロックはEブロックの氾濫堆積層の上にかぶさるように形成される、土壌外側の補強構造である。弱粘質土の間に大型の花崗岩を大量に充填し、土壌の外側半分を、強固に築きあげる。工程としてはTR0902（北土壌）のFブロックとも対応するが、様相は大きく異なる。また、FおよびGブロックの所々で白色化した貝殻¹⁷⁾が固まって出土する場所があり、出土状況から、人為的に廃棄されたものとみられた。F'ブロックは1～5cm大の礫を多く含む土壌外側の補強構造である。Gブロックはやや粘質のシルトを用いて高さを増した盛土構造である。Hブロックは表土であり、南北両端は後世の搅乱をうけている。



第27図 TR0802集石上面実測図

(6) 土壌構造のまとめ

以上の3カ所の土壌断ち割り調査の成果から、土壌が形成される過程を推察すると、大きく3段階に分けることができる。

TR1004（第23図）を例に土壌構造をみると、11層上面（第23図）の中世遺構面（標高1.5m付近）より下層では遺構を伴わない自然堆積層となる。ただし、TR1004の12-②層上面（第23図）では、わずかに人為的な活動の痕跡が認められるとの堆積学による観察所見がある。居館内部および土壌からは、高台付の椀底部（157～159）や青磁（233）・白磁など13世紀代およびそれ以前の遺物が少数ながら出土していることから、出土遺物の点からも居館の土壌築造時期と推定される14世紀前半代を遡る時期から既に中州内での人々の活動が行われていた形跡をうかがうことができる。

TR1004の土壌構造（第23図）の場合、第1段階の初期の盛土は、居館内部の中世遺構面と同じ基

盤層の自然地形（TR1004のBブロックの一部でほぼ9A層に相当する堆積部）の上に、均質なシルトや砂礫が椀を伏せた形状〔TR1004・8A層（Bブロックの一部）、7A層（Cブロック）、10A層（Dブロック）。ただし10A層は自然堆積の小丘陵の可能性もある〕に盛土されている。

第2段階では、付近一帯に及んだと思われる大規模な河川の氾濫によって、土壘の外側に厚い氾濫堆積層（TR1004 E・Fブロック）が残される。TR0902では、氾濫堆積層（第20図、D・Eブロック）の土砂が土壘を乗り越えて居館内部に達する。居館内部の氾濫堆積土砂は氾濫後に一定程度整理されたと思われるが、土壘断面には氾濫堆積層（TR1004のE・Fブロック、TR0902のD・Eブロック、TR0802のD・Eブロック）がそのまま残されており、土壘の盛土内容物を構成する一部となっている。

さらに、第3段階では土壘の外側で、氾濫堆積層の上面をおおうように大型の花崗岩（TR1004のGブロック）を用い、内側では土砂（TR1004のHブロック）を盛り重ねて強固な土壘構造を築き、最終的に幅10mを超える大規模な土壘となっている。この時点での土壘の高さは明らかではないが、北西隅の土壘は約40mにわたって周囲の標高より約7m高い土壘を留めている。また、近世中期に描かれた絵図では居館跡の土壘の高さが四周にわたって一様に描かれていることから、第3段階の最終完成時点では、数m以上の一定程度の高さと10mを超える幅を有する土壘が四周を巡っていたと推定される。なお、これらの近世の絵図から判断して近世に旧居館内部を利用した瑞光寺が土壘（当時は築地と呼んだ）の現状維持に尽力した様子がうかがえるとともに、現在残存している土壘の高さ等はあくまでも瑞光寺廃寺以降に上部の削平などの改変を受けた後の姿と見ることができる。

以上、各トレーニング調査で得られた所見に基づき、土壘の築造段階（工程）と構造を中心に検討を加え、各トレーニング（TR）について第1～3段階と層序ブロックの関係を以下にまとめて整理した。

第1表 土壘断ち割りトレーニングの層序ブロックと土壘構造の対応

	TR1004（第23図）	TR0802（第26図）	TR0902（第20図）
第1段階	B・C・D	B・C	B・C
第2段階	E・F	D・E	D・E
第3段階	G・H	F・F'・G	F・F'・G・H

いずれのトレーニングも程度の差はあるが前述の3段階を経ていることがみてとれる。細かい点では、初期の盛土の頂部に矢板状の物を抜き取った溝状の痕跡がある点なども共通する。特に南土壘上で直線距離にして30mの位置にあるTR1004とTR0802の間ではほぼ相互に対応可能な盛土構造が確認できた。一方で、TR0902については南土壘の2ヵ所と部分的に様相が異なり一律に対応させることは難しい。例としては、大型の花崗岩を用いた土壘外側の補強構造が土壘幅全体に占める割合、北土壘で厚く形成される砂礫の盛土層の存在などである。北と南の土壘構造に違いがある原因として、不整形な居館の形状からも推察される築壘当時の河川流路の状況が考えられる。中州の形成状況によっては、居館の北と南で立地環境が大きく異なったことも考えられ、氾濫時の被害の状況なども異なった可能性がある。土壘外側の補強構造は、河川氾濫時に受けた被害の事後対策として築かれた堤防の意

味合いも考えられることから土壘構造の理解のためにも当時の自然環境に関するさらなる検証が必要である。

この3段階にわたる築造工程が、数年単位の短期間の間に一連の築造作業での工程段階を示すものか、10～100年単位の時期差を伴う土壘の順次増築・発展過程を示すものかは限られた調査範囲における土層や堆積状況の観察、ならびに土壘断ち割り調査に伴う少量の出土遺物からだけでは判断を下せない。しかし、第2段階の氾濫堆積層による被害を受けた土壘を長期間放置したとは考えにくく、第2段階の形成の後、さほど大きな期間をおかず、復旧工事とともに迅速に第3段階の築造作業に着手されたのではないかと考えられる。

土壘の構造や築造時期等については、今後東土壘および西土壘を含めた土壘構造の検討および調査を進め、判断材料の増加を待って結論を出していく必要がある。

4 堀状遺構

(1) 土壘の外の現状

平地に築かれる居館であれば通常は堀を伴うが、現状の表面観察からは中津居館跡の周囲に堀の痕跡を見ることはできず、現存する近世の居館跡の姿および周辺を描いた複数の絵図でも堀の表現は確認できない¹⁸⁾。中津居館跡は川の中州に立地し、土壘の築造が開始された後も、頻繁に河川氾濫の影響を受けていた様子が居館内部および土壘の発掘調査から確認されており、多量の土砂を搬入する河川の氾濫が頻繁に起こる状況下では、堀の維持管理に困難が伴ったと推測される。別の言い方をすれば居館周囲を流れる河川を天然の堀として利用するために、あえて川の中州に立地したとも考えられる。いずれにしても北土壘および東土壘の外側の計3ヵ所にトレントを設定して行った今回の調査は、土壘外周約570mの内のごく一部に過ぎず、全体像を推測するにはさらなる資料の増加が不可欠である。3ヵ所の調査結果は中世の一時期、土壘外側にある程度人為的な掘り込みが存在したことを示しているが、一般的に抱く防御機能を備えた「堀」のイメージとは異なり、堀として長期間維持された形跡は確認できていないことなどから、現時点では土壘外側の落ち込みを「堀状遺構」として捉えることとした。

(2) TR1002（第28図、図版18・19）

北土壘の外側の北東隅付近に、長さ21m、幅3mのトレントを設定し、堀の有無および規模の確認をおこなった。トレントは北土壘の残存土壘基底部から居館の外に向かって直線的に極力延長し、土壘と土壘外側との関係の把握に努めた。

①層序

地表から-1.2m（標高1.5m）までは砂質を帯びる黄褐色土（第28図の1～15層）が厚く堆積する。この層の所々に畝状の層序が確認され、後世田畑として利用された形跡とみられる。地表から-1mより下層で自然堆積の砂礫層（28層）となり、自然堆積層の上面は緩やかに堀状の落ち込みを呈する。

②堀状遺構

自然堆積の砂礫層の上面は、トレント北側で地表から-1m（標高1.6m）付近に現れ、南に向かつ

て徐々に下がっていき最も深い所で地表から - 2 m になる。トレンチの東壁土層断面では、自然堆積層の上面が堀状の落ち込みを呈する。堀状遺構の規模は、上幅約 18m、底幅約 6 m、上端部から底部までの深さ約 1 m、現地表面から底部までの深さ約 2 m である。自然堆積層の直上のオリーブ褐色砂質土の層（第28図の19層）から14世紀半ば以降とみられる輸入青磁片 1 点（234）、14～15世紀代の陶器甕の破片（230）、15世紀前半とみられる瓦質土器の鍋（225）が出土した。このうち瓦質土器の鍋（225）には使用時に付着した外面の煤が良く残っており、AMS測定法を用いた年代測定を行うことが可能であった。測定結果は 1400～1426 cal AD の範囲であり¹³⁾、周辺から出土した遺物の土器形式からみた年代観¹⁹⁾ と近い年代を示した。自然堆積層の落ち込み上面（第28図の28層上面）で出土した遺物が示す年代が 14～15世紀前半代の約 100 年間の幅に収まることから、堀状遺構が形状を保った一定期間内にこれらの遺物が散乱し、後の氾濫等の影響から上位の堆積層が形成されたことでそのまま包蔵されたと推察される。堀であれば外側に立ち上がりが存在するが、現状では明瞭に確認することはできない。土壘の断ち割り調査（TR0902）では、TR1002 の自然堆積層を形成する砂礫に近似する砂礫を大量に用いて厚い盛土層が形成されており、特に北土壘では盛土に占める砂礫層の割合が大きかったことを考えるとこの落ち込み（窪み）は土壘盛土の調達に伴う浚渫痕とみることもできる。

③ 土壘基礎敷石

残存する北土壘の下の現地表から - 1.5 m（標高 1.1 m）付近で大小の礫を敷石状に並べた土壘の基礎構造が検出された。この敷石は残存土壘のほぼ真下から土壘の外約 4 m の範囲にあり長辺 20～30 cm の角礫を主体としながら、最も外側では、長辺 60 cm を越す花崗岩を据えて館の外に向かって緩やかに下る。これと似た構造が後述する TR0803 の土壘基礎部分にも確認されており、TR0802 および TR0902 で見られた土壘外側の補強構造とあわせて一連の土壘構造として捉えるべきと考える。

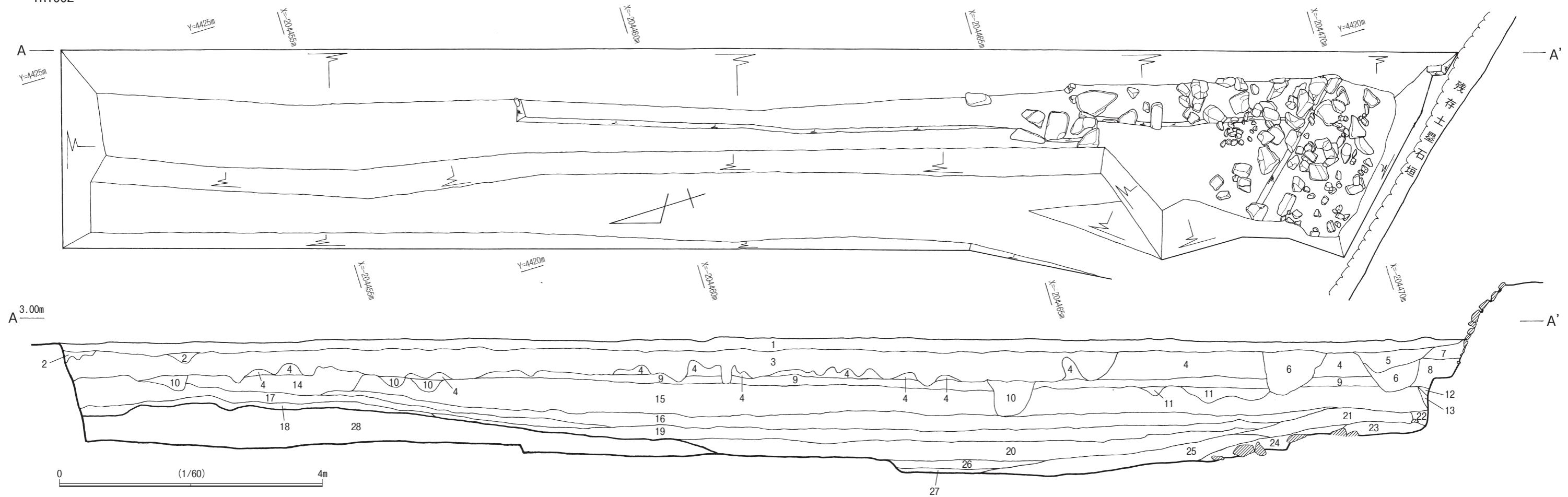
（3） TR0803（第29図、図版20）

東土壘および東土壘の外にまたがる幅 2 m、長さ 6 m のトレンチを設定し、堀の有無および土壘から堀に向けての土壘構造の確認について調査をおこなった。TR0803 付近は明治以降、土壘の外側の一部が周囲の地表面と同じ高さまで削平されており、削平される以前の状況を記した明治2年作成の測量図²⁰⁾ では土壘幅は 7 間（12.6 m。現在残るのはその内の 8 m）とある。トレンチは東西方向の延長 6 m の内、西側 3 m を土壘部、東側 3 m を土壘外となるよう設定した。

① 層序

地表から - 0.4 m までは耕作土および表土である。本来の土壘部にあたるトレンチ西側では、表土直下に厚さ 20 cm の近世の埋土があり、近世埋土の下で長辺 10～40 cm の花崗岩を充填した土壘基礎部分が現れた。土壘基礎部分の上面は花崗岩を密に充填する敷石状集石面が形成される。この敷石状集石面は土壘外に向かって徐々に下り、トレンチ東端の最も下った部分との比高差は約 1 m となる。土壘基礎の一部を部分的に掘り下げたところ、現地表面から - 1.3 m（標高 1.2 m）付近まで充填された礫の存在が確認できる。土壘の断ち割り調査から、大量の花崗岩を充填する土壘外側の補強構造が確認されており、ここで見られる構造もそれらの土壘外側の補強構造に対応するものとみられる。敷石状集石の上面の灰オリーブシルト層（第29図の 9 層）では、中世の男性の人骨²¹⁾ および貝殻²²⁾ が出土したが、出土状況から埋葬された形跡は確認されなかった。

TR1002

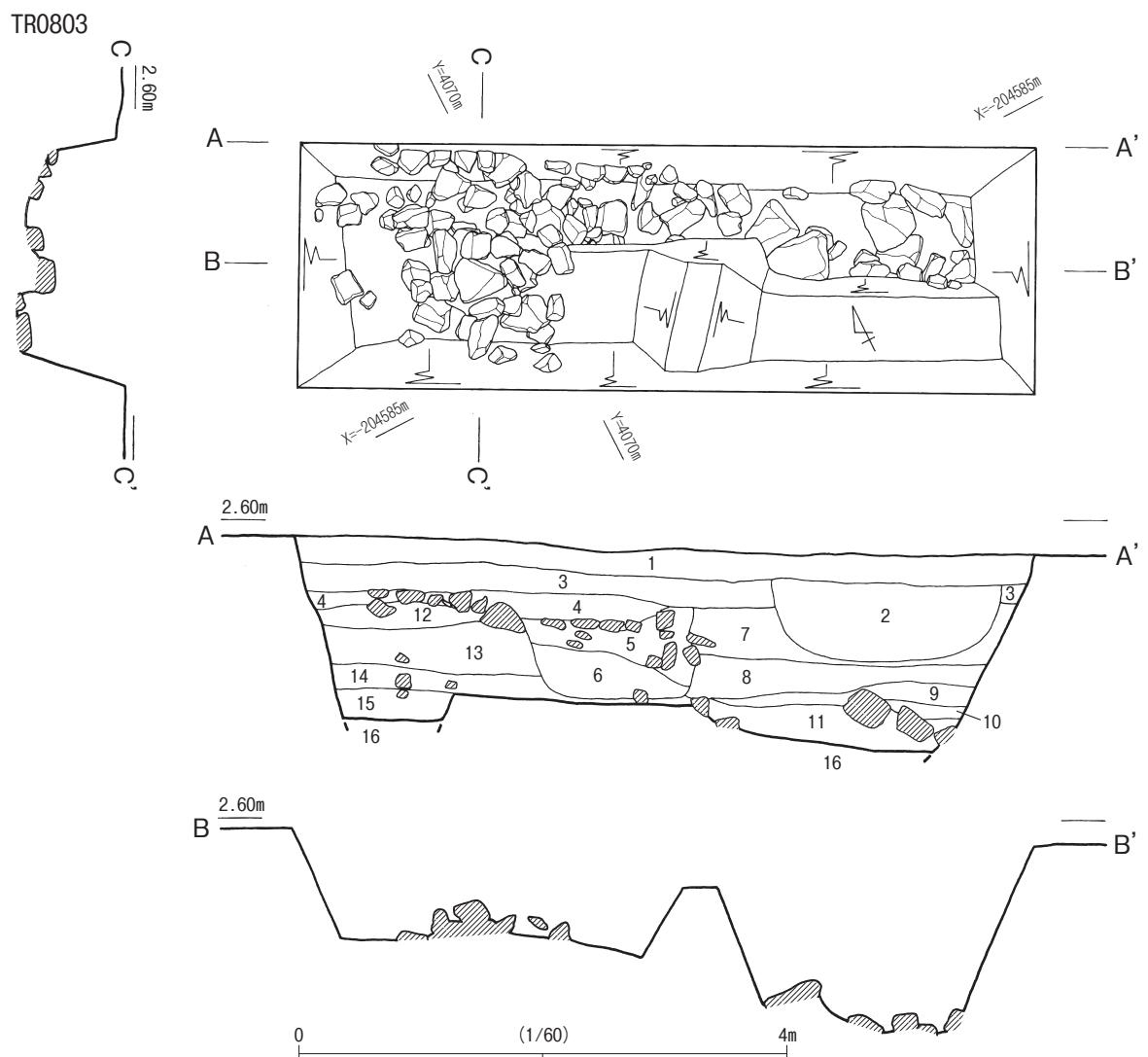


TR1002土層凡例

- 1 表土(耕作土)
- 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)土、砂質やや強い。
- 3 にぶい黄橙色(10YR6/3)土
- 4 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
- 5 褐色(10YR4/4)土1～5cmの礫と現代の土管含む、粘度が強い
- 6 にぶい黄褐色(10YR5/4)土、5mm～2cmの礫を上層に偏って含む。わずかに橙色土の粒子が散見される。
- 7 にぶい黄褐色(10YR5/4)土、若干の礫を含む
- 8 にぶい黄褐色(10YR5/4)土、2mm～2cmまでの小礫を含むが量は1～2%、土の粒子は細かくしまりと粘性がある。中程は灰黄褐色(10Y4/2)
- 9 黄褐色(2.5Y5/3)土、砂質やや強い。
- 10 にぶい黄褐色(10YR5/3)土。
- 11 にぶい黄褐色(10YR4/3)土、径1cm程度の円礫を若干含む。
- 12 オリーブ褐色(2.5Y4/4)土、2～3cmの礫を2個含む、粘性を有す。
- 13 オリーブ褐色(2.5Y4/3)土、2～5cmの小礫を全面に含む。上層より砂質味を増す。一部に暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)部分あり
- 14 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土、径1～2cmの円礫をわずかに含む。
- 15 褐色(10YR4/4)砂質土、径1cm未満の円礫をわずかに含む、木炭含む。

- 16 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土、径1～2cm前後の円礫をわずかに含む。
- 17 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土、径2cm前後の礫をわずかに含む。
- 18 オリーブ褐色(2.5Y4/3)土、径2～3cmの円礫を多く含む。
- 19 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土
- 20 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土
- 21 オリーブ褐色(2.5Y4/3)土、径2cm前後の小礫を含む。3cm程度の焼土ブロック1箇所あり(2.5Y4/3)。
- 22 オリーブ褐色(2.5Y4/3)土、⑦より濁りが強い。
- 23 灰オリーブ色(7.5Y5/2)土、茶褐色の縞模様を呈し、砂質味と粘性を兼ねて持つ。
- 24 灰オリーブ色(7.5Y5/2)土、円礫を含まない純粹層。
- 25 灰オリーブ色(7.5Y5/2)土、若干の小円礫を含む。
- 26 28の砂礫層(自然堆積)と25灰オリーブ色(7.5Y5/2)土の混合土
- 27 小礫層
- 28 砂礫層(角礫径2～10cm)、堀の掘り込み面。自然堆積層。

第28図 TR1002実測図



TR0803土層凡例

- 1 黒褐色(7.5YR3/1)粘質土(一部河床礫含む 表土)
- 2 暗褐色(10YR3/3)土ほか(現代のごみ穴)
- 3 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(小礫含む 旧地表土)
- 4 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト(小礫含む 近世埋め土)
- 5 灰黄褐色(10YR5/2)砂礫土(2～5cm大の小礫含む)
- 6 褐色(10YR4/1)砂礫土(2～5cm大の小礫含む)
- 7 黄褐色(2.5Y5/3)シルト(2～5cm大の河原礫含む)
- 8 暗オリーブ色(5Y4/4)シルト(2～10cm大の河原礫少量含む)

- 9 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト(食用廃棄貝殻、人骨出土)
- 10 灰色(10Y4/1)粘質土
- 11 オリーブ色(2.5GY5/1)粘質土(大型石含む)
- 12 黄灰色(2.5Y5/1)砂礫土(2～5cm大の河原礫含む)
- 13 灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘質土
- 14 緑灰色(7.5GY)砂礫土(2～5cm大の河原礫含む)
- 15 緑灰色(5G5/1)砂礫土(2～5cm大の河原礫含む)～自然堆積層
- 16 青灰色(5BG5/1)砂礫土～自然河床礫

第29図 TR0803実測図

(4) TR0804 (第30図、図版20)

TR0803より東へ3m先の延長線上に幅2m×長さ3mのトレンチを設定し、東土壘外側での堀の痕跡の確認を行った。この付近の東土壘は近代以降に外側が削平されているが、TR0804の設定位置は、削平される以前の土壘外壁からは6m離れた場所にあたる。

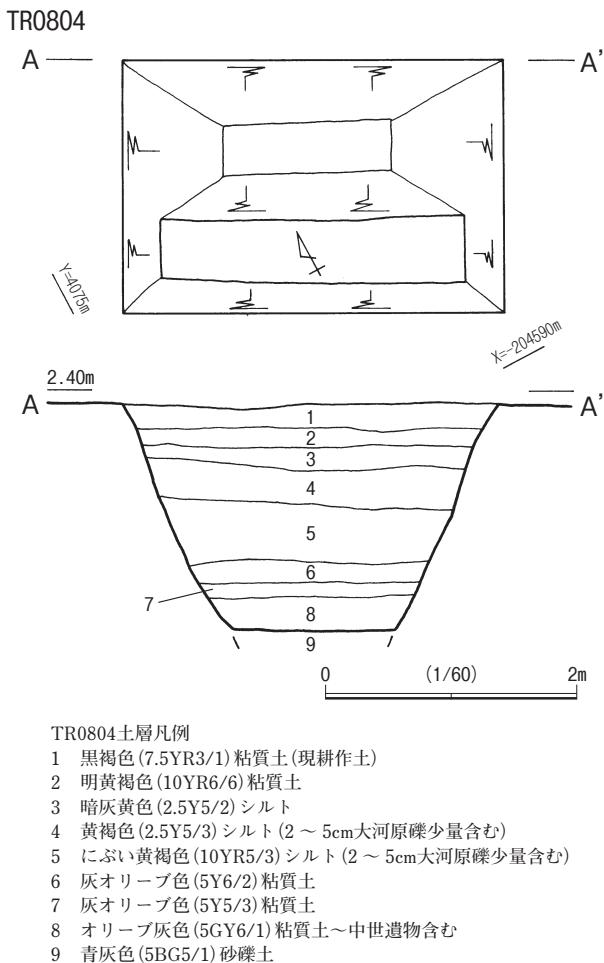
①層序

厚さ20cmの耕作土の下に、シルトと粘土からなる埋土が厚さ1.6mにわたって堆積し、その下で自然堆積の砂礫（第30図の9層）となる。埋土層の土壤は上層から下層まで変化が少ない。TR0803で検出された土壘基底部およびTR1002で検出された土壘基礎敷石に相当する痕跡は認められず、この範囲までは達していない。自然堆積層の上の粘質土層（8層）では中世の土師器片が出土した。自然堆積の礫層（9層）上面が中世の一定期間、堀底であった可能性が考えられる。TR0804の調査範囲は限定的であり、東土壘外側の堀の有無および規模については今後の調査によって慎重に判断する必要がある。

- 1) 中津薬師堂とも。方二間半寄棟造。瑞光寺の遺構。堂内の薬師如来坐像は、像高71.5cm・木造（寄木造）・玉眼・金泥塗・南北朝時代・京都を中心に活躍した院派系仏師の典型的な作風とされる。現在は横山の永興寺に移されている。（不動山永興寺『不動山永興寺の寺宝』2010年）
- 2) 資料編 文献6「享保増補村記」参照。
- 3) 薬師堂は昭和26年のキジア台風でも大きな被害を受けて修復されている。現薬師堂の基礎はコンクリートが使用されており、明治以降も若干位置が変わっている可能性がある。
- 4) 資料編 絵図4「中津瑞光寺築地之図」-④「旧瑞光寺境内図」参照。
- 5) 僧居所が取り壊された時期は明らかではないが、付近の住民の話では、昭和の初期まで建物があり僧侶が住んでいたという。
- 6) 松田順一郎氏（堆積学）の御所見による。松田順一郎氏には、第2次・第3次・第3次（追加調査）において堆積学の見地から現地調査を依頼した。現地調査は、第2次…平成21年8月17日、第3次…平成22年8月19・20日、第3次（追加調査）…平成23年3月16日、に発掘調査担当職員と共に行った。また、TR0903北壁・TR1004西壁の土壌を不拡散状態で採取し後日分析を依頼した。調査の報告は本書関連分野報告・分析編に「中津居館跡の地形条件と堆積物の観察結果」として収録した。
- 7) 註6) と同じ。
- 8) 寛文8年（1668年）作成の「御領内之内図」資料編 絵図1参照。居館跡が描かれている絵図として最も古い。
- 9) 資料編 絵図4-①「中津瑞光寺築地之図」参照。東土壘の内側に沿って南北に走る水路が青墨色で描かれる。
- 10) 註9) と同じ。
- 11) 文化庁文化財部記念物課「発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－」2010年（p176）の記載にならい、礎石を掘り込んだ柱穴の基底部に据える構造を「地下式礎石」と呼ぶこととした。
- 12) 広島県立歴史博物館主任学芸員鈴木康之氏の御教示による。
- 13) 関連分野報告・分析編「中津居館跡における放射性炭素年代（AMS測定）」参照。
- 14) 註6) と同じ。
- 15) 註6) と同じ。
- 16) 註6) と同じ。
- 17) 今回の調査で出土した貝殻の同定を、岩国市科学センター指導員 善村唯雄・大成芳道両氏に依頼した。出土貝類一覧表と共に遺物編に収録した。
- 18) 資料編絵図1～4参照。資料編には現存する絵図の中から中津居館跡に関して特に有益な情報を多く含むと考えられるものを掲載した。
- 19) 岩崎仁志「山陽西部における中世の土製煮炊具－周防・長門を中心にして－」（日本中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究 21』2007年）
- 20) 註4) と同じ。
- 21) 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸・松下真実氏の御教示による。人骨の鑑定結果の詳細は、関連分野報告・分析編「中津居館跡出土の中世人骨」に収録した。
- 22) 註17) と同じ。

参考文献

千田嘉博・小島道裕・前川要『城郭調査ハンドブック』（株新人物往来社 1993年
文化庁文化財部記念物課『発掘調査の手引き－集落遺跡発掘編・整理報告書編－』2010年



第30図 TR0804実測図

IV 遺 物

1 出土遺物の概要

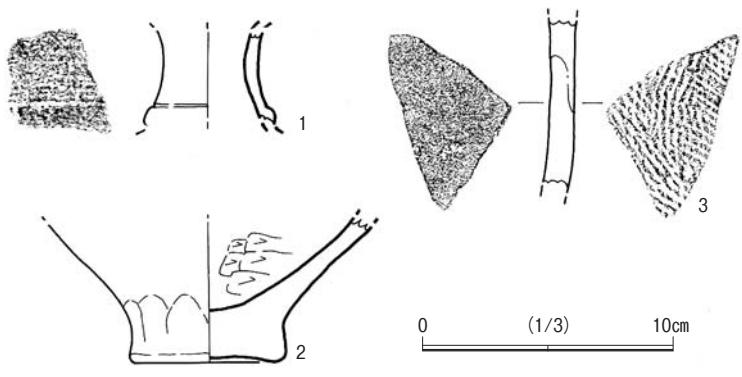
3年度にわたる調査で数百点の遺物が出土した。内訳は土師器、瓦質土器、陶器、輸入青磁・白磁、近世国産陶磁器、弥生土器、須恵器、瓦、土錐、土製品、鉄製品、鉄滓、銭貨、貝殻、人骨に大別できる。時代的に大別して中世（含中世以前）と近世の遺物に分けられる。土師器はいずれの調査区からも出土した。全体として出土の密度が高かったのは、建物跡が検出されたTR1003・TR1003-2の中世の遺物包含層であり、薬師堂に隣接するTR0901・TR1001の中世の包含層がこれに次ぐ。器種は供膳具である杯が主で、皿・椀が少量伴出している。瓦質土器、陶器・施釉陶器はTR0901・TR1001が最も多く、TR1003・TR1003-2がこれに次ぐ。他の調査区からも散発的に出土した。近世国産陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館特別学芸顧問大橋康二氏に鑑定を依頼した。輸入磁器はTR0902、TR1002、TR1003から出土した。鑑定は山口県立萩美術館上田秀夫館長に依頼した。青磁・白磁ともに小片で、器形は袋物、端反系かという程度にしかわからない。時期は11世紀後半から14世紀半ばまでと幅がある。本文では青磁2点のみを取り上げた。瓦はTR0901の近世から現代の層にかけて出土した。瓦以外の遺物は供膳具の割合が高く、調理具、貯蔵具の割合が低い。その割合には居館と岩国藩五大寺に準ずる藩営の瑞光寺の存在が、反映されているものと考える。

金属製品はTR0901・TR1001とTR1003・TR1003-2が拮抗する。しかし、前者が建物に伴うものが圧倒的に多いのに対し、後者は鉄滓という原材料が多い。貝殻は岩国市科学センター指導員大成芳道氏がまとめられた報告を一覧表にした。食用になる海水産だけであるが、1点のみ玩具として用いられた可能性が指摘された。人骨については、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏とスタッフの松下真実両氏により、中世的人骨の特徴を持つ壯年の男性と判明した。貝殻と人骨を除く各遺物の観察結果は第3～7表の遺物観察表に掲載した。

2 土器・陶磁器・土製品・瓦

(1) 弥生土器ほか (第31図、図版25)

1・2は弥生土器。1は壺の頸部～肩部破片と思われる。TR1001南東部から出土した。頸部に退化した沈線が見られる。弥生中期か。2はTR1003-2の南側溝掘りから単独で出土した。円形の輪郭とも取れる形跡が確認されたが、それ以上



第31図 遺物実測図① 弥生土器ほか

上の掘り下げは行っていない。壺の底部であろう。内面にヘラケズリ調整痕が残る。時期は弥生中期か。周辺の弥生時代の遺跡として、北西2kmの地点に高地性集落の可能性が指摘される大円寺遺跡¹⁾がある。当遺跡とは錦川支流の細い大円寺川を介して流路でつながるが、上流からの流転物なのか、三角州に弥生時代の遺跡が存在するのかは不明である。3は須恵器甕胴部と思われる。北土墨の砂礫層から出土した。外面にタタキ痕が重複して残り、断面に粘土紐の痕が観察できる。

(2) 土師器（第32～34図、図版21～23）

①一括廃棄土坑SK100310 出土遺物（第32・第33図、図版21・22）

TR1003の南東部で、大型掘立総柱建物跡を構成する柱穴（SB100301-SP03）と切り合い関係にある土坑SK100310から一括廃棄された状況で出土した。土坑の規模は、長径95cm、短径65cm、深さ約10cmである。出土土器のうち、個体識別できたものは在地系土師器の杯54点（16～69）・皿10点（4～13）、吉備系土師器碗2点（14・15）である。

皿（4～13）は、口径7.3cm、底径4.9cm、器高1.1cmの平均法量で器高の低い小皿である。粘土帶の端を折り返し、口縁として整えている。底部の厚いもの（4・5・6・7・12）と薄いもの（8・9・10・11・13）がある。底部に回転糸切り痕のあるもの（9～13）や粘土柱からのヘラ状工具による切り離しの痕跡（回転ヘラ切り痕）が認められるもの（5・6・7・12）もある。胎土・色調など以下の杯と同様の特徴を持つ。

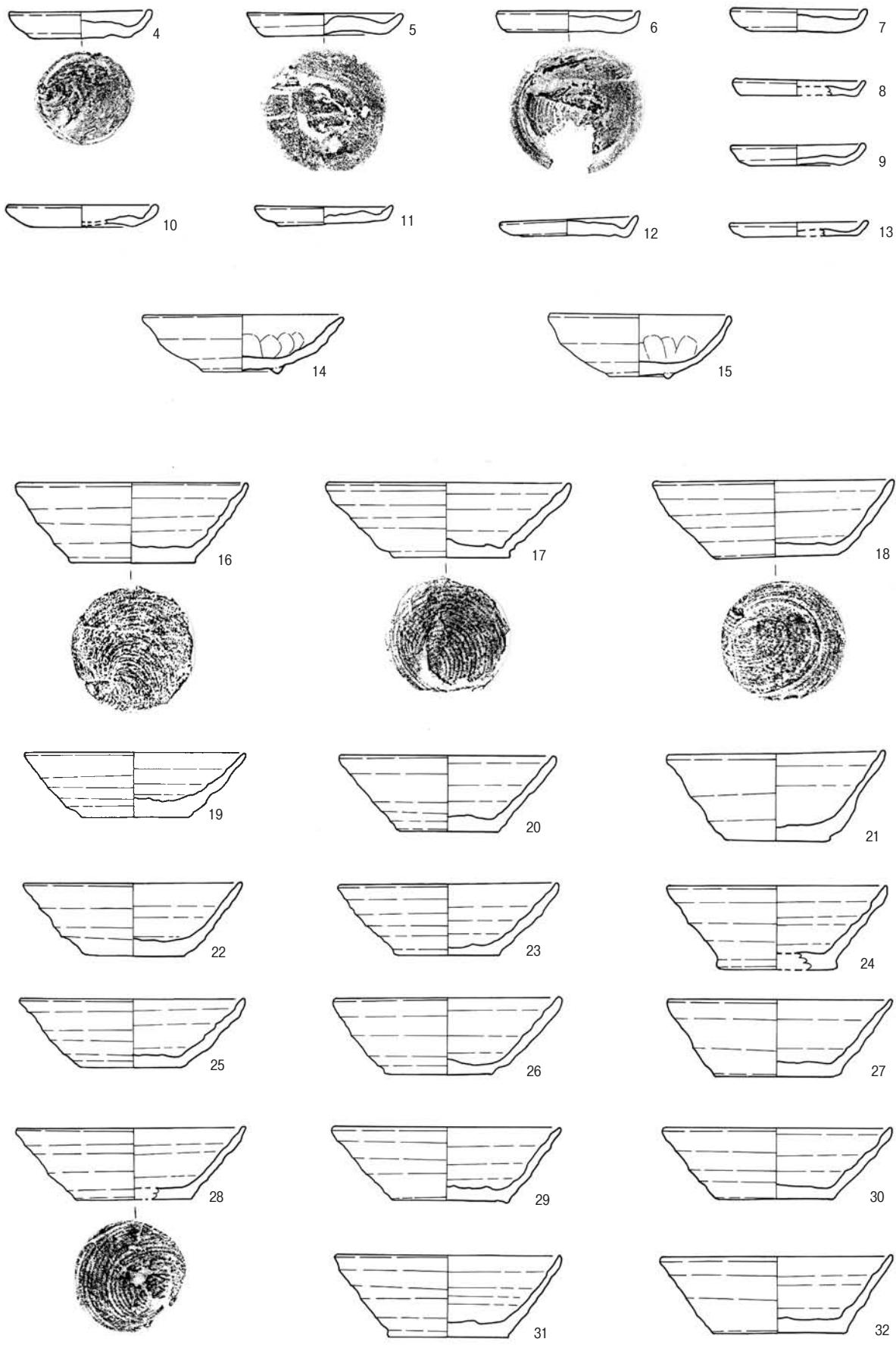
杯は、復元品を含み全体器形が計測可能なものの（16～49）の平均法量は、口径12.2cm、底径6.2cm、器高4.0cmとなる。器形は、底部から口縁にかけて内湾せず外開きに傾斜角度が急な直線的立ち上がりとなる。一般的に、中世後期の緩やかな立ち上がりで器高が低い器形に比べて、古い様相を示し、中世前期の杯の特徴が認められる。体部にはロクロ回転痕が残り、底部はやや厚手で裏には回転糸切り痕が認められる。胎土は、金色を呈する黒雲母²⁾（以下金雲母と略称する）を多く含むことを特徴とする。色調は、「にぶい黄橙色のもの」と、「橙色味が強い（赤橙色の）もの」とに分かれ、白色系のものは見かけない。焼成は、良好である。以上、極めて斉一性が高く、同系製作工人または集団による規格品として地元で一括生産されたものである可能性が高い。

19・21・24・31・36・37・41・45は特に厚底である。33～49はにぶい黄橙色のものも含むが概して橙色味が強い一群である。50～69は底部のみの遺存で、復元の困難なものまとめた。69は橙色ではあるが金雲母をほとんど含まない点で異質である。

このほかに、吉備系土師器碗（14・15）が共伴出土した。平均法量は、口径9.9cm、底径4.1cm、器高3.1cm。白色系の胎土で断面三角形のかなり退化した高台が底部に貼り付けられている。14は内側に押しつけた指痕のような形跡がわずかに残る。成形技法としての「底部の押し出し」³⁾は両者とも判然としない。口径も10cm未満に小型化して器面の調整・成形とともに粗製化が進み、吉備系土師器碗の型式編年Ⅲ-3期⁴⁾（14世紀代、山本悦世氏）に位置づけられると考えられる。この型式に併行する草戸千軒町遺跡における土師質土器編年ではⅡ期前半⁵⁾（鈴木康之氏）に位置づけられ、実年代では14世紀第一四半期から第二四半期に相当すると考えられる。よって、14・15は14世紀前半代のものと推定される。このほか、この区と西に隣接するTR1003-2から吉備系土師器碗の可能性のある底部片が数点出土しているが、いずれも小片であり可能性の域を出ない。

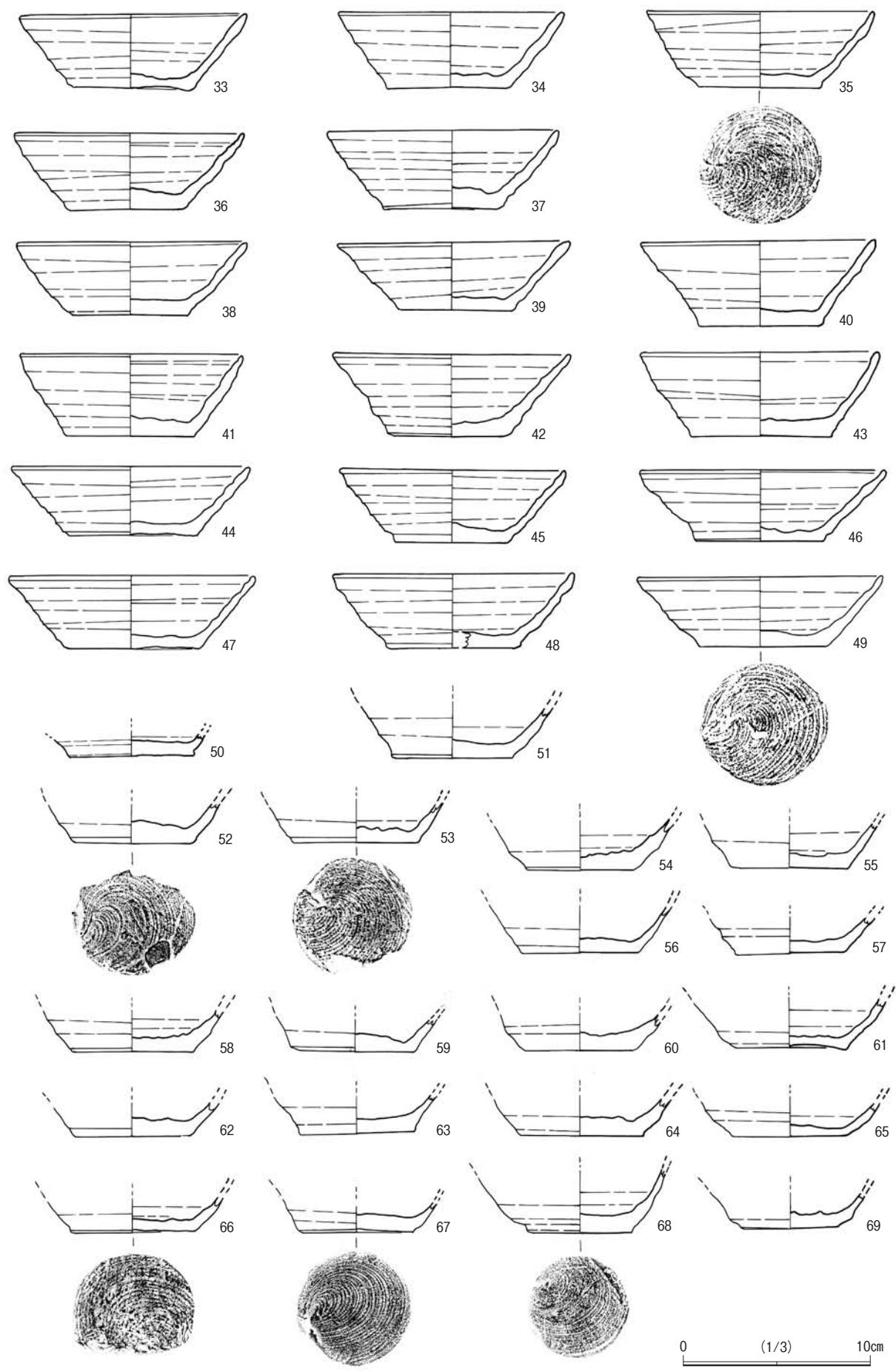
②土器集積100401・土壘盛土内出土遺物（第34図、図版23）

70～80はTR1004内の南土壘基底部近くの土器集積100401出土の土師器である。70は小皿である。糸切りかヘラ切りか判然としない。71～80は杯である。計測可能な71～76では、口径平均12.8cm、器高平均4.7cmとなる。一括廃棄土坑（SK100310）出土の土師器杯（16～49）と比較的類似する型式で時期的にも近いと推定される。ただし、土器集積100401出土の杯（71～76）は、一括廃棄土坑



0 (1/3) 10cm

第32図 遺物実測図② 一括廃棄土坑(SK100310) 出土土師器1

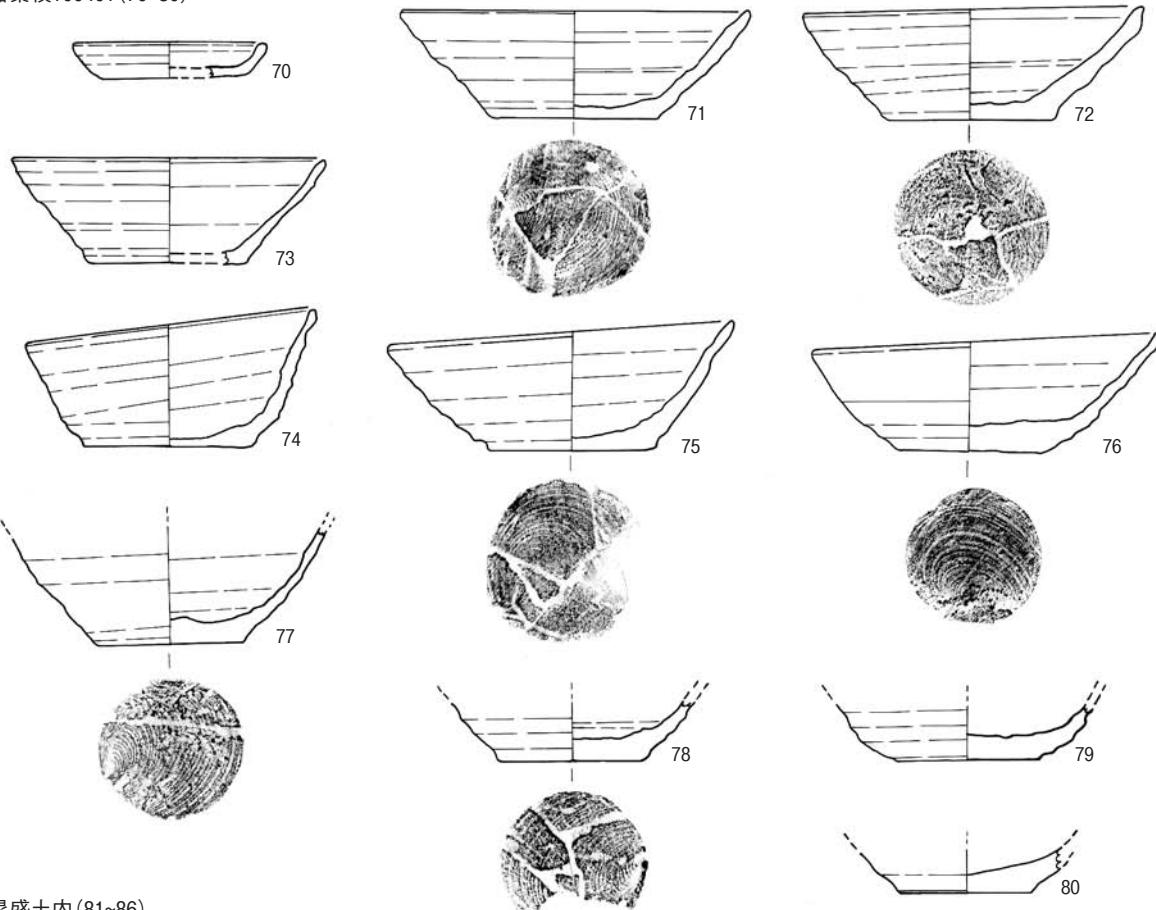


第33図 遺物実測図③ 一括廃棄土坑(SK100310)出土土師器2

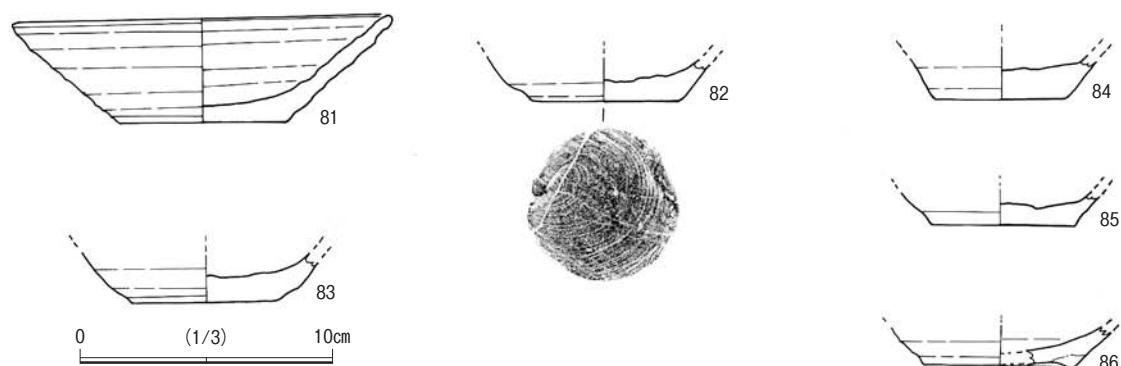
SK100310出土の杯（16～49）の口径平均12.2cm、器高平均4.0cmよりもやや大ぶりで厚手の器壁があり、型式的には少し古相とみられる。出土状況の点からも、土壙築造以前に廃棄されたと見られる土師器（70～80）が、土壙に囲まれた居館内に建てられた大型掘立総柱建物跡の廃絶後に一括廃棄されたとみられる土師器（16～49）よりも古い様相を示すことは、合理性があるといえよう。

71の底部は、糸切り痕が消えてわずかに窪む。口縁にマンガン等の土壤成分の付着あるいは煤か。内側の器壁に付着物の盛り上がりがある。72は底部の糸切り痕は不鮮明である。内部に土手状の付着物がある。73の器壁は口縁に向かうにしたがって内湾気味になる。74は器形の歪みが大きい。75も器形の歪みが大きい。底部は僅かに厚底にしているように見える。内外面ともにマンガン等の土壤成

土器集積100401 (70~80)



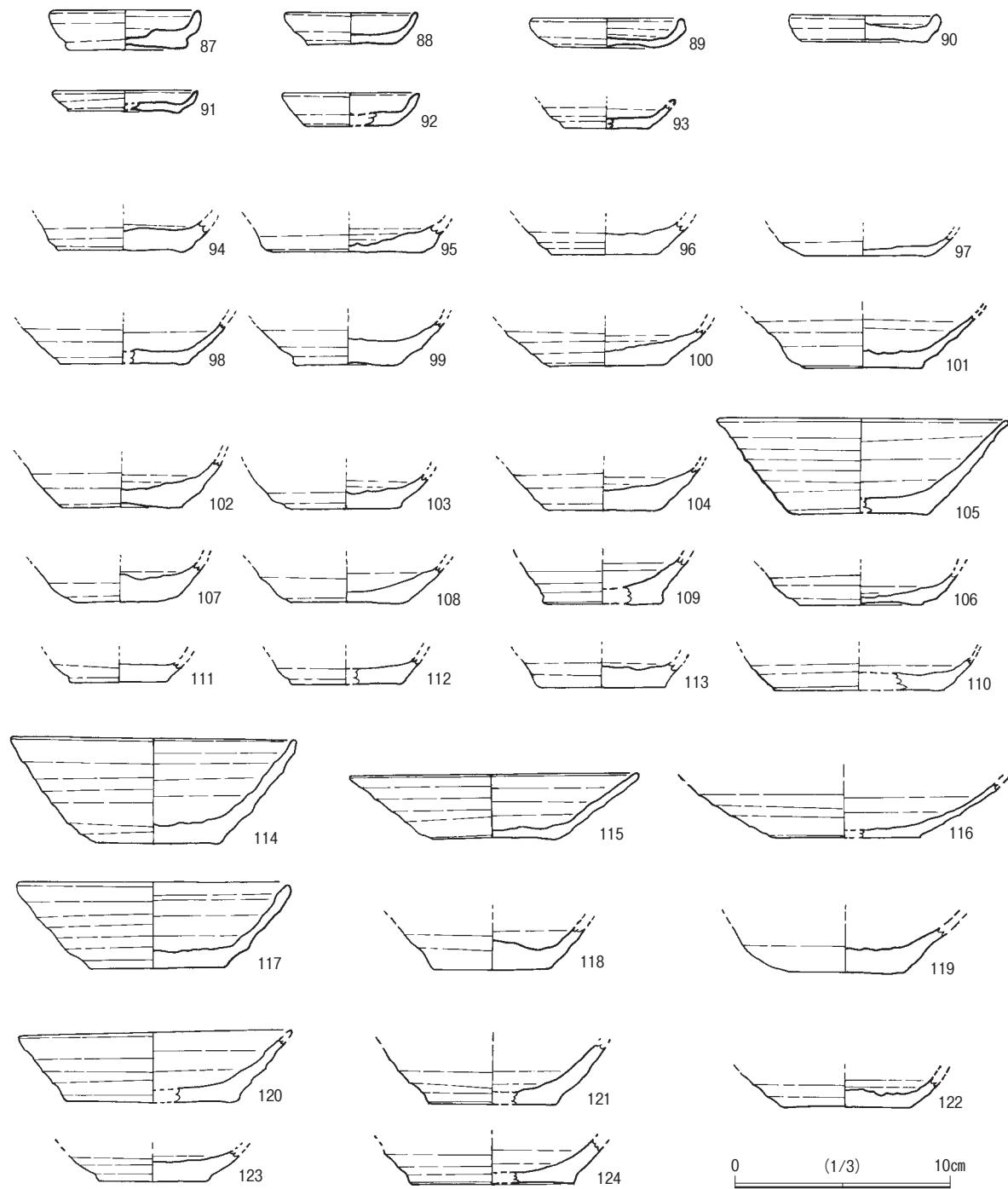
土壙盛土内 (81~86)



第34図 遺物実測図④ TR1004出土土師器(土器集積100401ほか)

分の付着あるいは煤か。76も器形の歪みが大きい。底部に糸切りによって生じた段差が付く。79の底部には糸切りによって生じたロクロ回転痕が付く。80も75と同じく付着物がある。外側の一部は褐灰色、内側は黒色である。

81～86は土墨盛土内出土。81は内側底部のロクロ回転痕を消して平らにする。82は底部の色調が3/4は黒色、残り1/4は白色である。83の底部には糸切りで生じたロクロ回転痕が付く。84の底部にも糸切りで生じた回転痕が付く。85は胎土の組成が均質で他のものと印象が異なり、全体の色調も灰白色気味な浅黄橙色。86は退化した高台貼り付け碗。



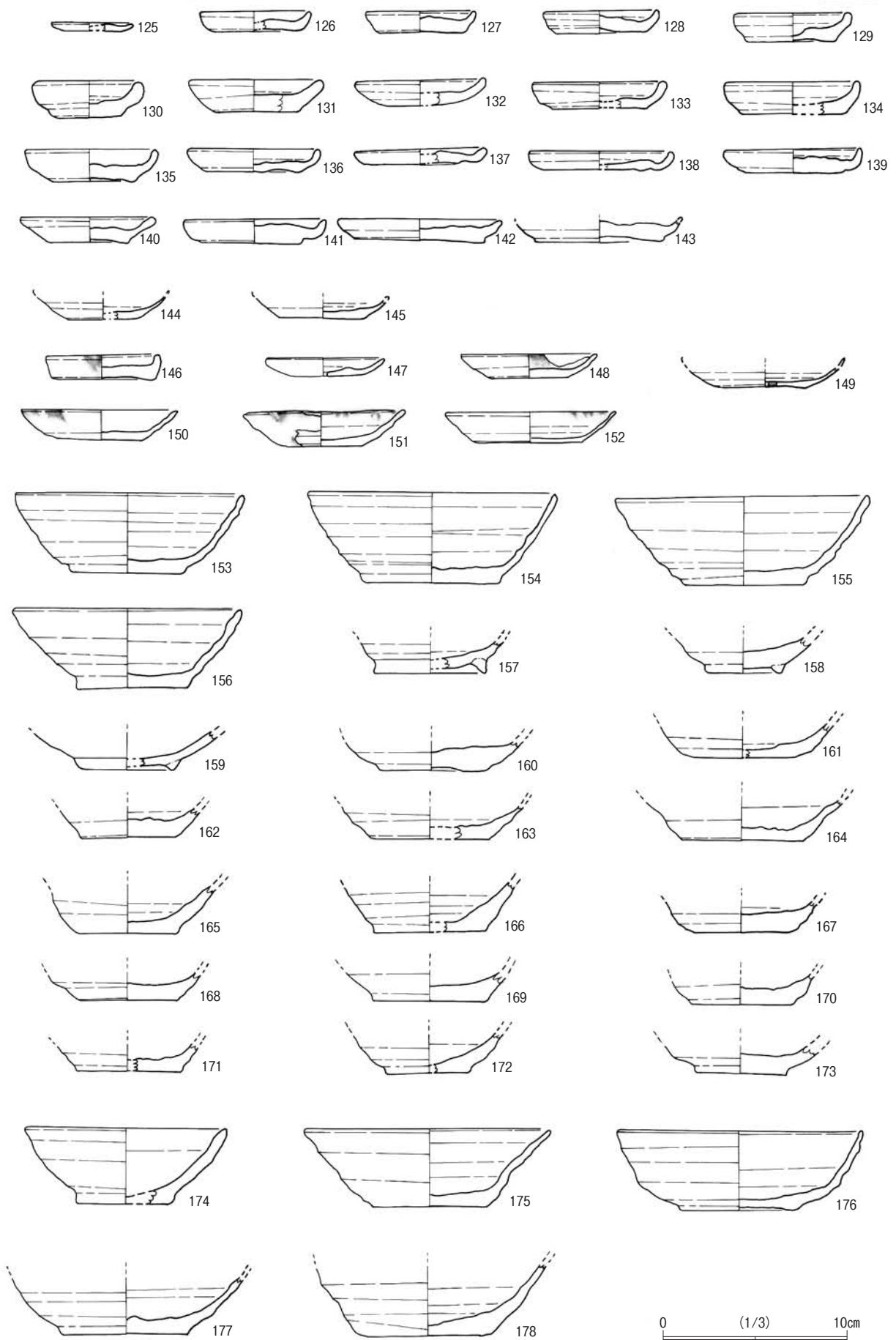
第35図 遺物実測図⑤ 遺構出土・遺物包含層出土土師器

(3) 遺構出土・遺物包含層出土土師器 (第35図、図版23・24)

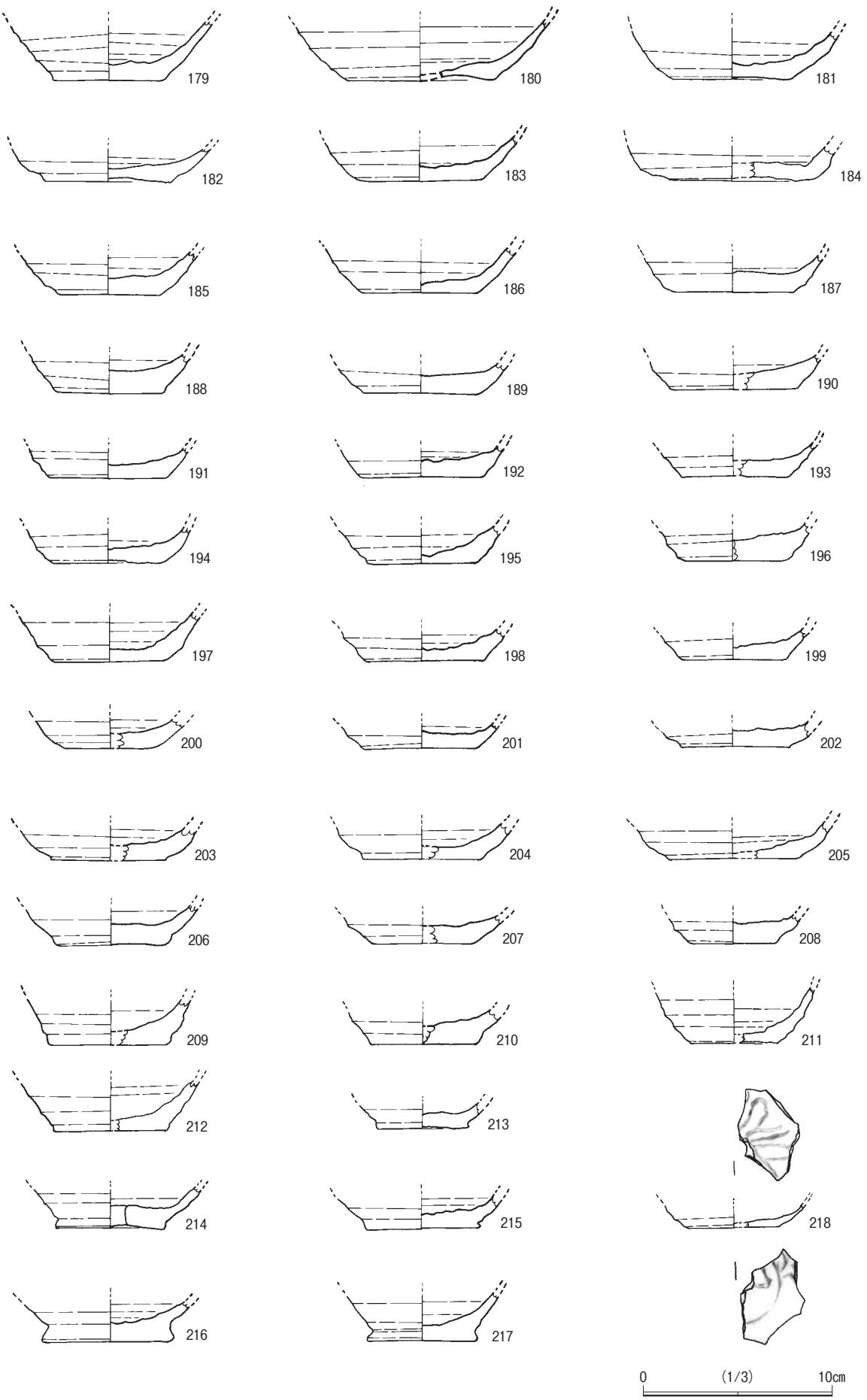
87～93は土師器の小皿である。87～90・95はTR0901の中世最末期層で検出された石090105の断ち割りから一括して出土した。内外面ともに色調が橙色であり、糸切り底である。87は中心部に穴が開く。89は金雲母を多く含み、調整が丁寧である。91～93・110は、中世の大型掘立総柱建物跡(SB100301)にともない、SB100301-SP14(91・110)、SP16(92)・SP10(93)から出土した。金雲母を多く含む。94～124は杯である。96・97も石090106の断ち割りから出土した。94・95は回転糸切り、金雲母を多く含み橙色である。96・97は回転糸切りであるが、金雲母を含まず浅黄橙色である。98以下はTR1003、T1003-2の柱穴・土坑などから出土した杯である。99はSK100313から鉄滓(460・461)と供伴した。100・101はSP1003-217出土。102は器壁に粘土の付着がある。103は底部に低い台を作り出しているように見える。104・105・106はSP1003-201出土。107～109・114・115・117～119はTR1003の南東遺物包含層からの出土。107の色調は灰白色である。108は器壁がざらつく。109は底部が厚い。113は色調が灰白色である。114は器壁にロクロ回転痕が顕著に残る。115は器壁が薄く器高が低く、15世紀代のものと思われる。116は器壁が薄く、大ぶりの器形である。117は厚底である。118～121は厚底の底部である。118と119・122は色調が灰白色である。123・124は見込のロクロ回転痕をほぼ解消している。

(4) その他出土土師器 (第36・37図、図版23・24)

多くはTR0901・TR1001とTR1003・TR1003-2の中世以降の造成層や堆積層から出土した。125～152は、小皿である。色調は「にぶい黄橙色」と「橙色」にほぼ二分される。底部は「回転糸切り」と「回転ヘラ切り」と思われるものがある。125は底部の切り離し不明瞭。126は口唇部を僅かに外反させる。127は底部ヘラ切りかと思われる。口唇部外側に稜が付く。128は器形の歪みが大きい。口唇部は三角形に尖る。129は口唇部をやや内湾気味に立ち上げる。内側に稜がつく。130は底部ヘラ切りかと思われる。131は胎土が粗密である。132は底部ヘラ切りかと思われる。内外ともにナデて平滑にしている。135は厚底である。136は底部の歪みが大きい。ヘラ切りかと思われる。137～139は二重底状態になる。139は底部ヘラ切り。140は器壁が内外面とも黒褐色で、燻されているように見える。142・143は糸切りが不安定で段がついたり、湾曲したりする。144は他との比較で器壁が極端に薄い。145は回転糸切りの後、静止状態で改めて切り取ったように見える。146～152は、灯明皿である。中世以降新しい時期の可能性もある。口縁部に1ヵ所ないし複数の煤けた部分がある。146は一部の器壁が無く底部がむき出しになる。147は内部全体に飴色の釉がかかる。中心部に人為的な孔がある。148は内側の7割ほどに乳白色の膜のようなものが残る。149は内外面ともに煤ける。中心部に穿孔がある。150は内側に飴色の釉をかける。口縁部に連続して煤けた痕跡が残る。151は約半分の残存部に4ヵ所の煤跡がつく。152は口縁部に連続して煤跡がつく。153～178のうち157～159は椀である。それ以外は杯である。153～173は、色調がおおむね灰白色を呈する。ほとんどが回転糸切り底である。153の底部が台状に見えるのは糸切りの加減か意図したものか分明でない。154の器壁に粟状の小さな膨らみが多く存在する。155は底部が厚底になる。156は歪みが大きい。底部が厚底になる。157は古代の椀に見られる高い高台がしだいに退化して断面三角形になる過程段階の高台がつく。内側の底近くに目跡のような弧線がつき、その周辺は薄赤く変色する。158には退化した三角形の高台がつ



第36図 遺物実測図⑥ その他出土土師器1

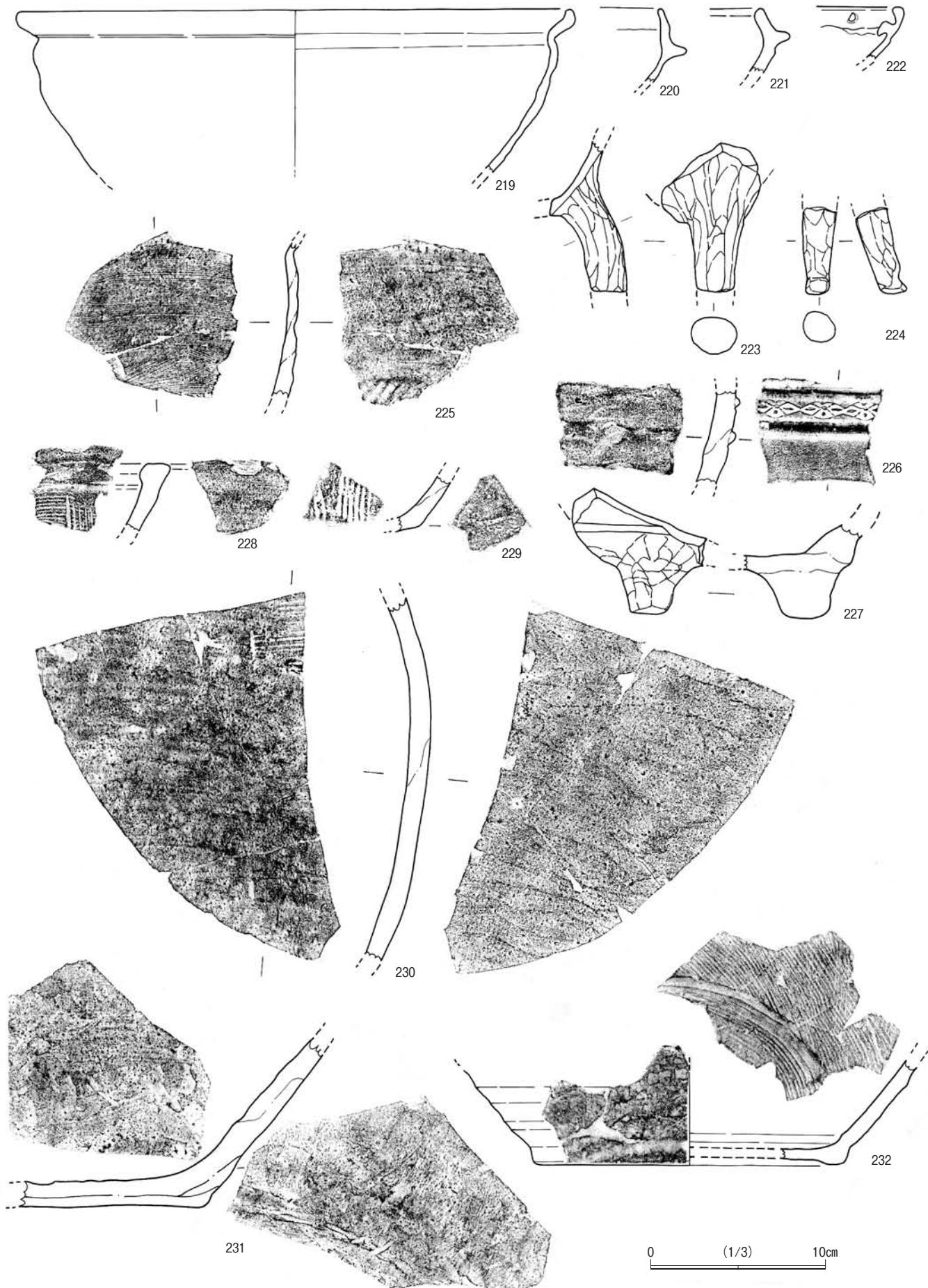


第37図 遺物実測図⑦ その他出土土師器2

く。159は退化した三角形の高台が付く。内側のミガキは暗紋化する。13世紀代に遡る「和泉型瓦器椀」の可能性がある。161は底部に1mmを切る薄い箇所がある。163は底部付近に液状の粘土が連続してつく。164は底部内面で成形の際に生じたロクロ回転痕が著しい。167は底部を引き切る際に一部を削ってしまっている。168は底部と器壁の間に段差がある。173・178は底部が厚い。175は下半部を2枚の粘土で貼り合わせている。強く押したために、器壁の中程が屈曲する。176は静止糸切りか。底部内側のロクロ回転痕はほぼ消している。177は厚底である。178は器壁が屈曲し、器具による傷がつく。179は下部に指の圧痕が連続してつく。180は底部が大きく波打つ。181はヘラで削った後に指を押しつけていった跡が残る。182・183も指でナデた跡を残す。185～191は見込のロクロ回転痕をかなり解消している。192は焼成が硬質である。196は厚底で体部立ち上がりが急である。202は見込に親指大の圧痕が一面に残る。205は引き切りの加減か底部に段差が付く。206は底部が厚い。207～209は見込のロクロ回転痕がかなり解消されている。210は厚底である。211は器壁最下部に指を滑らせて調整した跡が残る。213は底部を低い台状にする。214は歪みが大きく器形が非対称で、底部が厚く人為的な孔がある。215は厚底である。216・217は底部が厚く、外側に張り出し気味である。218は皿である。見込に花押のような墨書きがある。

(5) 中世瓦質土器・陶器等（第38図、図版25）

居館内部と土塁から出土した。219は東周防型鍋⁶⁾と呼ばれる系統と見られる。短い頸部から口縁を外反させ、直立気味に立ち上げて口唇部を作る。14世紀代のものの可能性がある。220・221はともに羽釜の口縁部である。13世紀～14世紀代に遡る可能性がある。220は羽の部分を器壁に押しつけ、横にナデて段差を解消している。221は器壁の芯は黒色土、周囲は黄橙色にはっきり分かれる。222は内耳鍋である。口縁内側に円孔が付く。その部分は粘土を貼り付けている。内耳は形骸化しており、16世紀～17世紀代に降る可能性がある。広島県西部の系譜につながるか。223・224は防長型足鍋の脚部である。223は長手方向に指ナデの調整を加える。224も同様の調整を加える。端部は獸足状になり、底面は黒色化する。225は脚部の欠損痕が底部に残る（足）鍋である。底部外面にタタキ痕が見られる。内側2/3には水平方向に、それ以下には3方向にハケメが付く。岩崎仁志氏の防長型足鍋編年⁷⁾によれば15世紀前半のものかと思われる。なお225はC14年代測定法による試料①で、15世紀前半の測定結果が出ており、年代が一致する。226・227は火鉢である。226には菱形紋が付く。227には脚部のやや上に断面半円形の粘土紐が貼り付く。奈良火鉢かと思われる。228・229は瓦質土器擂鉢である。縦方向にオロシメが付く。230は陶器甕である。TR1002内の堀状遺構最下層の砂礫直上から出土した。色調は内側が灰色、外側は暗灰褐色を呈し、内側にハケメが付く。14～15世紀代の備前系の製品かと思われる。堀状遺構の年代推定資料である。231は陶器甕である。底面に降灰が付着する。練った粘土板を折り曲げて成形している。内側には先の四角い幅1cm強の工具で搔き取ったような跡が残る。外側は縦方向に削ったような跡が残る。14世紀～15世紀代の備前系の製品かと思われる。232は瓦質土器甕である。内外ともに黒色である。内側にはハケメが、外側にはタタキ痕が残る。15世紀代の製品かと思われる。



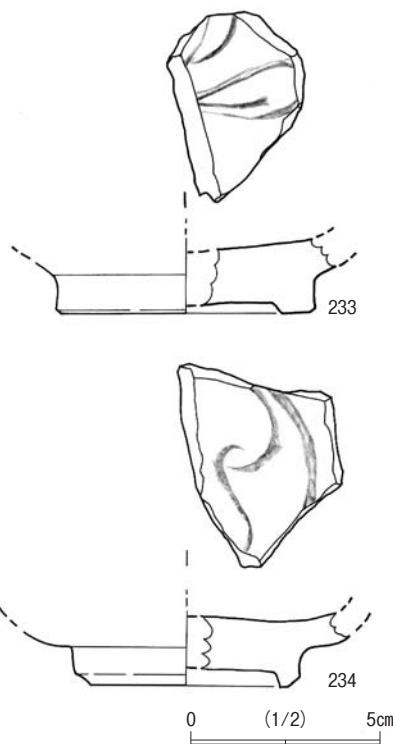
第38図 遺物実測図⑧ 中世瓦質土器・陶器等

(6) 貿易陶磁器 (第39図、図版25)

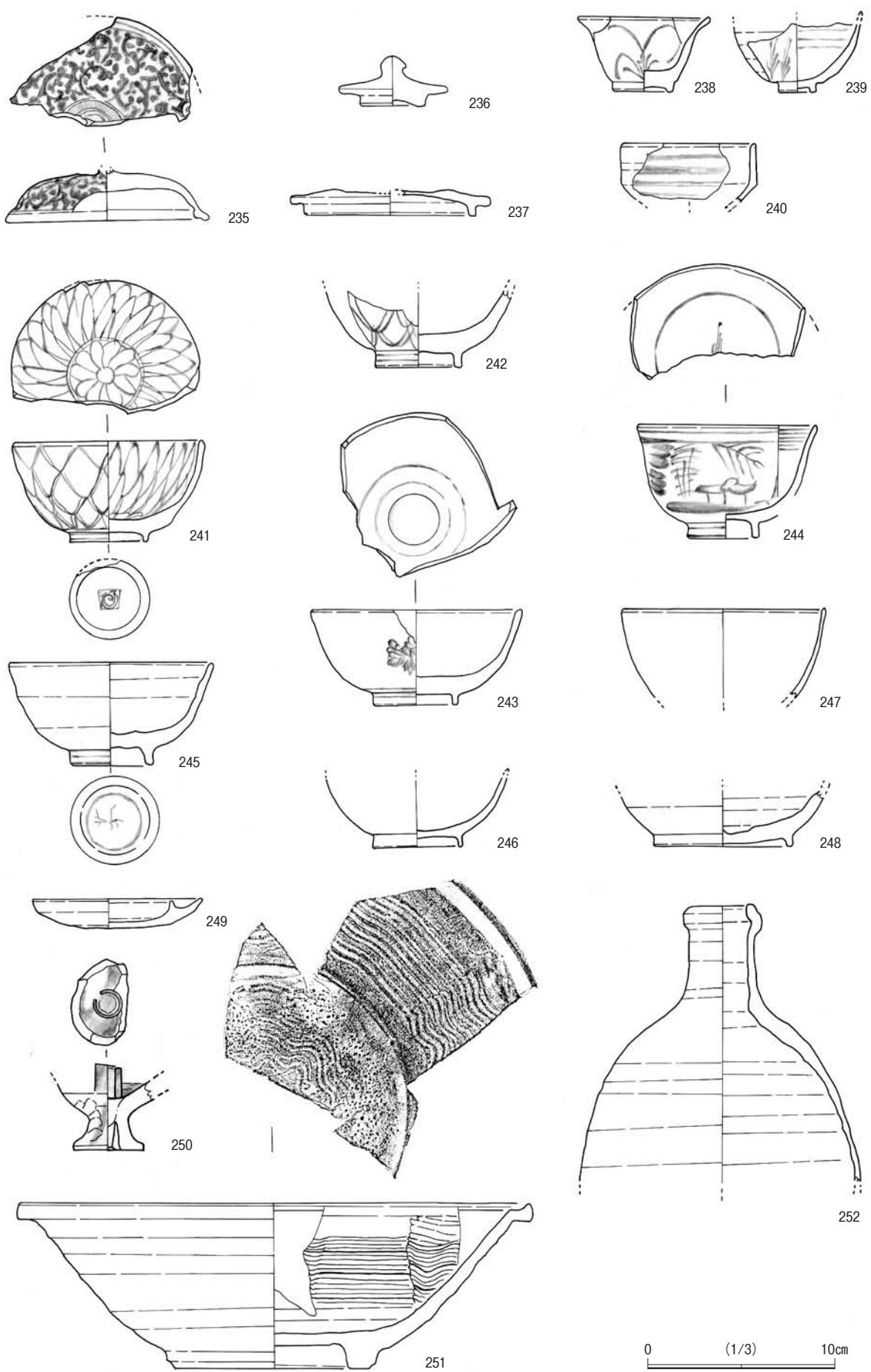
北土墨と堀状遺構から出土した。233は青磁である。器形は不明である。胎土は灰色で非常に緻密である。上面に蓮弁様のものを刻む。高台内部は無施釉である。12世紀後半代の龍泉窯の製品に比定される。234も青磁である。釉色はやや赤味を帯びたオリーブ黄色である。高台端部の断面は逆三角形になる。上面に植物紋を刻む。14世紀半ば以降の龍泉窯の製品に比定される。

(7) SK090105出土近世陶磁器 (第40図、図版25・26)

TR0901・TR1001にかかる土坑SK090105からの一括出土品である。縦横3m、深さ約60cmの不整形な土坑から石や瓦片とともに出土した。235は蓋の上面に隙間なく唐草文様を配する。頂部にはつまみの痕が残る。236は小型の蓋である。暗褐色の釉をかける。237は上面にのみ釉をかける。238は端反りの小杯である。菖蒲のような水生植物を描く。239は小型の碗である。高台とその付近を除いて、薄く緑釉をかける。18世紀後半の関西系製品に比定される。240は碗である。外面は無釉であるが、口唇部付近から内側全面には飴色の釉をかける。産地、時期は不明である。241は碗である。高台内部にも施釉する。内外ともに網目紋様を描き、見込に2重の円圏とその内側に花弁を描く。高台内には崩した「福」の字を書く。18世紀前半の肥前焼に比定される。242は碗である。畳付以外は全面に施釉する。外面に網目紋様を描く。見込には砂のような痕跡が残る。18世紀後半の肥前焼に比定される。243は碗である。外面には不明瞭な紋様を描き、体部と高台の境界に3本の円圏を入れる。見込には目跡がほぼ円形に残る。18世紀前半から中葉の肥前焼に比定される。244は碗である。外面には水辺に立つ鶯鷦と植物紋様を描く。口縁内側に6本の線を入れ、所々に点を打つ。底付近には太いコバルトと細い橙色の線を入れ、中に植物紋様を入れる。一面に小突起が付く。19世紀後半の肥前系に比定される。245は黄釉の碗である。見込は2.4cmの幅で釉を拭い取って蛇の目状にし、中心に小突起がある。高台の内側には2カ所に砂のような付着物がある。19世紀後半の肥前焼に比定される。246は白磁の碗である。畠付の部分は釉を拭い取っている。見込に10カ所ほど砂状の粒子が付着する。17世紀後半の肥前焼に比定される。247は白磁の碗である。17世紀後半の肥前焼に比定される。248は磁器碗である。灰色の釉をかける。畠付以外は施釉する。見込の中心部に小突起が5カ所残る。産地、時期は不明である。249は陶器の油皿である。灰白色から浅黄色の色調の釉が、内面のすべてと口縁の外側を5mmの幅で帯状に廻る。19世紀代関西系製品に比定される。250は素焼きの陶器である。全体に熱を受け、黒ずむ。産地、時期ともに不明である。251は大型の鉢である。内面のすべてと外側上半部に灰黄褐色から浅黄橙色の釉がかかる。内側には幅2.5mmほどの櫛状の痕跡が残る。産地、時期は不明である。252は瓶である。黒褐色の釉を内外ともに施す。17世紀後半の肥前焼に比定される。



第39図 遺物実測図⑨ 貿易陶磁器

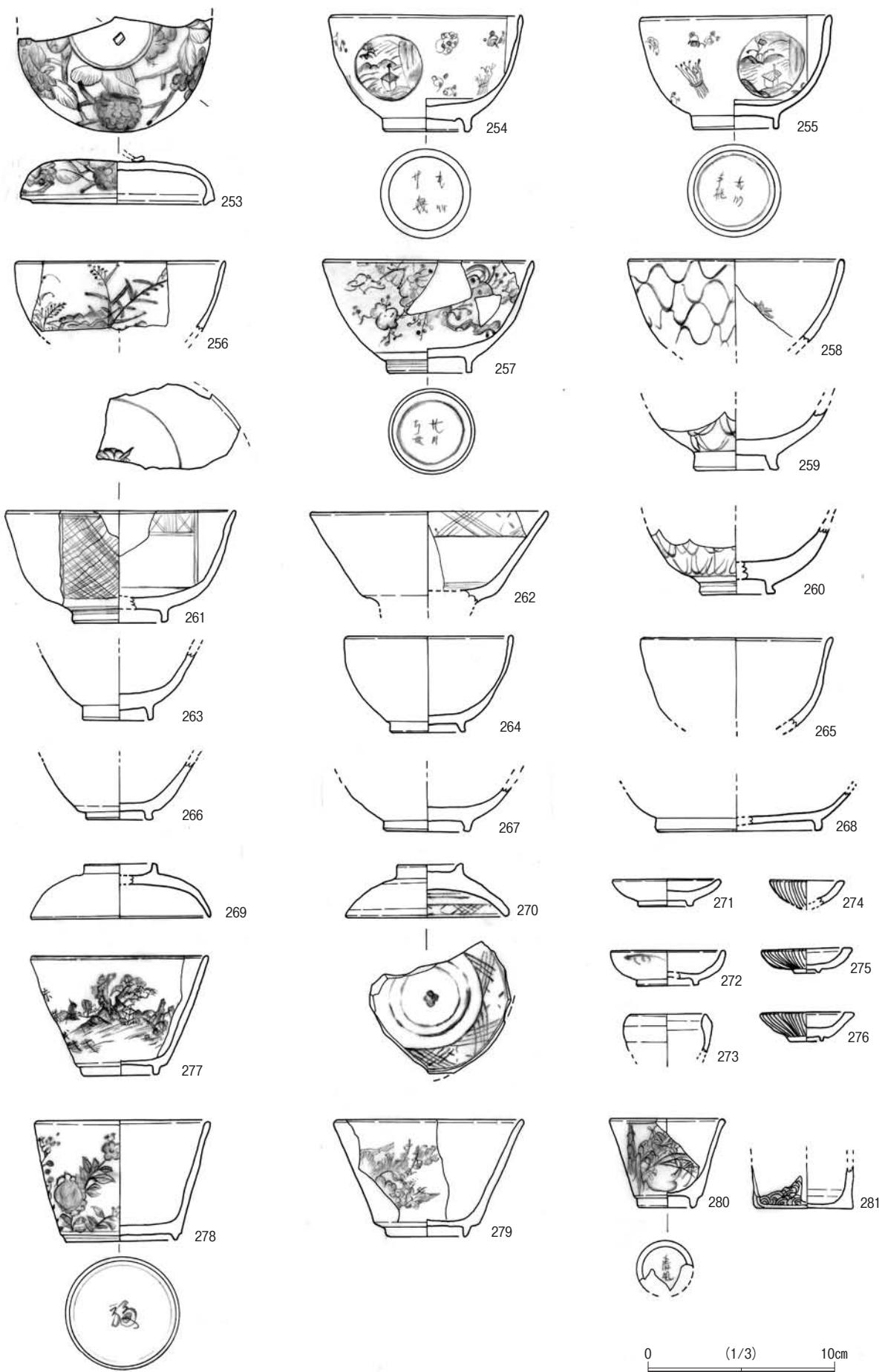


第40図 遺物実測図⑩ SK090105出土近世陶磁器

(8) 近世陶磁器 1～3 (第41～43図、図版26・27)

調査区各所の近世遺物包含層から出土した。前項で紹介したTR0901・TR1001にまたがるSK090105出土品以外について記述する。TR0901南端の東西方向に当初設定したTR0901DとEおよび列石周辺で集中的に検出された。17世紀のものから幕末・明治期にかけてと年代幅がある。慶応2年(1866年)までこの地に存在した瑞光寺に関連するものと、廃寺直後の明治2年の絵図に描かれている僧居所に伴うものと考えられる。瑞光寺は寛延2年(1749年)に、前年の大風による柱等への傷みの進行と当年の桃源院(吉川興経)の200回忌の法要のために建て替えられており⁸⁾、幕末に薬師堂のみを残して廃寺となった⁹⁾。こうした改修ないし廃絶に際してそれまで使用してきた物が一括して土坑を掘って投棄されたものであろう。

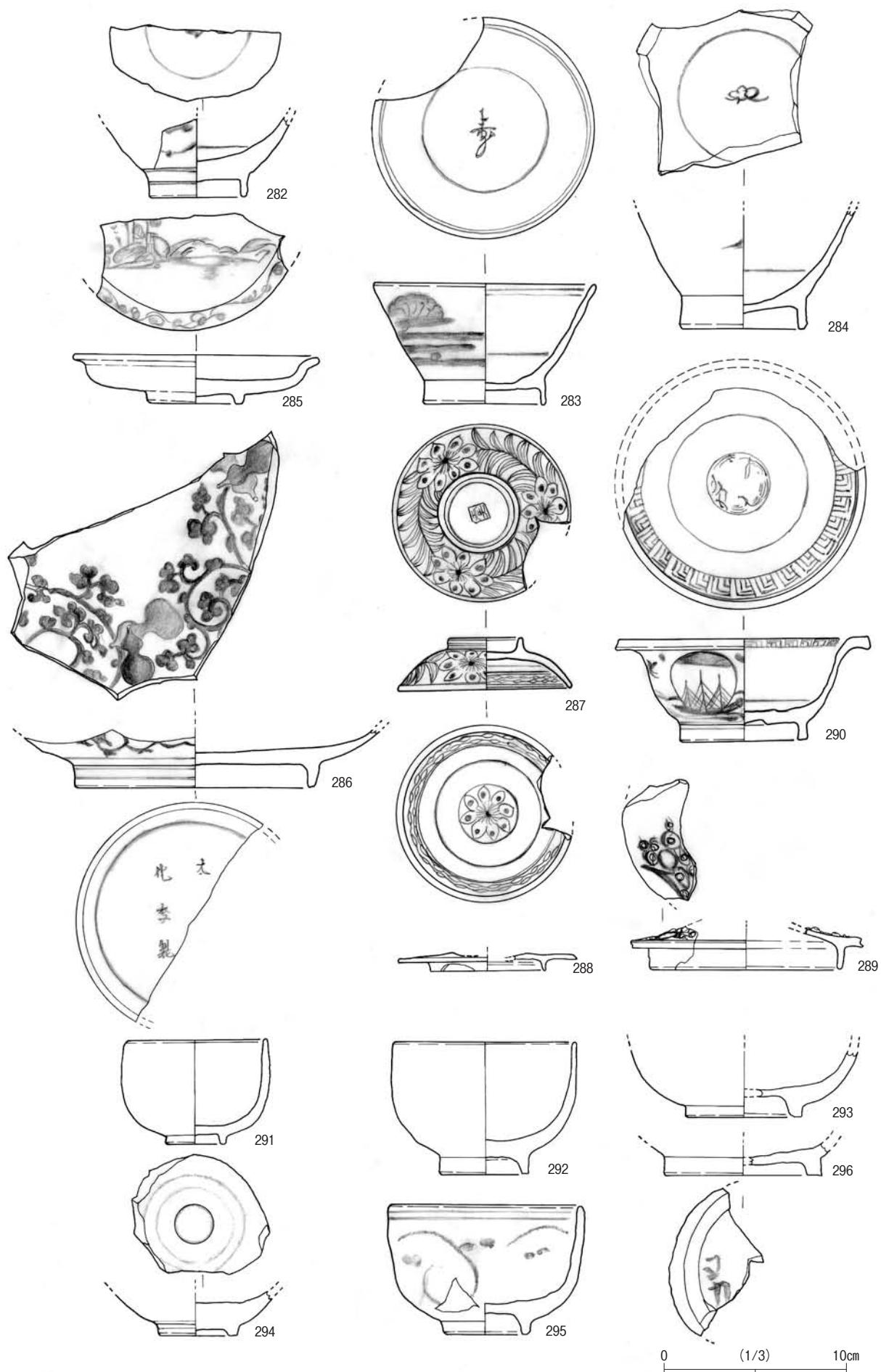
第41図掲載品について述べる。253は摘みの付く染付の蓋である。上面に実の付いた植物を描く。釉には貫入がある。受け口との接触部分は釉を拭い取っている。18世紀末から19世紀前半の肥前系の磁器に比定される。254は碗である。外側には丸窓の中に遠景に山容、近景に四阿を描いて植物や水の流れを添える。円窓の周囲には梅のような花弁3個と束ねた枝状のもの1個を合わせた4個を1セットにして繰り返す。高台の内側には4つの判読不能な文字様のものを描く。漢字であるならば「大明年製」か。17世紀末から18世紀初の肥前焼に比定される。255は染付の磁器碗である。円窓の中に遠景に山容、近景に流れの辺に立つ四阿を描く。254と同様のセット4つを四周させる。高台の内側の文字様のものはやはり「大明年製」か。17世紀後半から18世紀初の肥前焼に比定される。256は染付の碗である。外側に植物を描くが内側には何も描いていない。17世紀後半の肥前焼に比定される。257は染付の磁器碗である。外側には高台と体部の境界付近に3本の線を廻らし、体部には遠景に山と島、近景に梅のような植物を描く。高台内に254や255と同様のものがある。見込に砂状の付着物がある。畳付の部分は釉を拭う。18世紀前半の肥前焼に比定される。258は染付の磁器碗である。外側には網目状の紋様を、内側には花弁を描いている。17世紀後半の肥前焼に比定される。259は染付の磁器碗である。外側に網目状の紋様を描く。畳付の部分は釉を拭う。肥前系の磁器と推定される。260は染付青磁碗である。外側の高台と体部の境界付近に3本の線を廻らし、体部に網目状の紋様を描く。畠付の部分は釉を拭う。18世紀後半の肥前焼に比定される。261は染付磁器碗である。外側の高台と体部の境界付近に細い3本の線を廻らし、体部に太い斜格子線の間に細い3本の線を交差して描く。内側口縁付近にはXと5本の縦線の組み合わせ、あるいは15に相当するローマ数字のような意匠を描く。見込の意匠の意図は不明である。1820～1860年代の肥前系の磁器に比定される。262は染付青磁碗である。外側には何も描かれず、内側口縁下部に草のような意匠を描く。18世紀後半の肥前焼に比定される。263は白磁の小型碗である。見込に砂状の粒子が点々と付き、一部の釉が剥離する。畠付の部分は釉を拭う。17世紀後半の肥前焼と推定される。264は白磁の碗である。高台の内側にも釉がかかる。貫入がある。17世紀後半の肥前焼に比定される。265は白磁の碗である。産地、時期ともに不明である。266は高台以外に灰色釉のかかる小碗である。産地、時期ともに不明である。267は白磁の碗である。見込に3ヵ所の目跡が残る。高台の内側にも釉がかかるが、畠付の部分は釉を拭う。17世紀後半の肥前焼と推定される。268は白磁の盤である。高台の内側まで釉がかかる。17世紀末から18世紀初の肥前焼に比定される。269は白磁の蓋である。釉には貫入、内側にはガラス化



第41図 遺物実測図⑪ 近世陶磁器1

した降灰物のような付着物がある。17世紀末から18世紀初の肥前焼と推定される。270は青磁染付の蓋である。口縁近くには2つの円圏の中に2種類の斜格子紋様を交互に繰り返す。底にも2つの円圏を描く。釉の盛り上がりが不規則に付く。18世紀後半の肥前焼と推定される。271は白磁の小皿である。高台の中まで施釉するが、畳付の部分は釉を拭う。産地、時期ともに不明である。272は白磁染付小皿である。外側に1ヵ所図案があるが、何を描こうとしたのか不明である。高台の中まで施釉するが、畳付の部分は釉を拭う。産地、時期ともに不明である。273は白磁の小壺である。産地、時期ともに不明である。274は白磁の紅皿である。外側は鎧状の凹凸をなす。釉薬は体部の上2/3ほどにかかる。18世紀後半から19世紀後半の肥前系磁器と推定される。275は白磁の紅皿である。外側は鎧状の凹凸がつく。形ばかりの高台部分を除いて釉がかかる。19世紀末から幕末期にかけての肥前系磁器と推定される。276は白磁の紅皿である。外側には鎧状の凹凸がつく。277は染付の小碗である。口唇部は細く鉄釉で縁どる。外側には池の畔に四阿を置き、橋を架ける。左手には巖松を配して深山幽谷を表現している。側に「赤壁賦」の3文字を入れる。18世紀末から19世紀初にかけての肥前焼に比定される。278は染付の猪口である。外側に花を描く。高台の中には崩した「福」の字を書く。18世紀初の肥前焼に比定される。279は染付の猪口である。外側には花や蕾を描く。輪郭を線書きし、濃淡を使い分けて塗っている。17世紀後半の肥前焼に比定される。280は染付の猪口である。外側に竹と笹のような図柄を描くが明瞭でない。見込の中に「寿風」とも読める漢字を書く。19世紀後半の関西系の磁器に比定される。281は染付の水滴と思われる。外側に青海波のような紋様を描く。18世紀代の肥前焼と推定される。

次に第42図掲載品について述べる。282は染付の碗である。外側に水か水草を描く。見込には1本の円圏を廻らすが、中心部に描かれた意匠は何を表現したのか不明である。内外面ともに施釉するが、畠付と高台の内側は無施釉である。17世紀後半の肥前焼に比定される。283は染付の碗である。外面に4本の横線とその上に花弁を二つ入れる。水辺に咲く植物を表したものか。見込には円圏の中に「寿」の字を書く。1780年代から19世紀前半の肥前系の焼物と推定される。284は見込には円圏とその内側に花弁を描く。内外ともにたっぷりと施釉するが、畠付の外側を一周して拭いとっている。19世紀後半の肥前系磁器と推定される。285は染付の盤である。鎧状の口縁には連続する水草のような紋様を描き、底には水辺に生える植物のようなものが描かれている。わずかな凹部が3ヵ所残るが、その周囲はピンク色である。1630年代～1640年代の肥前焼に比定される。286は染付の盤である。瓢箪を葉茎とともに濃淡を使い分けて描く。外面に瓢箪を描いていたか否か不明である。高台の内側中心部には臍状の隆起があるが折損している。また、欠落しているが「太明成化季（年の意か）製」と見える年号を書く。18世紀代の肥前焼と推定される。287は染付の蓋である。内面には開く花弁と口縁に花弁を連続させたような紋様を二重に描く。外面にはデフォルメした花弁を描く。摘みの内部には□の中に「奉大」と見える漢字を書く。1820年代から1860年代の肥前系の磁器と推定される。288は施釉の陶器で茶器の蓋であろうか。天蓋部は無釉であるが、内側は施釉する。注ぎ口が設けられている。産地、時期ともに不明である。289は施釉陶器で蓋である。天蓋部には梅のような突起を貼り付け、茶釉に浸した筆で枝を抽象的に描く。内側は無釉である。19世紀代の関西系の焼物と推定される。290は染付の鉢である。外側には波間に浮かぶ西洋型帆船と宙に舞う海鳥を描く。内側

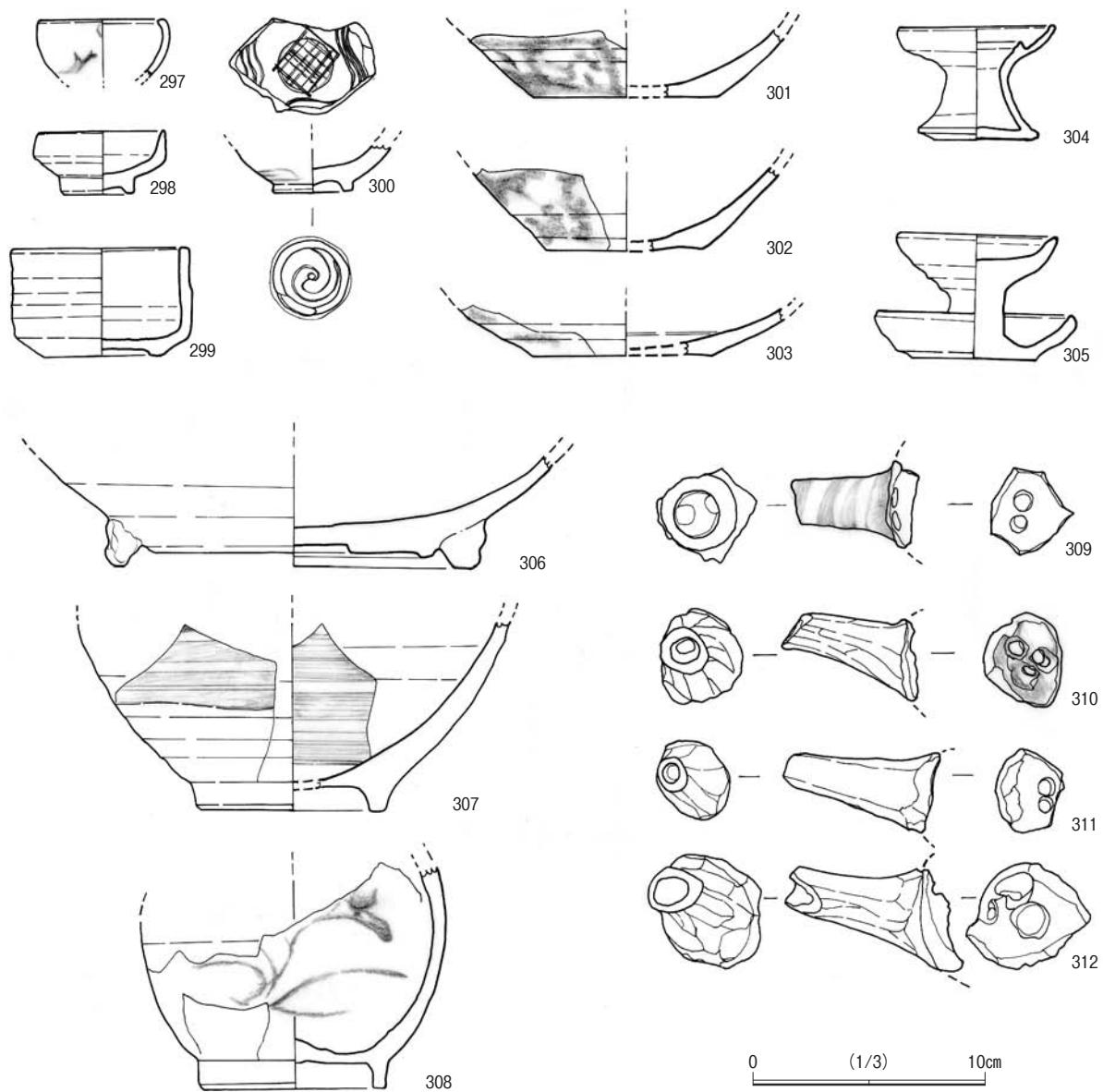


第42図 遺物実測図⑫ 近世陶磁器2

には底部に水鳥（海鳥）と流水もしくは波を、折り返した口縁には雷文様の紋様を描く。高台内部の釉は拭い取っている。19世紀末から幕末にかけての肥前系磁器に比定される。291は施釉の小碗である。口唇部と高台は華奢な作りである。高台より上の内外面に浅黄色の釉がかかる。きめ細かい貫入がある。18世紀末～19世紀前半にかけての関西系の焼物に比定される。292は施釉の陶器碗である。高台の内部まで施釉するが、器壁への変換点あたりは浅黄色の釉が白色化して一周する。産地、時期ともに不明である。293は白磁の碗である。高台の内部まで施釉するが畳付の部分は拭い取っている。産地、時期ともに不明である。294は染付の碗である。見込は蛇の目状に施釉する。釉を拭い取った箇所には畳跡が、畳付にも砂が付着する。産地、時期ともに不明である。295は染付の碗である。内外ともに水草の間を飛ぶ螢のようなものが描かれるが不確かである。見込には砂が帯状になって大きく2ヵ所に固まる。畳付より内側は釉を拭い取っているが不完全である。産地、時期ともに不明である。296は施釉の陶器である。高台の内側まで施釉した痕跡が残るが、全体に剥落が著しい。高台の内側に墨書がある。「別」の異体字である左側部分が書かれている。

最後に第43図掲載品について述べる。297は極暗赤褐色の釉を施す陶器の小鉢である。口縁は平縁である。内外に施釉するが、むらが生じている。産地、時期ともに不明である。298は陶器の小鉢である。内側の全面と外側の上方の一部に灰白色の釉がかかる。口唇部の内側をヘラで削っている。18世紀から19世紀にかけての瀬戸焼と推定される。299は陶器の小鉢である。内外ともにオリーブ黄色の釉をかけるが、直立する体部から脚部にかけてはかからない。また同心円状に器壁についた傷により、釉のかかりかたに濃淡が生じている。19世紀代の関西系の焼物と推定される。300は施釉の陶器碗である。底部を除いて素地に白い化粧土をかけ、さらに茶褐色の釉をかける。見込にはこの後、差し渡し2cmほどの○と□の組み合わせをヘラで彫り込み、その外側を3条の波線で四角に囲む。高台の内部には切り離し痕が巴紋のように残る。18世紀後半から19世紀にかけての長門深川焼に比定される。301は平底の陶器である。内側は淡黄色を呈し、降灰が自然釉としてまとまって残る箇所がある。外面は煤けるが、底部付近は特に顯著である。内外ともにロクロ成形の際の擦痕を残す。産地、時期ともに不明である。302は施釉の陶器である。外面は煤けて黒ずむが、内面には明黄褐色の釉がかかり、底に行くほど貫入が目立つ。破損してから火を被っており、浅黄色の胎土の断面もところにより漆黒である。産地、時期ともに不明である。303は施釉の陶器である。皿の類であろうか。内側のみ灰釉がかかり、貫入がある。産地、時期ともに不明である。304は施釉陶器の油皿である。底面を除いて淡黄色の釉がかかる。19世紀代の関西系の焼物と推定される。305は施釉陶器の油皿である。糸切り痕の残る底部以外は暗褐色の釉がかかる。底面には重ね焼きにより生じた釉の付着痕が5ヵ所付く。18世紀から19世紀に掛けての関西系の焼物と推定される。306は青磁の三足皿である。オリーブ灰色の釉を内外ともにかけるが、段差のある底部の一段高い部分は拭い取っている。内側の底には、回転をかけながら釉を剥ぎ取った部分があり、その際の圧痕が同心円状と幾条もの放射状の弧線として明瞭に残る。17世紀末から18世紀初の肥前焼に比定される。307は施釉陶器の瓶である。高台より上は内外ともに褐色の釉をかけるが、外側は素焼のままに残る部分があり、内側は褐色と白色の部分がある。高台の外側端部を削り、面取りをしている。産地、時期ともに不明である。308は施釉陶器の瓶である。但し内部にはオリーブ色の釉はかからない。外側には濃い茶褐色の絵の具で茎

か枝状の物を描き、一部を緑色の絵の具で塗る。内側底部の中心に降灰付着物がある。産地、時期とともに不明である。309は施釉陶器の注口である。急須の一部であろう。巻き上げで生じた段差により釉のかかりかたに濃淡が出て、濃い部分はオリーブ褐色、薄い部分は黄褐色になっている。内側に釉はかかるない。産地、時期ともに不明である。310は陶器の注口である。釉はかかるない。表面は長手の方向に器面成形痕が顕著に残る。穿孔部も削り抜き放しである。全体に煤けている。二次的な加熱を受けたものか。産地、時期ともに不明である。311は瓦質土器の注口である。急須の一部であろう。長手の方向の器面成形痕が明瞭に残る。巻き上げ痕はナデて消している。表面にのみ暗赤褐色の釉がかかる。産地、時期ともに不明である。312は瓦質土器の注口である。根本から先端方向にかけてケズリとミガキを兼ねた調整を施している。外側は燻しのためか銀色の光沢がある。産地、時期とともに不明である。



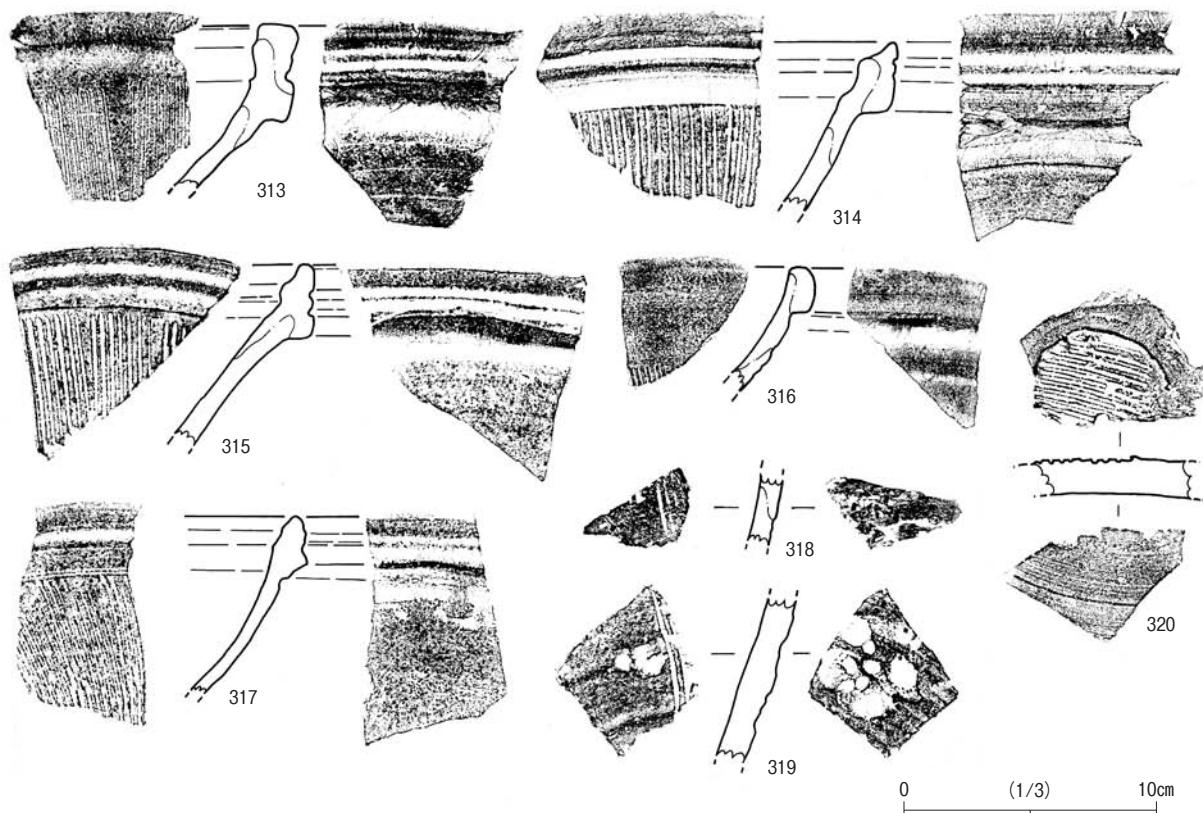
第43図 遺物実測図⑬ 近世陶磁器3

(9) 近世陶磁器4 (第44図、図版28)

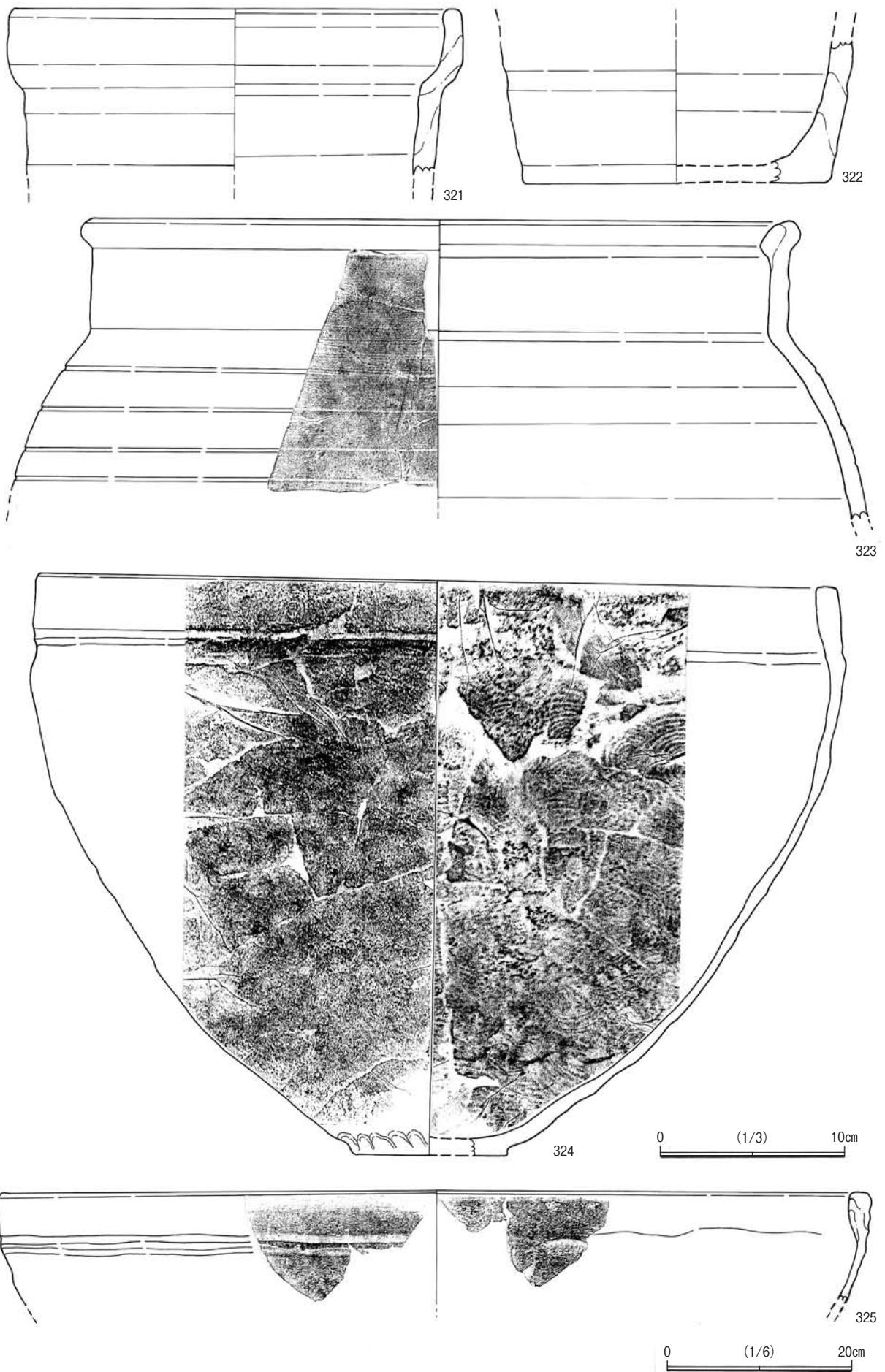
315を除き、現薬師堂に隣接するTR0901・TR1001の近世から幕末にかけての層位から出土した。313～320はすべて陶器擂鉢である。いずれも縦方向にオロシメがつくが、320は径6cm弱の円圏の中にオロシメをつける。産地は不明である。

(10) 近世陶器・土器 (第45図、図版28)

TR0901、TR1002、TR1003から出土した。321は粘土紐を巻き上げて成形する。内外ともに色調は橙色である。322は素焼の土器である。火鉢と思われる。輪積み成形で橙色を呈する。323は施釉陶器の大甕である。内外ともに暗赤褐色を呈する。外表には7本の横線が1cmの幅で平行して入る。内側では直立する頸部と体部との変換点あたりを、擦れたような跡が変色して廻る。324は佐野焼の大甕である。器形や断面の形状、内部に残る当て具の痕跡が、18世紀～19世紀に位置づけられる萩城外堀出土品と良く類似する¹⁰⁾。内部の各所に石灰分のような付着物が付く。325は素焼の大甕である。口径が1m近い。ほぼ直立する口頸部は異なる粘土紐を継ぎ足して成形しており、接合面が全周する。接合面内側の凹所は、布のような物で横方向にナデた跡が顯著に残る。産地、時期は不明である。



第44図 遺物実測図⑭ 近世陶磁器4

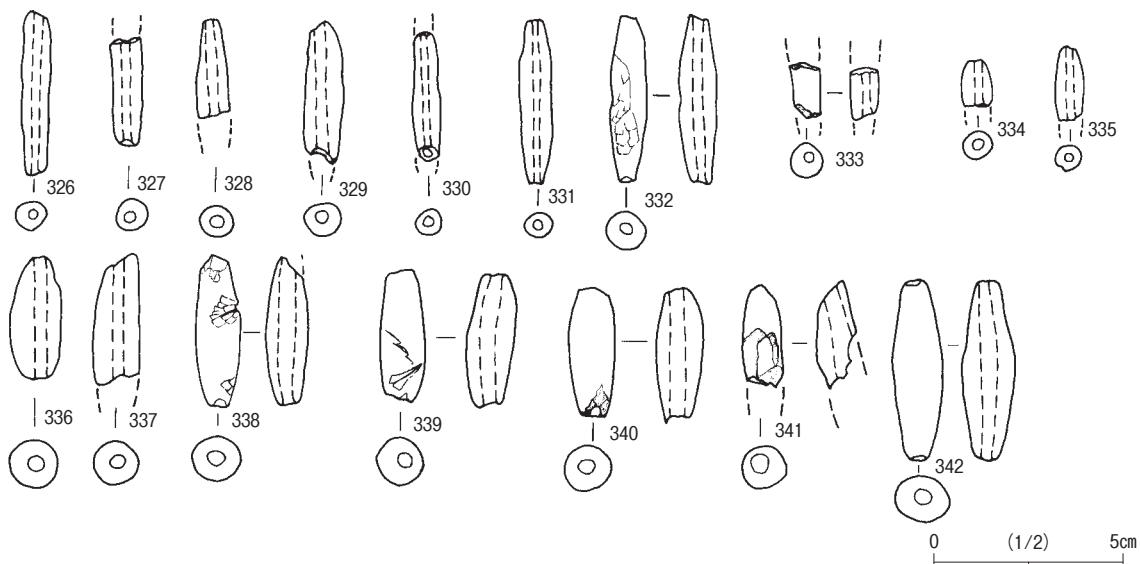


第45図 遺物実測図⑮ 近世陶器・土器

(11) 土製品・陶製品 (第46~48図、図版28)

①土製品1 (第46図、図版28)

326~342は素焼の土錘である。調査区の近世層各所から17点が出土した。居館内部からは11個体64%、土塁からは1個体5%、土塁外からは5個体29%の比率になる。完存するものでは長いもので5cm弱、小さいもので3cm強である。径は1.2~1.4cmである。平均値を取ると、長さは4.0cm、最大径は1.2cm、孔径は0.3cmになる。336は例外的であるが、概して細長いといえよう。比較的小型であることから、投網などの錘として用いられたと推定される。中には朱塗りかと思うほどの赤色を呈するもの（特に337）もあるが、土中の鉄分が付着したものであろう。それ以外は概してにぶい黄橙色から橙色を呈す。大きさに差があることから、複数の網の存在が考えられる。



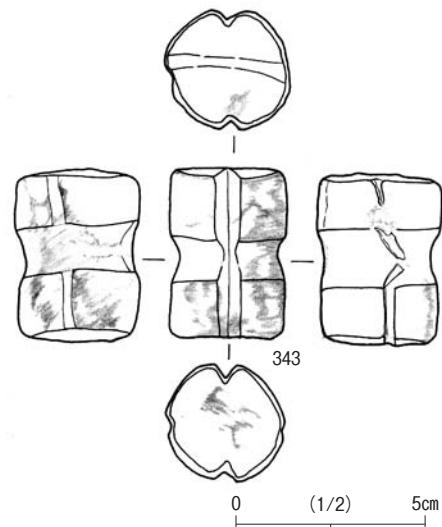
第46図 遺物実測図⑯ 土製品1

②土製品2 (第47図、図版28)

TR0802から出土した。343は素焼きの槌の子である。中程が窪むが全体としてほぼ円筒形を呈する。重さは57.3gある。堅く焼き締まり、中程横方向に幅1.5cmほどの凹みが一周し、縦方向に二カ所の幅8mmほどのV字の刻み目が入る。その中間に幅4~5mm程の僅かな凹みが付く。

③土製・陶製品 (第48図、図版28)

2体ともにTR0901の近世後期層から出土した。344は冠を被り福耳の笑っているように見える人物を表現している。大阪 観心寺蔵「如意輪観音座像」のように左足を寝かし、右足は立てて座る。右手には何か持っていたようであるが、欠損している。型に粘土を押し当てて成形したものと思われる。素焼きで背面は平らである。



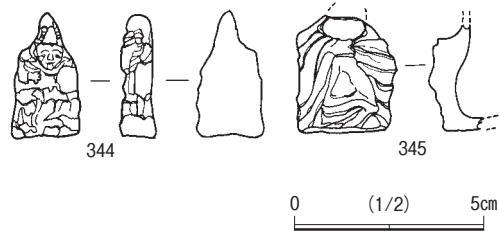
第47図 遺物実測図⑰ 土製品2

345は頭部を欠くが、右手に軍配のような物を持ち、長袖の衣服をまとう。型あわせの技法で成形されたものか。白い釉薬をかける。産地、時期は不明である。

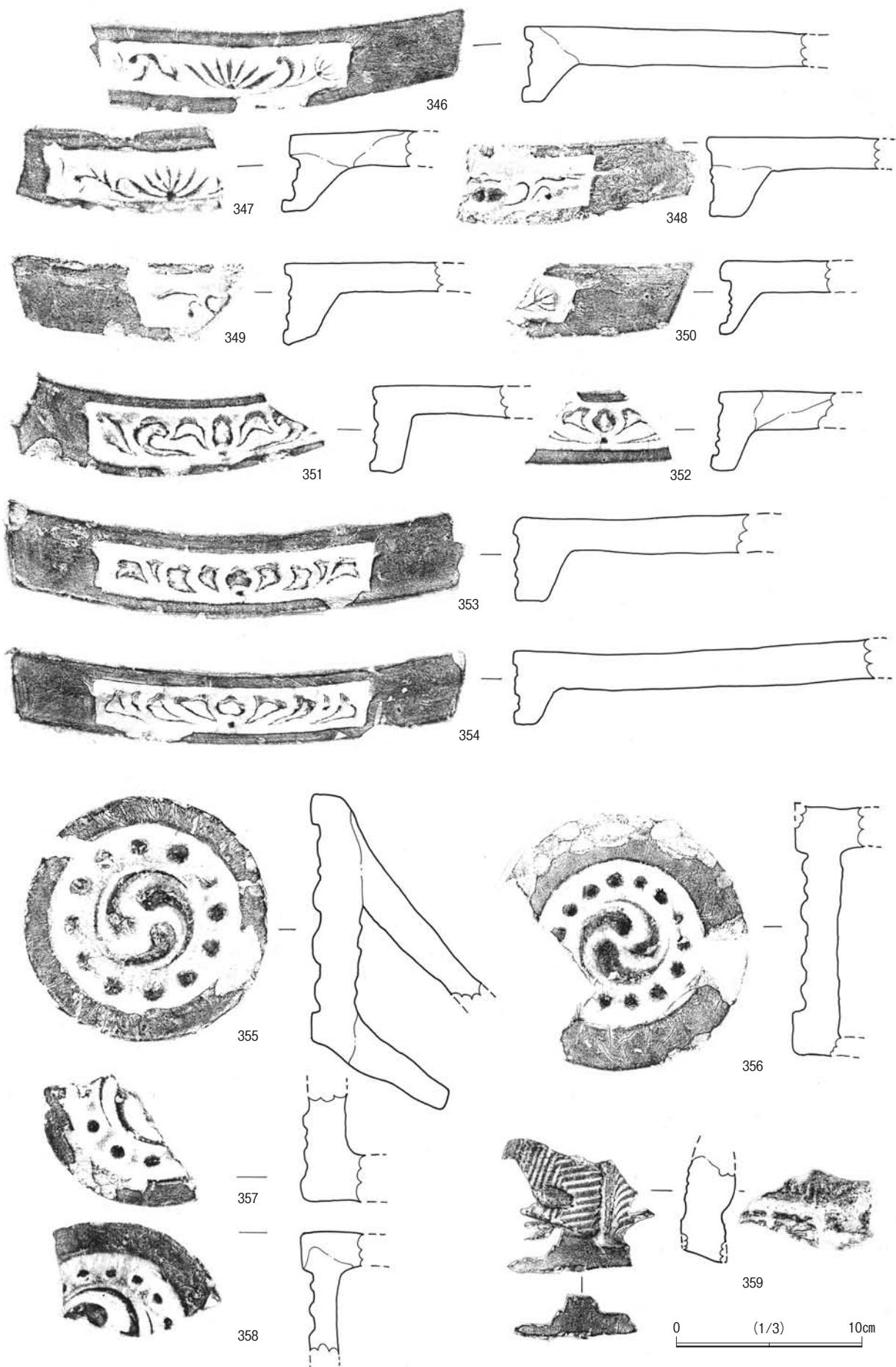
(12) 瓦 (第49~52図、図版28・29)

軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、道具瓦が出土した。現薬師堂東隣のTR0901の表土直下、石列の直上と廃棄土坑であるSK090105を中心に出土した。幕末までこの地に存在した瑞光寺および薬師堂と現薬師堂に伴うものと考えてほぼ誤りないであろう。瑞光寺は、第二代領主吉川広正により、寛文2年（1662年）に再興された。寛文7年（1667年）には、吉川興経（桃源院）の位牌を横山の洞泉寺より移し、吉川家の菩提寺となった。貞享3年（1686年）には京都紫野龍光院の末寺になり、岩国藩五ヶ寺に準ずる大寺になり、寺の修理なども五ヶ寺に準じる扱いを受けるようになった。興経の命日には極力藩主が参詣し、世嗣や正室が参詣する場合もあった。18世紀後半になって、老朽化と大風による傷み、興経の二百余忌が重なったことから建て替えられた。しかし、幕末には四境戦争を控え、藩の弾薬や大砲の保管所の建設を契機に廃寺となって薬師堂と僧居所以外の建物は取り壊されている。薬師堂の起源は不明であるが、寛文5年（1665年）に薬師免として7斗3升を与えられ、瑞光寺同様、藩の尊崇を受けた。瑞光寺廃寺の際も取り壊されず、現代まで維持されてきた。瓦の年代を考える上での一助となろう。近所の住民によると昭和の初期まで僧1名が起居していたとのことであり、当然現代の瓦も含まれていよう。なお、岩国歴史古館所蔵の4枚の瑞光寺を描いた絵図のうち最も新しい明治2年作成の絵図と、それ以前に描かれた3枚の絵図とでは薬師堂の位置が明らかに異なっており、現在の薬師堂は、幕末の廃寺とその後の境内地払い下げの便宜上今の位置に移されたと思われるこことを付言する。

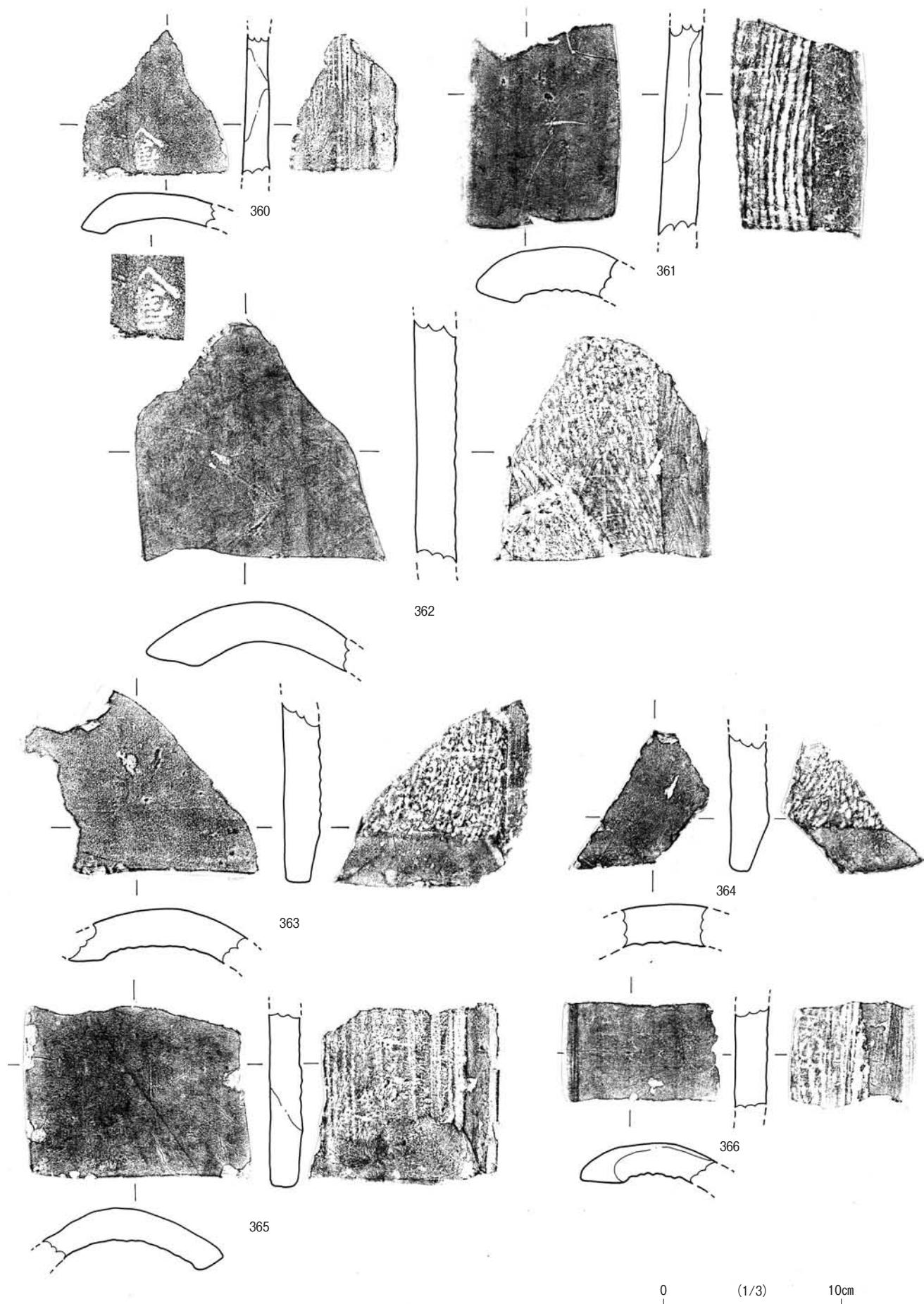
346~354は軒平瓦である。瓦当文の違いにより2種に分かれ。一つは346~349のように上向き7葉の中心飾りを持つタイプである。346は内側に大きく反転する唐草から引き出された5葉と外側に大きく反転する唐草に1葉を添える。347~350は中心飾りが欠けているが、脇飾りはいずれもまず内向きに、次に外向きに、さらに両者の間からの横方向に伸びる唐草文を配している。いずれも中高である。他の一つは351~354のように宝珠を中心飾りにするタイプである。いずれも宝珠の下には1個の珠文を置く。脇飾りには内向きと外向きの2種3ないし4つの唐草の葉脈とも雲とも見えるものを表現している。外・内・外（351）、内・内・内・外（353）、外・内・内・内（354）などのバリエーションがある。硬直し退化した表現のように見受けられる。軒丸瓦は瓦当面がほぼ完全に残っているものは1点だけである。丸瓦部と一体になって残っているものは皆無である。355は形状から棟の四隅に用いられる道具瓦と思われる。右回りに尻尾の回り込む三巴を中心に配し、その周囲に12個の珠文を置く。356は左回りに尻尾が回り込む三巴を中心に配し、その周囲に推定で14個の珠文を置く。357と358は断片であるが、二つとも左回りの三巴と珠文の組み合わせであることは同じである。珠文の数は異なるようである。359は道具瓦の一部であろうか。平らな粘土板の上に幅4mmほどの刻み目を入れた团子状の粘土を重ねて焼成している。刻み目は接着力を増すためかずれの防止であろう。



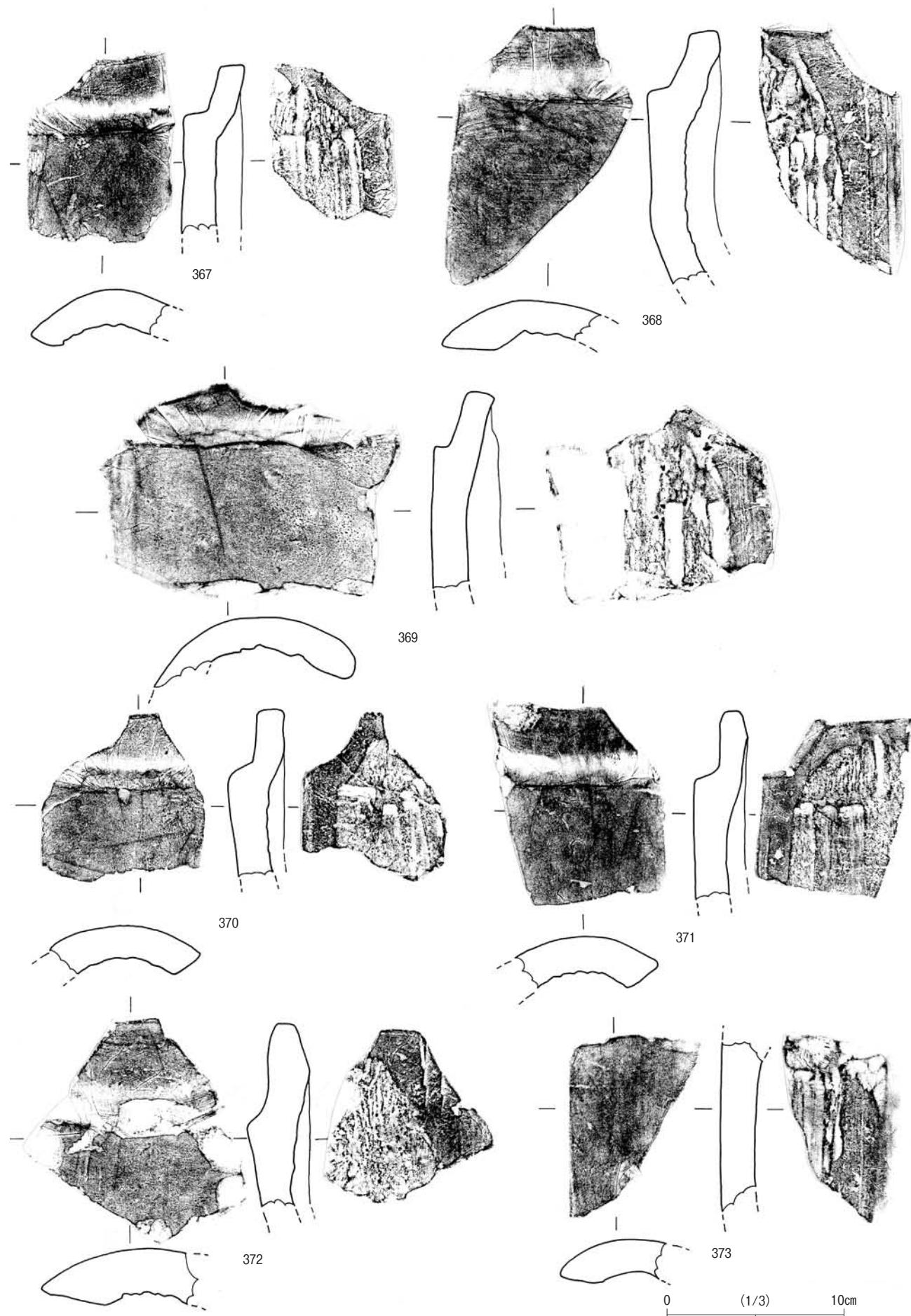
第48図 遺物実測図⑯ 土製・陶製品



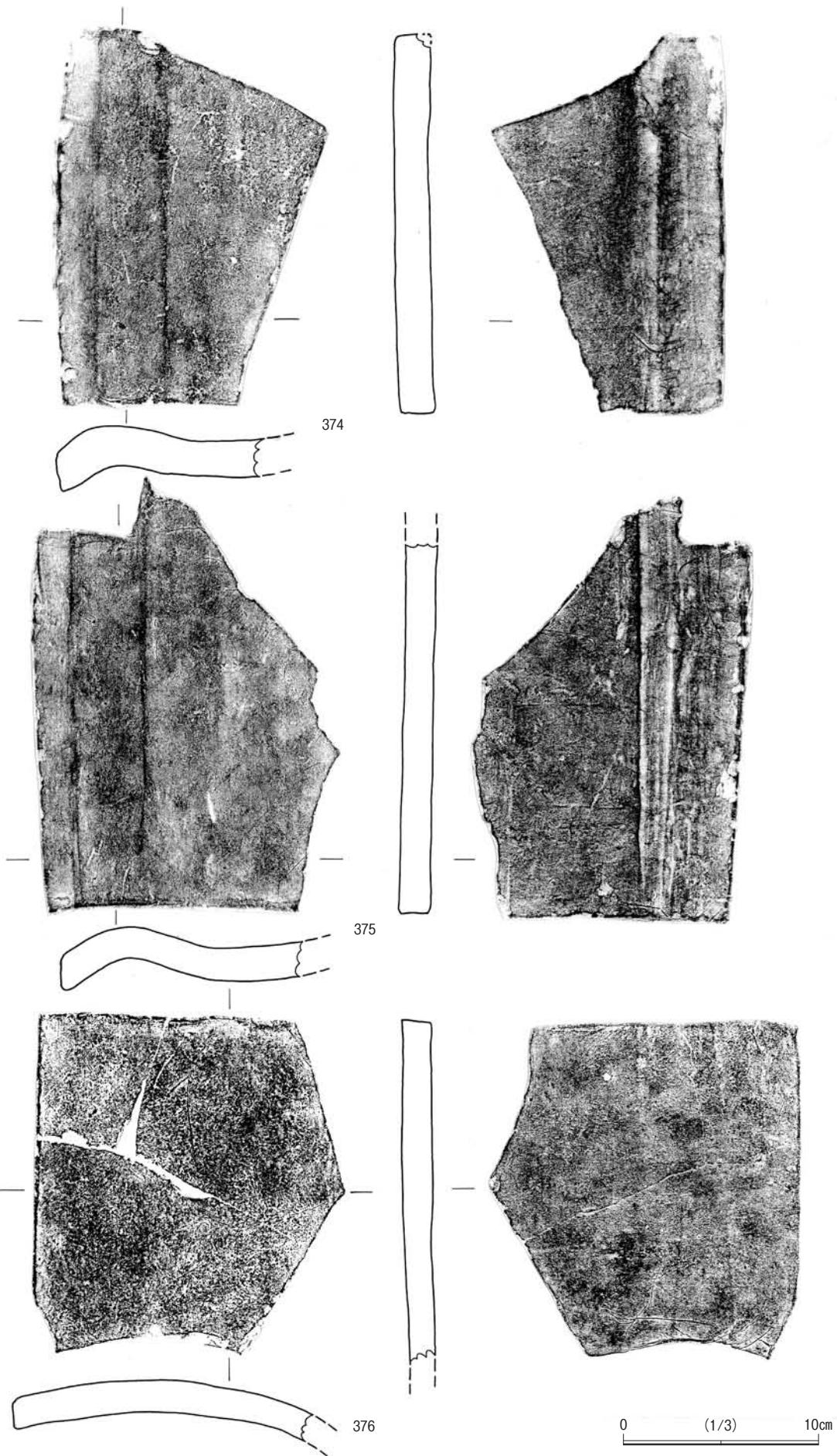
第49図 遺物実測図⑯ 瓦1



第50図 遺物実測図② 瓦2



第51図 遺物実測図② 瓦3



第52図 遺物実測図② 瓦4

が、焼成後に、何らかの理由で組み合わさっていた部分が外れてしまったものであろう。内側の成形痕は丸瓦に通じる。360は棟瓦である。「へ（山）善」と読むべきヘラ記号が付く。屋号か製造所名と思われる。361～373は有段の丸瓦である。破片のみで出土し、完形品はない。一部を除き燻しがかかる。内側には共通して幾本もの筋が走り、内型の跡を残す。361は燻しがかからずきわめて軽質であり、中世より瓦を焼いた伝統のある市内多田産¹¹⁾と思われる。362にはL字状の紐跡が残る。374～376は平瓦である。破片のみである。燻しがかかる。未掲載品の中には燻しのかからないものがあり、水に浸すと、ずぶずぶという音を立てて吸い込む音を発する。色調と、軽質であることからやはり市内の多田産であると推定される。燻しや釉薬のかからないこうした瓦では、冬期に降雪や降雨のある地域では凍結により破損する恐れがある。他の地域から運び込まれた瓦ではなく、冬期も比較的温暖な当地で焼成され、用いられていたものであろう。

3 金属製品（第53～55図、図版29）

（1）鉄製品・鉄滓等（第53・54図、図版29）

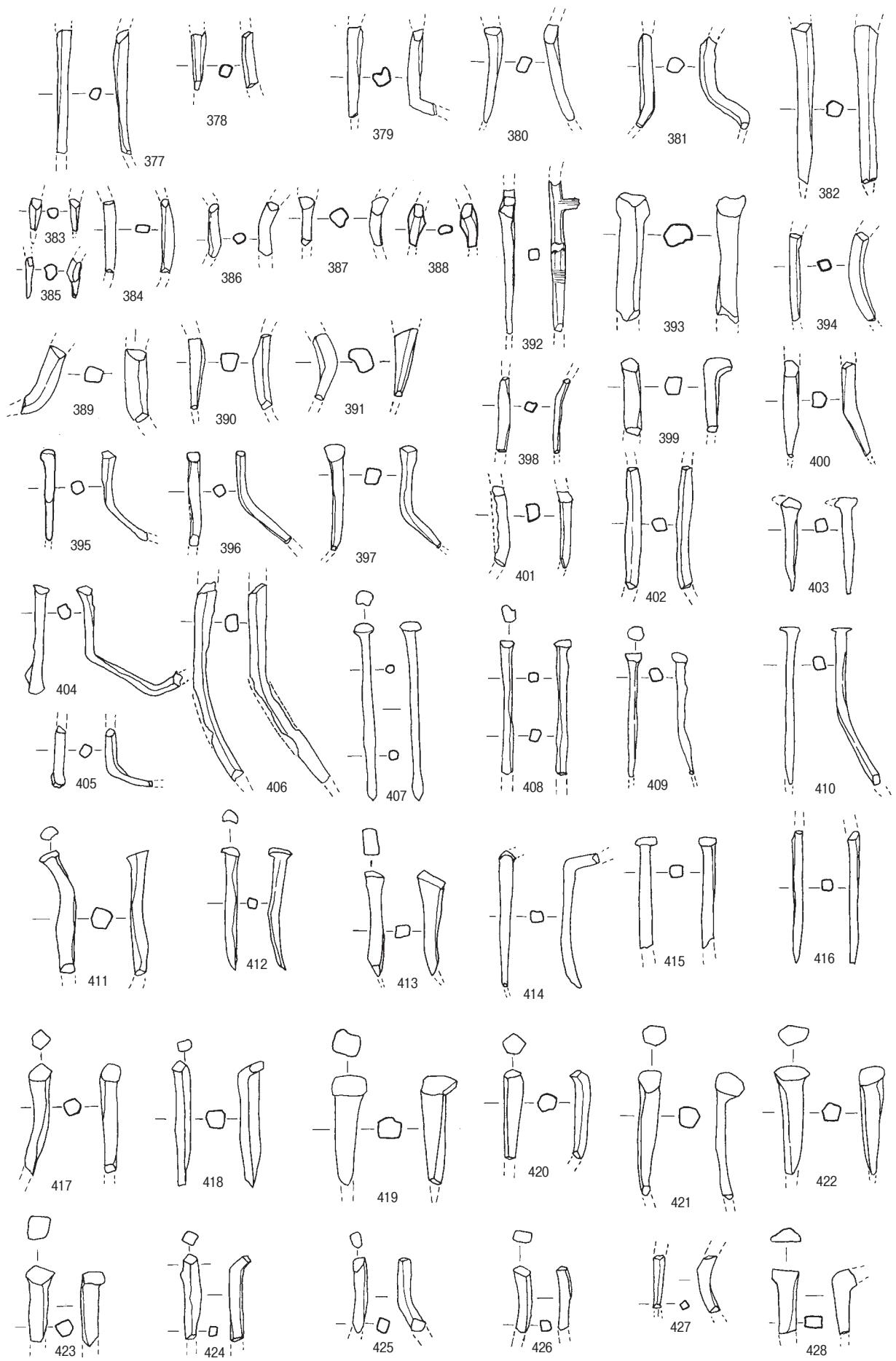
掲載した84点の内66点は和釘で、80%近い比率を占め最も多い。種類を問わず全点数を場所別に見ると、現薬師堂に隣接した調査区のTR0901とTR1001を合わせると53点となり、63%を占める。この調査区では地表付近から中世最末期の層までの間で出土している。建物跡が検出されたTR1003とTR1003-2を合わせた22点が26%とこれに次ぐ。

377～442は和釘である。概ね平たい頭部と断面四角形をなし先端が尖る。身は屈曲し、捻れを有するものがほとんどである。443は刀装具の切羽であろう。444は円形に復元できるが、使途は不明である。446～448は、鎌の一部と思われる。身が厚いことから、草ではなく竹や木の枝を扱うものであろう。449・450・452は鎗である。いずれも先端部が片方に湾曲し、刃部がつく。451はフックのようなものである。衣紋掛けなどに取り付けて用いられたものであろう。453は蛇行状の鉄器であるが使途は不明である。454は釣り針であろうか。中・大型魚の漁に用いられたか頑丈なつくりである。455・456は木材を固定するかすがいである。後者は遺存状態が良い。457は青銅製で煙管の雁首である。ラオ（羅字）の部分は竹製であったものが失われてない。458は巻金である。使途は不明である。

459～461は鉄滓である。小鍛冶の材料として用いられたものであろう。459は、TR1001の中世最末期層近くで出土した。187gある。460・461はTR1003西側中世期の土坑SK100313から一括で出土した。659gと860gある。日本刀の製造に使われる玉鋼ではなく、包丁鉄といわれるものである。

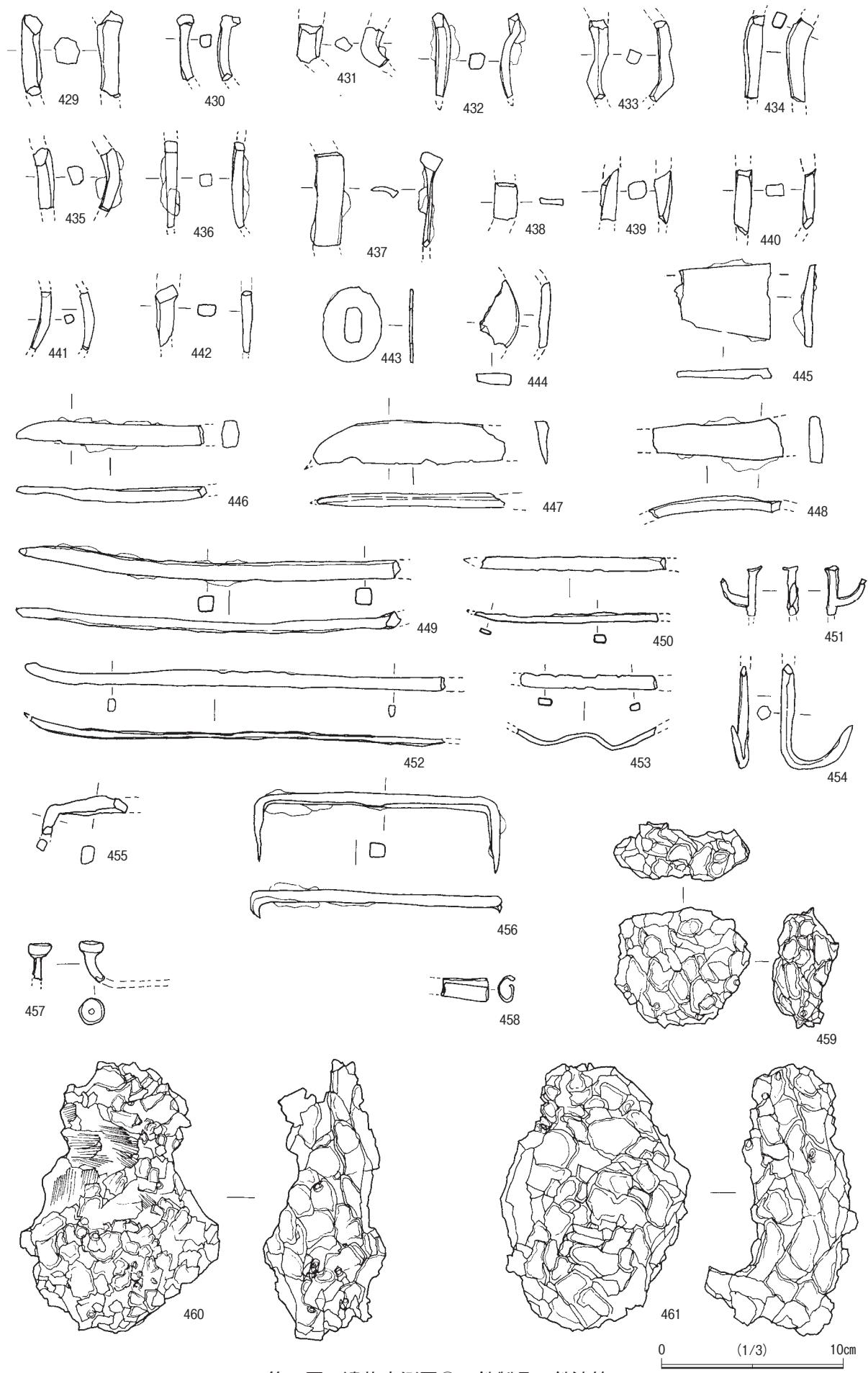
（2）錢貨（第55図、図版29）

TR1004土壘内側際の柱穴SP100401から、3枚一括で出土した。462～464は寛永通寶である。3枚とも緑青を吹いている。いずれも鋳化が進行しているが、表面の字が寛永通寶と読める。「ハ貝寶」の字体から「新寛永」とみられる。縁断面は「コ」字状であり、不十分ではあるが、方孔部の目戸切が行われている。但し463のみは錢質が著しく劣る。462と464の各数値の平均を記すと、直径は22.6mm、方孔一边の長さは10.3mm、厚さは1.05mm、重さは3.0gである。製造時期や地域が特定できる明瞭な特徴の判読は難しい。

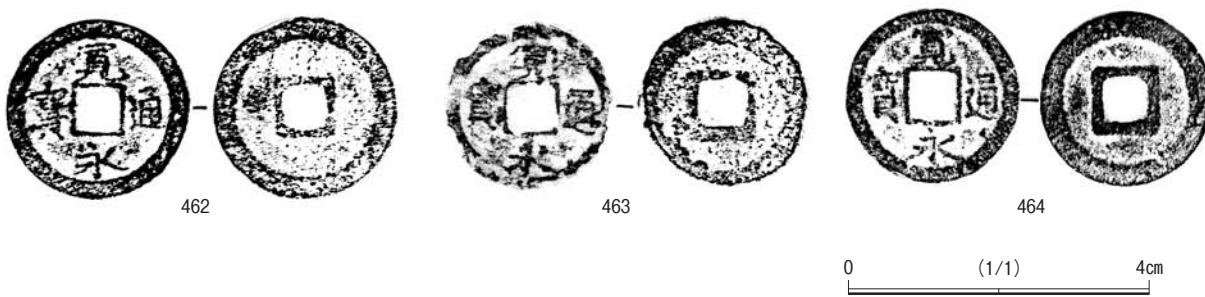


第53図 遺物実測図㉓ 鉄製品

0 (1/3) 10cm



第54図 遺物実測図② 鉄製品・鉄滓等



第55図 遺物実測図②5 銭貨

4 貝殻・人骨

(1) 貝殻

都合5カ所のトレンチから出土した貝殻のうち、7科74個体の貝類について同定できた。もっとも多かったのが「まるすだれがい科」のアサリ29個であり、同科のハマグリ19個がこれに次ぐ。1個体のみも4科6種あった。「たまがい科」のヒメツメタは、同定人によって玩具として用いられた可能性が指摘されている。他はすべて食用となる海水産の貝である。遺跡の所在地は北側を今津川、西側を門前川に挟まれ、東側が瀬戸内海に面する三角州に立地する。淡水産、汽水産の貝類も容易に採取できたはずであるが、大型の貝類の生息を可能にする藻場の豊富な東側の遠浅の海岸で、より肉厚な味の良い貝類を求めたものと思われる。

第2表 出土貝類一覧

科名 ¹²⁾	名称	点数	出土地点
いとまきぼら科	ナガニシ	1	TR0902
ばかがい科	バカガイ	2	TR0803, TR0902
	シオフキ	2	TR0803
ざるがい科	トリガイ	4	TR0902
	アサリ	29	TR0802, TR1004
	オニアサリ	4	TR0802
	ヒナガイ	1	TR0802
	カガミガイ	1	TR0802
まるすだれがい科	マツヤマワスレ	1	TR0802
	ハマグリ	19	TR0802, TR0803 TR1004
	チョウセンハマグリ	6	TR0802, TR0902
たまがい科	ヒメツメタ	1	TR0901A
あっきがい科	アカニシ	2	TR0803
てんぐにし科	テングニシ	1	TR0803

(岩国市科学センター指導員 善村唯雄・大成芳道両氏作成報告にもとづく)

(2) 人骨

TR0803から人骨1体が検出された。検出された層位（第29図の9層）は土壘東端と判断した地点から、さらに東へ1.4~2.3m伸びた地点にあり、土壘の外側に流水による洗掘を避けるために、川あるいは堀底に貼られたと考えられる石の外側に位置する。土質は灰オリーブ色（5Y5/2）シルトである。標高は1.1m~1.3m。この層の直下層（第29図の10層）のさらに下層は、湧水のレベルになるので、堀か何かの流路が少し埋まった段階の層と考えられる。付近からは、10数個の二枚貝と2個の巻き貝など食用の貝殻が出土した。調査時には人骨は堀へ投棄されたことも想定される出土状況である。墓坑や木棺は検出されておらず、偶発的理由で存在する人骨か埋葬された人骨か、伸展か座棺状態かは不明である。

註

- 1) 「岩国の原始」（岩国市史編纂委員会『岩国市史 史料編一』 岩国市役所 2002年）
- 2) 加納隆 山口大学名誉教授のご教示による。
- 3) 山本悦世「吉備系土師器椀の成立と展開」（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『鹿田遺跡3』1993年）および広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』1996年
- 4) 註3) と同じ。
- 5) 草戸千軒町遺跡編年II期相当 広島県立歴史博物館主任学芸員鈴木康之氏のご教示による。（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』1996年）
- 6) 岩崎仁志「山陽西部における中世の土製煮炊具－周防・長門を中心に－」（日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究 21』2007年）
- 7) 註6に同じ。
- 8) 「寛延二年（1749年）二月廿七日の頃」『御用所日記』
- 9) 「瑞光寺」の項への朱書追記『享保増補 村記』
- 10) 岩崎仁志「佐野焼の生産と流通」、田畠直彦「佐野焼の「荒物」づくり－人間轆轤と叩き技法－」（『山口考古』第28号 山口考古学会 2008年）
- 11) 元岩国歴古館館長宮田伊津美氏のご教示による。
- 12) ひらがな表記は吉良哲明『原色日本貝類図鑑』保育社 1954年、波部忠重『続原色日本貝類図鑑』保育社 1961年 による。

参考文献

- 菅原康夫・梅木謙一『弥生土器の様式と編年－四国編－』木耳社 2000年
『陶器講座第7巻 中国Ⅲ 元・明』雄山閣 1973年
上原真人 『歴史発掘11 瓦を読む』講談社 1997年
山崎信二『近世瓦の研究』（奈良文化財研究所学報第78冊） 奈良文化財研究所 2008年
広島県立歴史博物館他『広島県立歴史博物館開館20周年記念公開シンポジウム 中世後期の流通を考える』2009年
岩崎仁志「足鍋再考」（財團法人 山口県教育財團山口県埋蔵文化財センター『陶壇』第12号 1999年）
石井龍彦「山口県西部の弥生時代後半～古墳時代初頭の土師器について」（財團法人 山口県教育財團山口県埋蔵文化財センター『陶壇』第13号 2000年）
日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究 23』2011年
広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門他『シンポジウム 安芸地方の中世を探る～中世前期を中心として～』2012年

5 遺物観察表

第3表 遺物観察表（土器類）

()の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類	器形	法量(cm)				特徴	胎土	焼成	色調	
							(器種)	口径	底径	器高	高台高				
(内-外)															
1	31	25	1001	f区南壁下深掘り	弥生土器	壺頸部	頸部径(3.8)					胎土ざらつく	含白色・半透明灰色砂粒	やや不良	橙色
2	"	25	1003-2	b区南壁下深掘り	弥生土器	壺底部か		6.0				底部僅かに上げ底	含白色・半透明灰色砂粒		淡赤橙-にぶい橙色
3	"	25	0902	9~17.5m区砂礫層	須恵器	甕	厚さ1.0					外面斜格子状叩き目			薄灰色
4	32	22	1003	SK100310	土師器	小皿	(7.4)	5.0	1.4			回転ナデ	雲母少量含		にぶい黄橙色
5	"	22	1003	SK100310	土師器	小皿	8.1	6.4	1.2			ヘラ切り、回転ナデ	含雲母	軟	橙色
6	"	22	1003	SK100310	土師器	小皿	7.5	6.1	1.1			ヘラ切り、回転ナデ	均質雲母少量含		橙色
7	"	22	1003	SK100310	土師器	小皿	(7.1)	(5.1)	(1.2)			ヘラ切り	含白色砂粒、雲母少		にぶい黄橙色
8	"		1003	SK100310	土師器	小皿	(7.0)	(5.6)	0.7				均質雲母少量含		橙色
9	"		1003	SK100310	土師器	小皿	(7.0)	5.0	1.1						橙色
10	"		1003	SK100310	土師器	小皿	(7.6)	(4.2)	1.2				含雲母・白色砂粒		橙色
11	"	22	1003	SK100310	土師器	小皿	7.0	4.8	0.9			糸切底	均質雲母少量含		にぶい橙色
12	"	22	1003	SK100310	土師器	小皿	7.2	6.4	0.9			ヘラ切り	均質雲母少量含		にぶい橙色
13	"		1003	SK100310	土師器	小皿	(7.4)	(5.6)	(0.8)						橙色
14	"	21	1003	SK100310	土師器	椀		10.4	4.1	3.0	0.2	吉備系土師器椀、 高台貼り付、14C前半代	白色砂粒多く含む		灰白色～浅黄橙色
15	"	21	1003	SK100310	土師器	椀	(9.4)	4.0	3.2	0.2		吉備系土師器椀、 高台貼り付、14C前半代	白色砂粒多く含む	淡黄色	一部赤橙色
16	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(13.2)	6.6	4.2			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
17	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(12.8)	5.5	3.9			糸切底、内面煤ける	含雲母・白色砂粒	良	にぶい黄褐色-にぶい黄橙色
18	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(12.6)	6.5	4.0			糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
19	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(11.6)	5.7	3.4			糸切底、歪みあり	均質雲母少量含	不良	橙色
20	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(11.2)	(5.2)	3.9			糸切底、歪み大	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
21	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	11.3	5.5	4.6			糸切底、やや硬質	均質雲母少量含		橙色
22	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(11.4)	(5.3)	3.8			糸切底、やや硬質	均質雲母少量含		橙色
23	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(11.4)	(5.7)	3.7			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
24	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(11.4)	(6.2)	4.4			糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色-にぶい黄橙色
25	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	11.7	5.5	3.7			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
26	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	11.7	5.6	4.0			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
27	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(11.7)	6.5	4.1			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
28	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	11.8	6.0	3.9			糸切底、中心に穿孔か	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
29	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	11.8	6.1	3.9			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
30	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	11.8	6.2	3.7			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
31	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(11.8)	6.2	4.3			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
32	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	11.9	7.0	4.1			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
33	33	21	1003	SK100310	土師器	杯	11.9	6.2	4.0			糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
34	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	12.0	4.6	4.0			糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
35	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(12.0)	6.5	4.1			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
36	"		1003	SK100310	土師器	杯	12.2	5.8	4.0			糸切底		不良	橙色
37	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	12.2	6.3	4.1			糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
38	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(12.2)	6.0	3.9			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
39	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(12.3)	6.2	3.6			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
40	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(12.4)	6.6	4.6			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
41	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(11.8)	(7.0)	4.4			糸切底、内面煤ける	含雲母・白色砂粒	やや良	橙色
42	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(12.6)	6.3	4.4			糸切底、二次加熱か	雲母少量含む	不良	橙色
43	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(12.8)	(7.6)	4.5			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
44	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(12.8)	(7.0)	3.7			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
45	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(13.0)	6.2	3.9			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
46	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(13.0)	6.9	3.8			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
47	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(13.0)	(7.1)	3.9			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
48	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(13.0)	(7.4)	4.0			糸切底	含雲母・白色砂粒	良	橙色
49	"	21	1003	SK100310	土師器	杯	(13.1)	6.8	3.8			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
50	"		1003	SK100310	土師器	杯			6.7			糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
51	"	22	1003	SK100310	土師器	杯	(12.8)	6.4				糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
52	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		(6.6)				糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
53	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		(6.5)				糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色

第3表 遺物観察表（土器類）

（）の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類	器形	法量(cm)				特徴	胎土	焼成	色調
							(器種)	口径	底径	器高	高台高			
54	33	22	1003	SK100310	土師器	杯		5.8		糸切底		均質雲母少量含		橙色
55	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		6.2		糸切底		含雲母・白色砂粒		橙色
56	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		(6.4)		糸切底		含雲母・白色砂粒	良	にぶい黄橙色
57	"	1003	SK100310	土師器	杯		(6.0)		糸切底		含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色	
58	"	1003	SK100310	土師器	杯		(6.4)		糸切底		均質雲母少量含	良	橙色	
59	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		(6.4)		糸切底		含雲母・白色砂粒		橙色
60	"	1003	SK100310	土師器	杯		(6.0)		糸切底・摩耗著しい		含雲母・白色砂粒	不良	にぶい黄橙色	
61	"	1003	SK100310	土師器	杯		6.1		糸切底		含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色	
62	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		(6.2)		糸切底		含雲母・白色砂粒	良	にぶい黄橙色
63	"	1003	SK100310	土師器	杯		6.4		糸切底		含雲母・白色砂粒	良	にぶい黄橙色	
64	"	1003	SK100310	土師器	杯		(6.8)		糸切底		含雲母・白色砂粒	やや良	橙色	
65	"	1003	SK100310	土師器	杯		(6.2)		糸切底・器壁薄い		均質雲母少量含		にぶい橙色	
66	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		(6.6)		糸切底		含雲母・白色砂粒	良	にぶい黄橙色
67	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		6.2		糸切底		均質雲母少量含		橙色
68	"	22	1003	SK100310	土師器	杯		5.6		糸切底		均質雲母少量含		にぶい黄橙色
69	"	1003	SK100310	土師器	杯		(5.2)		糸切底		含暗赤褐色粒子	良	橙色・浅黄橙色	
70	34	23	1004	土器集積100401	土師器	小皿	(7.6)	(5.7)	1.4	糸切底か		含微量の雲母	硬	橙色・淡橙色
71	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯	13.5	6.3	4.3	糸切底・口縁煤ける		含微量の雲母		にぶい橙色～橙色
72	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯	13.1	6.6	4.3	糸切底・器壁厚い		含微量の雲母	やや軟	にぶい橙色～橙色
73	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯	12.2	6.0	4.0	糸切底		やや精良	良	にぶい黄橙色
74	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯	11.4	6.6	4～5.4	糸切底・歪み大		含微量の雲母		にぶい黄橙色～明黄褐色
75	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯	13.3	6.4	4～5.1	歪み大・糸切底内側一部焼け・器壁厚い		含雲母・白色砂粒	不良	にぶい黄橙色
76	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯	13.4	5.5	3.8～4.8	歪み大・糸切底外側に付着物・器壁厚い		含雲母・白色砂粒	やや良	にぶい黄橙色
77	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯		5.7		糸切底		含微量の白色砂粒		にぶい黄橙色
78	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯		5.6		糸切底		含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
79	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯		5.7		糸切底		均質	やや軟	浅黄橙色
80	"	23	1004	土器集積100401	土師器	杯		(5.4)		糸切底・重量感アリ全体黒ずむ		含微量の雲母	堅緻	にぶい黄橙色
81	"	23	1004	i区、標高1.52m	土師器	杯	(14.6)	(6.6)	(4.0)	糸切底・器壁厚い		含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
82	"	23	1004	g区、標高1.88m	土師器	杯		6.1		糸切底・底部煤ける		含雲母・白色砂粒		橙色・大部分が黒色化
83	"	1004	土壘盛土内	土師器	杯		(5.5)			糸切底		含雲母・白色砂粒		橙色
84	"	23	1004	土壘盛土内	土師器	杯		(5.3)		糸切底・底部厚い		含雲母・白色砂粒		橙色
85	"	23	1004	i区、土壘盛土内	土師器	杯		5.6		糸切底		含白色砂粒	やや軟	浅黄橙色～灰白色
86	"	1004	土壘盛土内	土師器	碗		(6.0)		0.2	三角形の高台押付・内側黒ずむ		含微細白色砂粒		にぶい橙色
87	35	23	0901	石090105	土師器	小皿	(6.8)	(5.4)	1.8	中心に孔・糸切底		含雲母・白色砂粒	軟	橙色
88	"	0901	石090105	土師器	小皿		(4.0)	(1.4)		糸切底		含雲母・白色砂粒		橙色
89	"	0901	石090105	土師器	小皿	(6.8)		(1.3)		糸切底		含多量の雲母	やや軟	橙色
90	"	23	0901	石090105	土師器	小皿	6.9	5.8	1.3	糸切底		含雲母・白色砂粒		橙色
91	"	1003-2	SB100301-SP14	土師器	小皿	(6.7)	(5.2)	0.9		歪み大		含雲母		にぶい橙色
92	"	1003-2	SB100301-SP16	土師器	小皿		(4.2)	1.5		糸切底		含雲母		灰黄褐色
93	"	1003	SB100301-SP10	土師器	小皿		(4.1)			糸切底		含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
94	"	0901	SS090103	土師器	杯		(5.8)			底部内面中央に凹み・糸切底		含雲母・白色砂粒	軟	橙色
95	"	0901	石090105	土師器	杯		(7.0)			糸切底		含雲母・白色砂粒		橙色
96	"	0901	石090106	土師器	杯		(4.8)			糸切底		含白・黒色極微砂粒	軟	浅黄橙色
97	"	0901	石090106	土師器	杯		(5.6)			糸切底		含黒色砂粒		浅黄橙色
98	"	1003	SP100319	土師器	杯		(6.0)			糸切底				灰白色・浅黄橙色
99	"	24	1003	SK100313	土師器	杯		5.0		糸切底		鉄滓(460-461)と共に	やや不良	灰白色～浅黄橙色
100	"	1003-2	SP1003-217	土師器	杯		(5.6)			糸切底		含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙～にぶい黄褐色
101	"	24	1003-2	SP1003-217	土師器	杯		(5.5)		糸切底・外面煤ける		白色砂粒含み精良	良	浅黄色～暗灰褐色
102	"	1003-2	SP1003-218	土師器	杯		(5.5)			糸切底		含雲母		にぶい橙色
103	"	1003	SK100307	土師器	杯		(5.3)					含赤褐・黒色砂粒	やや不良	灰白色
104	"	1003-2	SP1003-201	土師器	杯		(5.0)			糸切底		含雲母・白色砂粒	やや不良	灰黄褐色・明赤褐色と黒斑
105	"	1003-2	SP1003-201	土師器	杯	(13.2)	(6.2)	(4.4)		糸切底・底部厚い		含雲母・白色砂粒		橙色～にぶい黄橙色
106	"	1003-2	SP1003-201	土師器	杯		(5.8)			糸切底		含黒雲母	やや良	にぶい黄橙色
107	"	1003	南東遺物包含層	土師器	杯		(4.0)			糸切底		含白色砂粒	やや不良	灰白～浅黄橙色
108	"	1003	南東遺物包含層	土師器	杯		(5.4)			糸切底		含雲母・白色砂粒	やや不良	にぶい橙色

第3表 遺物観察表（土器類）

（）の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類	器形	法量(cm)				特徴	胎土	焼成	色調	
							(器種)	口径	底径	器高	高台高				
109	35	1003	南東遺物包含層	土師器	杯		(5.4)					糸切底	含雲母・白色砂粒	やや不良	橙色
110	"	1003-2	SB100301-SP14	土師器	杯		(7.7)					摩耗著しい		やや不良	灰白色
111	"	1003-2	SP1003-211	土師器	杯		(4.6)					糸切底	含雲母		浅黄橙色
112	"	1003-2	SP1003-206	土師器	杯		(5.2)					糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
113	"	1003-2	SP1003-212	土師器	杯		(6.0)					糸切底	含む白色砂粒		灰白色
114	"	24	1003	南東遺物包含層	土師器	杯	13.2	6.2	4.9			糸切底	含雲母・白色砂粒	不良	にぶい橙色-橙色
115	"	24	1003	南東遺物包含層	土師器	杯	(13.3)	5.6	(2.9)			糸切底、器壁薄い	均質雲母少量含		にぶい橙色-橙色
116	"	24	1003	SK100315	土師器	杯		(7.0)				糸切底、器壁薄い	精良	良	浅黄橙色
117	"	24	1003	南東遺物包含層	土師器	杯	12.5	6.1	4.0			糸切底	含白色砂粒	不良	灰白色
118	"	1003	南東遺物包含層	土師器	杯	(10.6)	(5.6)	(4.6)				歪み大、糸切底	含白色砂粒	不良	灰白～褐灰色化
119	"	1003	南東遺物包含層	土師器	杯		5.5					糸切底	精良	やや不良	灰白色
120	"	24	1003	SD100301下	土師器	杯	(12.4)	(8.0)	(3.9)			糸切底	白色砂粒多く含む		橙色
121	"	1003-2	SD1003-201	土師器	杯		(6.0)					糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
122	"	1003-2	SD1003-201	土師器	杯		(6.0)					糸切底	含雲母	やや不良	灰白色
123	"	1003-2	SD1003-201	土師器	杯		(5.2)					糸切底	含雲母・微細な白色砂粒		灰黄褐色
124	"	1003	SK100309	土師器	杯		(7.4)					糸切底、被熱の為硬質	含雲母・白色砂粒		灰色
125	36	1003-2		土師器	小皿		0.4						含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
126	"	23	1003	東側拡張区南	土師器	小皿	(5.8)	(4.2)	1.0				含雲母		にぶい黄橙色
127	"	1003	西側拡張区南半	土師器	小皿	(5.8)	(3.8)	1.1				ヘラ切り	含微細な白色砂粒		橙色
128	"	1003		土師器	小皿	(6.0)	(4.0)	1.2				口縁の歪み大	含雲母・白色砂粒		橙色
129	"	23	1001	f区、標高1.55m	土師器	小皿	(6.2)	(3.6)	1.4			糸切底	含雲母		橙色
130	"	23	0901B	南半-60cm	土師器	小皿	(5.8)	(3.5)				ヘラ切り	含雲母・白色砂粒	軟	にぶい橙色
131	"	1001	d区	土師器	小皿	(7.0)	(4.7)	1.7				糸切底	含雲母	やや軟	にぶい橙色
132	"	0901	南西区	土師器	小皿		(4.2)					ヘラ切りか	含雲母・黒砂粒		橙色
133	"	1001	a区	土師器	小皿	(7.0)	(5.0)	1.4				糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい黄橙色
134	"	1001	b区、-40cm	土師器	小皿	(7.0)	(4.8)	1.7				糸切底	含雲母		橙色
135	"	1001	e区、深掘り標高1.2m	土師器	小皿	(7.0)	(4.2)	1.7				ヘラ切りか	含雲母		にぶい黄橙色
136	"	1003-2	北壁	土師器	小皿	(6.9)	(5.2)	1.2				ヘラ切り	含白色砂粒		橙～にぶい橙色-橙色
137	"	1001	b区	土師器	小皿	(7.0)	(6.0)	0.8				糸切底	含雲母		橙色
138	"	23	1003		土師器	小皿	(7.6)		0.9			糸切底	含雲母		にぶい黄橙色
139	"	1003	東側拡張区南東隅	土師器	小皿	7.1	5.1	1.3				ヘラ切り	含雲母・白色砂粒		橙色-にぶい黄橙色
140	"	23	0802	最下層	土師器	小皿	(7.0)	(4.0)	1.4			糸切底	含白色砂粒		黄褐色-黒褐色
141	"	23	1003	西側掘り下げ	土師器	小皿	7.4	5.1	1.3			ヘラ切り	含雲母・白色砂粒	やや良	橙色
142	"	1003	西側拡張区	土師器	小皿	8.6	6.6	1.3				糸切底	含雲母		にぶい黄橙色
143	"	1001	-114cm	土師器	小皿		6.9					糸切底	含白色砂粒	良	明赤褐色
144	"	1001	c区	土師器	小皿		(3.8)					糸切底、器壁薄い	均質		橙色
145	"	1003-2	b区	土師器	小皿		(4.6)					糸切底	均質	やや良	にぶい橙色
146	"	0901C	南半中世最末期-75cm	土師器	灯明皿	5.9	5.2	1.4				糸切底	含白色・黒色砂粒	軟	にぶい橙色
147	"	0901	中世最末期	土師器	灯明皿		0.9					中心に孔、内面に透明皮膜	含橙色・黒色砂粒	軟	橙色
148	"	0902	-30cm	土師器	灯明皿	(7.3)	4.0	1.2				内面に乳白色の皮膜	含白色砂粒		明褐色-明赤褐色
149	"	0901B	SB090101検出中	土師器	灯明皿		(4.2)					底部中心に孔、内外共煤ける	含白色砂粒		にぶい黄橙色
150	"	0902	9~17.5m区、-110cm	土師器	灯明皿	8.2	4.4	1.5				糸切底、内面に透明の皮膜			橙色
151	"	0901E	-50cm	土師器	灯明皿	(8.6)	(4.0)	1.9~2.0				糸切底、口縁に煤跡	含白・黒色砂粒		にぶい橙色-橙色
152	"	0901D	-45cm	土師器	灯明皿	(9.2)	(5.6)	1.6				糸切底、口縁に煤付着	含白・黒色砂粒		明赤褐色
153	"	24	1003	東側拡張区南東隅	土師器	杯	(11.2)	(6.2)	(4.3)			糸切底	含白色砂粒		灰白色一部橙色
154	"	24	1003	東側拡張区	土師器	杯	(13.2)	(5.6)	4.9			糸切底	均質	良	橙色-灰白色
155	"	24	0802	-100cm	土師器	杯	13.4	6.6	4.7			糸切底	含白色砂粒		灰白色～淡黄色
156	"	24	1003	東側拡張区北東	土師器	杯	11.8	5.8	4.2			糸切底、外縁に煤ける	含雲母	やや不良	赤橙色-灰白色
157	"	1001	-190cm	土師器	椀		(6.0)		0.5			逆三角形の高台付	含雲母	やや不良	灰白色
158	"	0902	9~17.5m区、-90cm	土師器	椀		(4.0)		0.3			不整形な高台が付く	含黒色砂粒		浅黄橙色
159	"	24	1003-2	西南隅深掘	瓦器	椀	(5.2)		0.3			和泉型瓦器椀、高台付、磨き暗紋化			灰白色
160	"	0802	標高1.3m	土師器	杯		(5.8)					糸切底	含雲母・黒・橙色砂粒		にぶい橙色
161	"	1003-2	e区	土師器	杯		(5.6)					底部中心に穿孔か	均質		灰白色
162	"	1003	西側拡張区	土師器	杯		5.0					糸切底	含白色砂粒		灰白色-浅黄橙色
163	"	24	0901C	5~13.5m区、-95cm	土師器	杯		(6.4)				糸切り底	含白色砂粒		灰白色

第3表 遺物観察表（土器類）

（）の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類	器形	法量(cm)				特徴	胎土	焼成	色調	
							(器種)	口径	底径	器高	高台高				
164	36	0901	中世最末期	土師器	杯		(6.8)					糸切底、軽質	含雲母・白・橙色砂粒	軟	灰白色
165	"	24	1003	東側拡張区南東隅	土師器	杯		5.4				糸切底	含灰白色砂粒	不良	灰白色
166	"	1003-2	b区	土師器	杯		(6.0)					糸切底	均質		灰白色
167	"	1003	西側拡張区	土師器	杯		(4.8)					糸切底	含雲母		褐灰色-にぶい黄橙色
168	"	1003	南側拡張区	土師器	杯		(5.5)					糸切底	含雲母	不良	灰白色
169	"	1003-2	e区	土師器	杯		(6.2)					糸切底	含白色砂粒		灰白色
170	"	1003-2	b区	土師器	杯		(5.6)					糸切底	含白色砂粒		灰白色
171	"	1003	東側拡張区	土師器	杯		(5.6)					糸切底	含白色砂粒		灰白色
172	"	1003-2	a区	土師器	杯		(4.4)						含白色砂粒		褐灰色
173	"	1003		土師器	杯		(5.0)					糸切底	含雲母		灰白色
174	"	1003-2	b区	土師器	杯	(10.7)	(5.2)	(4.1)				糸切底	精良	良	にぶい橙色-にぶい黄橙色
175	"	1003-2		土師器	杯	(13.2)	6.1	(4.1)				糸切底	含雲母		橙色
176	"	1003-2	e区、包含層	土師器	杯	(13.2)	(6.6)	(4.2)				糸切底、歪み有り	含白色砂粒		にぶい橙色
177	"	1001	d区	土師器	杯		(6.6)					糸切底	含白色砂粒		にぶい橙色
178	"	24	1003	西側拡張区	土師器	杯	(6.9)					糸切底、底部厚く大振り	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色～橙色～橙色
179	37	24	0901D		土師器	杯		5.8				糸切底	軽質	軟	浅黄橙色
180	"	1003-2		土師器	杯	(7.4)						糸切底、中心に孔	含雲母	やや不良	にぶい橙色
181	"	0802	標高2.7m	土師器	杯	(6.1)						糸切底、若干上げ底			にぶい橙色
182	"	24	0901	排土表採	土師器	杯	(6.6)					糸切底	含雲母・白・黒色砂粒		にぶい橙色
183	"	24	0903		土師器	杯	(6.4)					糸切底	含雲母・白・黒色砂粒		橙色
184	"	0901B	5~13.5m区、-90cm	土師器	杯	(6.4)						糸切底	含雲母・白・黒色砂粒		橙色
185	"	1001	d区	土師器	杯	(5.4)						糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
186	"	1001	b区、中世面	土師器	杯							糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
187	"	1003	東側拡張区北半	土師器	杯	(6.2)						糸切底	含雲母		橙色
188	"	1003	東側拡張区	土師器	杯	(5.6)						糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
189	"	1003	西側拡張区	土師器	杯	(5.8)						糸切底	含雲母		にぶい橙色
190	"	1003-2	a区	土師器	杯	(6.6)						糸切底	含白色砂粒	不良	にぶい黄橙色
191	"	1003-2	b区、南壁	土師器	杯	(5.0)						糸切底	含雲母・白色砂粒		にぶい橙色
192	"	1003	中世上面	土師器	杯	6.4						糸切底	含2mm大白色砂粒	硬質	灰白色-黄橙色
193	"	0901A	10-20m区、-80cm	土師器	杯	(5.6)						糸切底	含白色・黒色砂粒		にぶい橙色
194	"	1003	西側拡張区北半	土師器	杯	(5.8)						糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
195	"	1001	b区、-75cm	土師器	杯	(5.8)						糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色-にぶい橙色
196	"	1001	e区	土師器	杯	(5.8)						糸切底	含雲母・白色砂粒	良	橙色
197	"	1001	c区	土師器	杯	(6.0)						糸切底	含雲母・白色砂粒	やや不良	橙色
198	"	1001	e区、中世面	土師器	杯	(6.2)						糸切底	含雲母	やや軟	橙色
199	"	0901	中世最末期面	土師器	杯	5.5						糸切底	含雲母・白色・褐色砂粒		にぶい橙色
200	"	0901A	10-20m区	土師器	杯	(4.8)						糸切底	含雲母・白・橙色砂粒		橙色
201	"	1003-2	b区、中世面	土師器	杯	(6.0)						糸切底	精良	やや不良	にぶい黄橙色
202	"	0901B	-60cm	土師器	杯	(5.8)						糸切底	含雲母・白・黒色砂粒		にぶい橙色
203	"	1003-2		土師器	杯	(6.0)						糸切底	含雲母		にぶい橙色
204	"	1003-2	b区	土師器	杯	(6.0)						糸切底	含雲母・白色砂粒	やや良	にぶい黄橙色
205	"	1003	北隅	土師器	杯	(6.8)						糸切底	含雲母・白色砂粒	不良	橙色
206	"	1003-2	西壁北拡張	土師器	杯	(5.8)						糸切底	含雲母		橙色
207	"	1003-2	北壁清掃	土師器	杯	(5.2)						糸切底	含白色砂粒	不良	にぶい黄橙色-灰褐色
208	"	1001		土師器	杯	4.4						糸切底、全面煤ける	含雲母		黒褐色化(地色不明)
209	"	0901	南西区	土師器	杯	(6.2)						糸切底	含雲母・白・黒色砂粒		明褐色
210	"	1001	e区	土師器	杯	(5.6)						糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
211	"	24	0901A	-130cm	土師器	杯	(4.6)					糸切底	含白色・黒色砂粒		浅黄褐色
212	"	1001		土師器	杯	(6.0)						糸切底	含雲母・白色砂粒		橙色
213	"	1003	中世面	土師器	杯	(4.8)						糸切底	含白色砂粒		黄橙色
214	"	1003-2	南壁包含層	土師器	杯	5.6						糸切底、歪み大、中心に孔	含白色砂粒	やや良	にぶい黄橙色
215	"	1001	e区	土師器	杯	(5.6)							含雲母		橙色
216	"	1003	西側拡張区	土師器	杯	(6.6)						糸切底	精良	良	にぶい橙色
217	"	24	1003	西側拡張区北半	土師器	杯	(5.6)					糸切底、底部厚い	精良	良	褐灰色-にぶい橙色
218	"	24	0901B	-60cm	土師器	皿	(4.6)					見込に墨書	含白・黒色粒子		橙色からにぶい橙色

第3表 遺物観察表（土器類）

（）の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類	器形	法量(cm)				特徴	胎土	焼成	色調	
							(器種)	口径	底径	器高	高台高				
219	38	25	0802	北西、-195cm	土師器	鍋	(31.6)					外面全体と、内面の一部煤ける	含雲母	明黄褐色-黒褐色	
220	"	0902	-50cm	土師器	羽釜	器厚0.3~0.6						外側完全に煤ける		灰白色~灰色-黒色	
221	"	0902	0-9m区、角礫層中	土師器	羽釜	器厚0.7							黒色土	にぶい黄橙色	
222	"	1003	中世面	土師器	内耳鍋	器厚0.3								浅黄橙色	
223	"	25	0803	瓦質土器	足錐脚	脚径2.1						内面・脚上部煤ける	灰白色	浅黄橙色-黒色	
224	"	25	1001	SK090105下	土師器	足錐脚	脚径1.7						断面黒化	にぶい橙色	
225	"	25	1002	北半-145cm	瓦質土器	鍋	器厚0.6~0.9					器外壁一面に煤付着 C14分析試料①(V章参照)	含微細な雲母	灰褐色-黒褐色	
226	"	25	1003-2	a区	瓦質土器	火鉢	器厚1.2~1.3					外面に菱形文	密 淡黄褐色	黄褐色	
227	"	25	1003	東側拡張区	瓦質土器	火鉢脚						一部煤ける	含微細白色砂粒	にぶい黄橙色	
228	"	25	0901C	5-16.5m区	瓦質土器	擂鉢	器厚0.7~1.0					内部に縦のオロシメ	含微細白色砂粒	光沢黒色に煤ける	
229	"	25	1001	C区	瓦質土器	擂鉢	器厚0.9					オロシメ		淡灰色	
230	"	25	1002	砂礫層直上	陶器	甕(体部)	器厚1.1					備前焼大甕、内外共にナデ	緻密 含石英粒	良好	灰色-暗灰褐色
231	"	1002	北半表土	陶器	甕								暗赤褐色	灰黄褐色	
232	"	25	0803	瓦質土器	甕	器厚1.0 (16.8)						外面にタタキ痕	灰白色	黒色	
233	39	25	0902	9~17.5m区-230cm	青磁(龍泉窯)		(6.8)	1.0	1.0			見込に蓮弁、高台内無釉、高台径6.8cm	灰色	良 オリーブ灰色	
234	"	25	1002	青磁(龍泉窯)			(5.0)		1.0			高台断面逆三角形	密、灰白色	やや軟 オリーブ黄色	
235	40	26	0901	SK090105	磁器	蓋	(内径9.0)					肥前染付、17C後半、蛸唐草	白色	灰白色	
236	"	1001	SK090105	陶器	蓋	5.7	2.6					飴釉	暗褐色	暗褐色	
237	"	1001	SK090105	陶器	蓋							上面施釉、釉に貫入	灰白色	良 灰白色	
238	"	25	1001	SK090105	磁器	小杯	(6.8)	3.1	3.9	0.5		肥前染付、17C後半、水草描く	灰白色	良 明緑灰色	
239	"	25	0901	SK090105	陶器	碗		高台径1.9		0.5		18C後半、関西系	白色	灰白色	
240	"	1001	SK090105	陶器	碗	(7.0)							浅黄橙色	暗褐色	
241	"	26	0901	SK090105	磁器	碗	(10.0)	4.1	5.3	0.5		肥前染付、内外共綱目紋 高台内に渦福、18C前半	灰白色	明緑灰色	
242	"	1001	SK090105	磁器	碗	(4.6)						肥前染付、外面全体に二重綱目紋、18C後半	灰白色緻密	明オリーブ灰色	
243	"	26	0901	SK090105	磁器	碗	(10.8)	4.2	5.0	0.5		肥前染付、外力所に文様、18C前~中葉	白色	にぶい灰白色	
244	"	26	1001	SK090105	磁器	碗	(9.4)	3.8	5.9	0.9		肥前染付、水辺の鶯雀描く、19C後半	灰白色	明青灰色	
245	"	1001	SK090105	陶器	碗	(10.5)	4.3	5.4	0.8			肥前黄釉、19C	灰白色	やや不良 灰白色-黄褐色	
246	"	1001	SK090105	磁器	碗	(4.6)			0.7			肥前白磁、17C後半	白色	良 白色	
247	"	1001	SK090105	磁器	碗	(10.0)						肥前白磁、17C後半	白色	良 白色	
248	"	0901	SK090105	磁器	碗	(7.4)			0.5			灰釉、見込中心窪む	灰色	明オリーブ灰色	
249	"	0901	SK090105	陶器	灯明皿	8.8	6.8	1.5				関西系、19C	灰白色	灰白色~浅黄色	
250	"	1001	SK090105	陶器	燭台	1.4	3.8	4.5				二次加熱痕跡	鈍い赤褐色	にぶい赤褐色	
251	"	25	1001	SK090105	陶器	鉢	(17.7)	(10.6)	8.8	1.0		内外面の上半施釉	赤褐色		
252	"	25	1001	SK090105	陶器	瓶	2.4	頸部径3.5				内外面施釉	含微細な雲母	やや不良 黒褐色	
253	41	26	1001	f区	磁器	蓋	10.0	2.2				肥前系、植物描く、全体に貫入	白色緻密	青味を帯びた灰白色	
254	"	26	0901C	5~16.5m区	磁器	碗	10.7	4.5	6.1	0.7		肥前染付、17C末~18C初、貫入あり		明オリーブ灰色	
255	"	26	1001		磁器	碗	(9.8)	4.4	5.9	0.7		肥前染付、窓風景と植物描く 高台内に文字(大明年製か)	白色	やや不良 青味を帯びた白色	
256	"	26	0902	0~9m区	磁器	碗	(11.0)					肥前染付、外面に植物描く	白色緻密	白色	
257	"	26	1001	SS100101	磁器	碗	(10.9)	4.3	5.9	0.5~0.8		肥前染付、山水と梅を描く 高台内に文字(大明年製か)、18C前半	白色緻密	灰白色	
258	"	1001	f区表土	磁器	碗	(11.2)						肥前染付、外に綱目紋、内に花弁	白色	明青灰色	
259	"	1002	南半	磁器	碗	(4.2)			0.9			染付、外側に綱目紋、見込みに砂跡	灰白色	明オリーブ灰色	
260	"	1001	c区	磁器	碗	(3.8)						肥前系染付青磁、外面に二重の綱目紋様	灰白色緻密	良 明オリーブ灰色	
261	"	1002	南壁西端	磁器	碗	(12.0)	(5.0)	(5.8)				肥前系、外側に斜格子紋	白色	明青灰色	
262	"	1001	d区	磁器	碗	(12.4)						肥前系染付青磁、内側上縁に文様	含白色砂粒	良 明青灰色-オリーブ灰色	
263	"	26	1002	南端土壘付近	磁器	小碗	(3.6)					肥前白磁か、高台内も施釉、17C後半か	灰白色	やや不良 灰白色	
264	"	0901C	搅乱坑	磁器	碗	(8.7)	(3.8)	5.0	0.5			白磁、高台内も施釉	灰白色	灰白色	
265	"	1001	SS100101	磁器	碗	(4.9)						白磁	青味を帯びた白色	青味を帯びた白色	
266	"	1003	SD100301	磁器	小碗	(3.5)						灰色釉、細かい貫入	灰白色緻密	良 明オリーブ灰色	
267	"	26	1001	表土	磁器	碗	4.5		0.5			白磁、高台内も施釉、貫入あり	灰白色	灰白色	
268	"	1001	SS100101	磁器	盤	(8.4)			0.7			白磁、17C末~18C初	灰白色	青味を帯びた灰白色	
269	"	26	0901C		磁器	碗蓋	(9.4)	(3.8)	2.9			白磁、貫入あり	灰白色	灰白色	

第3表 遺物観察表（土器類）

（）の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類	器形	法量(cm)				特徴	胎土	焼成	色調
							(器種)	口径	底径	器高	高台高			
270	41	1001	f 区表土	磁器	碗蓋	(8.4)	3.5	2.7				肥前染付青磁	灰白色緻密	オリーブ灰白色
271	"	1003	SD100301	磁器	小皿	(5.7)	2.8	1.4	0.2	白磁、高台内に釉が溜まる	灰白色		明緑灰色	
272	"	1003	SD100301	磁器	小皿	(6.0)	(3.2)	1.4	0.3	白磁染付	灰白色		白色	
273	"	1003	SD100301	磁器	小壺	(4.0)				白磁、内外面施釉	灰白色、緻密		施釉	
274	"	0801	黄褐色粘土層	磁器	紅皿	(4.4)				肥前系白磁、型押し成形外面に凹凸の縦縞	灰白色		白色光沢あり	
275	"	27 0901B		磁器	紅皿	(4.6)		1.2	0.2	肥前系白磁、型押し成形外面に凹凸の縦縞	灰白色		灰白色光沢あり	
276	"	0801	表土	磁器	紅皿	(5.0)	(1.5)	1.5	(0.2)	型押し成形外面に凹凸の縦縞	灰白色		灰白色	
277	"	26 0901C	5~16.5m区	磁器	猪口	(9.2)	(2.9)	6.3	0.5	肥前染付、外面に風景と「赤壁譜」の文字	水漉白色		灰白色	
278	"	26 0901C		磁器	猪口	(9.0)	5.7	6.3	0.3	肥前染付、高台裏に「福」、18C初か	白色		灰白色	
279	"	1001		磁器	猪口	(9.8)	(4.2)	6.1	0.5	肥前染付、植物描く	白色緻密		灰白色	
280	"	26 0901C	5~16.5m区	磁器	猪口	6.0	3.4	4.7		関西系染付、高台裏に文字(寿風か)19C後半	白色	良	灰白色	
281	"	27 0901C	SK090102	磁器	水滴					肥前染付か、底部・内部は無施釉	灰白色		灰白色	
282	42	1001	b 区	磁器	碗		(5.2)		1.4	肥前白磁か、水草を描く	灰白色		明オリーブ灰色	
283	"	27 0803		磁器	碗	(11.4)	6.4	6.5	1.4	肥前系染付、外面に花弁を描く見込に壽の字	水漉、緻密	良	明緑灰色	
284	"	27 0902	北端集石上方壁	磁器	碗			6.6	1.8	肥前系染付、見込に花弁を描く	灰白色、緻密	良	明オリーブ灰色	
285	"	27 1002		磁器	盤か	(12.8)	(5.6)	(2.6)	0.5	肥前染付、水辺の植物を描く	灰白色		明緑灰色	
286	"	27 0901C		磁器	盤		(12.7)		1.4	肥前か、高台裏に「太明成化季製」	白色、緻密	良	明緑灰色	
287	"	27 0901D	-85cm	磁器	碗蓋	9.3	3.9	2.9		肥前系、高台内に「奉大」	白色、緻密	良	灰白色	
288	"	1001	d 区	陶器	蓋	6.1				無釉の上面は灰白色	灰白色		内面施釉淡黄色	
289	"	27 0901A	10~20m区	陶器	蓋	(10.2)				上面のみ施釉	灰白色	軟	上面浅黄色他は灰白色	
290	"	27 0901E	-45cm	磁器	鉢	(13.1)	6.7	5.4	0.9	肥前系染付、外側に帆船と鳥、見込に鳥と雷紋風、19C末~幕末	白色、緻密	良	明青灰色	
291	"	26 0901	SK090106上面	陶器	碗	(7.3)	(3.2)	5.6	0.5	関西系、透明釉には細かい貫入	灰白色	普通	浅黄色	
292	"	27 1001		陶器	碗	(9.6)	4.7	7.1	1.0	全面に貫入	浅黄色	やや軟	浅黄色	
293	"	1003	SD100301	磁器	碗		(6.2)		0.6	白磁、白釉が高台付近に溜まる	橙色	普通	灰色	
294	"	1003	東壁溝	磁器	碗		4.0		0.5	染付、見込に明黄褐色の豊跡	灰白色		灰白色	
295	"	27 1003-2	近世面	磁器	碗	10.4	4.7	5.9	0.7	染付、草葉の間を飛ぶ螢の意匠	灰色	やや不良	緑灰色	
296	"	1001	f 区	陶器			8.4		0.6	高台内部に墨書(別)	淡黄色	軟	白釉	
297	43	1001	SS100101	陶器	小鉢	(5.4)				内外面に施釉	赤色	やや軟	極暗赤褐色	
298	"	27 0901E	-20cm	陶器	小鉢	5.7		2.6	0.7	瀬戸焼か	緻密		灰白色施釉	
299	"	1002	土壘直下	陶器	小鉢	(7.4)	5.0	4.6		関西系、19C	淡黄色		オリーブ黄色釉	
300	"	0901B	0~5m区	陶器	碗		3.4		0.4	長門深川焼	鈍い橙色		灰褐色(鉄釉)	
301	"	0901E	-20cm	陶器	鉢		7.8			外面煤ける	灰白色	堅緻	淡黄色	
302	"	0901		陶器	鉢		6.4			外面煤ける	浅黄色	良	明黄褐色-黒色	
303	"	0901		陶器	皿		7.6			内面のみ施釉	灰白色	堅緻	灰白色	
304	"	27 0901E	-85cm	陶器	灯火具	6.4	5.0	4.8		関西系、19C	灰白色	軟	淡黄色	
305	"	27 0901D	-85cm	陶器	灯火具	上10.5下8.1	5.2	5.2		関西系か、鉄釉、18~19C	浅黄橙色			
306	"	0901C	5~16.5m区	磁器	三足皿	(11.6)				肥前青磁、脚が付く	橙色~浅黄橙色		オリーブ灰色	
307	"	1001	中世面	陶器	瓶		(7.8)		1.2	内外面施釉	赤橙色		暗赤褐色~浅橙黄色	
308	"	27 0803		陶器	瓶		7.6		1.2	外側のみ施釉	明赤褐色		明赤褐色~オリーブ黄色	
309	"	1002	南壁西端	陶器	土瓶注口	1.5(先端内径)		(4.9残存長)		2孔開く	黄灰色、緻密		オリーブ褐色~黄褐色	
310	"	0901B	0~5m区、-30cm	陶器	急須注口		(6.0)		3孔		灰黄色			
311	"	0901A	20~30m区、-83cm	瓦質土器	急須注口	0.9(先端外径)3.5(後端外径)(残存長6.4)			4孔、暗赤褐色釉	橙色		暗赤褐色		
312	"	27 0901C	5~16.5m区、-60cm	瓦質土器	急須注口	3.0(後端外径)(残存長8.1)			3孔	含極微細な金雲母他	やや良	灰色~黒		
313	44	28 1001	d区	陶器	擂鉢	器厚0.8				口縁部、オロシメ			赤褐色	
314	"	28 1001	SS100101	陶器	擂鉢	器厚0.9				口縁部、オロシメ				
315	"	28 0803		陶器	擂鉢	器厚0.7				口縁部、内面オロシメ、外面口クロ痕	含白色砂粒、緻密	良好	赤褐色	
316	"	0901D	-75cm	陶器	擂鉢	器厚0.8				口縁部、内面オロシメ、鉄釉	赤褐色、緻密		鉄釉	
317	"	28 0901	表土	陶器	擂鉢	器厚0.7				内面鉄釉、オロシメ	含白色砂粒		暗赤灰色	
318	"	1001	SS100101	陶器	擂鉢	器厚0.8				体部、オロシメ				
319	"	1001	SS100101	陶器	擂鉢	器厚1.3				体部、オロシメ			淡暗褐色	
320	"	0901A		陶器	擂鉢	器厚1.0				内側オロシメ、外側回転ナデ	緻密			
321	45	0901	SP090109	素焼土器		(24.2)				回転ナデ	橙色に含白・黒色砂粒	堅	橙色	
322	"	28 1003	SD100301	素焼土器	火鉢か		(16.6)			外側煤ける	含微細な雲母		橙色	
323	"	1002	北半 埋土下	陶器	大甕	(37.6)				内外面共に施釉	縞状に練っている合金雲母		暗赤褐色	

第3表 遺物観察表（土器類）

()の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類 (器種)	器形	法量(cm)				特徴	胎土	焼成	色調
							口径	底径	器高	高台高				(内-外)
324	45	28	0901	SK090105	素焼土器	大甕	(46.0)	(8.4)	(31.1)		佐野焼、内部に円形の当て板痕	含白・乳白色粒子		にぶい橙色
325	"	0901	SK090106	素焼土器	大甕	(93.6)					口縁部は異なる粘土片を接合	含白色、灰色粒子		灰黄褐色

第4表 遺物観察表（土製・陶製品）

()の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版トレンチ	出土地点	種類 (器種)	器形	法量(cm,g)				備考	胎土	焼成	色調	
						長さ	径(幅)	孔径	重さ				(内-外)	
326	46	28	0804	砂礫層上	土製品	土錐	4.4(長さ)	0.73(最大径)	0.2(孔径)	3.2	全面に凹凸が付く			明褐色～明黄褐色
327	"	28	0901A	10~20m区	土製品	土錐	2.9(残存長)	0.8(最大径)	0.25(孔径)	2.2				明赤褐色
328	"	28	0901B	5~16.5m区、-60cm	土製品	土錐	2.6(残存長)	0.8(最大径)	0.3(孔径)	2.1	表面を平滑に仕上げる			にぶい黄橙色
329	"	28	0901B	5~16.5m区、-60cm	土製品	土錐	3.8(残存長)	1.1(最大径)	0.3(孔径)	3.7				赤褐色
330	"	28	0901C	-80cm	土製品	土錐	3.4(残存長)	0.7(最大径)	0.2(孔径)	1.6				にぶい褐色
331	"	28	0903	-110cm	土製品	土錐	4.4(長さ)	0.8(最大径)	0.2(孔径)	3.2	指の圧痕が全面に付く			やや堅緻
332	"	28	1002	-50cm	土製品	土錐	4.5(長さ)	1.0(最大径)	0.4(孔径)	3.6	2ヶ所に削り痕、煤ける	密	良	淡黒褐色
333	"	28	1003	SD100301	土製品	土錐	1.4(残存長)		0.3(孔径)	3.8		密	良	赤褐色
334	"	28	1004	土壘内	土製品	土錐	1.8(残存長)	1.2(最大径)	0.4(孔径)	2.6	表面に赤色斑紋	含雲母少		橙色～明赤褐色
335	"	28	1004		土製品	土錐	2.9(残存長)	1.05(最大径)	0.3(孔径)	2.0	表面赤色化	含雲母少		赤褐色
336	"	28	0901D	-50cm	土製品	土錐	3.2(長さ)	1.8(最大径)	0.3(孔径)	5.4		含雲母		明黄褐色
337	"	28	0901	表土	土製品	土錐	3.5(長さ)	1.1(最大径)	0.3(孔径)	5.6	表面を平滑に仕上げる	含白・黒色砂粒		にぶい黄橙色
338	"	28	1001	b区、-90cm	土製品	土錐	4.0(長さ)	1.2(最大径)	0.5(孔径)	4.1		密	良	赤褐色
339	"	28	1001	-30cm	土製品	土錐	3.5(長さ)	1.3(最大径)	0.3(孔径)	4.8	使用痕有	密	良	褐色
340	"	28	1001		土製品	土錐	3.5(長さ)	1.2(最大径)	0.4(孔径)	5.6		良		赤褐色
341	"	28	1002	東壁面、-55cm	土製品	土錐	2.7(残存長)		0.5(孔径)	1.8	指ナデ痕	密	良	淡褐色
342	"	28	1002	北半、-45cm	土製品	土錐	4.7(長さ)	1.4(最大径)	0.4(孔径)	5.6		密、含白色砂粒	良	赤褐色
343	47	28	0802	表土中	土製品	槌の子	4.5(長さ)	3.1(最大径)		57.4	表面を平滑に仕上げる	含白・黒色砂粒		にぶい橙色
344	48	28	0901C	5~16.5m区	土製品	土人形	3.3	幅2.0 厚さ0.9			素焼き	含白・黒色砂粒		にぶい橙色
345	"	28	0901C	-30cm	陶器	陶製人形	2.9	幅2.6 厚さ0.9			右手に扇を持つ、施釉	灰白色	良	白色

第5表 遺物観察表（瓦）

()の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類 (器種)	器形	法量(cm)				特徴	胎土	焼成	色調
							面径	奥行	横幅	厚さ				(内-外)
346	49	28	0901	SK090105	瓦	軒平瓦	長15.7	20	1.7~2.0	忍冬唐草文	密	白色砂粒を含む	良好	
347	"	28	0901	SK090105	瓦	軒平瓦			1.8	多田焼(岩国産)				
348	"	28	0901	SK090105	瓦	軒平瓦			1.7		やや粗	10cm大の小石含む		
349	"	0902	9~17.5m区	上層集石内	瓦	軒平瓦			1.5			光沢ある灰色～灰白色・黒色		
350	"	0902	9~17.5m区	上層集石内	瓦	軒平瓦			1.7		均質、細気孔が点在	光沢ある灰色～灰白色・黒色		
351	"	1001	C区		瓦	軒平瓦			1.6	唐草文	緻密、灰色		暗灰色	
352	"	0902	0~9m区	角礫層	瓦	軒平瓦			2.0	花弁模様、型に押し込んだ痕跡有	灰白色～浅黄色		黒色～灰オリーブ色	
353	"	28	1001	SS100101	瓦	軒平瓦			1.9		緻密、灰色		暗灰色	
354	"	1001	SK090105		瓦	軒平瓦			2.0	唐草文、煤状付着物	緻密、灰色		暗灰色	
355	"	28	0901B	SB090101基壇	瓦	軒丸瓦			1.2~1.9	左巻き三巴・珠文12個	均質で緻密		暗灰色	
356	"	28	0901A	0~10m区	瓦	軒丸瓦			2.0~2.5	左巻き三巴・珠文14個(2個欠) 裏面に指による圧痕	均質		光沢ある暗灰色	
357	"	28	1001	C区	瓦	軒丸瓦			2.2~2.5	9mm大の円形凸部の貼り付けの内に巴文	緻密	灰色	灰色～明灰色	
358	"	28	1001	SS100101	瓦	軒丸瓦			1.5~1.7	7mm大の円形凸部の貼り付けの内に巴文	緻密	灰色	灰色～暗灰色	
359	"	0901B	SB090101		瓦	軒先瓦	長5.2	8.9	2.3~2.5	軒先唐草紋瓦の素地	密	良好	暗黒褐色～褐色～暗黒褐色	
360	50	29	0901D	-45cm	瓦	棟瓦			1.5~1.6	「山善」の刻印有り、外面は平滑 内面は一部2~3mmの幅の圧痕	緻密		黒色	
361	"	0901C	SK090107		瓦	丸瓦			1.8~2.0	多田焼(岩国産)、外面は平滑 内面は布目圧痕が残る	均質		灰白色	
362	"	29	0901C	-95cm	瓦	丸瓦			2.1~2.3	福岡県産、近世初期に岩国城に 使用された瓦と同様の特徴備える			暗灰色	
363	"	1001	SS100101		瓦	丸瓦			1.7~2.0	内面 タタキ目	緻密		暗灰色	
364	"	1001	SK090105		瓦	丸瓦			2.1	内 横目・ナデ	緻密	灰色	暗灰色	
365	"	0901D	10~20m区	-45cm	瓦	丸瓦			1.8		緻密		暗灰色	
366	"	1001	SK090105		瓦	丸瓦			1.8	布目ナデの後ヘラケズリ	緻密	灰色	暗灰色	

第5表 遺物観察表（瓦）

()の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	種類 (器種)	器形	法量(cm) 面径 奥行 横幅 厚さ	特徴	胎土	焼成	色調
								(内-外)			
367	51	29	0901A	表土直下	瓦	丸瓦	1.7	断面は灰白色を呈す、光沢の部分に黒色の焼け有り		良	浅黄色
368	"	0901	SS090101	瓦	丸瓦		1.7	叩き板調整痕あり	均質	良	暗灰色~灰白色
369	"	29	0902	9~17.5m区 上層集石内	瓦	丸瓦		外表面は平滑、内面は指による圧痕、弱い焼け		良	灰~黒色
370	"	1001	SK090105	瓦	丸瓦		1.9	内面へラケズリ	やや粗、灰色		淡黄灰色~黒色
371	"	1001	C区	瓦	丸瓦		2.0	内面へラケズリ	やや粗、白灰色		暗灰色
372	"	1001	SK090105	瓦	丸瓦		2.5	内面へラケズリ	緻密、灰色		暗灰色
373	"	1001	SK090105	瓦	丸瓦		2.0	内面へラケズリ	密、灰色		暗灰色
374	52	1001	C区	瓦	平瓦	残存長19.5	1.9	灰色煤の付着有り	密	良好	灰色
375	"	1001	SS100101	瓦	平瓦		1.5	ヘラケズリ	緻密、灰色		暗灰色
376	"	0901B	SB090101東側-60cm	瓦	平瓦		1.6	表面煤ける	均質	やや不良	灰白色-黄灰色~黒褐色

第6表 遺物観察表（鉄製品ほか金属類）

()の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土位置	種類	器形	法量(cm) 長さ(現存長)	高さ	幅	厚さ	直徑	特徴
											(頭部最大幅)	
377	53	0901	石090106	鉄製品	和釘		(6.6)	0.6(中程)				芯部が層状、頭部に近いほど角柱状
378	"	0901	石090106	鉄製品	和釘		(2.5)	0.9(中程)				
379	"	0901	SK090105	鉄製品	和釘		(5.8)	(0.8)		(1.0)		
380	"	1001	SK090105	鉄製品	和釘		(5.2)	0.7		0.8	1.0	
381	"	1001	SK090105	鉄製品	和釘		(5.1)	0.8		0.8		やや捻れる
382	"	1003	SK100303	鉄製品	和釘		(8.5)	(0.9)		(0.9)	(1.8)	全体に錆びていている
383	"	29 1003	SK100315	鉄製品	和釘		(1.7)	(0.6)		(0.6)		
384	"	29 1003	SK100314	鉄製品	和釘		(3.9)	(1.0)		(0.5)		
385	"	29 1003	SK100314	鉄製品	和釘		(1.1)	(0.5)		(0.5)		
386	"	29 1003	SK100313	鉄製品	和釘		(2.8)	(0.7)		(0.8)		
387	"	29 1003	SD100304	鉄製品	和釘		(12.6)	(0.8)		(0.9)		
388	"	29 1003	SK100309	鉄製品	和釘		(2.6)	(0.7)		(0.7)		頭が潰れて身と付く
389	"	29 1004	土壘内、標高1.1m	鉄製品	和釘		(4.1)	(2.3)		(1.4)		二個の鉄器が付着か
390	"	29 1004	SK100401	鉄製品	和釘		(3.8)	(1.0)		(1.0)		
391	"	29 1003	SD100301	鉄製品	和釘		(3.8)	(1.2)		(1.2)	(0.7)	
392	"	0803		鉄製品	和釘		(7.7)	0.7(軸部中程)		0.6		全体に木質が付着、一部に突起
393	"	0901A	0-10m区	鉄製品	和釘		(7.1)	1.5(軸部中程)		1.5		
394	"	0901A	10-20m区	鉄製品	和釘		(5.4)	(0.7)		(0.8)		
395	"	0901A	10-20m区	鉄製品	和釘		(6.1)	(0.5)		(0.6)	0.8	
396	"	0901B	0-5m区	鉄製品	和釘		(6.1)	0.6(軸部中程)		0.6		
397	"	0901B	0-5m区	鉄製品	和釘		(6.7)	0.7		0.7	1.5	
398	"	0901B	5~16.5m区	鉄製品	和釘		(3.8)	0.6(軸部中程)		0.5		
399	"	0901C	0-5m区	鉄製品	和釘		(4.1)	(0.7)		(1.5)	1.3	
400	"	1001	標高1.75m	鉄製品	和釘		(5.1)	0.8		0.8		
401	"	0901B	0-5m区	鉄製品	和釘		4.4	(0.6)		(0.6)	(1.3)	
402	"	0901C	5~16.5m区	鉄製品	和釘		(6.6)	0.5(軸部中程)		0.6		やや捻れる
403	"	0901A	10-20m区	鉄製品	和釘		(5.1)	(0.6)		(0.6)	(1.3)	
404	"	0901C	0-5m区	鉄製品	和釘		(10.4)	0.6(軸部中程)		0.6		
405	"	0901B	0-5m区	鉄製品	和釘		(4.8)	(0.6)		(0.7)		
406	"	0901B	0-5m区	鉄製品	和釘		(10.8)	0.7		0.8		やや捻れる
407	"	0901B		鉄製品	和釘		(0.94)	0.4(軸部中程)		0.5		
408	"	0901B	0-5m区	鉄製品	和釘		(7.0)	0.4(軸部中程)		0.4		
409	"	0901E	真砂下	鉄製品	和釘		(6.7)	0.5(軸部中程)		0.5		
410	"	0901E	真砂下	鉄製品	和釘		(9.1)	0.6(軸部中程)		0.6		
411	"	0901		鉄製品	和釘		(4.7)	0.5(軸部中程)		0.5		
412	"	0901	-45cm	鉄製品	和釘		6.4	0.5(軸部中程)		0.6		頭部は平頂
413	"	0901		鉄製品	和釘		(5.6)	0.8(中程)		0.8		頭部は低平
414	"	0901C	0-10m区	鉄製品	和釘		(7.2)	0.8(軸部中程)		0.5		
415	"	0901E	-45cm	鉄製品	和釘		(6.0)	0.6(軸部中程)		0.6		
416	"	0901C	0-10m区	鉄製品	和釘		(7.0)	0.5(軸部中程)		0.6		
417	"	29 1001	C区、標高1.85m	鉄製品	和釘		(5.9)	(0.8)		(1.0)	1.4	やや捻れる

第6表 遺物観察表（鉄製品ほか金属類）

()の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土位置	種類	器形	法量(cm)				直径 (頭部最大幅)	特徴	
							長さ(現存長)	高さ	幅	厚さ			
418	53	29	1001	D区、-90cm	鉄製品	和釘	6.6		1.0	1.0	1.1		
419	"	29	1001	D区	鉄製品	和釘	5.8		(1.2)	(1.2)	1.8	全体に錆が付着している	
420	"	29	1001	f区、-90cm	鉄製品	和釘	(4.7)		(1.1)	(1.1)			
421	"	29	1001	f区、-90cm	鉄製品	和釘	6.7		(1.1)	(1.1)			
422	"	29	1001		鉄製品	和釘	5.9		(1.0)	(1.0)	1.8		
423	"		1003	北側拡張区	鉄製品	和釘	4.1		(1.1)	(1.1)	(1.6)		
424	"		1003	標高1.6m	鉄製品	和釘	(4.0)		(0.9)	(1.1)			
425	"		1003	西側拡張区南半	鉄製品	和釘	(3.1)		(0.8)	(0.8)			
426	"		1003	西側拡張区南半	鉄製品	和釘	(3.5)		(1.0)	(0.8)			
427	"		1003	北側拡張区	鉄製品	和釘	(2.8)		(1.0)	(1.9)		木質が付着する	
428	"		1003	西側拡張区	鉄製品	和釘	(3.8)		(3.2)	(1.1)		使途不明	
429	54		1003-2	e区、標高1.6m	鉄製品	和釘	(4.5)		(1.5)	(1.4)			
430	"		1003-2	a区、標高1.6m	鉄製品	和釘	(3.7)		(0.7)	(0.7)	1.1		
431	"		1004	土壘内西半	鉄製品	和釘	(2.1)		(1.1)	(1.1)			
432	"		1004	標高1.6m	鉄製品	和釘	(4.5)		(1.0)	(0.8)			
433	"		1004	土壘内西半	鉄製品	和釘	(4.4)		(0.8)	(0.8)	1.3		
434	"		1003		鉄製品	和釘	(4.5)		(1.2)	(1.2)			
435	"		1004	-165cm	鉄製品	和釘	(3.4)		(0.9)	(1.2)	1.1		
436	"		0901C	-90cm	鉄製品	和釘	(4.7)		0.7(軸部中程)	0.7			
437	"		0901B	0-5m区	鉄製品	和釘	(5.3)		(1.4)中程	(1.0)			
438	"		0901B	0-5m区	鉄製品	和釘	(2.0)		1.5	1.5		平釘か	
439	"		1003	SD100301	鉄製品	和釘	(2.8)		(1.0)	(0.9)			
440	"		0901B	0-5m区	鉄製品	和釘	(3.5)		(1.0)	(0.7)			
441	"		0901C	5~16.5m区	鉄製品	和釘	(3.4)		0.6(軸部中程)	0.4		蟹の爪状、横に溝が入る	
442	"		1003	西側拡張区	鉄製品	和釘	(3.2)		(1.0)	(0.5)			
443	"		0901C	0-5m区	鉄製品	切羽	4.0(長径)		3.1(短径)	0.1		隅丸長方形の刀身孔	
444	"		1003	北側拡張区	鉄製品	円形金具	径(7.0)			(0.9)		使途不明	
445	"		0901B	SB090101付近、-60cm	鉄製品	鉄板	(5.0)		3.8(中程)	0.6(中程)		台形、厚みはほぼ一定	
446	"		29	0901A	10-20m区	鉄製品	鎔	(10.0)		1.1(中程)	1.0(中程)		厚みがあり、重量感がある、芯鉄が巻いたような形状をなす
447	"		1004		鉄製品	鎌	(10.2)		(2.4)	(0.8)		鎌か	
448	"		0901E	-35cm	鉄製品	鎌	(7.0)		(0.6)				
449	"		29	0901E	埋甕内	鉄製品	鎔	(20.4)		0.9(中程)	1.0		先端に行くに従い捻れる
450	"		0902		鉄製品	鎔	(9.9)		0.8(中程)	0.4			
451	"		0902	9~17.5m区	鉄製品		(2.7)軸部		0.6(軸部中程)			鉤の手のような突起が付く、頭部は平頂	
452	"		29	0902	表土直下	鉄製品	鎔	(22.3)		0.9(身部中程)	0.5		身部と刃部とで若干の捻れがある、左側が刃
453	"		0902		鉄製品	蛇行状鉄	(7.4)		0.9(中程)	0.3		鎔の二次的変形か	
454	"		1003	-83cm	鉄製品	釣針か	(10.3)		(0.7)	(0.7)			
455	"		29	0901	SK090105	鉄製品	鎔	4.6(身部)		0.7(軸部中程)	0.9(身部中程)		断面は丸みを帯びた方形
456	"		29	0901A	0-10m区、-50cm	鉄製品	鎔	13.5		0.7(軸部中程)			捻れがある、鍛えによる層位が窺える
457	"		29	0901	-95cm	銅製	煙管	(1.3)	(2.1)				緑青を吹く
458	"			0901C	5~16.5m区	銅製か		(2.5)			0.05		緑青を吹く、板を丸めている
459	"			1001	b区	鉄滓						7.2×6.5×3.5	187g
460	"		29	1003	SK100313	鉄滓						11.8×14.7×6.6	659g
461	"		29	1003	SK100313	鉄滓						10.2×14.2×8.3	860g

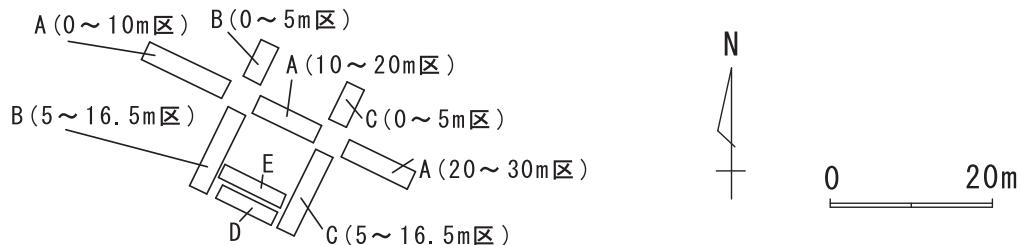
第7表 遺物観察表（銭貨）

()の数値は復元値。出土地点のマイナス数値は採取地点の地表面からの数値。

No.	挿図	図版	トレンチ	出土地点	銭種	法量(mm,g)				目戸切	特徴
						直径	方孔一辺	厚さ	重さ		
462	55	29	1004	SP100401	寛永通寶	24.8	9.9	1.1	3.0g	有	鎔進行し不鮮明、「永」字が横長、ハ貝寶、新寛永
463	"	29	1004	SP100401	寛永通寶	22.4	10.0	1.6	2.1g	有	鎔化の進行が著しく、きわめて不鮮明、「永」字均整とれる、ハ貝寶、新寛永
464	"	29	1004	SP100401	寛永通寶	22.5	10.8	1.0	3.0g	有	鎔進行し不鮮明、「永」字横長、表裏縁研ぎ明瞭、ハ貝寶、新寛永

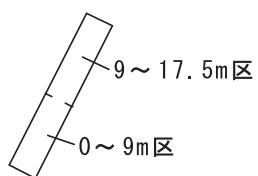
トレンチ別の出土地点略号の示す範囲

TR0901

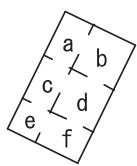


※TR0901の調査区配置は第2次調査における
前半(5月25日～8月3日までの間)のもの。

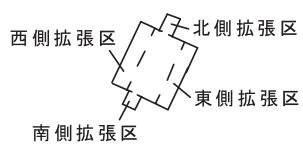
TR0902



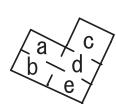
TR1001



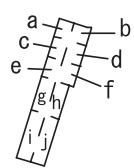
TR1003



TR1003-2



TR1004



V 関連分野報告・分析

加陽和泉守居館跡現地踏査所見¹

千田 嘉博

1. 現状

2007年7月23日に標記館跡の踏査を行ったので、所見を述べる。加陽和泉守居館跡は、現在、明瞭な土壘跡が残り、とりわけ北西隅の土壘は保存状況がよい。この土壘跡はおおむね矩形に連続しており、基底部の幅も一定である。後述するように形状から中世の館にともなう遺構と考えるべきである。土壘跡の表面には石積みが認められるが、いずれも近世～現代に築かれたもので、石積みについては中世ではなく、比較的新しい時代の付加である。曲輪内は宅地や畠となっているが、地下遺構を壊滅させるような大規模な建築物はなく、地下に遺跡が良好な状況で包蔵されていることが推測される。なお踏査では中世に遡る遺物を表採することはできなかった。

土壘の外側には館であれば堀を伴うのが通例であったが、現状では土壘の外側は宅地化が進行しており、明瞭ではない。地籍図の一部を閲覧したが、館の主要部分についての地籍図を確認することができず、堀の有無について確認するには至らなかった。また航空写真についても同様に閲覧したが、実体視可能な状態なく、やはり確認は困難であった。近世の絵図では土壘を明瞭に描く一方、堀については表記がない点を勘案すれば、早い段階で堀が埋没したことが推測される。

2. 考察

加陽和泉守居館跡のような構造上の特色を持つ遺跡は、近世以降に築かれたとは考えにくく、また古代の遺跡とも考えがたいので、中世の館跡とするのが妥当である。するとその規模は室町期の守護所に相当し、中世の館としては山口県内で屈指の大きさをほこる館跡といえる。

一般的にこれほどの館跡であれば、守護もしくは守護に準じた有力武士の拠点と判断されるが、文字史料からそれに見合う武士の姿は判然としない。この点については古文書の調査などを待つほかないが、いずれにせよ中世の岩国周辺の歴史について再検討を迫る遺跡であることは間違いない。

さらに戦国期以降の平地の館がせいぜい一辺50m～100m程度であったのに対し、中世前期から室町期にかけては一辺100mを越える館がしばしば築かれたことを考えれば、加陽和泉守居館もおそらく室町期に創築が遡った蓋然性が高い。立地から水運との関わりなども推測される。

3. 評価と課題

加陽和泉守居館跡はきわめて規模が大きく室町期の守護所相当の格式を備えたこと、四周を取りまく土壘がよく残り、平地城館としての様相をよくとどめることがわかる。一般に中世城郭のうち山城は比較的残りやすいものの、平地城館はその後の開発で失われることが多く、加陽和泉守居館跡は全国的に見ても特筆すべき遺跡である。

事実、山口県内では守護所であった大内氏館が史跡として保護・調査・整備され、同様に大分県の大友館も完全に市街地化が進んだ状態でも史跡指定され、調査と公有地化が進行中である。また徳島県の守護所・勝瑞城でも整備に向けた委員会が組織されているなど、近年、各地でわずかに残された

中世の平地城館を保護する動きは大きく前進している。

このように県内・県外の事例と比較すると、加陽和泉守居館跡は文献史料からの検討が現状では不足しているが、遺跡としては国指定史跡相当の価値をもつと評価される。岩国市としてはきわめて重要な遺跡といわなくてはならない。

築城主体については現状では詳らかにしえないが、（1）毛利氏台頭以前に有力な武士が拠点を構え、それが改修されて戦国期に継承された、（2）自治的・惣村的自治によった自立的な施設として「惣構え」土壘が構築された、（3）地域に根付いた権力ではなく、合戦などを契機とした臨時施設「陣」として建設された、（4）輪中堤のような防水施設として築かれた土壘で、城館とは関係ない、といった可能性をあげうる。

今後、加陽和泉守居館跡の詳細を把握するため、文化庁の補助金を得て、また山口県教育委員会の指導を仰ぎながら、計画的かつ継続的な試掘調査を行うことが望ましい。それにより規模を確定し、創築時期や廃絶時期、改修の有無などを把握すべきである。

一方で古文書や絵図・地図・航空写真といった多岐にわたる資料群の検討も必要であり、試掘調査と合わせた総合的な検討を行うことが重要である。これらによって、今後の遺跡の保護や活用、地域計画に関する適切な判断を行うための基礎資料を早急に整備することを求めたい。

1 この報告は発掘調査着手前の平成19年（2007年）7月23日に奈良大学千田嘉博准教授（当時）が岩国市教育委員会と共同で行った中津居館跡現地踏査の所見である。中津居館跡に関する最初の専門家所見として転載した。「加陽和泉守居館跡」は当時の遺跡名称であり、遺跡に関する数値等は当時の岩国市教育委員会提供の情報にもとづいている。本報告は発掘調査の計画段階から3年度にわたる調査期間中を通じて基本的な方針決定に係る指針とした。

弘中氏・賀屋氏と岩国地域 —「中津居館跡」の築造主をめぐって—

和田 秀作

1. はじめに

今回発掘調査が行われた岩国市楠町の「中津居館跡」は、出土遺物や遺構から、館の築造が14世紀前半に遡ることが明らかとなった。したがって、この居館の築造主は、伝承をもとに想定されてきた戦国期の加陽和泉守（賀屋武頼）ではないことは確実であり、それ以前に岩国一帯の領主であった弘中氏である可能性が有力視されている¹。

そこで、ここでは、限られた文献資料をもとに、弘中氏とはどういう領主であったかについて概観し、その作業を通じて弘中氏とこの居館跡との接点を探りたい。あわせて、これまで築造主とされてきた賀屋氏と当地域の関わりについても触れることとした。

2. 中世の弘中氏

2.1 弘中氏の出自と室町期の動向

弘中氏は、源姓で「兼」字を通字とする。源頼義の孫清縄良俊が、12世紀の平治の乱後に周防国岩国室木に配流となり、子孫の兼胤に至り弘中と称したという²。14世紀大内氏の周防統一の過程でその傘下に入ったと思われる。

弘中氏は、15世紀初頭、大内氏の氏寺氷上山興隆寺の「供養勧進帳」には12名（奉加額計3000疋）が、「一切経勧進帳」には10名（奉加額計1500疋）が、それぞれ名を連ねている³。また、同時期に大内氏菩提寺の国清寺の興行には5名が連署して誓約しており、この頃には大内氏の有力家臣として一族で栄えた様子がうかがえる⁴。

2.2 戦国期の動向

戦国期に入った文明10年（1478）、豊前・筑前両国を回復した大内政弘は配下の武士73名に所領を与えているが、その内の9名が弘中氏であった⁵。当該期の弘中氏においては、中務丞を名乗る興兼・隆兼の系統、新四郎・兵部丞を名乗る武長・正長の系統、下野守を名乗る重勝・興勝の三つの系統が有力であった。

2.2.1 弘中隆兼の系統

隆兼の家系は、錦見の亀尾城を本拠とし、岩国の惣鎮守である白崎八幡宮の宮司を世襲したという。弘中弘信など、従来、白崎八幡宮の棟札をもとに描かれてきたのはこの系統の弘中氏であり、弘中氏の惣領家とされる⁶。

隆兼（中務丞・三河守）は、大内義隆のとき安芸国東西条代官を務め、のちに安芸国守護代と梶山城城督を兼ねて隣国備後国南部をも管轄した⁷。その一方で有力国人の一人である天野隆綱に娘を嫁がせるなど⁸、私的関係も取り結びながら、毛利氏ら国人領主の統制に努めた。とはいっても、独立性の強い国人領主が盤踞する安芸国にあっては、分国主化は果たせなかった。しかし、隆兼の不同意により、国人たちの要望が実現しないこともあるなど⁹、彼ら安芸国人の障壁となった点は評価してよい。後年毛利元就は、隆兼の書状がそっけなかつたことを述懐しているが¹⁰、これなどは両者の距離感を示すものであろう。反面、厳島合戦の直前に留守を預かる家族に宛てた手紙には實に細やかな心配りを見せており、その人間性がうかがわれる¹¹。周知のように、隆兼父子は、弘治元年（1555）厳島で最後まで毛利勢に抗しながらも討死した。

2.2.2 弘中武長・正長の系統

武長（新四郎・兵部丞・越後守）は、15世紀末から大内氏奉書の奉者に加わって頭角を現していく、永正年間大内義興の在京時には山城国守護代に任命された¹²。守護代としての武長は、槙島城に拠って山城国の上三郡（相楽・綏喜・久世）を管轄し¹³、管領細川氏や大寺社などの影響力の強い地域にあって、伝統的な勢力とわたりあっていた。また、彼は「兵のつかさのまつりこと人」と賞された武人でもあり¹⁴、大永年間の安芸出陣の際には、「防州ノ警固船」の「大将」（=大内氏直属水軍の総司令官）を務めた¹⁵。さらに、大内氏が永正17年（1520）に伊勢神宮を山口に勧請した際には、武長は「惣奉行」に任じられて、毎日現場で陣頭指揮に当たり、その大役を果たした¹⁶。優れた行政手腕をもつ武将であったことがうかがわれる。

正長（新四郎・兵部丞・越中守）は、大内義隆のとき安芸厳島神社の「社家申次」（=担当奉行）を務めた¹⁷。大内義長期に、十分な船がなく「警固奉行人」を務められなかつた弘中新四郎は、その名乗りから正長の後継者であろう¹⁸。この系統の弘中氏は、警固衆としての性格が濃厚である。

2.2.3 弘中重勝・興勝の系統

重勝（下野守）は、15世紀半ば過ぎの応仁の乱のとき大内政弘に従い上洛、大内氏奉書の奉者を務める一方「宇智大将」でもあった¹⁹。興勝（源次太郎・右衛門大夫・下野守）も、大内義興に従って上洛し、永正8年（1511）船岡山合戦で一軍を率いたのをはじめとして、天文12年（1543）石見国衆から戦功の報告を受けるなど、長らく軍事指揮官として活動している²⁰。その間大内氏奉書の奉者でもあった²¹。つまり、彼らは、平時は大内氏奉書の奉者であり、戦時には軍事指揮官として活動している。

2.3 弘中氏の家臣

弘中氏の上層家臣には、同名の弘中氏をはじめ、池内、清水寺、諸卜軒、無量寺などの諸氏がいる²²。これらの老臣や奉行人による家中支配組織の存在は当然想定されるが、今のところ確かな事例は確認できない。また、弘中氏が安芸国人久芳氏の一族や筑前怡土庄の土豪徳永氏に偏諱を与えている事例が見いだされ²³、大内氏勢力下の中小規模の領主と私的な関係を取り結んでいた点は注目される。

2.4 弘中氏の婚姻関係

弘中氏の婚姻関係は詳らかでない。わずかに、周防東部の豪族でのちに大内氏重臣となる内藤氏²⁴や前述した安芸国人天野氏との間で確認できる程度である。弘中弘信の妻を大内持盛の娘とするなど大内氏との婚姻関係を伝える系図もあるが、系図以外には何ら確証がない。

2.5 弘中氏ゆかりの寺社

弘中氏と関わりの深い寺社としては、前述の白崎八幡宮のほかに、琥珀院、喜楽寺、瑞光寺、大應寺、無量寺などがあげられる。このうち、無量寺は隆兼の家臣の一人であり、毛利氏時代の事例から水運との関わりも想定される²⁵。岩国以外では、山口の建殊院（現、俊龍寺）が「弘中三河守」の位牌所であり²⁶、高森の正蓮寺の開基了善は弘中隆兼の末子と伝える²⁷。

2.6 弘中氏の経済的基盤

弘中氏一族の所領は、本拠地であった岩国本庄を中心に、玖珂郡柏森北方・与田保・伊賀地郷内大原名、熊毛郡麻郷、都濃郡遠石得善室積庄、吉敷郡長野村、長門国厚東郡吉見郷、美祢郡加万別府、筑前国怡土郡警固・波呂村、穂波郡平塚村・吉隈村、糟屋郡上津屋・東郷、豊前国田河郡吉永で確認できる²⁸。特に、隆兼は大内義長のときに筑前国早良郡姪浜代官職、那賀郡板付村・五十講之村・下

長村、蓀田郡馬淵免田等を知行した²⁹。

また、警固衆としての顔を持つ弘中氏は、必然的に内海の商業流通や河川流通に関与し、そこから収益を得ていたと考えられる³⁰。

2.7 大内家における弘中氏の地位

弘中氏は15世紀以降、平時には山口の政庁にあって、いわゆる奉行人として大内氏奉書の奉者などを務めて大内氏当主の側近くに仕える一方、戦時には軍事指揮官として警固衆を率いている事例が多い。とりわけ、16世紀の武長や隆兼の地位は、大内氏分国の大内氏の「国代官」（=守護代）であった。弘中氏は、大内氏の滅亡にいたるまで、まぎれもなく大内氏の権力中枢にいた重臣であったといえよう。

2.8 大内氏滅亡後の弘中氏

弘中隆兼父子の戦死後、その子女や遺臣たちは九州に逃れた。たとえば、弘中弾正忠や清水寺尊恕らは、豊後の大友氏のもとに身を寄せていた大内輝弘に仕えた。永禄12年（1569）に大内家再興を試みて挙兵する際、輝弘は「弘中一家」に対して山代之内生見郷などの土地を与える約束をしている³¹。巣島合戦の際最後まで毛利氏に抗した弘中隆兼の遺臣たちが、14年後に再び元就を悩ませたことになる。

一方隆兼末弟の方明（就慰）は毛利氏に降ってその家臣となり、毛利氏の防長制圧後に岩国で20貫地を与えられている³²。隆兼の重臣の一人諸卜軒も毛利氏の配下となり、巣島合戦直後に錦見や本庄に給地を与えられた³³。毛利氏の防長支配が始まってからも、弘中氏と岩国地域とのつながりが完全に断たれたわけではなかったことがうかがえる。

その後弘中方明は毛利氏の警固衆に編成され、賀屋氏と行動を共にする場合もあった³⁴。そういう関わりもあってか、弘中氏と賀屋氏とは江戸時代初期には婚姻関係を取り結んでいる。すなわち、方明の孫にあたる弘中信治の妻は「賀屋和泉守」の娘であり、慶長18年（1613）その子弘中才王は、甥という由緒により「賀屋藤兵衛」の知行16石余りを譲り受けた³⁵。

3. 賀屋氏と岩国地域

3.1 賀屋氏の出自

家伝によると、賀屋氏の本姓は藤原で、肥後国賀屋庄（現、熊本県菊池市加恵付近）に拠って賀屋氏を名乗った菊池氏の一流が、15世紀末の延徳年中に安芸国佐東郡河ノ内に移住したという³⁶。のち毛利氏に仕えて、毛利氏が広島湾頭の太田川河口に所領を得て育成した直属水軍である「川内警固衆」の一員となった。賀屋氏は、その「頭分五人之内」であったというが³⁷、実際の活動例からはそこまでの地位にあったとは考えられない。

3.2 賀屋和泉守と白崎八幡宮

賀屋氏には、いくつかの系統があり、一族で毛利氏の領国拡大につれて各地を転戦することになる。このうち、岩国地域と関わりがあるのは、「和泉守」すなわち武頼・景頼・元武の系統である。その早い例が、弘治元年（1555）10月玖珂の鞍掛城を攻略した毛利氏が岩国に引き揚げた際、吉川元春が「中須のかや和泉所」に陣をとったとする記述である³⁸。

この賀屋氏と岩国地域との関わりについては、近年原文書が見いだされた賀屋家伝來の文書³⁹によってある程度うかがいしことができる。それによると、永禄6年（1563）以前に賀屋和泉守（武頼）は、白崎八幡宮の御供米を毛利隆元に、某年毛利元就にそれぞれ届けている。また、永禄12年（1569）には、景頼が父武頼の跡を継ぎ、「御神前并公役等」を務めることを毛利輝元から命じられている。その地位は、具体的には「周防国岩国白崎社家」と表現されているから、御供米を毛利隆元

や元就に届けた前述の武頼の行為は、白崎八幡宮の神官としての職務にもとづくものであったことがわかる。さらに、後年景頼の子元武は、八幡宮領の半分を給地として与えられているから、やはり白崎八幡宮と関わりがあったことが知られる。

このように、賀屋和泉守武頼は、防長両国の新たな支配者となった毛利氏から、白崎八幡宮の社家に命じられ、その地位は少なくとも子供の景頼に受け継がれた。

3.3 賀屋氏の性格

一方景頼は、毛利輝元から「警固馳走」を命じられるなど、相変わらず水軍の武将としての働きも期待されている。また、景頼の「景」字は、小早川隆景の偏諱を受けたものであり⁴⁰、その隆景を通じて愁訴の実現を図るなど、小早川水軍との結びつきも強めている。つまり、警固衆の一員として、軍事指揮官のもとで毛利氏に対して「警固馳走」を果たすのが、賀屋氏の基本的な性格であるといえる。さらに、こういった本業の「警固馳走」にくわえ、賀屋氏の持つ治水事業の技術や造船技術も毛利氏から期待されていたとされる⁴¹。

なお、賀屋氏の毛利家における地位について付言しておくならば、所領規模がおよそ350石程度の大身とは言えない家臣である。賀屋家伝来の文書に見える毛利氏当主からの書状の多くも、賀屋氏に直接宛てられずに、上官の栗屋氏を通じて言い聞かせるという形をとっている。

4. おわりに

4.1 弘中氏と「中津居館跡」

弘中方明末裔の萩藩船手組士・弘中信久家の家伝によれば、弘中三河守弘信の「居城」が防州岩国中津村（今津川と門前川にはさまれた三角州上にあり、当居館跡を含む一帯）にあったという⁴²。また、当居館跡内の薬師堂は、かつてここにあった瑞光寺の貴重な遺構である。文明年間の同寺住持喜昱藏主は弘中氏の一族である可能性が高く⁴³、そもそも「瑞光寺殿」は、大内氏の娘で弘中氏の妻となった女性であるという⁴⁴。さらに、この居館跡の南を流れる門前川の対岸にあった喜楽寺は、「弘中三河守」の菩提所にして、瑞光寺の本寺であったと伝わる⁴⁵。

これらの多くは、江戸時代になってからの家伝や地誌に記された伝承であり、むろんそのまま史実とすることはできない。しかし、当居館跡を加陽和泉守のものとする主な典拠である「森脇覚書」や「享保増補村記」も、江戸時代に成立した、似たような性格の史料といえる。したがって、伝承とはいえ、当居館跡の周辺に弘中氏の痕跡が色濃く残っていることは、この居館跡が弘中氏と何らかの関係があったとしても不思議ではないことを示唆するものと考えられる。

4.2 弘中氏と賀屋氏

弘中氏は、室町～戦国期に、西日本屈指の大名である大内氏の重臣として栄え、守護代や奉行人を一族から輩出した。同時に、周辺の警固衆を統率し、岩国の惣鎮守である白崎八幡宮の宮司を世襲した、岩国周辺の沿岸部に影響力を及ぼす強力な在地領主であった。

一方、大内氏滅亡の過程で、毛利氏によって岩国地域に配置された賀屋氏は、やはり「警固衆」であり、白崎八幡宮の神官でもあった。このような賀屋氏の姿は、大内氏配下の弘中氏のそれと重なる。むろん、中世領主としての賀屋氏の実力は、弘中氏に比肩しうるものではない。しかしながら、弘中氏の持っていた権益の一部を毛利氏が賀屋氏に引き継がせ、岩国地域の支配に活用したこと、そしてその権益の中に、白崎八幡宮の対岸に位置する当居館跡が含まれていたと推測するのはそう的外れではないのであるまいか。

- 1 山田豊「賀屋一族について」（『岩国郷土史研究』5、2006年）。『岩国市史通史編1』ほか。
- 2 『岩国市史通史編1』ほか。
- 3 「興隆寺文書」237・238号（『山口県史史料編中世3』pp.322—326）。
- 4 「常栄寺文書」60号（『山口県史史料編中世3』p.353）。
- 5 「正任記」文明10年10月8日条・18日条・22日条（『山口県史史料編中世1』p.336・349・353）。
- 6 註2と同じ。
- 7 『吉川家文書』1258号。「大願寺文書」44号（『広島県史古代中世資料編III』p.1200）。
- 8 『閥閱録』卷113神代5。「譜錄」わ18渡辺三郎左衛門直（『広島県史古代中世資料編V』pp.388—390）。
- 9 『右田毛利家文書』89号（『山口県史史料編中世3』p.461）。『近世防長諸家系図総覧』（マツノ書店、1980年）。
- 10 『小早川家文書』124号。
- 11 『毛利家文書』545号。
- 12 『西郷文書』12号（『豊前市史文書資料編』p.97）。
- 13 『防長風土注進案12』p.17。「東寺百合文書」ワ函80ほか。
- 14 今谷明『守護領国支配機構の研究』（法政大学出版局、1986年）。
- 15 「再昌草」2627（『山口県史史料編中世4』p.797）。
- 16 「房顕覚書」15（『広島県史古代中世資料編III』p.1112）。「閥閱録」卷137沓屋8。
- 17 「山口大神宮文書」1号（『山口県史史料編中世2』p.907）。
- 18 「房顕覚書」19（『広島県史古代中世資料編III』p.1126）。
- 19 「白井文書」10号（『広島県史古代中世資料編V』p.18）。
- 20 『閥閱録』卷150臼杵18。「大乘院寺社雜事記」文明7年6月月末条（『山口県史史料編中世1』p.216）。
- 21 『閥閱録』卷166渡辺1。「久利家文書」24号（『山口県史史料編中世4』p.851）。
- 22 『久利家文書』25号（『山口県史史料編中世4』p.852）ほか。
- 23 『賀茂別雷神社文書』124号（『史料纂集〔古文書編〕22賀茂別雷神社文書1』p.87）。
- 24 『西郷文書』21号（『豊前市史文書資料編』p.102）ほか。
- 25 『久芳家文書』。「徳永資料」12号（『福岡市史資料編中世①』p.1005）。
- 26 『岩国市史通史編1』。
- 27 『閥閱録』卷62土肥10。
- 28 『防長寺社証文』卷19俊龍寺（『萩藩閥閱録4附録』p.261）。「防長寺社由来3」p.435。
- 29 『防長風土注進案9』p.573。「防長寺社由来2」p.140ほか。
- 30 『正任記』文明10年10月8日条・18日条・22日条（『山口県史史料編中世1』p.336・349・353）。
- 31 『石清水文書』167・556号。「興隆寺文書」85号（『山口県史史料編中世3』271頁）。
- 32 『田原文書』13号（『大分県史料10』p.46）。「閥閱録」卷46大庭9。
- 33 『西郷文書』20・27号（『豊前市史文書資料編』p.101・105）。
- 34 山田豊「賀屋一族について」（『岩国郷土史研究』5、2006年）。
- 35 『西郷文書』15号（『豊前市史文書資料編』p.99）。
- 36 『閥閱録』ひ27弘中六左衛門信久。
- 37 『中村家文書』1号（『山口県史史料編中世2』p.105）。
- 38 『閥閱録』卷133弘中2。
- 39 『譜錄』ひ27弘中六左衛門信久。「閥閱録」卷133弘中18・19。
- 40 『譜錄』か13賀屋九郎左衛門頼辰。
- 41 註36と同じ。
- 42 註30と同じ。
- 43 註32と同じ。
- 44 「森脇覚書」。本書資料編 文献8。当居館跡が加陽和泉守のものとされる有力な典拠であるが、同時代の史料ではない。
- 45 山口県文書館蔵「徳山毛利家文庫 諸家文書」に含まれる。本書資料編 文献2。
- 46 註36と同じ。
- 47 註30と同じ。
- 48 註32と同じ。
- 49 「白崎御宝殿棟札」本書資料編 文献1。
- 50 『玖珂郡志』中津村の項。本書資料編 文献7。
- 51 『玖珂郡志』門前村の項。p.94。『玖珂郡志』中津村の項。本書資料編 文献7。

中津居館跡の地形条件と堆積物の観察結果

松田順一郎

(史跡鴻池新田会所管理事務所)

1. 岩国平野の地形条件

岩国平野は錦川下流区間の山地・丘陵地帯の谷底平野と河口に近い臨海平野を指す(図1)。平野北西部では、頁岩、砂岩、チャートを基盤岩とする山地谷底に狭隘な氾濫原(標高10~5m)が続き、流路が穿入・曲流する多田・横山を経て、岩国・川西より下流では開析・侵食が進んだ花コウ岩からなる丘陵地帯の谷底氾濫原(標高5~4m)から臨海部の低地(標高4~0m)へと拡がる。錦川は谷底氾濫原の終端で今津川と門前川に分岐し、近世以後に造成された干拓地が大きな領域を占める臨海部の低地を流下する。

錦川の河谷と谷底平野

錦川の河谷は砂礫を主とする未固結堆積物で厚く埋積されており、多田(中村)より上流約1.5km地点(標高約8m)のボーリング資料によると、氾濫原面下25mでも基盤岩に達していない。「岩国市史」によれば、今津川左岸の日本製紙敷地内のボーリング調査で、最終氷期の約28000年前に降下した始良火山灰(AT)が地表下約40m、後氷期の約7800年前に降下した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)が地表下17.8mで検出されている。これらの深度は現在の三角州前線の海底より深く、最終氷期以後の河谷とその出口付近の海域における堆積空間や埋積量の大きさを示している。現河床にたいして段丘化した氾濫原面のほかは谷底に河成段丘はみとめられない。錦川下流区間の河床と氾濫原面の勾配は約1%である。この勾配は、典型的な沖積扇状地の勾配に比べて小さいが、錦川の河床堆積物は粗く、沖積扇状地を構成する堆積物にも相当する。大礫がまじり、中礫を主とする砂礫で、河口付近では砂がちである。1947年の米軍撮影空中写真を見ると、錦川、今津川、門前川流路内の砂礫州は長さ150~500mの非対称な紡錘形で、寄州をなすほか、両側に濁筋をともない、長軸が河岸の伸びに斜交するものが多い。砂礫州上にはそれらを斜めによこぎる増水時の濁筋(低水路)が、砂礫州と河岸の間にはシートがみとめられる。増水時にはこれらに流れが生じ、基本的にはたがいに交叉する2重の蛇行した濁筋をなすような複列州のパターンとみなせる。谷底から河口寄り標高約2.5mまでの氾濫原面にも、離水した州の跡とそれらが集合したロウブのいくつかの高まりと分岐した低水路跡が分布し、横山、牛野谷、門前の氾濫原では、谷壁に沿ってシート状の低水路がみとめられる。以上の流路と氾濫原の特徴は扇状地的である。

岩国三角州

三角州は陸域の河川から海域や湖水域に流送された堆積物の累重によって生じる。したがって、岩国平野の臨海部で三角州とみなせるのは、後氷期の海水準上昇(縄文海進)で拡がった海域に発達した領域である。図1bに示したボーリング資料のC-C', D-D'の地表下7~23mには、海成粘土と考えられる泥が分布し、その上位に海浜や干潟に堆積したような砂や砂質泥、さらに流路や氾濫原に堆積した礫質砂や砂が上方粗粒化して累重し、陸域の堆積環境が海側に前進していったことがうかがえる。縄文海進最盛期には中津居館跡付近に汀線があったと推測される。これより下流側で砂礫州跡、分岐する低水路跡、自然堤防の形状が空中写真の判読で確かめられる領域は上部三角州平野とみなせる。中津の北東側を南東に伸びる低水路(後の車新田)の分岐とともに、車町付近の砂礫州とロウブ、

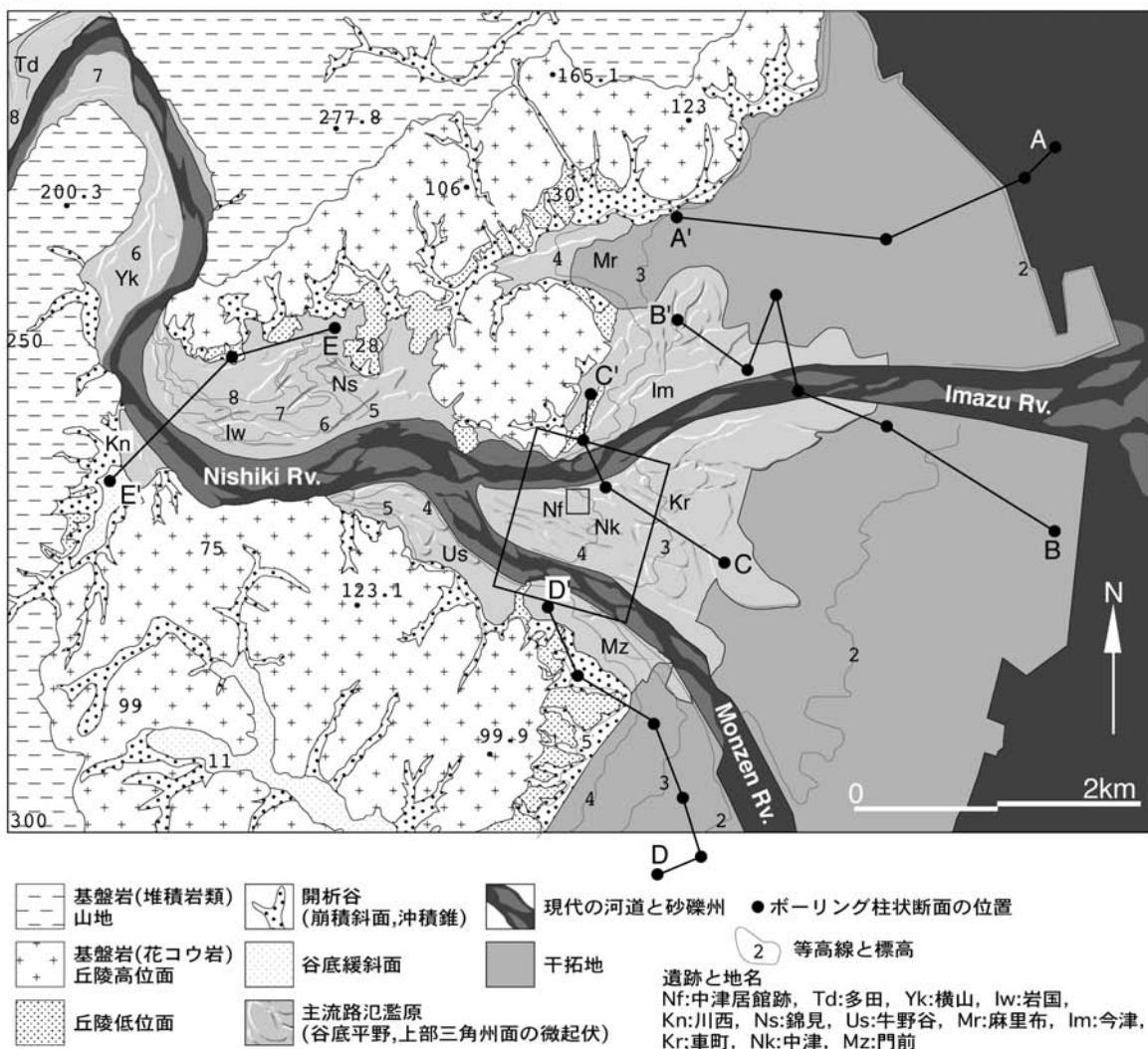
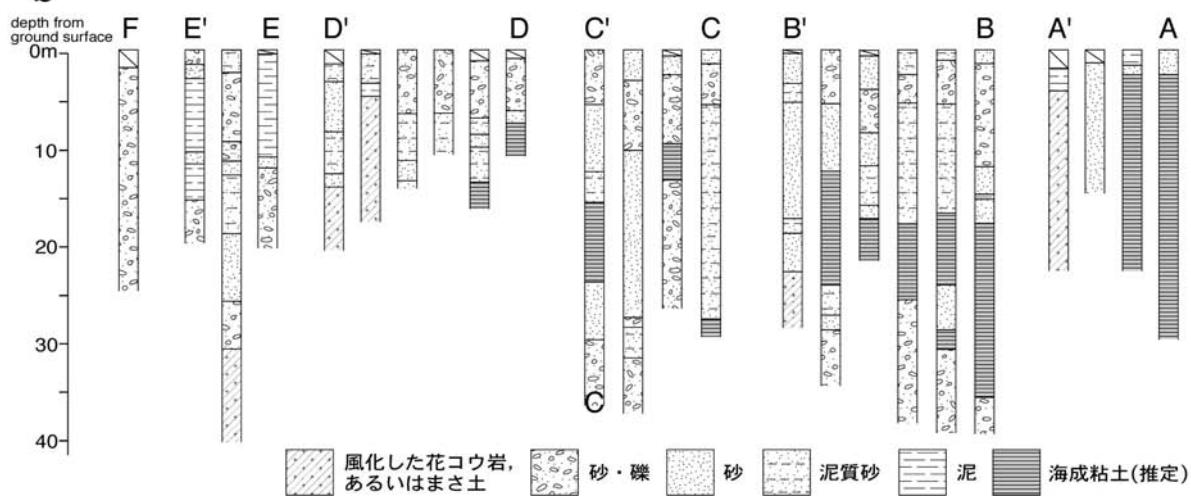
a**b**

図1 岩国平野とその周辺の地形分類図(a)および低地のボーリング柱状断面図(b)。bは「土地分類基本調査図」、山口県・広島県(1979)表層地質図「大竹」図幅、山口県(1980)表層地質図「岩国」図幅にもとづき一部加筆。aは両図とともに同図幅の地形分類図と1947年米軍撮影の空中写真(USA-M124-108~111)の判読による。等高線は国土地理院の「数値地図 50m メッシュ(標高)」にもとづく。柱状断面図Fは、錦川の図幅端より上流側約1kmの谷底に位置する。枠内は図2の範囲。

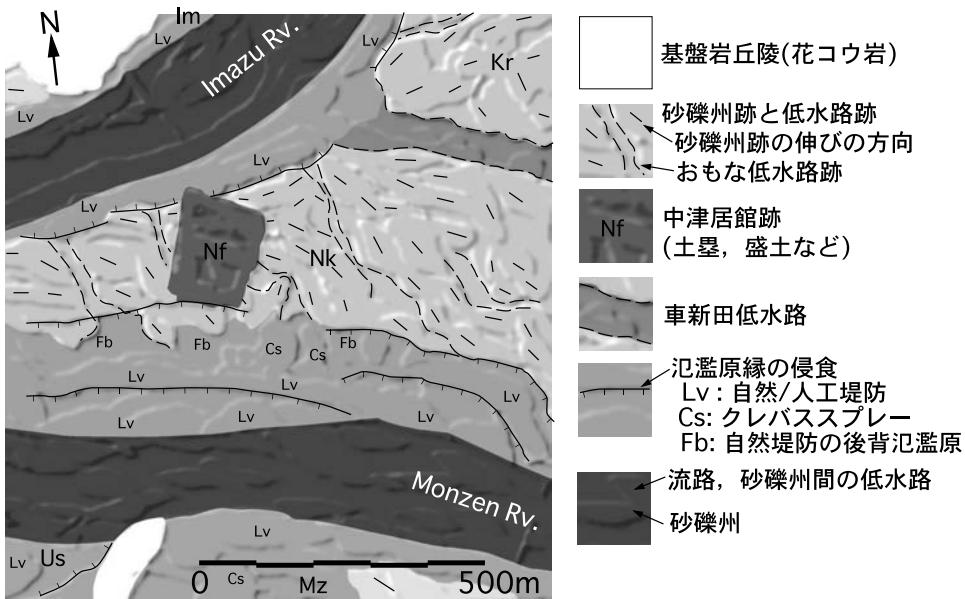


図2 中津居館跡とその周辺の微地形分類図。図の範囲は図1の枠内。1947年米軍撮影空中写真(USA-M144-49～51)の判読による。Nf: 中津居館跡、Im: 今津、Kr: 車町、Nk: 中津、Us: 牛野屋、Mz: 門前。

さらに今津地区の南西側の流路帯が発達し、その後、今津川両岸で自然堤防状の高まりが下流側に発達していったと考えられる。より低い臨海部では沖積リッジの高まりがみとめられず、海水準に近く潮汐の影響を受ける下部三角州平野とみなせる。この領域では広い干潟が干拓されたようである。

1602年に今津川が開削され、主流路が門前川から同川に変更されたことは史料からわかるが自然の地形プロセスを記載しているわけではない。今津川両岸の上部三角州平野の発達から、開削以前も高流出時にはいちじるしい河流を生じ堆積作用がさかんであったと推測される。長期間の三角州発達において、おそらく1000年をこえる過去の流路は現状とは異なる流路の位置と流況、それらにともなう地形発達を考えねばならない。

海図などで三角州前線の海底地形を調べると、門前川沖には河口からの延長距離が今津川沖の約2倍に達する広い水中三角州すなわちデルタフロントの領域がみとめられ、門前川沖の堆積作用も盛んであったことがうかがわれる。広島湾から岡山平野にかけての海側の領域が最近70年間の水準測量によると2～4mm/年の沈降傾向を示すこと(壇原1972)や、岩国付近での波力や潮流が弱く、三角州汀線以下の侵食量が少なかったことが広い水中三角州を発達させた要因と考えられる。

居館跡の地形条件

居館跡は岩国三角州の上部三角州平野上流端に位置し、錦川河谷終端部の扇状地性谷底平野の地表プロセスが卓越する。居館跡とその近傍の微地形について空中写真判読した結果を図2に示す。発掘調査でも、図1bのボーリング資料B-B'、C-C'柱状の最上部でも、地表直下では砂あるいは泥質砂層が見られ、これらは伏在する過去の砂礫州の起伏を残しつつ覆っていると考えられる。現在の今津川、門前川流路に接して、近世・近代の流路固定後の氾濫で生じた自然堤防とその後背氾濫原がみとめられる。その縁辺は流路側に向かってゆるやかな凹弧形をなし、ごく低い段をつくっているように見える。門前川の左岸では、より古い自然堤防と後背氾濫原が居館跡南側に近接して拡がる。その縁辺が北西-南東方向にのびたさらに古い砂礫州の高まりを切っており、居館跡の土壘南辺と重なる。形成年代は不明だが土壘南辺に氾濫がおよびうることを示す。土壘の北辺は低水路跡と重なり、この低水路跡と砂礫州跡は居館跡から東側150～300mの範囲に放射状に分布し、その縁辺を北西-南東に伸

びるやや幅広の低水路跡に合流している。これらの配向は街区と調和的である。さらに東側の車新田の低水路跡までには配向の異なる砂礫州・低水路跡がひとまとまりのロウブをなす。今津川の現在の河岸に沿っては、流路固定後の侵食によって生じたと考えられる凹弧形に伸びる段差がある。土壌内側の地表面は人工改変のため外側とは不調和な平坦面と凹地が分布する。居館跡西方の楠町付近では砂礫州や低水路の跡は不明瞭で、人工改変による直線的な起伏が混在するが、北西－南東方向の砂礫州の集まりがおよそ識別される。

2.TR0903 遺跡基盤堆積物の観察結果

居館築造以前の地形条件や耕作や盛土などの土地利用を推測するため、2009年度調査地のもっとも南に位置するTR0903で、中世遺構検出面下の堆積物を観察した。おもに中～細粒の中礫を主とし、砂礫州を構成する河床堆積物と考えられる礫層(12層)の上面が標高約0.95mでみとめられた。この上位の標高2.1mまでの間に、比較的明るい黄褐色を呈し、小型の大礫以細の礫がまじる泥質砂層(11・10層)が累重する。10・11層堆積物の構造は不明瞭で、途切れがちな葉理をなす部分や、長径1cm以下の泥がちな堆積物の塊あるいは破片(偽礫)が散布する部分はあるが、肉眼的な全体の印象は塊状である。中礫～小型の大礫は、人為的に持ち込まれて混入したと考えられる。中世遺構検出面にあたる10層上面は擾乱されており生活面は失われている。

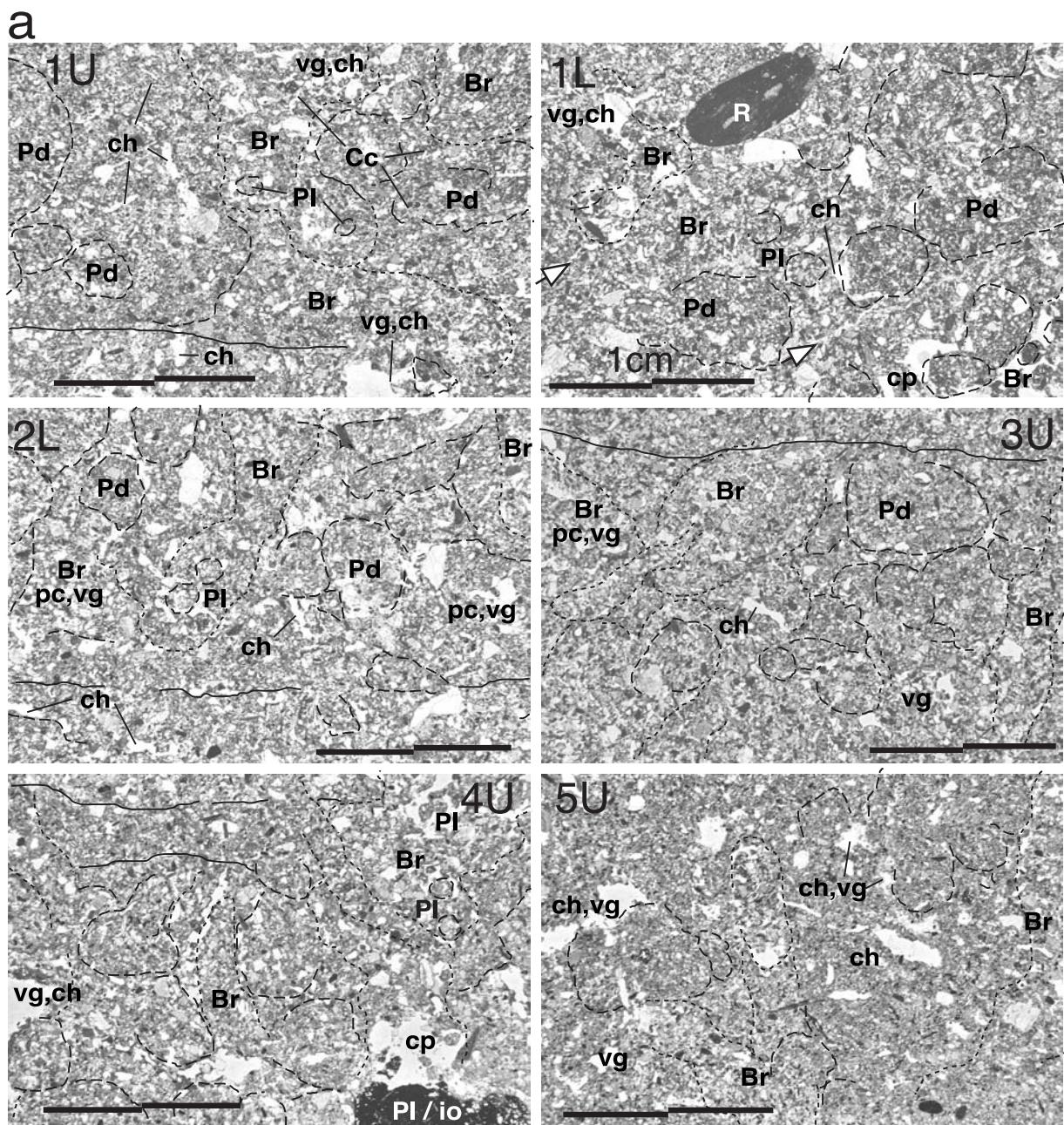
10・11層の垂直範囲約1mから、10cm四方の不搅乱試料をほぼ等間隔で調査担当者に採取していただき、試料を上位より1～5と付番し、各試料を上下(U、L)に分けて、それぞれの層準で薄片を作成した。その内の6点の拡大写真を図3aに示す。また、いくつかの試料は粒度組成を確認するため、粗粒砂以細の試料約2.5mlを遠沈管(容量50ml、高さ135mm)で水・分散剤とともに振盪・沈積させてふるい分け、遠沈管の目盛りで体積を読み取る方法により1φ間隔の粒度階の量比を求めた。その際、粘土はフロック剤を用いて沈積させ、吸引して回収したのち乾燥させ、ふたたび遠沈管にもどして体積を求めた。

薄片の観察結果

鉱物・岩石種、粒度組成 上述の粒度組成観察の結果、10・11層堆積物は中粒砂以細の砂と、堆積物全体の約1/3を占め、シルトを主とする泥からなることがわかる(図3b)。また10・11層の垂直範囲で最下部の5Lより上方の2Uまで砂が増え、顕著ではないが上方粗粒化し、最上部の1Lで細粒化する。砂粒を構成する鉱物・岩石種は石英、長石、雲母など花崗岩に由来するものと、泥岩、チャートなどの堆積岩片である。前者は角張っているが、後者の比較的粗粒な粒子はよく円磨されたものが混じる。全体に砂と泥はよく混じり合い、肉眼では塊状(あるいは壁状)をなすが、相対的に粗粒な堆積物と細粒な堆積物が10～30mmの厚みで交互に漸移して累重するパターンが認められる。

孔隙、粒団、棲管 幅3mm以下の孔隙が全体的に分布するが、おおむね上位層準とくに2L以上でその分布密度が高い。チャネル孔隙が卓越するが、それらとともにパッキング孔隙(バグ孔隙を含む)に区切られた堆積物が、長径100μm以下の小粒状に見える一次粒団をなし、それらが集合して長径3mm以上、数mmまでの二次粒団を構成する。ことなる粒度や構造を画する水平方向の不規則に屈曲した境界がどの薄片にもみとめられる。とくに10層中・下部にあたる3U、2L、1Lでは粒団の形状が明瞭である。11層中部にあたる5U層準では粒団の構造はまばらで、ほぼ水平方向のチャネル孔隙が多く、初生の堆積構造を反映しているようにも思える。

土壤動物が掘削あるいは排泄した堆積物で充填された直径数mmの棲管はどの層準でもみとめられ



(Pd, PI) 団粒(Pd), 土壤動物のペレット(PI)などの凝集体の輪郭

(Br) 棲管(Br)の輪郭 — 成層した
堆積物の境界

△ 面状孔隙の伸び方向

ch : チャネル孔隙 vg : バグ孔隙

cp : 複合パッキング孔隙 R : 岩片

cc : 炭片 PI / io : 酸化鉄のついたペレット

altitudes of sampling horizons		
1U 2.05 m	upper part	
1L 2.00 m		
2U 1.88 m	middle part	str. 10
2L 1.82 m		
3U 1.67 m	lower part	
4U 1.48 m	upper part	str. 11
5U 1.27 m	middle part	
5L 1.21m		

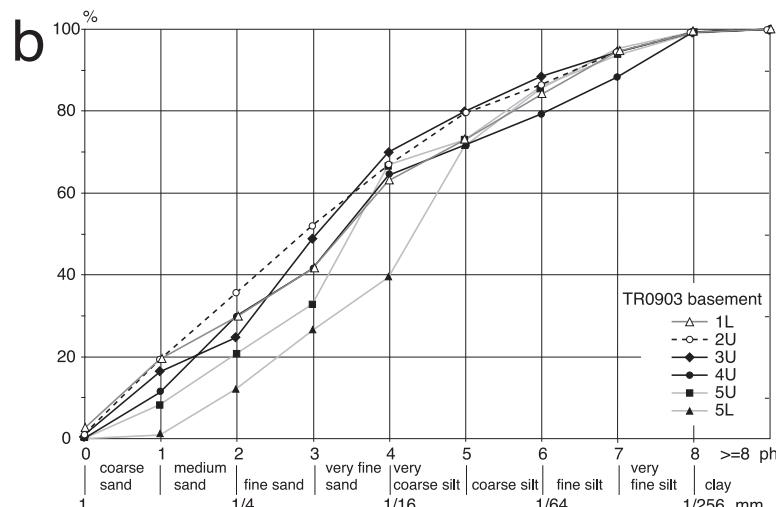


図3 TR0903 北壁、中世遺構検出面直下から掘削底の礫層直上までの垂直範囲で採取された不搅乱試料の薄片写真(a)と粒径積算頻度曲線(b)。試料採取層準の標高を左下の表に示す。

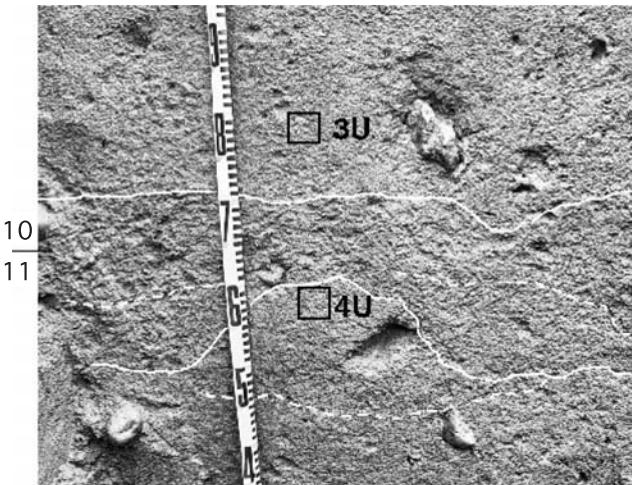


図4 TR0903 北壁の10・11層境界付近にみられる粒団の層。畑地作土層と考えられる。白線は層界を示す。3U、4Uは図3の薄片の位置。スケールの数字は10cm単位。10・11層境界の標高は約1.3m。

堆積の場に草地などの植生があったことや生物擾乱によるが、長期間の土壤生成の影響はなく、数10年オーダーの短期間に堆積したと想像される。数mm以上の粒団の構造が生じるには、いくらか圧密された堆積物を大気下でよく碎き攪拌する必要がある。このような点で複合的な粒団の構造はトレンチ周辺が畑地作土であったことを示唆し、土壤A層の特徴を欠くこととも調和的である。水で洗い巨視的な構造を浮き出させた断面の記録写真を精査したところ、4U直上に幅40cm間隔、高さ10cmの波状の起伏がみとめられ、長径3cm以下の粒団を含む厚さ10～20cm堆積層に覆われており、畑地跡の可能性が高い(図4)。

居館跡周辺の微地形や後述する土壌盛土に挟まれた氾濫堆積物とともに、昭和・平成の数10年に1回という頻度で起こった台風にともなう洪水の水位や、寛文8年の絵図に見られる堤防の構え方から、中世遺構検出面の高度に洪水流がおよぶことはめずらしくなく、むしろ頻繁であったと考えられる。居館跡とその周辺が河床から氾濫原の堆積環境へ変化した原因は、少なくとも局地的には錦川とその分流路の河床低下である。ファンデルタ(扇状地性三角州)の前面に河口から新たなロウブが発達すると、河床勾配が低下するとともに、上流側のロウブの流路が下刻されることは実例でも実験的にも確かめられている(たとえばSchumm 1987)。すでに述べた下部三角州の発達にともない、遺跡周辺の扇状地状に相対的に高く累積していた砂礫からなる上部三角州平野が下刻された可能性が考えられる。そのさい流路位置が門前川と今津川として安定したはずである。いっぽう、河口の閉塞、海水準の上昇などにともなう細粒の砂・泥の河口上流側での滞留、集水域内の植生破壊や人工改変による流送荷重の変化などいくつかの要因をさらに検討する必要がある。

3.TR0901とその近傍の中世遺構の基盤をなす盛土

TR0901の中世遺構検出面にあたる標高2.1mの直下約70cmの垂直範囲では、赤みがかった明褐色を呈し、わずかに小型の大礫を含むが、おもに極粗粒の中礫以細の礫が多数まじる泥質砂層が載る(8・10層)。このうち、下部・中部の約55cmの垂直範囲では、(北側断面で)東に5～40°傾斜して礫が配列したり、層状に集合する部分や、粒度組成の異なる砂礫が傾斜して重なり、砂には明瞭な葉理が見られる。これらはひょうに平坦な堆積斜面をつくりながら側方(東方)へ順次付加されていったことを示す。この傾いた構造は、上部にむかって傾斜を減じ、中世遺構検出面直下では、ひ

る。また、長径2mm前後の球状の凝集体は土壤動物のペレットで、棲管の外にも粒団とともに分布し、ひょうに多い。1L層準では、左下がりで直線的に連続した面状孔隙(白矢印)が平行して何枚もみとめられ、堆積物が小さな堆積斜面をなし人為的に積まれたことを示す。

堆積相の解釈

12層の上面は標高約0.9mで、かつての錦川河床の高度とみなせる。河床の礫が砂礫州をなして堆積した後に離水し、氾濫堆積物である10・11層の泥質砂が累重した。この堆積相に初生の構造がほとんどみとめられないのは、

じょうに低角度か水平をなす。中世遺構検出面は全般的には平坦だが、高さ数cmの起伏があり、部分的には層界が不明瞭な部分もみとめられ、上位層(TR0901の7層)形成時に擾乱されたと考えられる。

本層の赤みがかった色調は、赤灰色の砂混じりシルト質粘土からなる長径数cm以下の偽礫によるものである。積層した堆積物の数10cmの厚みごとに赤灰色偽礫の量が異なり、北東隅の深掘地点では上位層準ほど多くなるように見える。偽礫は、輪郭が不明瞭で、他の堆積物がまざりあっていいるところも多い。この赤灰色偽礫の性質を調べるため、TR0901北東隅の深掘サブトレーンチの中世遺構検出面直下で採取された不攪乱試料(垂直断面で15cm四方の範囲)から薄片を作成し検鏡した。偽礫のない盛土部分(図5a、a')と赤褐色偽礫(図5b、b')の薄片観察結果を以下に述べる。

薄片の観察結果

鉱物・岩石種、粒度組成 薄片では鉱物粒子や岩片からなる砂と細礫が卓越し、長径8~10mmの中粒の中礫が少数含まれる。それらの地となる細粒部分(マトリクス)はシルト以細の泥からなり、部分的には粒子支持だが全般的にはマトリクス支持の構造をなす。

砂粒子は石英(Qz)、長石(Fs)、黒雲母(Bt)などの鉱物からなる。これらは花コウ岩片(Gn)を構成するもので、マトリクスをなす泥の画分とともにその岩体の風化岩屑やまさ土に由来する。頁岩、チャートなどの堆積岩の砂粒子は、盛土のみの部分にはにかなり微小なものが1個あるかないかという程度である。偽礫にはみとめられなかった。これらに対し、すでに述べたTR0903の基盤堆積物には堆積岩片は多く含まれる。

孔隙 図5のモノクロ写真では、平行ポーラで白色、直交ポーラでもっとも暗い灰色あるいは黒色の部分は孔隙とみなせる。写真a、a'では、幅約2mm以下で、不整形、多角形の孔隙が多く分布する。孔隙が内に凸形をなす部分も多い。これらはパッキング孔隙(pc。バグ孔隙を含む)で、堆積物の集塊間のすき間と考えられる。その一部は後述する砂粒子の配向と調和的に分布する。幅1mm以下の孔隙には円形、橢円形をなすものも多く、部分的により大きな孔隙と連結したものもみとめられる。これらの多くはチャネル孔隙(ch。おもに根成孔隙)で、管状の孔隙の平行・斜交断面として現れ、パッキング孔隙を横切ったり、それらを連結するところも多い。面状孔隙と呼ばれる亀裂状の孔隙はほとんどない。酸化鉄の暗赤褐色とまだらに濁った淡赤褐色の粘土が孔壁に被膜をつくっている部分や、孔隙をほとんど充填した部分(chf)が2、3か所みとめられる。

砂礫粒子とマトリクスの分布パターン 写真aの黒矢印は斜め右下方向への砂礫粒子の配向が線状に連続する部分を指す。トレーンチの断面で巨視的に見られる東落ちの層理の一部である。薄片での構造は明瞭で、堆積物の集塊や構成粒子が堆積斜面を流水下で運搬され堆積したことを示す。踏みつけの圧迫、引きずり、蹴り起こしと再堆積などの生活面の直下数~10数mmで生じる特徴(水平方向の葉理状の積層構造、それに挟まれた微小なレンズ状の荷重痕、砂礫粒子の抜けあとなど)はなく、遺構検出面の上位にあった生活面は削平され失われている。

赤灰色偽礫 偽礫をなす赤灰色砂質泥と他の堆積物の境界は微視的なスケールでは漸移的で周囲の堆積物と混じり合う部分が多い。赤褐色の泥部分には、約100μm以下の不規則な斑状(部分的に点斑状)および短い線状に分布する、橙色のより明るい部分が分布する。これらは粘土鉱物の配列を反映する複屈折光のパターンと、線状の風化した雲母の破片である。高温被熱すると失われるこれらの特徴(Fedoroff et al.)は残存し、いっぽう被熱収縮した粘土の凝集体は生じていない。したがって、

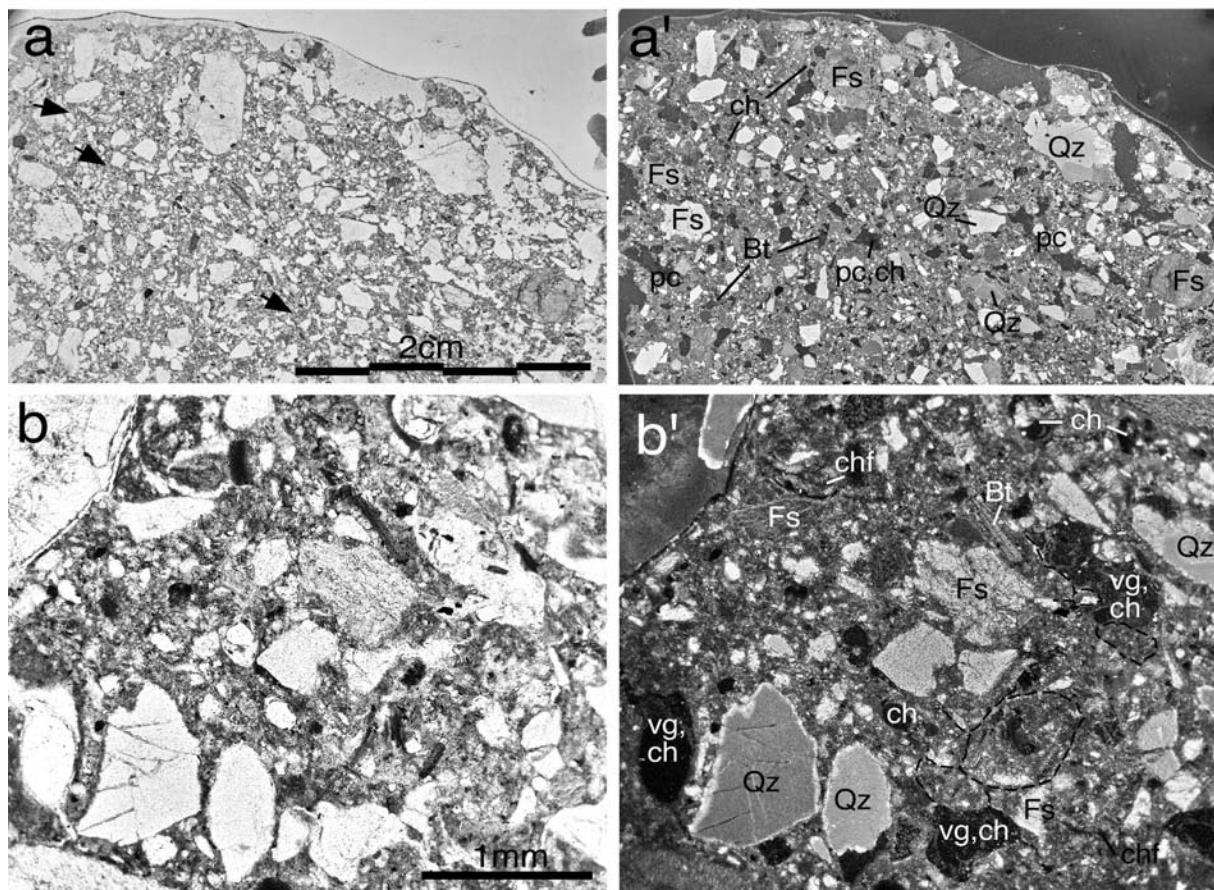


図5 TR0901 北東隅の深掘サブトレンチの遺構検出面基盤盛土の薄片顕微鏡写真。aは盛土中で赤灰色偽礫を含まない部分、bは赤灰色偽礫内部。a、bは平行ポーラ、a'、b'は直交ポーラ。Qz: 石英、Fs: 長石、Bt: 雲母、ch: チャネル孔隙、pc: パッキング孔隙、vg: バグ孔隙。

偽礫の赤い色調は花コウ岩の風化物質（まさ土）中の酸化鉄分と、酸化ケイ素にたいする酸化アルミニウムの増加を特徴とする、すなわち赤色風化によるもので、西日本の更新統からなる高位の段丘（丘陵）に分布する「赤色風化殻」あるいは「赤色風化土」（たとえば永塚 1981）に由来すると判断される。盛土材料の性質、産地 この盛土にみられる礫・砂・泥からなるこの場での組成の混合状態は、一時の一様な運搬・堆積営力で生じたとは考えにくい。すなわち自然状態で堆積した「一種類の材料」の人为的な再堆積ではない。盛土の砂には堆積岩片を含まれず、花コウ岩体に由来すると考えられる。明黄褐色や赤灰色の花コウ岩風化物質はともに付近の丘陵地帯で得られるはずである。いっぽう堆積岩の礫は、意図的かどうかはわからないが、人为的に混入したようである。両者がまじった理由は、露頭で隣接して産出したとも、異なる地点で産出したものを足し合わせたとも想像できる。礫をまぜることで生じる地耐力の効果にたいして、赤灰色偽礫をまぜる利点はとくに思い浮かばない。居館跡までの運搬の便宜を考えると、錦川沿いの丘陵谷壁から舟運によってもたらされたのかもしれない。以上の堆積物の構成物質の特徴と堆積構造から推測される堆積機構は、本トレンチの盛土は流水による再堆積物か盛土造成に際して多量の水を使って流し落とされたかのどちらかと考えられる。なお、この盛土と北側の土壌盛土との層序関係は把握されていない。

4. TR1004 の土壌構成堆積物と氾濫堆積物の観察結果

本トレンチでは古い時期の土壌構成堆積物の微細堆積相・土壤形態と粒度組成を調べた。TR0902北部でも土壌盛土の累重中に氾濫堆積物があまり擾乱されずに挟まれている様子がうかがわれたが、

ここでは南端部で土壌に接して検出された明瞭な氾濫堆積物の累重を検討した。

土壌構成堆積物

トレーンチ南端より約4m北の、遺構の基盤をなす11・12層とこれらを覆うもっとも古い累重(9A)、これを切って載る土壌構成堆積物(8A)の柱状試料(図6a)は砂質シルトあるいはシルト質砂からなる(図6c)。砂は細粒砂、極細粒砂を主とし淘汰がわるく、泥の量比が卓越する。これらは懸濁した比較的ゆるやかな氾濫流によって運搬・堆積したと考えられる。後述する氾濫のphase1より古い時期の累重だが、細粒砂、極細粒砂が増え、細粒のシルトと粘土が減る上方粗粒化の傾向がすでに生じている。試料観察の結果、12-2層の層準では上下の堆積物がおそらくは人為的に擾乱され、両者が長径数cm以下の偽礫状に混ざり合っている。11層から上位の9A-2層までには、9A-4・9A-3a層間に生物擾乱によるものと考えられる屈曲した、組成の異なる堆積物の境界がみとめられる以外には、ふつう盛土を構成する偽礫・土塊はみとめられず、人為的擾乱層準の直上にあたる12-1層の薄片(図6b中段)でも壁状で堆積物で充填された棲管と粗孔隙が多くみとめられ、盛土の特徴はない。TR1003-2の中世遺構基盤層の薄片(図6b下段)と似た構造を示す。9A-3a層の薄片(図6b上段)では同様に壁状だがアモルファスな有機物の凝集(写真右)がほぼ均等ランダムに分布し、よわい土壤生成がみとめられる。試料の肉眼的な観察では9A-2も同様の堆積相を示す。これらのことから、試料中・下部(9A-2、3、4)は盛土ではなく、土壌築造以前の自然営力による堆積物と考えられる。しかしその上位の9A-1層には角張った偽礫が積まれており盛土と判断され、それより下方、とくに9A-3層までには細粒の砂で充填された根成孔隙(ルートキャスト)が高密度に分布する。この9A-1層の盛土を地表面とした土壤発達は顕著ではないが、少なくとも2、3年を要すると思われ、その期間は土壌が維持されたことを示唆する。試料上部の8A-5、6層は偽礫を含むが流水下で堆積したことを見示す、左(南)下がりの斜面に平行な葉理構造がみとめられ、すでに述べたTR0901の盛土同様、この堆積営力について氾濫水や豪雨の地表流のような自然の流水か、造作のための注水かを見極める必要がある。

氾濫堆積物

氾濫堆積物はおもに写真記録を判読したり、図7aのようなトレース図を作成して累重様式を検討した。最下の11層、12層は土壌外側にゆるやかに傾斜して侵食され、8A-16～19層が載る。11層から上方に、断面南端で約1.8mの厚みの堆積物を粒度組成や堆積構造の違いによって次の4段階(図7中のPhase1～4)に区分した。この内phase2、3は一回の氾濫で累重した。

Phase1(写真bの下部)は土壌盛土とされる8Aの累重中にみとめられる氾濫堆積物と盛土を挟むが、それらを含め上方厚層化、上方粗粒化する累重様式で、門前川の氾濫活動が数か月程度とみられる期間内でしだいに活発になったことを示す。中部の8A-10層は泥質で細粒の砂から極粗粒砂に逆級化し、浅いトラフ型斜交葉理をなす2、3枚の組である。逆級化成層は氾濫堆積物の代表的な堆積相である(たとえば増田・伊勢屋 1985)。この段階の最上部に載る6A-1～4層は厚さ10～15cmの2枚の中礫混じりの砂からなり顕著な逆級化成層をなす。この上面は自然の堆積構造としては不自然な凹凸があり、直下の内部構造が乱れているが、堆積後さほど時を経ず上位層が載ったと思われる。Phase2は写真b、cにみられるように、細粒砂～細かめの粗粒砂が低角度のフォーセット葉理をなし、セット高10～15cm、波長80cm以上のメガリップルが1、2段積み上がった後、洗掘され、幅広いトラフ型斜交葉理に平行葉理(プレインベッディング)が混在したコセットをなす粗粒砂～細礫に充

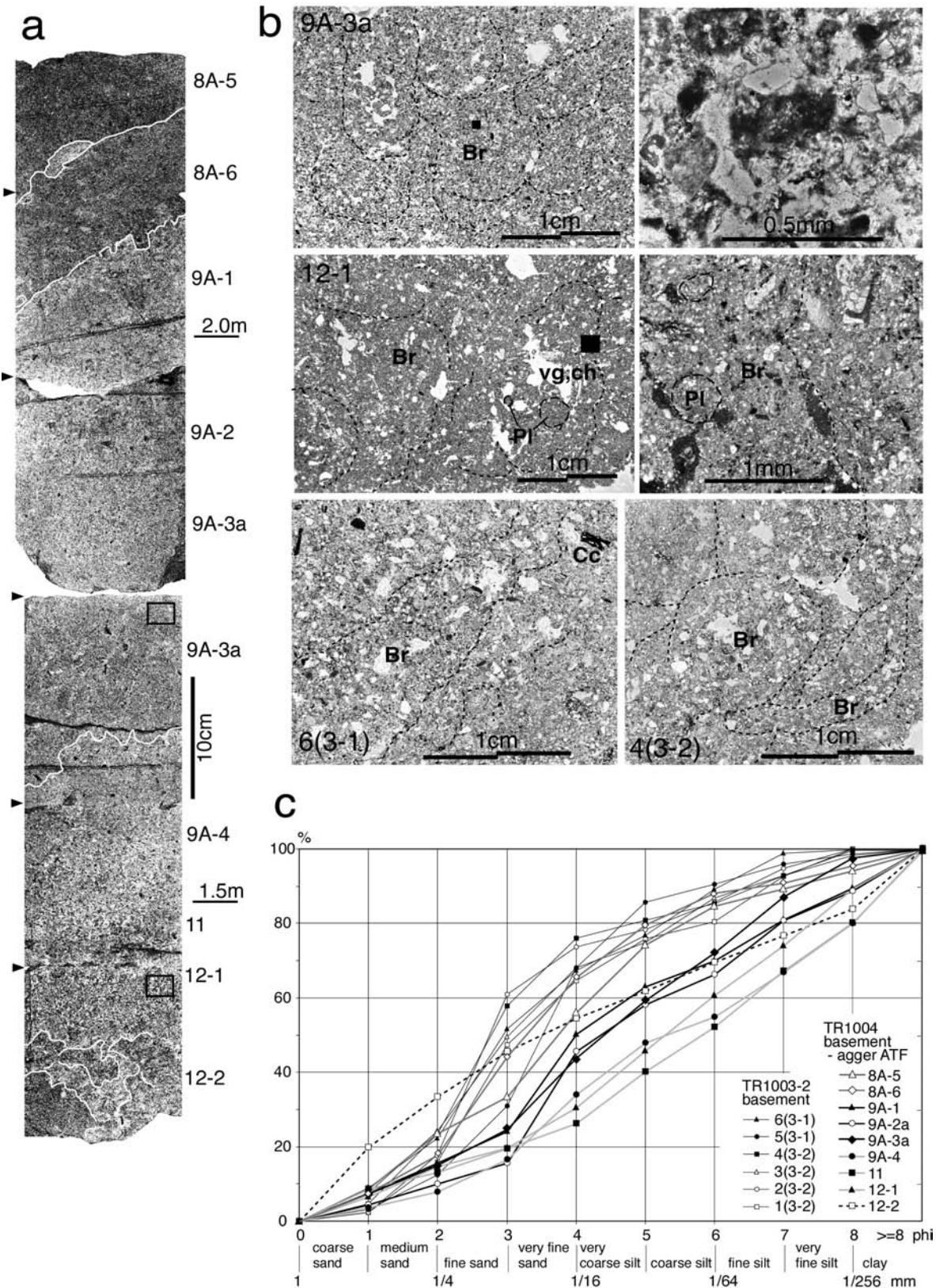


図6 TR1004 西壁、土壌盛土断面で採取された不搅乱試料の柱状写真(a)とその2層準から作成した薄片顕微鏡写真(bの上・中段)、TR1003-2の掘立柱建物跡基盤層の薄片顕微鏡写真(bの下段)、および両トレンチ試料の粒径積算頻度曲線(c)。aの画像は昼光写真の赤と黄成分の処理で試料表面の起伏を強調したもの。黒三角は試料の切れ目、白線はおもな層界、試料表面の横線は発掘時の分層線、黒枠はbの薄片の位置。右欄は発掘の層名と標高。b 上・中段の左は平行ポーラ、右は直交ポーラで撮影。下段は左右とも平行ポーラ。cは本文中に記載した図3bと同じ粒度組成観察方法による。試料名はすべて発掘の層名。

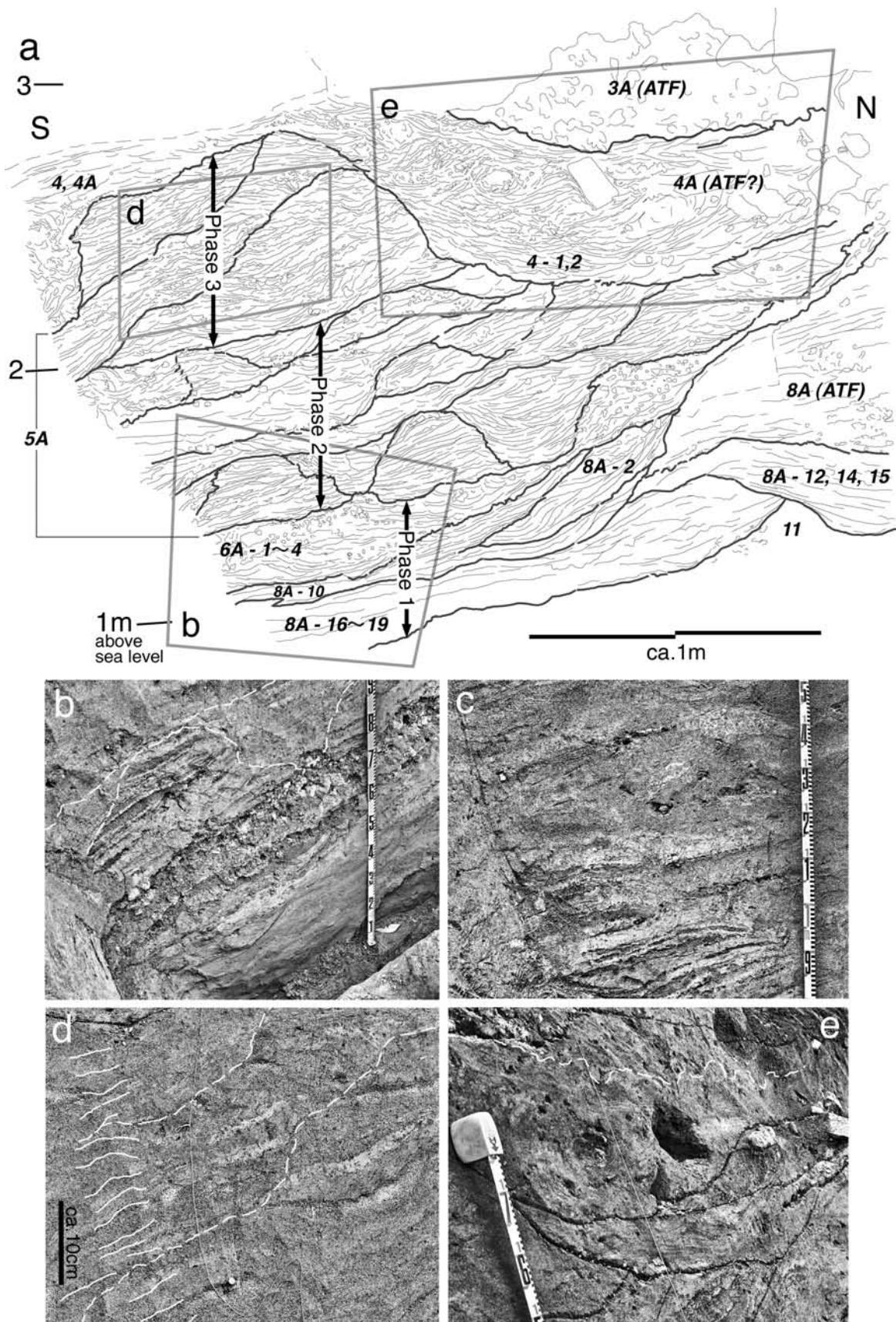


図7 TR1004南端部に累重する氾濫堆積物の西壁断面写真の堆積構造トレイス図(a)と断面の部分写真(b~e)。aの太線はおもな層(セットおよびコセット)の境界。細線はそれらの内部構造を示す葉理。太字斜体は発掘の層名。灰色の枠は写真b、d、eの撮影範囲を示す。写真cは西壁に接する南壁で、古流向に平行ないし斜交断面。スケールの数字は10cm単位。

填され覆われる累重が、約70cmの垂直範囲にほぼ3回みとめられる。写真で白く写った細粒の砂の葉層は上部ほど少なく、一連の上方粗粒化がみとめられる。また級化構造をなすセットも多く見られる。土壌南辺は洪水流の縁辺付近に位置し流速は相対的に低いが、多量の堆積物を運搬・堆積させた流況が推測される。メガリップルが氾濫の減衰期に生じた例(Ritter 1988)は知られるが、ここでは増水期に生じたと考えられる。Phase 3は、全体に層厚1~5cmで、細粒砂から粗粒砂、極粗粒砂に逆級化する堆積層の累重(写真dの左の線)で、phase 2にくらべあきらかに粗粒である。各層の内部構造は幅20~10cm以下のトラフ型斜交葉理が卓越し、部分的に平行葉理が挟まり、狭いチャネル状の掘り込みを充填する部分では正級化構造がみとめられる。岸側の堆積物を侵食して、流路側に累重が2度くりかえされている(写真dの破線)。写真cの上端部で見られるように下位のメガリップルが破壊されつつ累重しており、流速が高まり高流領域への漸移相とみなせる。以上から、Phase 3は河道側の湧昇(boil)がより盛んになったことを示し、氾濫の最盛期と考えられる。断面最上部、Phase 4の堆積物4Aはphase2、3の堆積物を侵食し、土壌外側と流路状の落ち込み(4-①・②、写真e)を充填している。この侵食が人為的な掘削によるかどうかは未確認である。落ち込みではおおむね泥質砂と砂が平行葉理をなす累重中に土壌盛土が楔形に挟まり、その直上層準では盛土偽礫や石材として持ち込まれた小型の巨礫~中礫が堆積物中に散在する。それらの周辺ではすでに累重した堆積物を動かした渦の流線パターンが見られ、流水中に投入されたものと考えられる。落ち込み最上部にはふたたび平行葉理をなす厚さ約10cmの泥質砂、砂が載る。この堆積状況は土壌外側でもほぼ同様である。流水の影響がこの高度に達していることから氾濫時の堆積と考えられ、Phase 4はphase 3に続く氾濫減衰期の累重に人間行動が加わったとも考えられる。TR0901の盛土でもみられたように盛土材料と流水とのかかわりはいまだ不明確だが、本トレンチの氾濫堆積物から、検出された初期段階の土壌頂部(8A層)の標高2.6mを充分に越え、居館周辺を含め丘陵谷底と上部三角州平野のほとんどを呑みこんだ氾濫イベントが推定される。

謝辞 興味深い地形と堆積物に向き合させていただいた神崎前氏はじめとする岩国市教育委員会の皆様、山口県教育庁の上山佳彦氏、調査にお誘いいただいた熊本大学文学部 木下尚子先生に感謝いたします。

文献

- 壇原 穀(1972) 日本における最近70年の総括的上下変動. 測地学会誌. 17, 100-128.
- 永塚鎮男(1981) 赤色土. 「地形学辞典」, 二宮書店, pp.310.
- 増田富士雄・伊勢屋ふじこ(1985) “逆グレーディング構造”：自然堤防帶における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会報, 22・23, 108-116.
- 岩国市史編纂委員会(2009) 岩国地方の火山灰層. 「岩国市史 通史編1」, 岩国市, pp.57-60.
- Fedoroff, N., Courty, M.-A., and Gou, Z.(2010) Paleosoils and relict soils. In Stoops, G., Marcelino, V., and Mees, F.(eds.) *Interpretation of Micromorphological Features of Soils and Regoliths*. Elsevier, pp.647-649.
- Ritter, D.F.(1988) Floodplain erosion and deposition during the December 1982 floods in Southeast Missouri. In Baker, V.R, Kochel,R.C., and Patton,P.C.(eds.) *Flood geomorphology*. Wiley, pp.243-260.
- Schumm, S.A., Mosley, M.P., and Weaver W. E. (1987) *Experimental Fluvial Geomorphology*. Wiley,pp.351-366.

中津居館跡出土の中世人骨

* 松下孝幸 · ** 松下真実

【キーワード】：山口県、中世人骨、男性骨、長頭型、歯槽性突顎

はじめに

山口県岩国市教育委員会は、同市楠町三丁目に所在する中津居館跡に関する基礎資料を得るために2008年（平成20年）度から2010年（平成22年）度まで3次に亘る本遺跡のトレンチ調査を実施した。2008年度の調査で、TR0803トレンチの北東隅から人骨が検出された。人骨は礫の間に充填していた土の中から貝の集積とともに検出されているが、遺物は伴っていない。また、人骨も埋葬状態を保って検出されておらず、頭蓋や上肢骨などが散乱状態で検出されている。後述しているとおり、この人骨は中世人骨と推測されている。

山口県での中世人骨の出土例としては、下関市の吉母浜遺跡（中橋・他、1985）出土人骨がもっとも保存状態が良く、数も多い。その他には山口市の瑠璃光寺跡（松下・他、1988b）と古大里遺跡（松下・他、2011）、萩市の萩城跡（松下、2006b）、下関市の市場遺跡第Ⅱ地区（松下・他、1992）、吉母堂の下遺跡（松下、2002a）、下関市菊川町の竜王南遺跡（松下、2002b）、下関市豊浦町の汐汲遺跡（松下・他、1986）、高野遺跡（松下、1999b）、吉永遺跡Ⅲ-西地区（松下、1999a）、吉永遺跡Ⅲ-東地区（松下、1999c）、中ノ浜遺跡（松下、2006a）、下関市豊北町では、中平尾遺跡（松下・他、2003a）、神田口遺跡（松下、2003b）、東正寺遺跡（松下、2004）、寺ヶ浴遺跡（松下、2005a）、波原遺跡（松下、2007）の他に土井ヶ浜遺跡の第7次調査（松下・他、1983b）、第14次調査（松下、1996）、第16次調査（松下、1998）でも中世人骨が出土している。また、下松市の梅ノ木原遺跡（松下・他、1987）、防府市の玉祖遺跡（松下・他、1983a）、原遺跡（松下、2001a）、上り熊遺跡（松下・他、2008a、2009、2010）、宇部市の東隆寺経塚（松下・他、1988c）と末信遺跡（松下・他、1988a）、美祢市美東町の植畠遺跡（松下、1997）、柳井市の向田遺跡（松下、2005b）と吉毛遺跡（松下・他、2008b）、長門市三隅町湯免遺跡（松下、2001b）、萩市見島（牛島・他、1960）などからの出土例がある。中ノ浜遺跡の第10次調査（平成22年度）でも1体の幼児骨が出土している。このうち東隆寺、梅ノ木原、吉母堂の下、吉永（Ⅲ-東地区）、竜王南は火葬骨であった。保存状態が良好だったのは吉母浜、中ノ浜、土井ヶ浜、汐汲の各遺跡から出土した人骨で、いずれも響灘沿岸の砂丘から出土したものである。

今回検出された人骨は1体分で、残存部分も多くないが、骨質が堅牢で、計測や観察をおこなうことができたので、その結果を報告しておきたい。

資料

中津居館跡の3次に亘る調査で検出された人骨は1体（TR0803-Y01）のみである。出土状態の詳細は定かではないが、礫群間に充填していた土の中から検出されている。採集された人骨を解剖学的に精査したところ、重複部分がないので、1体分の人骨と判断した。この人骨は後述しているとおり壮年の男性骨と推測される。年齢区分は表1のとおりである。なお、本人骨は考古学的所見から14世紀前半の室町時代に属する中世人骨と考えられている。

*Takayuki MATSUSHITA、** Masami MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

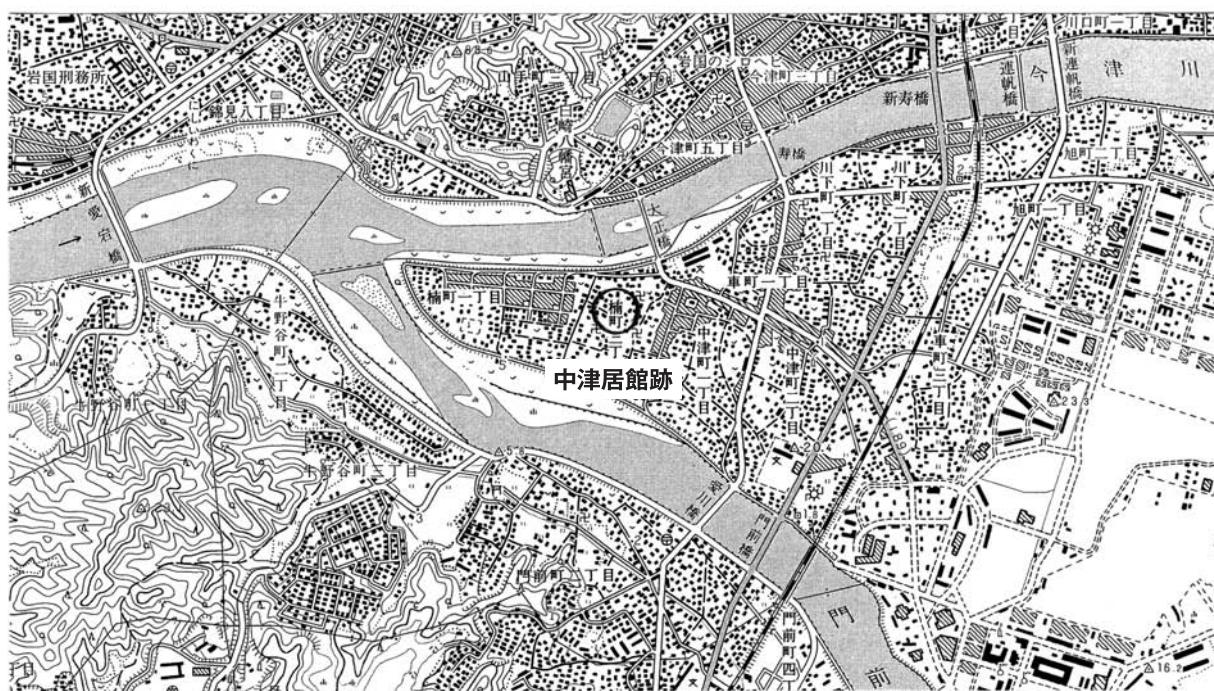


図1. 遺跡の位置 (1/25,000)
(Fig.1 Location of the Nakazu-kyōkanato. Iwakuni city, Yamaguchi Prefecture.)

表1 年齢区分 (Table 1 .Division of age)

年齢区分		年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所 見

各人骨の残存部は図2に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

TR0803-Y01 (男性・壮年)

残存していたのは、頭蓋(含下顎骨)、鎖骨(右)、肩甲骨(左右)、上腕骨(左右)、橈骨(右)、尺骨(右)、寛骨(一部)(右)、椎骨(1片)、肋骨(1点)である。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

バラバラになっていた頭蓋片を接合したところ脳頭蓋を復元することができたが、右側の破壊がひどく、この部分の骨が残存していない。骨壁はやや厚く、堅牢である。外後頭隆起はやや発達しているが、乳様突起は小さい。頭頂部は矢状縫合部分がやや隆起している。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右とも認められない。三主縫合の観察ができたが、三主縫合とも内外両板が開離している。

脳頭蓋の計測はできないが、観察によれば、径は小さく、頭型は長頭型と推測される。

(2) 顔面頭蓋

左側の上顎骨と下顎骨のオトガイ部が残存していたに過ぎない。眉間はやや隆起しているが、眉上弓の隆起は弱いようで、前頭鱗は膨隆しておらず、前頭結節の発達もみられない。上顎骨の径も小さく、歯槽突起には強い歯槽性突顎がみられる。前頭突起を欠損しているので、前頭突起の向きは不明である。オトガイ高は33mmで、下顎骨の高径は低いが、オトガイ隆起とオトガイ結節はよく発達している。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ / / / / / /	① ② ③ ④ ⑤ 6 ⑦ ▽
/ / / / / / / ①	① ② ③ 4 5 ⑥ //

[●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 ／:不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種]

[1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]

歯の径はかなり小さい。咬耗度はBrocaの1度(咬耗がエナメル質のみ)で、咬耗は弱い。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

①上腕骨

両側とも骨体が残存していたが、計測ができるのは左側のみである。骨体は細いが、三角筋粗面の発達は良好で、骨体はやや「く」の字状を呈している。

計測値は、骨体最小周が59mm(左)、中央周は61mm(左)で、骨体は細い。中央最大径は21mm(左)、中央最小径は16mm(左)で、骨体断面示数は76.19(左)となり、骨体の扁平性はあまり強くない。

(2) 下肢骨

①寛骨

右側の大坐骨切痕部が残っていたが、その角度の大きさを知ることができるほどの大きさではない。

4. 性別・年齢

外後頭隆起と眉間がやや隆起しており、前頭鱗はやや後方へ傾斜し、これらの特徴は男性的である。眉上弓の隆起は弱く、乳様突起は小さい。これらは女性を思わせる。上腕骨の中央周は61mm(左)であるが、男性とすればやや細いが、女性とすればかなり大きい。頭蓋や上肢骨の径は小さいが、外後頭隆起と眉間がやや隆起しており、前頭鱗が後方へ傾斜していることから、性別を男性と推定した。年齢は、三主縫合とも内外両板が開離していることから、壮年と思われる。

考 察

上腕骨について、山口県内の中世人骨と比較してみた。表2は男性上腕骨の計測値比較表である。中央周は61mmで、土井ヶ浜1402に次いで小さく、最小周は59mmで、吉毛の1例に一致し、土井ヶ浜1402よりは大きいが、吉母浜、萩城跡よりは小さく、骨体は男性としては細い方である。骨体断面示数は76.19で、吉毛の1例の値に一致し、表2では最大値となり、骨体の扁平性はあまり強くない。

表2 上腕骨計測値(男性、右、mm) (Table 2. Comparison of measurements and indices of male right humeri)

	中津居館跡	瑠璃光寺	吉毛	萩城跡	原	土井ヶ浜	吉母浜	
	中世	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	
	山口県	山口県	山口県	山口県	山口県	山口県	山口県	
	岩国市	山口市	柳井市	萩市	防府市	豊北町	豊浦町	
	(松下・他)	(松下・他)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(中橋・他)	
	TR0803-Y01	n M	n M	ST-118	ST1	1402	n M	
5.	中央最大経	21(左)	4 21.75 (左)	1 21	25(左)	24	21 20	22.9
6.	中央最小径	16(左)	4 15.50 (左)	1 16	18(左)	17	14 20	17.3
7.	骨体最小周	59(左)	- (左)	1 59	67(左)	-	54 20	62.6
7(a).	中央周	61(左)	4 63.00 (左)	1 62	72(左)	67	60 20	66.4
6/5	骨体断面示数	76.19(左)	4 71.99 (左)	1 76.19	72.00 (左)	70.83	66.67 20	75.6

要 約

岩国市楠町三丁目に所在する中津居館跡から散乱状態の人骨が検出された。人骨はやや堅牢で、部分的に計測も可能であった。人類学的観察や計測の結果は次のとおりである。

1. 人骨は礫の間に充填していた土の中から貝の集積とともに散乱状態で検出された。
2. 本人骨は、考古学的所見から、14世紀前半の室町時代に属する中世人骨と推測される。
3. 本人骨は壮年の男性骨である。

4. 残存していたのは、頭蓋(含下顎骨)、鎖骨(右)、肩甲骨(左右)、上腕骨(左右)、橈骨(右)、尺骨(右)、寛骨(一部)(右)、椎骨(1片)、肋骨(1点)である。
5. 頭蓋は計測できないが、径は小さく、頭型は長頭型である。
6. 上腕骨の計測値は、骨体最小周が59mm(左)、中央周は61mm(左)で、骨体は男性としては細い。
7. 本例には、長頭性と歯槽性突顎が認められ、中世人的特徴を示しており、考古学からの推測された所属時代と矛盾しない。上腕骨体は細いが、三角筋の発達は悪くはない。今回出土した人骨はトレーナー調査で検出されており、取り上げられた人骨も部分的である。周辺に墓域が存在するのかなど、周辺の検討が必要であろう。本人骨1例のみでは岩国市域の中世人の特徴を明らかにできたとは思えない。資料の増加を期待したい。

謝辞

《擇筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた岩国市教育委員会の皆様に感謝致します。》

《参考文献》

1. 松下孝幸・他、1983a：山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告第70集)：147-148.
2. 松下孝幸・他、1983b：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次調査報告概報(豊北町埋蔵文化財調査報告2)：19-30.
3. 松下孝幸・他、1986：山口県豊浦町汐汲遺跡出土の古墳時代・中世人骨。汐汲遺跡(豊浦町埋蔵文化財調査報告第7集)：75-102.
4. 松下孝幸・他、1987：山口県下松市梅の木原遺跡出土の火葬骨。梅の木原(山口県埋蔵文化財調査報告第98集)：107-112.
5. 松下孝幸・他、1988a：宇部市末信遺跡出土の中世人骨。末信遺跡(宇部市文化財資料第10集)：20-25.
6. 松下孝幸・他、1988b：山口市瑠璃光寺遺跡出土の中世人骨。瑠璃光寺跡遺跡－中世墳墓の調査。(山口市埋蔵文化財調査報告書第28集)：397-436.
7. 松下孝幸・他、1988c：東隆寺経塚出土の人骨。東隆寺一字一石経塚(伝南嶺和尚墓)(宇部市文化財資料第9集)：33-36.
8. 松下孝幸・他、1992：山口県下関市市場遺跡第Ⅱ地区出土の中世人骨。市場遺跡Ⅱ・宮添遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告第149集)：23-25.
9. 松下孝幸、1996：土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査出土の中世・弥生時代人骨。土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第12集)：24-50.
10. 松下孝幸、1997：山口県美東町植畠遺跡出土の中世人骨。植畠遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告第183集)：38-40.
11. 松下孝幸、1998：土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査出土の弥生時代・中世人骨。土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査報告書(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第14集)：付1-39.
12. 松下孝幸、1999a：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世人骨。吉永遺跡(Ⅲ-西地区)(平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書)(豊浦町の文化財第16集)：21-25.
13. 松下孝幸、1999b：山口県豊浦町高野遺跡出土の中世人骨。高野遺跡(南地区)(平成7・8・9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書)(豊浦町の文化財第15集)：226-233.
14. 松下孝幸、1999c：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世火葬人骨。吉永遺跡(Ⅲ-東地区)(平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書)：51-54.

15. 松下孝幸、2000：山口県豊浦町川棚条里跡出土の中世人骨。川棚条里跡1(大浦・台地区)(平成11年度経営ほ場整備事業に伴う発掘調査概報)(豊浦町の文化財第17集)：64-68.
16. 松下孝幸、2001a：山口県防府市原遺跡出土の中世人骨。原遺跡(山口県埋蔵文化財調査センター調査報告第23集)：41-56.
17. 松下孝幸、2001b：山口県三隅町湯免遺跡出土の中世人歯冠。湯免遺跡(三隅町埋蔵文化財調査報告第1集)：付篇
18. 松下孝幸、2002a：山口県下関市吉母堂の下遺跡出土の中世火葬骨。吉母堂の下遺跡(下関市埋蔵文化財調査報告書61)：10-11.
19. 松下孝幸、2002b：山口県菊川町竜王南遺跡出土の中世火葬骨。竜王南遺跡(山口県埋蔵文化財センター調査報告第31集)：69-74.
20. 松下孝幸・他、2003a：山口県豊北町中平尾遺跡出土の中世人骨。中平尾遺跡・上今宮遺跡(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第23集)：160-163.
21. 松下孝幸、2003b：山口県豊北町神田口遺跡出土の中世人骨。土井遺跡群 二刀遺跡・丸山遺跡・神田口遺跡(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第24集)：85-87.
22. 松下孝幸、2004：山口県豊北町東正寺遺跡出土の中世人骨。東正寺遺跡・浴ノ迫遺跡(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第25集)：29-31.
23. 松下孝幸、2005a：山口県豊北町寺ヶ浴遺跡出土の中世人骨。土井ヶ浜遺跡周辺遺跡群 寺ヶ浴遺跡 広田遺跡(下関市文化財調査報告書9)(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第38集)：138-144.
24. 松下孝幸、2005b：山口県柳井市向田遺跡出土の中・近世人骨。陶墳第18号(山口県埋蔵文化財センター年報－平成16年度－)：63-100.
25. 松下孝幸、2006a：山口県下関市中ノ浜遺跡出土の弥生・中世・近世人骨。山口考古 第26号：51-80.
26. 松下孝幸、2006b：萩城跡(外堀地区)出土の中世・近世人骨。萩城跡Ⅲ(山口県埋蔵文化財センター調査報告第52集)：253-274.
27. 松下孝幸・他2008a：防府市上り熊遺跡出土の中世人骨。上り熊遺跡I(山口県埋蔵文化財センター調査報告第66集)：138-146.
28. 松下孝幸・他、2008b：山口県柳井市吉毛遺跡の埋葬姿勢。吉毛遺跡(山口県埋蔵文化財センター調査報告第6集)：72-89.
29. 松下孝幸・他、2009：防府市上り熊遺跡Ⅱ地区出土の中世人骨。上り熊遺跡Ⅱ(山口県埋蔵文化財センター調査報告第70集)：131-136.
30. 松下孝幸・他、2010：防府市上り熊遺跡Ⅲ地区出土の中世人骨。上り熊遺跡Ⅲ(山口県埋蔵文化財センター調査報告第73集)：105-120.
31. 松下孝幸・他、2011：山口市古大里遺跡出土の中世人骨。古大里遺跡(山口県埋蔵文化財センター調査報告第75集)：69-74.
32. 松下真実、2007：山口県下関市波原遺跡出土の中世幼小児歯冠。波原遺跡・森広遺跡・片山遺跡(下関市文化財調査報告25)：125-130.
33. 中橋孝博・他、1985：人骨(山口県下関市吉母浜遺跡出土人骨)。吉母浜遺跡：154-225.
34. 牛島陽一・他、1960：山口県阿武郡見島村出土の中世時代の人骨について。人類学研究、7(3~4)：52-56.

表3 下顎骨(mm、度)(Mandibula)

中津居館跡 TR0803-Y01		
男性		
65	下顎関節突起幅	-
65(1).	下顎筋突起幅	-
66	下顎角幅	-
67	前下顎幅	-
68	下顎長	-
68(1).	下顎長	-
69	オトガイ高	33 (左)
69(1).	下顎体高	32 (左)
69(2).	下顎体高	-
70	枝高	-
70(1).	前枝高	-
70(2).	最小枝高	-
70(3).	下顎切痕高	-
71(1).	下顎切痕幅	-
71	枝幅	-
71a.	最小枝幅	-
79	下顎枝角	-
66/65	下顎幅示数	-
68/65	幅長示数	-
68(1)/65	幅長示数	-
69(2)/69	下顎高示数	-
71/70	下顎枝示数	-
71a/70(2)	下顎枝示数	-
70(3)/71(1)	下顎切痕示数	-

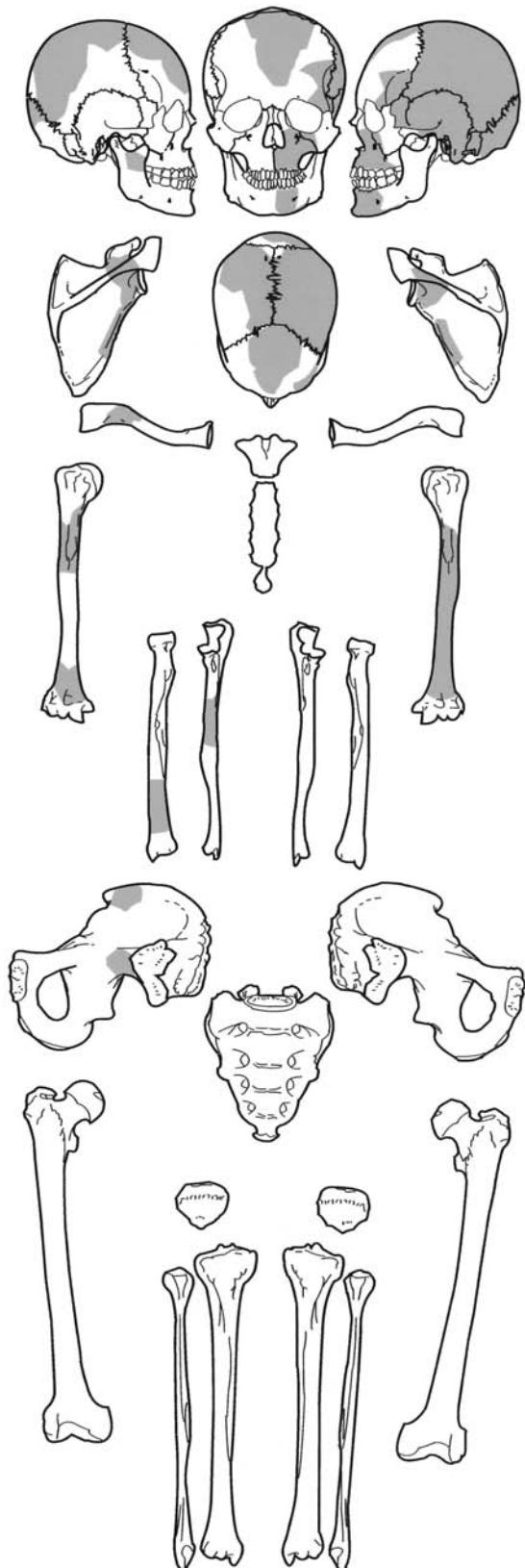
表4 上腕骨(mm)(Humerus)

中津居館跡 TR0803-Y01		
男性		
左		
1.	上腕骨最大長	-
2.	上腕骨全長	-
3.	上端幅	-
3(1).	横上径	-
4.	下端幅	-
5.	中央最大径	21
6.	中央最小径	16
7.	骨体最小周	59
7(a).	中央周	61
8.	頭周	-
9.	頭最大横径	-
10.	頭最大矢状径	-
11.	滑車幅	-
12.	小頭幅	-
12(a).	滑車幅および小頭幅	-
13.	滑車深	-
14.	肘頭窩幅	-
15.	肘頭窩深	-
6/5	骨体断面示数	76.19
7/1	長厚示数	-

表5 形態小変異(Non-metric crania variants)

中津居館跡 TR0803-Y01		
男性		
	右	左
1. Medial palatine canal(内側口蓋管)	/	/
2. Pterygospinous foramen(翼棘孔)	/	/
3. Hypoglossal canal bridging(舌下神経管二分)	/	/
4. Clinoid bridging(床状突起間骨橋)	/	/
5. Condylar canal absent(頸間欠如)	/	/
6. Tympanic dehiscence,Foramen of Huschke(>1mm) (フュケ孔、鼓室骨裂孔)	-	-
7. Jugular foramen bridging	/	/
8. Precondylar tubercle	/	/
9. Supra-orbital foramen(incl.frontal foramen)(眼窩上孔)	/	/
10. Accessory infraorbital foramen(副眼窩下孔)	/	/
11. Zygofacial foramen absent	/	/
12. Aural exostosis(外耳道骨腫)	-	-
13. Metopism(前頭縫合)	-	-
14. Os incae(インカ骨)	-	-
15. Ossicle at the lambda(ラムダ小骨)	/	-
16. Parietal notch bone(頭頂切痕骨)	/	/
17. Transverse zygomatic suture(>5mm)	/	/
18. Asterionic ossicle	/	/
19. Occipitomastoid ossicle	/	/
20. Epipterotic ossicle	/	/
21. Frontotemporal articulation	/	/
22. Biasterionic suture(>10mm)	/	-
23. Mylohyoid bridging(顎舌骨筋神経溝骨橋)	/	/
24. Accessory mental foramen(副オトガイ孔)	/	/
25. Mandibular torus(下顎隆起)	/	-
26. 滑車上孔(上腕骨)	/	/

[present : +, absent : -, unobserved : /]



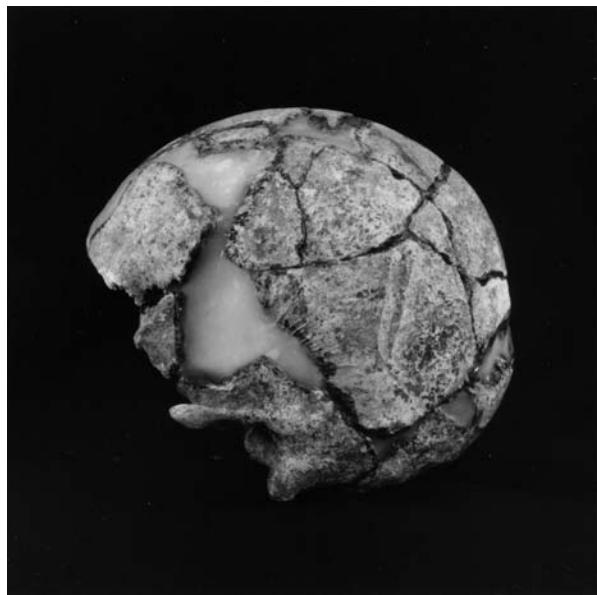
中津居館跡TR0803-Y01人骨(男性・壮年)

図2 人骨の残存図(アミかけ部分)

(Fig.2 Regions of preservasion of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



頭蓋上面 (Superior view of the Skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the Skull)



上顎骨・下顎骨 (Maxilla·Mandible)



上肢骨 (Bones of the upper limb)

中津居館跡TR0803-Y01 (男性・壮年)
(The Nakazu-kyokanato TR0803-Y01, young adult male)

中津居館跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

中津居館跡は、山口県岩国市楠町三丁目に所在する平地に築かれた中世の居館跡である。今回、岩国市教育委員会の依頼により、岩国市教育委員会が実施した中津居館跡発掘調査の出土遺物の放射性炭素年代測定（AMS測定）を行った。測定対象試料は、計3点である（表1）。それぞれの出土状況等は以下のとおり。

試料① (IAAA-110789) …土器付着炭化物。居館北東部の外に設けたトレンチ（TR1002）で堀状遺構が検出されているが、本試料はこの堀状遺構の底で出土した陶器片（鍋）の外面に付着していたもの。付着状況から煤と見られる。

試料② (IAAA-110790) …木炭。南土壘に設定した土壘の断ち割りトレンチ（TR1004）において、土壘基底部（標高1.05m、地表から-2.05m）で採取された。本試料は、この土壘基底部で検出された土器集積100401の土に含まれていたもの。

試料③ (IAAA-110791) …炭化物（微碎片）。居館内部の南東エリアに設けたトレンチ（TR1003）において土器一括廃棄土坑（SK100310）と隣接して出土した土坑（SK100309）の埋土を土ごと採取し炭化物のみを取り出したもの。この土坑の埋土には多量の炭化物が含まれていた。

2 測定の意義

3点の試料の測定を行う意義は下記のとおり。

試料①…出土状況から推測して、堀状遺構が存続した期間に堀底に沈み、堀が埋められる時にそのまま包蔵された可能性が考えられる。この測定により堀状遺構の存続時期を推測する資料の一つとする。

試料②…南土壘の調査によって、この付近に関し、土壘は少なくとも3段階の工程を経て築かれていることが確認されているが、本試料は最初の工程で築かれた初期土壘における人工盛り土の最下層で検出されていることから、初期土壘の築壘開始時期を推測する資料とする。

試料③…本試料の採取された土坑（SK100309）は同一トレンチ内で見つかった大型建物跡（SB100301）の柱穴に近接し、建物跡の柱穴と土坑の掘り込まれた遺構面の時期差はさほど大きくないと見られる。隣接する一括廃棄土坑（SK100310）とあわせて大型建物跡の存続時期を推測する資料とする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、

0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置（NEC社製）を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) 、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によつても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCaly4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特

定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6 測定結果

3点の試料の¹⁴C年代および曆年較正年代（ 1σ ）は以下のとおり。

試料①（堀状遺構出土土器付着炭化物）… 540 ± 20 yrBP 1400～1426cal ADの範囲

試料②（土墨基底部出土木炭）… 610 ± 20 yrBP 1304～1393cal ADの間に3つの範囲

試料③（土坑（SK100309）出土炭化物）… 680 ± 20 yrBP 1279～1380cal ADの間に2つの範囲

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 1

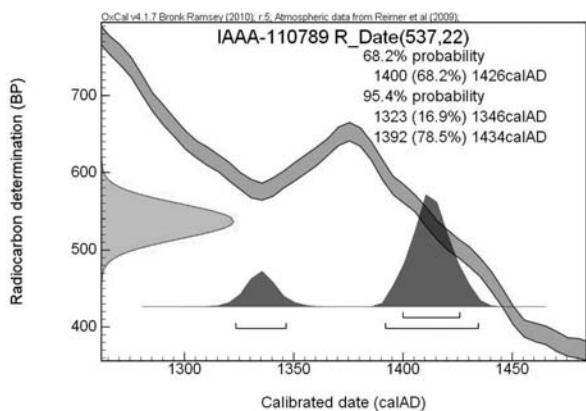
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-110789	①	TR1002 堀状遺構	土器付着炭化物	AaA	-25.47 ± 0.52	540 ± 20	93.53 ± 0.26
IAAA-110790	②	TR1004 土墨基底部	木炭	AAA	-23.51 ± 0.50	610 ± 20	92.67 ± 0.25
IAAA-110791	③	TR1003 土坑(SK100309)	炭化物	AAA	-32.87 ± 0.58	680 ± 20	91.84 ± 0.27

表 2

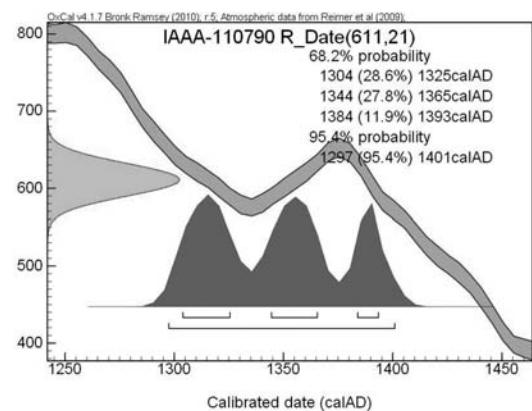
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-110789	550 ± 20	93.43 ± 0.24	537 ± 22	1400calAD - 1426calAD (68.2%)	1323calAD - 1346calAD (16.9%) 1392calAD - 1434calAD (78.5%)
IAAA-110790	590 ± 20	92.95 ± 0.23	611 ± 21	1304calAD - 1325calAD (28.6%) 1344calAD - 1365calAD (27.8%) 1384calAD - 1393calAD (11.9%)	1297calAD - 1401calAD (95.4%)
IAAA-110791	810 ± 20	90.37 ± 0.24	683 ± 23	1279calAD - 1299calAD (52.9%) 1370calAD - 1380calAD (15.3%)	1273calAD - 1309calAD (67.0%) 1361calAD - 1387calAD (28.4%)

【参考値】

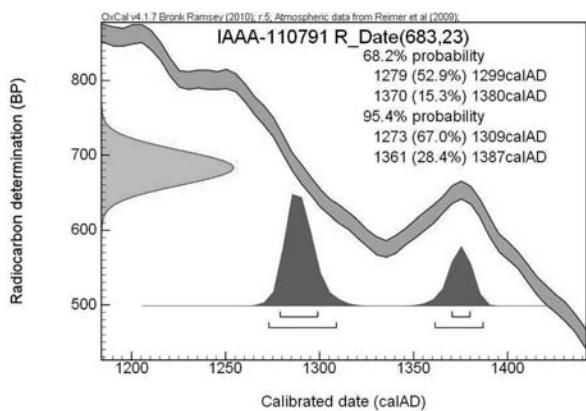
試料①



試料②



試料③



[参考] 曆年較正年代グラフ

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4), 1111-1150

VI 総 括

1 遺跡の現況

「中津居館跡」は、^{なかづきょかんあと} 四周を取り囲む土壘の基底部の外周が東西長約120～140m、南北長約130～170mの規模にわたって現存している（以下7ページ写真参照）。全体の平面形は、土壘の外周で西側約176m、東側約133m、北側約145m、南側約118mの規模のやや不整形な台形状を呈する。現存する土壘に囲まれた居館内の面積は約11,500m²、現存する土壘を含む全体面積は約20,000m²となる。北側が東側に向かって狭まっているのは、西側上流から東側河口方向に流れていた支脈河川の流路による制約を受けた地割が行われたことに起因する可能性がある。また、この北土壘に隣接して船着場などの付属施設が所在した可能性も考えられる。居館内は標高2.6m～3m弱の平坦面をなす。

現存する土壘の基底部は、現地表面から高さ約1m、幅約15～20mの規模である。土壘の北西隅では、現地表面との比高差約7m（標高9.9m）の高い盛土が約40mにわたり残存している。近世の絵図（Ⅶ資料編 絵図4-①②③④）や地域の年配者の証言によると近世以降～近代までの残存土壘は、少なくとも現存する高さよりも高く、近現代での上面削平が一段と進んだ結果が現在の残存状況であるといえる。北西隅に現存する高い土壘部（第4図、7ページ写真）は、もともと四周全体を巡っていた高さの名残であるのか、見張り台などの機能のためにこの周辺のみ一段と高く築造されていたのか、近世以降に別の目的で手を加えてこの部分のみ高くしたのか、など種々の可能性が考えられるが、表面観察からだけでは判断がつかない。なお、土壘の内側面・外側面には石垣が組まれている。これらは発掘調査での断ち割りの所見によると、現地表面に近い地下に石垣基底部があり、土壘内部の充填構造と明らかに異質であることが確認され、組み方や幅・高さなども不統一であって、近世後半から近代以降の土地利用等のために土壘上層を削平した際に、土壘内に充填されていた石塊を再利用して残存土壘側面を補強したもので、オリジナルな土壘に伴う構築物ではないと判断される。

東土壘中央部は、「くい違い」の形状の痕跡を留め、河口の海側に開かれた出入り口（虎口）として中世居館存続時にメインゲートの機能を果たした可能性がある。現在開放している西土壘の中央部の通路は、近世初期の寛文8年（1668年）の絵図（Ⅶ資料編 絵図1）には認められず、近世中頃の寛保元年（1741年）の絵図（Ⅶ資料編 絵図4-①）に、土壘を断ち割って通路として利用されていた状況が描かれていることから、居館当時の出入り口はこの東側中央部のみであったと推定される。

土壘（近世には築地として境界の役割をなす）に囲まれた居館内は、近世以降は岩国領主吉川家ゆかりの菩提寺であった瑞光寺境内となったが、近代以降の変遷により現状では北西の一角に薬師堂1棟がその名残を留めている。その他の居館内域は、宅地や畠地・果樹園などの民有地となっている。

土壘の外側には地上観察では堀が所在した形跡は確認できない。居館跡の様子を描いた近世初期の寛文8年（1668年）製作の現存する最古の絵図にも堀の描写は認められないことから、元来あったとしても居館存続時の早い段階に機能しなくなったり、廃絶直後に埋め戻されたりしたと考えられる。

以上、現況では土壘・居館内とともに、地上面での土地利用は一定程度行われているものの、基本的には地下遺構を損壊するような大規模な建築工事や土地改変は行われておらず、平地で市街地に所在する居館跡としては地下遺構が良好な状態で保存されている全国的にも稀少な遺跡といえよう。

2 発掘調査成果の概要（第8表）

第1次調査（平成20年度）、第2次調査（平成21年度）、第3次調査・第3次追加調査（平成22年度）の3年度にわたる個々の具体的な調査成果の詳細は、これまでの本文および調査成果一覧表（第8表）に示したとおりである。具体的な検出遺構として、掘立総柱建物跡（地下式礎石）1棟、土器一括廃棄土坑1基、土坑29基、溝4条、柱穴74個、土壘（砂・礫・山石の盛土）3ヵ所、堀状遺構2ヵ所、建物基礎石積（近世）1基、などが挙げられる。主な遺物は、土師器、瓦質土器、陶器、輸入磁器（青磁・白磁）、近世国産陶磁器、弥生土器、須恵器、土錘、近世瓦、鉄製品、鉄滓、銭貨、貝殻、人骨である。これらは大きく分けて、①中世の居館の時期に伴うもの（一部中世以前の遺物を含む）と②近世の瑞光寺境内の時期に伴うものの2種類に分けられる。

以下、これらの成果を要約するとともに特徴的な点についていくつか指摘や検討をおこなう。

（1）遺構について

①居館内部

a 中世段階の居館の状況（第4・8図、図版3～5）

居館内の状況調査のため、北西区画でTR0901・TR1001、TR0903、南西区画でTR0805、および南東区画でTR1003・TR1003-2、TR0801を設定した（第4図）。この結果、北西区のTR0901・TR1001（現中津薬師堂の隣接地）では、近世以降の後世の造成や土地改変・建物建築などにより、中世最終段階の遺構面と近世初期以降の造成面との境界において一定程度の搅乱・整地が行われ、中世生活面における明瞭な遺構が検出される状況ではなかった。

TR0901において、上層の近世以降の生活面からの深い掘り込みによる土坑基底（SK090105など）を除き、近世以降の遺物を伴わない造成層上面を面的広がりとして検出し、この生活面を中世最終段階の遺構面と判断した（第8図、図版3・4）。この生活面では、造成層中に中世土師器片を多く含むとともに、建物の礎石や根固め石として利用されていた可能性がある平坦面を持つ花崗岩の石塊がほぼ同一面上で検出された（第8図、図版4）。しかし、これらの石塊は、建物の基礎を構成するなど規則的に一列に並ぶ状況にはなかった。

TR0901・TR1001での発掘調査によって確認された原位置を留めない礎石痕跡などを伴う生活面の整地状況は、居館廃絶後に建物の解体や撤去が行われ、一定の空間整理・整地が行われたことを示すと考えられる。この遺構面が示す状況として、歴史的背景の詳細は後述するが、加陽（賀屋・賀陽）氏が厳島の合戦（1555年）後に駐留した政治状況に対応する可能性が考えられる（Ⅶ資料編 年表参照）。

この造成層より上層では、近世の陶磁器類などを含む近世以降の生活層が続き、近世中期、近世後期～幕末期の少なくとも2時期以上にわたる瑞光寺境内期の遺構が検出されている。

この中世末期の造成層をTR0901・TR1001の北・東・南側壁に沿ってトレンチ状に掘り下げて下層を確認した結果、標高約1m前後の自然堆積河床礫層（湧水点）から上層は基本的に赤橙色粘質土が混入したシルト質層（第8図9層）であることが確認された。この赤橙色粘質土が混入したシルト質層は、他の居館内のトレンチでは確認されておらず、TR0901・TR1001周辺域が本来、支脈的河川流

第8表 調査成果一覧表

調査年次・期間	トレンチ (TR)	調査位置	主な遺構等	主な遺物	主な成果	本文	図版
第一次							
平成20年7月28日～ 平成20年10月2日	0801 居館内部				○標高1.5m（現地表下70cm）で中世の生活面を確認。	27	
0802 土墨（南土墨）	土墨盛土構造	土師器 貝殻			○幅12m超にわたる盛土の規模と、外側に大型の花崗岩を大量に充填し、内側にシルトと砂利を盛土した特徴的な構造を確認。 ・外側半分に大型の花崗岩を充填し、土墨外側の崩落防止、および錦川の洪水を想定した補強構造を構成する。	38	16・17
0803 土墨（東土墨） および堀推定地	土墨基底部 堀状遺構	土師器 瓦質土器 人骨			○土墨外側基底部の補強構造・落ち込みを確認。 ・大型の礫を概ね敷石状に据えた土墨外壁の補強構造を確認。	42	20
0804 (東土墨外側)	堀推定地	土師器			○堀が存在したと推定される地点で、最下層の湧水点付近まで均質な埋土を確認。 ・一期期存在した堀が、成立後の早い段階で何らかの理由により埋められた可能性を示すとみられる。	46	20
0805 居館内部		土師器			○標高1.7m（現地表下70cm）付近で中世の生活層を確認。	27	5
第二次							
平成21年5月25日～ 平成21年9月4日	0902 土墨（北土墨）	土墨盛土構造	輸入青磁		○幅15m以上にわたって砂礫・シルトを盛土し、外側を大型の花崗岩を五重にして補強する盛土構造を確認。 ・同工法は、南土墨（TR0802・TR1004）、東土墨（TR0803）との共通点が認められる。	29	12・13
0903 居館内部		土師器			○現地表下70cm付近で中世遺構面を確認。居館に伴う明確な遺構は確認できなかつた。	17	5
0901 居館内部 (2ヵ所トレンチ隣接)	中世整地面 基礎石（根石）痕跡 建物基壇（近世） 廃棄土坑（近世） 土坑（近世）	土師器 土師器 近世陶磁器 瓦（近世）			○近世の堆積層直下で、砂礫を含む中世の造成層を確認。この造成層から、建物の礎石か根めに使用したとみられる大型の花崗岩を検出（石090101～090107・100101、SS090102・SS090103）。これらの石は廃絶後の居館の改変に伴つて原位置を留めていないとみられ、建物を構成する柱穴や礎石の配列等は未確認。	9	3・4・5
1001					○現地表下80cm付近まで、近世以降の氾濫堆積や土地造成に起因する堆積層がみられ、近世の瑞光寺に関連する建物基壇（SB090101）、大型の瓦集石（SS100105）とそれを囲む集石（SS100101）等を検出。土坑には瓦や近世陶磁器の破片が大量に含まれており、瑞光寺の改修か廃絶に伴う遺構と考えられる。		
第三次							
平成22年6月7日～ 平成22年10月26日	1002 堀推定地 (北土墨外側)	堀状遺構 土墨基底部	土師器 輸入青磁 瓦質土器		○北土墨の外で、自然堆積の砂礫層が緩やかに落ち込む堀状遺構を確認。 ○堀状遺構の底に堆積する粘質土層から、青磁・壺・瓦質の鋪などが出士。 ○残存土墨の下付近の現地表面下1.5m付近で、大小の礫を數き詰めた土墨基礎構造を確認。	41	18・19
1003					○中世の大型掘立柱建物跡（SB100301）1棟に伴う柱穴16個を確認。 ○上記のSB100301は柱間約2.4m（8尺）で、少なくとも東西4間（2.4m×4=9.6m） 南北4間（2.4m×4=9.6m）の規模を有する。 ○柱穴は中世遺構面を長径66～98cm、短径51～74cm、深さ52～60cmに掘り込み、柱底面には長辺約30～50cm、短辺20～30cmの花崗岩の平坦面を上に向けて据える（地下式礎石）。 ・地下式礎石は、建物が川の中州に位置し、地下水位の高い軟弱地盤に立地することによる、柱の不等沈下の防止措置とみられる。 ・建物跡（SB100301）の東辺から2mの位置にある東土墨の南北主軸はほぼ平行しており、土壘を意識した設計がうかがえる。	18	6・7・8・ 9・10・11
1003-2		大型掘立柱建物跡 土器一括墓土坑 土坑 (2ヵ所トレンチ隣接)	土師器 鉄滓 弥生土器 柱穴 溝		○建物跡南東隅の柱穴付近で、建物解体直後の遺構とみられる土器一括墓土坑を検出（SK100310）。土坑から吉備系土師器焼2点を含む約70点の14世紀前半代とみられる土師器（杯・皿）が出土。 ○中世遺構面では、土坑・溝・柱穴ほかを多數検出。		
第3次 (追加調査)					○土墨は、①基盤となる盛土、②基盤となる盛土の外側にに厚く堆積した氾濫堆積層、③氾濫堆積層の上に大型の礫を充填して人工的に築いた補強構造部分、の少なくとも3段階によつて構成される。 ○基盤となる盛土は居館内部から連続する中世遺構面の上に形成され、居館内部との関連性が確認された。 ○人工の盛土の最下部で、土師器約11点がまとめて出土（土器集積100401）。	33	14・15
平成23年3月29日	1004 土墨（南土墨） および居館内部	土墨盛土 土坑 土器集積	土師器				

路などで窪地となっていたところに中世段階に他の場所から搬入した赤橙色粘質土を混入させて埋めて整地した可能性も想定される状況であった。以下、堆積物については、本報告書所収の松田順一郎氏の堆積学に基づく所見報告を参考にしている¹⁾。

以上、この調査区内での調査状況からは、本来、河床礫からなる自然堆積の中州を造成し中世段階の居館の基盤面を構築して居館施設・建物の整備が行われ、中世末期に毛利氏方の加陽（賀屋・賀陽）氏により居館が占拠され、ある時期に廃絶された後、近世には瑞光寺の境内地として再利用された変遷過程が、発掘調査所見からも文献記載の出来事と符合する状況で確認された。

b 大型掘立総柱建物跡（SB100301）（第10～15・56図、巻頭図版2・図版6～11）

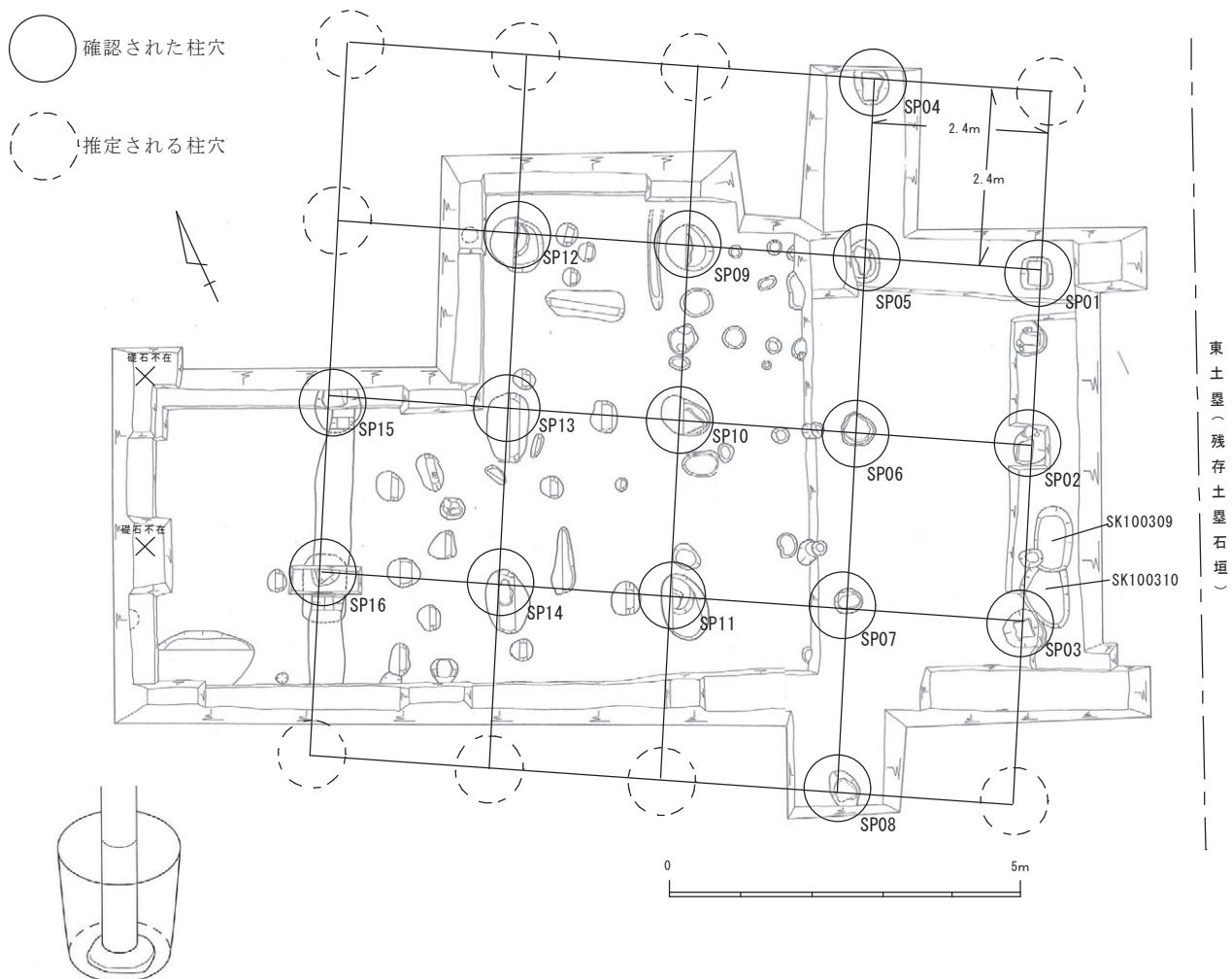
居館内南東区の調査区TR1003・TR1003-2において検出された大型掘立総柱建物跡（SB100301）は、未検出部分を含むものの調査範囲で現状確認された16個の柱穴掘り方および地下式礎石²⁾に基づくと、少なくとも柱間約2.4m（8尺）で、東西4間×南北4間（9.6m×9.6m）の床面積約92m²の規模を持つ掘立総柱建物跡になると推定される（第12・13・56図、巻頭図版2・図版6～11）。なお、建物西端柱穴SB100301-SP15とSP16の西側延長部2箇所で掘り方および礎石の有無を確認したが、地下式礎石痕跡はいずれからも検出されず、現状確認された西端が建物本体の西端と確定された。建物規模確認のため最大限、調査区をTR1003からTR1003-2へと当初より拡大したが、東方向および南北方向の延長部は現存する土塁や樹木・宅地境界等の既存構造物により調査区拡張が現時点ではできない範囲に当たるため、柱穴のさらなる延長の有無と最終的な建物規模の確定には至っていない。

柱穴の掘り方規模は長径66～98cm、短径51～74cmの橢円形で、柱穴の掘り方プランが検出された中世遺構面から深さ約52～60cm掘り下げられた基底部に一辺30～50cmの大きさで上面が平らな花崗岩が礎石として据えられている（地下式礎石）。礎石は、現時点での湧水点付近に当たる標高約1m前後の自然堆積の河床礫層中に据えられており、軟弱な地盤に立てられる柱の不等沈下を防ぎ、建物の安定性を保つための措置であったと推測される。

建物の南北方向軸は、東側に隣接して残存する東土塁の南北方向ラインにほぼ並行している。また、居館内全体での建物の立地は、東土塁中央付近に想定される出入り口（虎口）内側の南に隣接する。建物自体は、総柱という特徴を持つ掘立柱建物で規模も大きい。また、建物内部や周辺の遺構・遺物としては、鉄滓を伴う土坑（SK100313）（第12・16図、図版11）、土師器（杯・皿・椀）の一括廃棄土坑（SK100310）、炭化物を伴う土坑（SK100309）が検出されているが（第12・14図、図版11）、直接的に建物の性格を推定する手がかりとなる資料は確認されていない。

このため、建物の性格としては、主殿やその付属施設など居館主の直接的活動に関連する居住・賓客対応施設とは考えられず、貯蔵倉庫・収納保管施設や出入り口内の付属施設などとして経済・生産・流通・交流・監視等の居館内における付随的活動に関連する機能を持っていたと推定される。

ただし、現存する東土塁と大型掘立総柱建物跡との時期的・構造的関係については、土塁の断ち割り調査等による確認はされていない（大型掘立総柱建物跡の東端が現況のままか、さらに東土塁下に延びるかは未確定）。このため、東土塁と大型掘立総柱建物跡が並存する時期のものであるか、あるいは、大型掘立総柱建物跡が土塁よりも古い段階のもので、大型掘立総柱建物跡の廃絶後に東土塁が築造されたものであるのかなどの点については、最終的な確認には至っていない状況のもとで、留保



（文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』2010年 P175より転載）

第56図 大型堀立総柱建物跡(SB100301)配置図

付きでの建物の性格に関する推定であることを付言しておきたい。

次に、大型堀立総柱建物跡の時期については、近世の遺物を含む造成層の下層で検出された中世の土師器類のみを含む遺物包含層（第11・12図の4-1・4-2層）をさらに掘り下げた下層面で建物を構成する柱穴の掘り方プランがはじめて検出された状況から、近世以前の建物跡であることは間違いない。ただし、柱穴内からは、SB100301-SP10（93）、SP14（91・110）、SP16（92）でそれぞれ中世の小皿・杯の小破片が出土した以外には、いつの時期かを特定する基準となり得るような直接的な遺物の出土は認められなかった。

そこで、この建物の時期を比定する上で指標となるのは、土師器約70点（杯・皿・椀）を伴う一括廃棄土坑（SK100310）（第14・15図）である。この土坑は、建物跡の南東端の柱穴（SB100301-SP03）に隣接し、近世層下層の中世の遺物（土師器）からなる遺物包含層（第12図の4-1・4-2層）を掘り下げた後の下層面で検出された。隣接する炭化物を含む土坑（SK100309）に切られているが、これともさほど時期差を伴わないと推定される検出状況であった。一括廃棄土坑（SK100310）出土土

器については後述するが、14世紀前半代に比定される。

ここで、調査手順と出土状況について補足説明をしておく。当初設定した調査区トレンチ（TR1003、東西4m×南北7m、第10図）における調査過程において、SB100301-SP05付近を一部掘り下げた坪掘りで偶然にもSP05の礎石を検出した。その後、最下層まで掘り下げた時点で初めてSB100301-SP05～SP07の等間隔に1列に並ぶ礎石を検出した（第11図）。これを受けて、SP05～SP07に対応する礎石が所在するかどうかを確認するために、当初の調査区トレンチの東側壁際ぎりぎりの位置で、東側壁の一部をSP05～SP07に対応する箇所のみに限定して四角く局部的に最小範囲のみ拡張して掘り下げる調査方法を取った。その結果、礎石の所在が確認される（SB100301-SP01～SP03）とともに、SB100301-SP03に隣接して土師器集積の形跡が断面でわずかに確認されたため（図版9左2段目）、当初の調査区トレンチ（TR1003）を現存する東土壘のぎりぎりまでさらに約1m程度東側に拡張して平面的に掘り下げて遺構の残存状況を追加調査することとした。以上の調査過程をたどったことにより、隣接する大型掘立総柱建物跡の柱穴（SB100301-SP03）と一括廃棄土坑（SK100310）の切り合い関係を平面的に明瞭に検出する以前に、礎石部分のみ部分的に掘り下げる結果になったため、周辺全体を検出した段階で、改めて遺構の切り合い関係を精査した。

その結果、一括廃棄土坑（SK100310）内に集積した土師器類が、柱穴（SB100301-SP03）の掘り方の掘り込み面よりも上に覆い被さるように堆積している状況が観察されるとともに、柱穴（SB100301-SP03）の掘り方が廃棄土坑の淵を明瞭に切って掘り込まれている状況は確認されなかったことから、現時点では、大型掘立総柱建物跡の柱穴（SB100301-SP03）の廃絶後、間を置かず、土師器類が一括廃棄されたものと判断している（第14・15図、図版11）。このため、一括廃棄土坑（SK100310）出土の土師器類は、この建物の存続年代の下限を示す一括資料として重要と判断される。

以上により、隣接する各遺構の関係は、大型掘立総柱建物跡（SB100301）→一括廃棄土坑（SK100310）→炭化物を含む土坑（SK100309）の順番に古いものから新しいものへと位置づけられると現時点では推定される。ただし、上記のような調査経緯をたどったことから、今後のさらなる調査等によって、土壘を含めた遺構の前後関係の整合性を詳細に検討することが可能な資料が追加された際に、前後関係の解釈変更の可能性もあり得る点を留保する。なお、これら隣接する遺構は比較的狭い時期幅での切り合い関係に収まると判断される出土状況ではあったことを付言しておきたい。

②土壘

a 構造（第19～27・57図、図版12～17）

土壘の構造・築造時期などの情報を得るために、北土壘でTR0902、南土壘でTR0802、TR1004、東土壘でTR0803の各調査トレンチを設定した。これらのトレンチでの土壘断ち割り調査により、土壘構築上のいくつかの特徴が明らかになった。

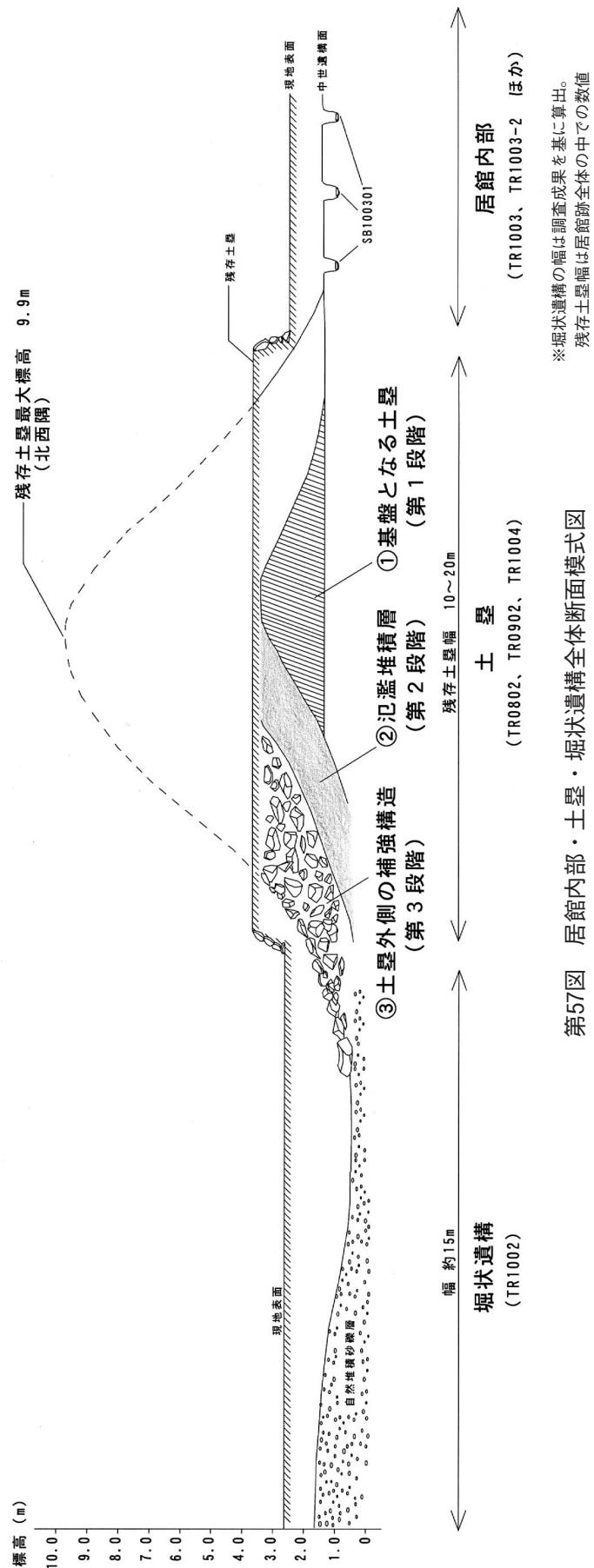
TR1004の土壘構造（第23図、図版14・15）を典型とすると、第1段階は均質なシルトや川砂が何層にも重なり椀を伏せたような小山状を呈する盛土層、第2段階は第1段階の盛土の外側に厚く堆積した氾濫堆積砂層、第3段階は第1段階の盛土層と第2段階の氾濫堆積砂層の上を覆うように内側に砂礫、外側に大型の花崗岩質の山石を充填して土壘を拡張した盛土層、の少なくとも3段階の構築段

階が確認された（第20図TR0902、第23図TR1004、第26図TR0802、図版12～17）。このうち、第1段階の基盤層の下層（第23図TR1004のBブロックの9A-①～④）については、自然堆積段丘がベースになっているとの堆積学所見も示されており、その上層に人工的盛土をし、全体として椀を伏せたような小山上を呈する形状になっているとも考えられる。また、第1段階の川砂盛土の頂点部に作業工程において矢板が埋め込まれていたと見られる痕跡が確認された（第23図TR1004の8A'層、図版15左3段目）。矢板は第1段階の盛土成形の後に頂点部から抜き去られた模様で、抜き取り痕に砂が流れ込んでいる形跡が観察される。

この3段階にわたる築造工程が、①短期間（1～数年単位）の一連の築造作業での工程段階を示すものか（工程差説）、②3段階の時期差（10～100年単位）を伴う土壘の順次増築・発展過程を示すものか（時期差説）、限られた調査範囲での土層や堆積状況の観察および土壘砂層中からの少量の出土遺物からだけでは明確に判断を下す状況には至っていない。ただし、後述するように第2段階と第3段階の時期差はあまりないと考えている。

第2段階の氾濫堆積砂層は、洪水などにより一気に第1段階の盛土層を覆うように形成されていることが堆積学の所見として松田順一郎氏により報告されており、大規模な土壌構築には一定程度の年数を要すると考えられることからも、第1段階の築造過程の途中または完成後において少なくとも大規模洪水に見舞われ氾濫堆積層が形成された1シーズン以上の期間を経て第3段階工程の築造作業が行われたことは検証できるといえる。また、第2段階の氾濫堆積砂層による被害を受けて土壌をそのまま放置したとは考えにくく、第2段階と第3段階との時期差はさほどないと考えられる。復旧・補強のための第3段階の築造作業にいち早く着手されたと見ることは合理性がある。

第3段階の土壘外側の上層から基底部に至るまで大型の花崗岩質の山石が大量に充填され補強されている



第57図 居館内部・土塁・堀状遺構全体断面模式図

土壘構造は、北土壘TR0902（第19・20図、図版13）および南土壘TR0802（第26・27図、図版17）で顕著に確認された。大小の山石が充填されている土壘外側の構造は、堀の状況を確認するために設置したTR1002南端の北土壘外周直下（第28図、図版18・19）や東土壘TR0803の基底部でも同様に検出された（第29図、図版20）。

こうした土壘構造は、錦川河口の中州に立地し、しばしば河川の洪水氾濫の被害を受けやすい環境に所在する居館を自然災害から防御するために、土壘が崩落しないように土壘外側に石塊を充填して強化し、かつ基底部が洗い流されないように表面を石塊で覆う河川土木工法が採用されていることを示すと考えられる。これらの石材は、ほとんどが直径30～50cm大の花崗岩で、風化が進行してもろくなり自然に割れた状態のものを加工することなくそのまま使用してあった。居館跡の北側を流れる今津川の対岸の今津・室の木地区、および南側の門前川対岸の門前・牛野谷地区の丘陵地帯は地形分類上広島花崗岩³⁾の分布する地域であり、これら近辺の丘陵が花崗岩の調達先になったことが岩石学の専門家の所見として推定され、こうした地域から多くは舟運により搬入されたものと考えられる。

中世期から近世期にかけて瀬戸内海から畿内に至る河川に関わる堤防や護岸工事のための石材補強工法の事例として、川西遺跡⁴⁾（徳島県徳島市）や宇治川太閤堤跡⁵⁾（京都府宇治市・国史跡）が知られ、関東でも甲斐の信玄堤と呼ばれる治水土木工事が行われるなど中世から近世はじめにかけて河川治水工事技術の発展が全国的に認められることから、本居館の土壘構造も当時の河川土木工事技術の情報ネットワークや技術者集団の交流を背景として採用されたものと推定される。今後、類似の調査事例が蓄積され、当時の土木技術の系譜や各地方有力者間での技術交流の伝播の状況について考証されることが期待される。

b 時期

次に土壘の築造時期を推定する資料について検討する。TR1004の南端に近い土壘基底部付近から廃棄された土師器類11点（皿70、杯71～80）が一括出土した（第24図、図版15）。土器集積100401出土のこれら土師器は、TR1004南端の中世整地面（第23図のAブロック黄色部分）が南側へ落ち込む緩斜面（または中世以前の自然の落ち込み、いずれにしても土壘の盛土以前、第23図のTR1004の土層11・12-①②）とその緩斜面上に盛られた土壘盛土との境界面で検出されたことから、層序的には南側土壘築造直前の時期に相当すると判断される出土状況であった。

この土師器については、器形的にはTR1003の大型掘立総柱建物跡（SB100301）に隣接した一括廃棄土坑（SK100310）出土の土師器杯（16～49）と比較的類似する型式で時期的にも近いものとみて大過ない。ただし、土器集積100401出土の杯（71～76）は、口径平均12.8cm、器高平均4.7cmとなり、一括廃棄土坑（SK100310）の杯（16～49）の口径平均12.2cm、器高平均4.0cmよりもやや大ぶりで器壁も厚手であり、少しばかり古い様相を示す。後述するように、このことは、土壘築造前の時期に廃棄されたと見られる土師器の出土状況と、土壘に囲まれた居館内に建てられた大型掘立総柱建物跡の廃絶後に一括廃棄されたと考えられる土師器の出土状況の時期的前後関係にも適合する。

また、他のトレンチの中世時期の遺構面や整地層から出土した土師器杯にも同様な器形のものが散見される（105・114・117など）。これら在地系土師器はこれまでの編年観からは14世紀代に比定され、この廃棄された土師器類と共に伴して出土した炭化物を放射性炭素年代測定（AMS測定）法で分

析した結果（V関連分野報告・分析参照）、14世紀代の年代に同定されたこととも整合性が認められる。

居館内の生活遺構面と土壘との関係について、南土壘から居館内を横断するTR1004で断ち割り調査に基づく検出中世遺構面と土壘盛土との層序観察にからは、居館内部の黄褐色砂質土の中世整地面（第23図11層、Aブロック）の上に土壘第1段階のシルトや川砂層（第23図9A・8A層、Bブロック）が盛土されている状況がうかがわれた。この中世整地層を部分的に掘り下げて下層を確認したところ、標高約1m前後で自然堆積の河床礫（第23図13層）が検出された（湧水点に到達）。このためこの最下層の無遺物の自然堆積河床礫（第23図13層）から層序関係をたどると、その上層には洪水などで運ばれたシルト層の細かい砂粒からなる自然堆積層（第23図12②層、Aブロック）が重なり、さらにその上層から畠地利用や整地などの人為的活動の痕跡がわずかにうかがわれる砂質土層（第23図12①層、Aブロック）、続いて土壘が盛られる直前の中世基盤層（第23図11層、Aブロック）が形成されている。この層序関係はTR1003・TR1003-2で観察された層序関係とも一致する（第12図）。なお、こうした居館内での土地利用の考古学的変遷過程は堆積学の所見とも整合性が得られる。

以上から、居館内部の中世面と土壘との一体的な同時期性は、TR1004での断ち割り調査により一定程度担保されたといえるが、今後のさらなる他の調査箇所での検証が求められる。

総じて、調査を実施した北土壘・南土壘・東土壘に設定したいずれのトレーナーで観察される盛土構造も場所により部分的に多少の相違はあるが、基本的には共通性が認められる。このため、未確認ながら西土壘も含めて現存する土壘は最終段階においては、同様な盛土構造を持ち四周围を巡る一体の土壘として、居館内部の施設・建築物とともに居館全体を構成したと考えられる。

③堀状遺構（第28～30・57図、図版18～20）

土壘の外側に堀が存在したかどうかの確認を目的として、TR0803、TR0804、TR1002を設定して調査に当たった。

北土壘に接するTR1002（長さ約21m、第28図、図版18・19）では、土壘基底部から北側に一旦落ち込み、自然堆積の砂礫層が緩やかに立ち上がりしていく状況が断面観察された。砂礫層は中州を形成する河床礫である。土壘基底部の立ち上がり基点から砂礫層（第28図28層）の傾斜転換点までの（堀）上幅は約18m、落ち込みの基底幅約6m、基底と砂礫層頂点との高低差（深さ）は約1mである。基底部は、現地表面（標高約2.6m）下約2mの標高約0.6mで湧水点に達して河床礫となり粘土などの沈殿した厚い堆積層は認められなかった。このため、粘土が沈殿するような閉塞的滞水状況であったと考えるよりも河川の流水等により粘土や砂粒が一定程度流される開放的な窪地であったと推定される。このように、TR1002の範囲での北土壘外側において、断面形状からは明瞭な「堀跡」と確定するには至らないものの自然堆積層（第28図28層）の上面が堀状の落ち込み形を呈することから「堀状遺構」として捉えた。自然堆積層との混合土（第28図26層）の直上のオリーブ褐色砂質土層（第28図20層）から少量ながら中世の14世紀半ば以降と見られる輸入青磁（234）や14～15世紀代の陶器甕（230）、瓦質土器鍋（225）などが出土している。その上層は人為的に一括で埋められたと見られるオリーブ褐色砂質土層（第28図19・16層）であり、さらにその上層黄褐色砂質土（第28図15層）から現地表面（第28図1層）までは近世以降の畠地や耕作地としての土地利用の様子がうかがわ

れる。

TR1002南端では、土壘基底部の立ち上がり部から堀状遺構の落ち込み部側にかけて、花崗岩を敷き詰め充填して土壘の土崩れを防ぐ補強工事が行われていることが確認された（第28図、図版19）。北土壘のTR0902、南土壘のTR0802・TR1004、東土壘のTR0803での断ち割り調査によって土壘外側で確認された花崗岩充填工法が、土壘外側の最基底部にも施されていることの検証にもなった。

また、土壘構築には大量の砂礫が使用されており、堀状遺構には、その盛土採取のための土取りを兼ねた副次的産物として的一面もあると考えられる。

居館の立地そのものが川の中州に位置するという特殊条件により、既に標高が低くすぐ湧水点に達する点、基盤土が砂礫で堀状の窪みの土壘側およびその反対側の立ち上がり部ともに崩れて埋もれやすい点、洪水などにより埋没しやすい点、川そのものが自然の防御機能や周囲との区画境界機能を果たしておりあえて本格的な堀構造を要しない点、などの諸要因から明確な堀構造が構築されず、かつて所在していたとしても明瞭な痕跡を留めにくい状況を生み出しているのではないかと推察される。

土壘基底部の花崗岩の貼り石・充填構造と一体で堀状の落ち込みが形成されたと見られることもあわせて、堀状遺構は、中世期の居館・土壘に伴うものと判断される。

なお、TR0803（第29図、図版20）での所見によると、TR1002南端の土壘基底部の立ち上がり部から堀状遺構の落ち込み部側にかけて確認された花崗岩を敷き詰め充填して土壘の土崩れを防ぐ補強工事が東土壘外側基底部でも同様に施されている状況が確認された。さらに、その外側の東に設定したTR0804（第30図、図版20）では、最下層（湧水点）に粘質土堆積層（第30図8層）が認められるところから、東側については土壘の外側に堀と見られる遺構が所在する可能性もある点を指摘しておきたい。

一方、居館跡の近世絵図では、居館跡が描かれた寛文8年（1668年）の最古の絵図（Ⅶ資料編 絵図1）では土壘の描写は見られるが、堀の形跡を示す描写はない。このため、もし所在していたとしても居館築造の早い段階または居館廃絶後間もない16世紀後半代には埋め戻されていたと考えられる。

いずれにしても、土壘外側でのトレンチ調査は限られた地点での狭い範囲での所見であるため、今後さらなる追加調査の成果により、土壘四周外側での堀の所在の有無について判断する必要がある。

④近世以降の遺構

中世の遺構面より上層では、近世になり吉川家ゆかりの瑞光寺境内となって以後の土地利用により形成された土坑（SK090105）、溝（SD100301）、建物跡（SB090101）の基礎石積などの遺構が検出された。土坑からは、当時使われて一括廃棄された陶磁器類が数多く出土した。溝は、東土壘に沿って北から南に流れており、寛保元年（1741年）の絵図（Ⅶ資料編 絵図4-①）に描かれた溝に一致する可能性がある。建物基礎石積（SB090101）等は、瑞光寺に関わる遺構で、18世紀後半に建て替えられた記録⁶⁾や薬師堂の新旧建て替えに伴う寺域の変遷過程を反映したものと考えられる。中世居館廃絶後から中世末期を経て近世の瑞光寺境内としての利用に至る歴史的変遷を物語る遺構であり、岩国における近世期寺院の発掘調査の先例となった。

（2）遺物について

①中世（含中世以前）

a 出土遺物からみた居館跡の展開

弥生土器（1・2）や須恵器甕（3）の破片が出土し、周辺からの流れ込みと見られるが、中州の形成とこの地での人的活動の開始時期を考える上で一つの資料となろう。

土師器は、中世遺構面や遺物包含層、造成層、遺構（一括廃棄土坑SK100310）、土器集積100401などから破片やまとまった状態で出土した。在地系土師器が大半で、器種は杯が多くを占め、皿・碗が少量を構成する。金色を呈する黒雲母粒子を多く含むことを特徴とする赤褐色胎土で焼成も良好なものが多い。色はにぶい黄橙色と橙色の2種類に分けられる。底部は回転糸切り痕が見られ、器壁にはロクロ回転痕が明瞭に残るものが多い。規格性が高く、地元で一括生産されたものと考えられる。

吉備系土師器碗（14・15）⁷⁾は、断面三角形のかなり退化した高台と口径10cm未満に小型化した粗製化傾向が見られ、14世紀前半代に編年されるもので、居館の築造年代に近いと判断される。

他に14世紀以前と見られる土師器碗（157・158）、和泉型瓦器碗⁸⁾（159）の小片や土師器の鍋（219、14世紀代）・羽釜（220・221、13～14世紀代）・火鉢片（226菱形文様、227脚部）などが少量出土した。11世紀後半から14世紀半ばまでの輸入青磁（233・234）・白磁もある。

出土遺物の傾向として、平安時代後期～鎌倉時代のやや古い時期のものを含み、14世紀代を中心とする中世前期（室町時代）の遺物が主流を占め、中世中後期の15～16世紀代の出土品が少ない。

このことは、居館の築造開始年代やその後の存続時期を検討する上で、示唆を与える現象といえよう。すなわち、遺構の検出状況からも、中世時期の遺構面と近世時期の堆積や造成による遺構面との間に中世の土師器を含む薄い遺物包含層が検出されているが、この遺物包含層中には中世前期の特徴を持つやや厚手で器高が高い土師器杯が中心的に含まれ、薄手の器壁で器高がやや低い中世後期の特徴を持つ土師器杯があまり見受けられない傾向が示される点である。このことは輸入磁器についても中世前期以前のもので構成され、中世後期の青磁や景德鎮青花などの出土が見られず、瓦質土器についても中世後期の15～16世紀代に山口県域で広く出土が認められる足鍋などの出土量が少ない。

全体的傾向として、中世前期の遺物が多く、祝宴などの儀式に使用されたと見られる杯類の出土が多くを占め、鍋・釜などの煮炊具・調理具の出土が比較的少ない。なお、広い居館内での発掘調査箇所と面積が限られていることや、居館内での目的による空間利用の違いなどの要因により、器種構成や出土する時期の遺物に偏りが生じる可能性があるため、上述の傾向は一概には結論づけられないことを付言し、今後の調査に委ねたい。

また、検出状況には不明な点があるものの、中世の男性人骨が見つかり、山口県東部における中世の人類学的研究（本報告書掲載の松下孝幸氏報告参照）に資するデータを提供することになった。

b 一括廃棄土坑（SK100310）出土の土師器についての検討（第32～34・58図）

ア 年代観

一括廃棄土坑（SK100310）出土の土師器類のうち、個体識別できたものとして在地系土師器の杯（54点）・皿（10点）、吉備系土師器碗（2点）がある。在地系土師器は、金色を呈する黒雲母（いわゆる金雲母）を多く含むことを特徴とする。色調は、「にぶい黄橙色のもの」と「橙色味が強い（赤橙色の）もの」とに分類され、白色系のものは見かけず、焼成は良好である。

復元品を含み全体器形が計測可能な杯（16～49）の平均法量は、口径12.2cm、底径6.2cm、器高4.0cmで、底部から口縁にかけて内湾せず外開きに直線的に立ち上がる形状を呈する。器形としては、中世後期の緩やかな立ち上がりで器高が低い杯に比べて、外開きの立ち上がり角度がより急傾斜気味で器高も高い中世前期の杯の特徴を有している。体部にはロクロ回転痕が残り、底部はやや厚手で裏には回転糸切り痕が認められる。

皿（4～13）は、口径7.3cm、底径4.9cm、器高1.1cmの平均法量で器高の低い小皿である。底部の厚いものと薄いものがある。底部は回転糸切り痕や粘土柱からのヘラ状工具による切り離しの痕跡（回転ヘラ切り痕）が認められるもの（5・6・7・12）もある。

以上、在地系土師器は、極めて齊一性が高く、同系製作工人または集団による規格品として地元で一括生産されたものである可能性が高いと考えられる。

以下、中津居館跡SK100310出土の杯（16～49）について、器形的に類似し、時期的にも近く、これまで山口県内の中世土師器杯の編年の標準とされてきた出土資料を取り上げて編年比較の対象とする。長門国府跡忌宮地区B地点LW001⁹⁾（下関市、長門国）および奥正権寺遺跡第IV地区SD-2¹⁰⁾（防府市、周防国）の一括資料の杯である（第58図）。

長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土資料については、近年、その年代観について見直し案¹¹⁾が提示されている。共伴遺物としては、瓦質土器鍋・擂鉢、常滑・備前系と見られる甕・壺など、本書掲載資料以外にも数多くの土師器・瓦質土器・陶器類が出土している。

法量分析対象とした資料は、本書掲載資料のうち、LW001報告書の中で、同一製作人によると考えられると報告された一群の杯27点（LW001報告書第6図88～107、第7図1～7）で、系統が異なると報告された3点（第7図8～10）は除いてある。なお、法量は報告書掲載図をもとに縮尺換算で計測して割り出した数値¹²⁾であり、多少の誤差は含み得る。

奥正権寺遺跡第IV地区SD-2出土資料は、共伴遺物に土師器皿・土師器足鍋がある。土師器足鍋は、LW001出土資料とともに山口県を中心とする足鍋編年の基礎資料としても分析対象にされてきた。法量分析対象とした資料は、杯22個である。法量は報告書の出土土器表に従い、一部数値の誤記は掲載実測図から割り出した数値で補正した。

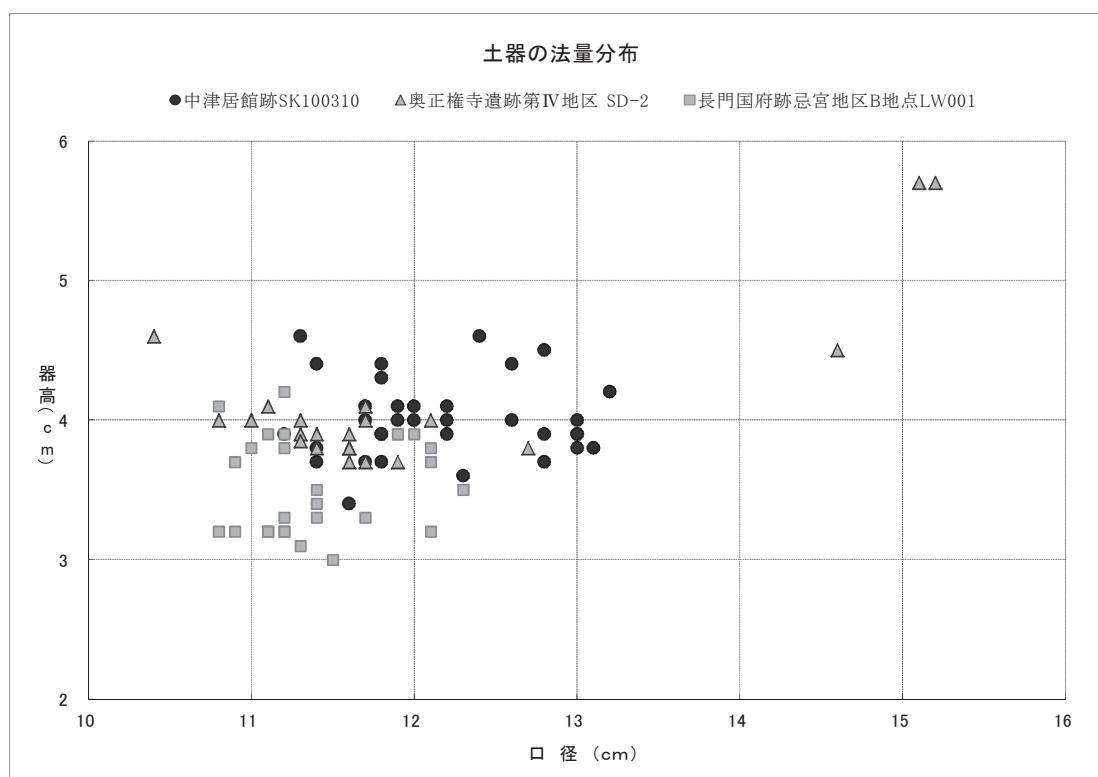
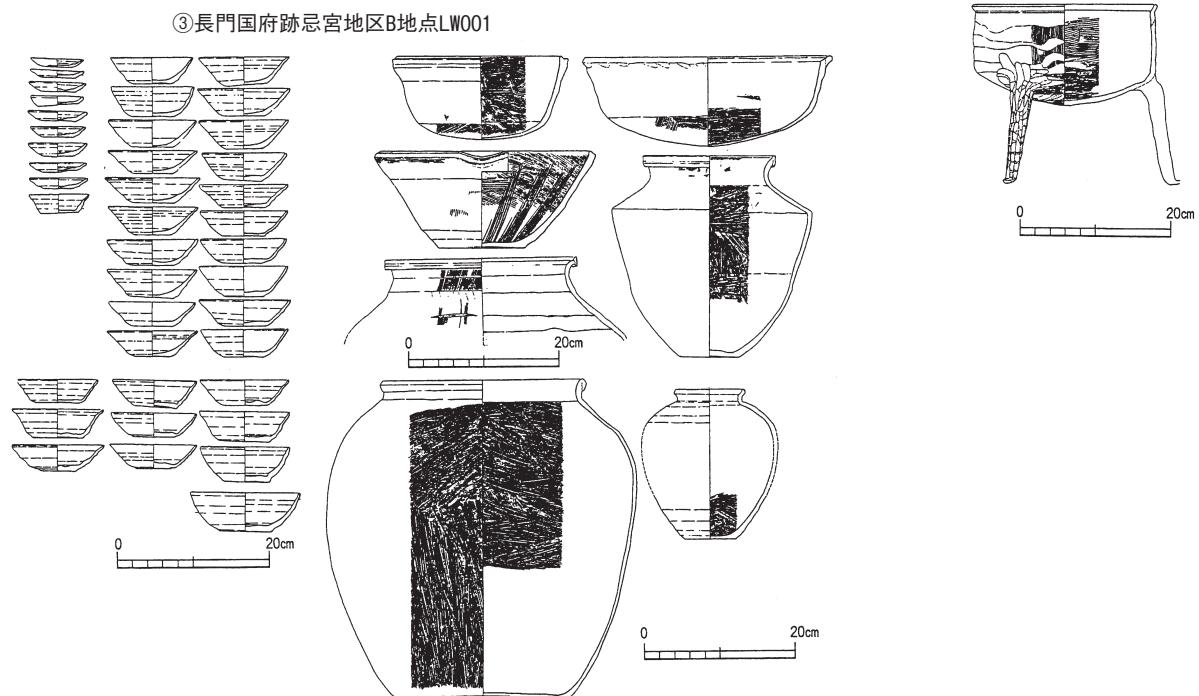
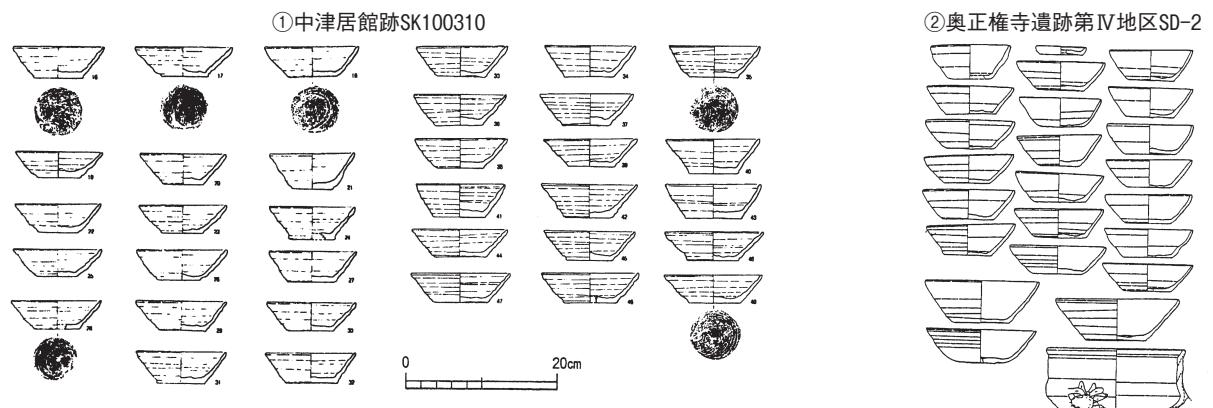
中津居館跡SK100310出土の杯34個については、復元値のものも含む（詳細は第3表遺物観察表による）法量値であり、多少の誤差を含む可能性があるが、分析対象個体数が多く全体的傾向は大きくは変わらないと判断される。

以上の作業を経て、これら3遺跡出土杯について、それぞれ口径と器高の比率をグラフ化¹³⁾したのが、第58図である。

中津居館跡SK100310出土の杯34点については、口径は11.2～13.2cmで、平均12.2cmとなる。器高は3.4～4.6cmで、平均4.0cm。

奥正権寺遺跡第IV地区SD-2出土の杯22点については、口径は10.4～15.2cmで、平均12.0cmとなる。器高は3.7～5.7cmで、平均4.1cm。なお、口径・器高とも法量の点で大きく、分布の一群を離れ別型式に分類できる3点を除いた19点での口径平均は11.5cmで、器高平均は3.9cmとなる。

長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土の杯27点については、口径は10.8～12.3cmで、平均11.4cmと



第58図 一括廃棄土坑(SK100310)と他の遺跡出土土器の法量分布図

なる。器高は3.0～4.2cmで、平均3.5cm。

以上の結果による3遺跡出土の杯の法量分布の相関関係（第58図）において、「中津居館跡SK100310出土の杯」→「奥正権寺遺跡第Ⅳ地区SD-2出土の杯」→「長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土の杯」へと「口径が大きく器高が高い」ものから「口径が小さく器高が低い」ものへの型式変化をたどることができる。

これまでの研究成果に基づく中世土師器杯についての編年観によれば、一般的には器高は時期が新しくなるにつれて高いものから低いものへ、口径も小さくなり、器壁は厚いものから薄いものへと型式変化をたどる傾向が指摘されている。

これら3遺跡は、山口県西部、中部、東部と距離が離れているという地域差を考慮に入れるにしても、上記の全国的傾向からすれば、「中津居館跡SK100310出土の杯」→「奥正権寺遺跡第Ⅳ地区SD-2出土の杯」→「長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土の杯」という流れで、型式的に類似性を持つ一群の中での古相→中相→新相へと時期差を伴う相対的型式変化の傾向を指摘できる。

次に、相対編年に対応する実年代について検討する。「長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土の杯」については、従来、関東御教書に記載された延慶2年（1309年）の火災と関連づけて解釈され、14世紀初頭の資料とされてきた。しかし、古賀信幸氏¹⁴⁾は、大内氏館跡出土土師器等に基づく編年における大内I期（15世紀前葉～中葉）の資料との時間的隔たりなどの観点から14世紀後半が妥当だと指摘を行った。また、小南裕一氏は、「長門地域の中世土師器編年試案」¹⁵⁾において、この資料について相対編年Ⅳ期に分類し、14世紀後半～15世紀前半に推定実年代を当て、古賀氏の年代観を追証した。なお、小南氏は、Ⅳ期のLW001出土の杯の前段階を相対年代Ⅲ期とし、14世紀前半～中葉を当てているが、実年代決定に使用できる資料については今後の増加を待ちたいとしている。

こうした中で、法量分析の結果、「中津居館跡SK100310出土の杯」は、「奥正権寺遺跡第Ⅳ地区SD-2出土の杯」を挟んで「長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土の杯」へと型式変化する中での最古相に位置づけられることから、小南氏の相対編年を援用すれば、相対年代Ⅲ期に相当する基準資料となると考えられる。小南氏のⅢ期には14世紀前半～中葉が当てられており、「中津居館跡SK100310出土の杯」の年代観として、ほぼ妥当なところと考えられる。

一方、「奥正権寺遺跡第Ⅳ地区SD-2出土の杯」、「長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土の杯」にそれぞれ共伴する足鍋の編年観において、岩崎仁志氏¹⁶⁾は、14世紀中葉ないし後半に比定している。こうした共伴資料の年代観からも、法量分析によって古層に位置づけられる「中津居館跡SK100310出土の杯」が、上記2資料より古相の傾向があることから、少なくとも14世紀前半～中頃に相当すると見ることは整合性がある。

これまで、山口県における中世土師器杯の編年研究史において、長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土一括資料については、14世紀初頭（火災記事に結びつける）とする年代観から14世紀後半～15世紀前半とする年代観までの幅があり、共通認識を得られていなかった。しかし、「中津居館跡SK100310出土の杯」をベースにした以上の県内3遺跡出土資料のみに限定した範囲内の比較検討の結果からは、上記3氏の年代観を踏まえ、「長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土一括資料のうちで報告書掲載資料の杯（未報告資料全体を含めての検討は要するが）の年代については、14世紀初頭

までは遡らず、14世紀中葉ないし後半代以降の14世紀代に収まる可能性が高くなってきた」といえよう。ただし、山口県域での西部・中部・東部という地域差を考慮すること、後述するような瀬戸内海ルートや神社を通じての土器製作工人間の情報交換の可能性を検討すること等を通じてより分析を深めた上で検証を行っていくことが必要であろう。

なお、TR1004の土壙断ち割り調査において、土壙基底部付近から土壙築造直前の時期に相当すると判断される土器集積100401から出土した杯71~80は、計測可能なものの(71~76)で口径平均12.8cm、器高平均4.7cmで、SK100310出土の杯よりやや大ぶりで器壁もやや厚い古相に位置づけられる。このことから、杯71~80については、SK100310出土の杯の前段階に相当するともいえ、居館変遷史と県内土師器杯の編年のひとつの基準となる資料といえよう。

このほか、「中津居館跡SK100310出土の杯」には、山口県外比較の資料として、岡山県西部から広島県東部の瀬戸内海沿岸を中心に分布する吉備系土師器碗2点(14・15)が共伴している。平均法量は、口径9.9cm、底径4.1cm、器高3.1cmで、白色系の胎土である。断面三角形のかなり退化した高台が底部に貼り付けられており、口径も10cm未満に小型化して器面の調整・成形とも粗製化傾向が見られ、吉備系土師器碗の型式変化では後半段階に位置づけられる。鹿田遺跡での吉備系土師器編年Ⅲ-3期(14世紀代、山本悦世氏¹⁷⁾)に相当し、こうした吉備系土師器碗の型式に併行する草戸千軒町遺跡における土師質土器編年ではⅡ期前半(鈴木康之氏¹⁸⁾)に位置づけられ、実年代では14世紀第一四半期から第二四半期に相当すると考えられる。このため14・15は14世紀前半代のものとして捉えられる。

以上、一括出土資料として、山口県内の在来系土師器杯の年代観、共伴した搬入品としての吉備系土師器碗の年代観の2点からの検討の結果、相互の年代観に矛盾はなく整合性が取れ、結論として「中津居館跡の一括廃棄土坑(SK100310)出土の土師器について、14世紀前半代に比定することは妥当性が高い」といえる。

現時点では岩国市周辺域の山口県東部での比較事例は限られる(伊領原遺跡¹⁹⁾・向田遺跡²⁰⁾・吉毛遺跡²¹⁾など)が、安芸地域を含めた山口県内における中世土師器についてのより詳細な比較や吉備系土師器碗・備前焼などの搬入遺物の編年との比較などを行い、より精度の高い年代特定をしていくことが今後の課題として挙げられる。

イ 特徴

SK100310出土の皿など居館内出土の皿(5・6・7・12・127・130・132・135・136・139・141)には、一定量、底部に「回転ヘラ切り痕」が認められるものがある。一般的には、14世紀段階には回転糸切りが一般的で、回転ヘラ切りがこの時期まで遅く技法的に残ることは珍しい。こうした中、長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土の杯・皿にも回転ヘラ切り²²⁾が一定量見られるという観察所見がある。長門国分寺跡(西地区)LW121出土土師器にも見られるといい、長門地域の国府地域周辺の一部には14世紀代まで回転ヘラ切りが残る状況のようである。

長門国府周辺の忌宮神社および白崎八幡宮に隣接する中津居館跡からの出土土師器の中に、一般地域では回転糸切り技法が基本となり、既に行われなくなった「回転ヘラ切り」技法を使ったものが一定程度含まれることは興味深い。同じ14世紀代に神社という宗教施設に近い遺跡でこうした技法が遅

くまで残ることは、祭祀用など限定された用途のための特殊な土師器製作工人によって製作されたことも推定される。長門国西端の関門海峡に面する忌宮神社と瀬戸内海交易ルートで結ばれる白崎八幡宮との交易・技術交流に隣接する中津居館跡の関係者がかかわっていた可能性も想定される。

さらに、玉祖神社（防府市）に隣接する奥正権寺遺跡も含めて、同じ14世紀代の土師器資料出土地であるこれら3遺跡は、山口県（周防国・長門国）の西部・中央部・東部にそれぞれ位置し、西の豊前国、東の安芸国に接しており、こうした周辺地域との海上交通ルートを通じた相互の人的・物的交流の形跡を宗教的施設（地域拠点神社・寺院）に関わる政治権力や製作工人の技術交流の側面を考古資料から掘り起こしていく作業も課題となるのではなかろうか。

吉備系土師器椀は、瀬戸内海沿岸部を中心に分布²³⁾が見られ、中津居館跡のSK100301に伴う出土品についても在地系土師器に比べて出土点数が少なく、瀬戸内海に面する居館の立地状況から見ても海上交通の流通経路を通じて搬入されたものと理解される。

また、在地系土師器は、規格性があり原形を留めているものが多く、破損したものを隨時廃棄したものではなく、使用可能なものも多く含まれていることから、居館内でまとまった数の人々により使用されたことがうかがわれ、大型掘立総柱建物跡との位置関係や出土状況から見て、宴会や建物の廢絶儀礼の直後に一括廃棄されたものである可能性も指摘できる。吉備系土師器椀についても、人と共に移動し、儀式（宴会）など短期間の使用後に一括廃棄される事例が多いと考えられており、吉備津神社²⁴⁾の信仰に關係する使い捨て食器ではないかとする見方もある。

②近世

国産陶磁器では、肥前焼²⁵⁾やその系統の染付を中心に17世紀の江戸時代前期から19世紀の幕末・明治時代初期に至るまでの詳細な年代や器種が明らかになり、近世の岩国地域および城下町萩を始め山口県内の近世遺跡や九州・関西地域との交流を検討する上で貴重な基礎資料を提示した。

出土した瓦類（平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・道具瓦）は、瑞光寺の境内域であった17世紀後半の近世から近代初頭にかけての時期のものである。金属製品については、大半は近世の瑞光寺の時期のもので、建物に関する和釘が80%近い比率を示し、煙管や寛永通寶などの日常生活品も少量伴う。このほか、河川・海に近いことから魚網の錘として使用される土錘などの土製品が出土した。

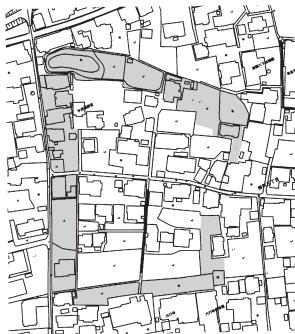
なお、貝殻は専門家の同定により、食用となる海水産であることが判明した（IV遺物参照）。

3 居館について

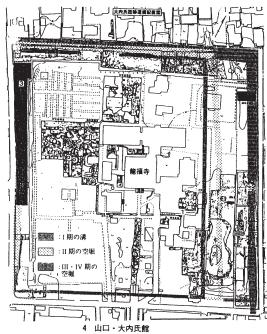
（1）中津居館跡の構造と特徴

①平地居館と山城等の関連施設との一体構造

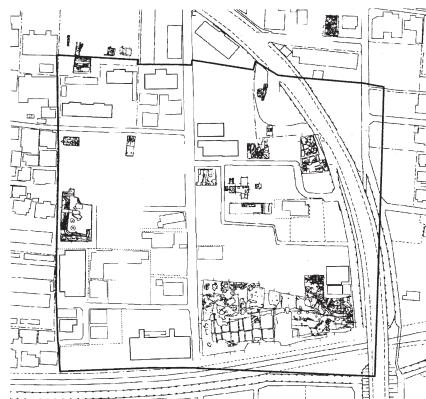
錦川を挟んで中州の平地に所在する中津居館跡と直線距離で約2km上流左岸に立地する連郭式山城（標高36m）である亀尾城跡（第1図⑧）がセット関係をなし、中世の典型的な城館を構成している。亀尾城跡の周辺に「城ノ前」、「船入」²⁶⁾などの地名が残り、中津居館跡と亀尾城跡の中間地点の錦川左岸に面して関所山城が所在するなど、河川・海・中州・山の自然地形と一体となった城館構成により、政治・経済・流通・防衛軍事等の機能を総合的に維持管理する体制が整えていたと考えられる。また、居館の北や南にも白崎八幡宮・喜楽寺等の宗教施設が所在しており、未確認ながら



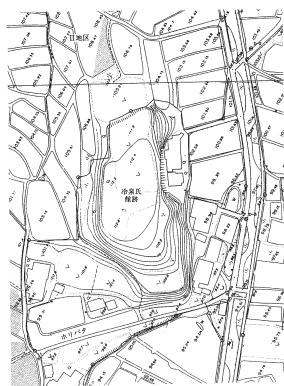
①中津居館跡
(岩国市)



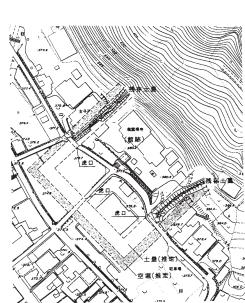
②大内氏館跡〔国史跡〕
(山口市)



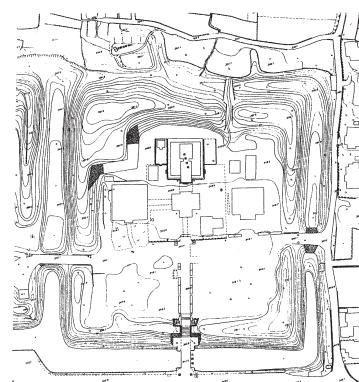
⑧大友氏館跡〔国史跡〕
(大分県)



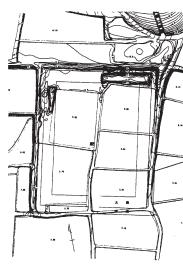
③冷泉氏館跡
(岩国市)



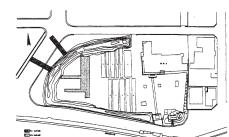
④江良氏館跡
(周南市)



⑨武田氏館跡 主郭〔国史跡〕
(山梨県)



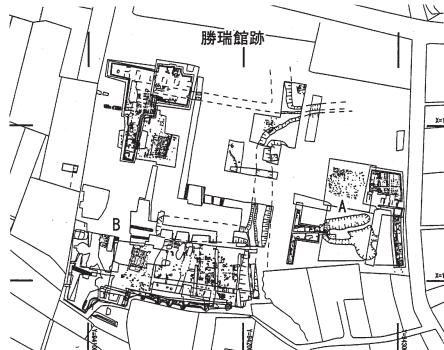
⑤三太屋敷跡
(下関市)



⑥勝栄寺土墨〔県史跡〕
(周南市)



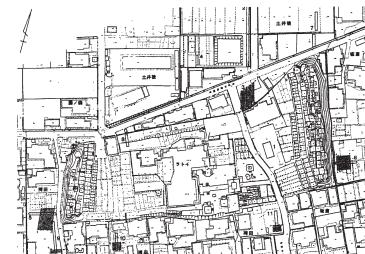
⑦岡田・江良遺跡
(萩市)



⑩勝瑞館跡〔細川氏・三好氏館跡、国史跡〕
(徳島県)



⑪朝倉氏館跡〔国史跡〕
(福井県)



⑫三宅御土居跡〔益田氏館跡、国史跡〕
(島根県)

山口県内

国内

0 (1/5000) 200m

第59図 中世平地城館跡の比較図

も家臣団の居住区や商業・手工業関連施設も一定規模で周辺に営まれていた可能性も想定される。

②大規模かつ中州に立地する特徴（第59図）

中津居館跡の大きな特徴として挙げられるのが、中世の一地域有力者の平地居館としては極めて規模が大きいこと、洪水被害のおそれがある河川の中州に立地すること、の2点である。

まず、第一の特徴である規模の大きさについて、検討してみよう。

a 政治的要因の検討

中世の周防・長門地域（山口県域）を治めた守護大名大内氏の拠点であった山口県には大内氏館跡²⁷⁾（山口市・国史跡）がある。このほか、一国規模の領域を配下に治めた守護所クラスの館跡として、全国的には大友氏館跡²⁸⁾（豊後国、大分県・国史跡）、武田氏館跡²⁹⁾（甲斐国、山梨県・国史跡）、朝倉氏館跡³⁰⁾（越前国、福井県・国史跡）、勝瑞館跡³¹⁾（細川氏・三好氏、阿波国、徳島県・国史跡）などが知られている（第59図）。

時期差はひとまずおいて、中津居館跡の規模は、これら一国規模の政治的拠点としての城館と比較してほぼ同程度かむしろ上回っているものさえある。しかし、単純な規模のみの比較で中津居館跡の性格をこれら守護所クラスの城館と同一なものと理解することは適切ではない。中津居館跡はあくまでも周防国・長門国の守護所とは考えられないからである。

守護所としての大内氏館跡を除き、山口県内の中世平地城館跡として知られるものに次のような遺跡が挙げられる。冷泉氏館跡³²⁾（岩国市）、三太屋敷跡³³⁾（三井氏館、下関市）、勝栄寺土壘³⁴⁾（陶氏館、周南市・県史跡）、江良氏館跡³⁵⁾（陶氏の家臣の館、周南市）、岡田・江良遺跡³⁶⁾（在地氏族の館、萩市）などである。これらは、いずれも一国内の各地域有力者の居館に位置づけられるが、土壘や堀を伴う数10m～100m未満の規模であり、居館の面積規模としては中津居館跡の半分以下程度に相当する。これらは平野や内陸部の一定地域を治めた有力者の居館跡であるが、守護所としての大内氏館跡と比較して規模が小さく、政治的力関係を反映した規模に収まっているといえる。これに対して中津居館跡が、守護所でないにも関わらず大内氏館跡に匹敵する規模を持つ理由としては、他の地域有力者の居館とは異なり、単に政治的立場を反映するのみならず、他の複合的要因を併せ持った機能を果たす居館として、大内氏との時々の諸関係を反映しながら築造・運営された可能性も考えられる。

このため、中津居館跡の規模のみを見ると守護所クラスに匹敵するが、このように大規模な面積を有する居館が築造された要因は、政治的要因以外の別の要因、例えば地理的・経済的・軍事的諸要因を考慮することが妥当と考えられる。

b 地理的・経済的・軍事的諸要因による立地条件

第二の特徴である河川の中州に立地することについて、第一の規模が大きいことの特徴と関連づけて検討してみる。

中津居館跡が河川流域と海域との接点に位置する河口の中州に所在することは、他の山口県内外の居館が主として平野部や内陸盆地などに立地しているのと比べて著しく異なる特徴を有する。すなわち、内陸山間部と沿岸部とを結ぶ河川交通の出入り口および瀬戸内海各地を結ぶ海運ネットワークの結節点に当たる錦川河口三角州という絶好の流通・経済拠点に立地していることが、政治的要因に比

して中津居館跡の規模が極度に大きい一要因になっていると推定される。中世においては、陸上交通が発達した近世以降や現代の状況に比較して、我々の想像以上に水上（河川・海）交通が発達し、物資の流通ルートの大道脈として陸上交通以上に重要視された側面があったことが、近年の発掘調査や史料³⁷⁾などにより明らかになっている。中津居館跡の発掘調査においても、和泉型瓦器椀、吉備系土師器椀、貿易陶磁器（青磁・白磁）など国内外からの広域流通によってもたらされた遺物が出土し、流通拠点に立地する居館が海上および河川物流ルートの中継・保管施設としての機能を果たしていた可能性も考えられる。加えて、嚴島神社という一大販路³⁸⁾に近いという要因も考慮に入れる必要がある。

こうした大規模な河川土木工事に要する労働力動員とその費用ならびに土木技術は、立地環境からして通行税や内外交易によってもたらされる潤沢な経済力やネットワークによる情報・技術力によって支えられたと推定される。また、このような当時の土木工事の状況や経済的背景が、近世以降に、「土一升・米一升」（土一升運べば米一升を支給する）や「朝日長者」³⁹⁾・「椿長者」⁴⁰⁾などの築造にまつわる伝説として語り継がれたのではなかろうか。

中津居館跡と立地条件が類似し、守護所ではない居館跡として、たとえば隣県の島根県益田市所在の三宅御土居跡⁴¹⁾（石見国内の有力氏族であった益田氏の居館跡・国史跡）が挙げられる。ここでの発掘調査においても、備前焼・常滑焼・唐津焼や中国製白磁・青磁、朝鮮製陶磁器など12世紀から16世紀にかけての国内外との幅広い交易を物語る遺物が出土している。この遺跡も政治的位置づけとしては守護所とはいえないにもかかわらず、中津居館跡と同様に守護所クラスの規模（東西最大190m、南北最大110m）を有し、益田川に面し日本海に近い河口に立地している。このことは政治的要因以外の地理的・経済的要因等が、居館規模に影響を及ぼしている事例の一つともいえ、中津居館跡の性格を考える上での参考となり得よう。

このほか、太田川（広島県）河口を拠点とする「警固衆」⁴²⁾と呼ばれたような瀬戸内海沿岸の水軍勢力との攻防に際し、周防地域から安芸地域にかけての海上交通の重要な拠点である岩国の軍事的要因が居館の規模や選地に関わっていたことも想定される。

c 立地環境を反映した大土木工事

以上のように、岩国地域の支配拠点としての政治的機能をベースとしつつ、草戸千軒町遺跡⁴³⁾のような港町・商業活動拠点としての経済的機能、瀬戸内海の水軍勢力との攻防に備えた堅固な軍事拠点としての軍事的機能など多面的な機能を総合的に果たす上で、最良の立地条件となる錦川河口で瀬戸内海にも開けた三角州を選地して、居館を構えたと考えられる。

ただし、人為的活動拠点としては最良の立地条件であっても自然環境の上では、居館は、常に河川洪水の自然災害に見舞われる危険性と隣り合わせであるという相矛盾する環境条件⁴⁴⁾のもとに置かれている。この課題を人為的に克服し解決する手段として、発掘調査で確認されたように、花崗岩を外側の内外面に充填し、基底部にも貼石構造の補強・護岸措置を施した堅固で高大な土塁を築いて洪水被害から居館を防護する大土木河川工事⁴⁵⁾を行ったものと考えられる。発掘調査により、土塁断面で少なくとも3段階の築造工程を経ている形跡が確認されたことからも、短期間での築造完成にしろ漸次長期にわたる段階的増築にしろ、自然災害に対応した土塁の補修・改修や補強・増築が繰り返し行

われ、最終段階として残っているのが現存する土墨の規模と構造であると見なすことができる。

以上のように、中津居館跡が、一国支配の守護所クラスの政治拠点としての館（例えば大内氏館跡等）に匹敵する大規模な居館として造営された背景としては、政治的要因以外の地理的・経済的・軍事的な諸要因も大きく関わっていたためと考えられる。

（2）岩国地域における中津居館跡の歴史的位置づけ

①居館築造の前史

今回の発掘調査により、平安時代後期～鎌倉時代の土師器椀（157・158）、貿易陶磁器（12～14世紀代の龍泉窯系青磁片233・234、11世紀後半～12世紀前半の白磁1点）、14世紀以前の和泉型瓦器椀と見られる資料（159）や瓦質土器羽釜（220・221）など、古代（平安時代後期）から中世前期（鎌倉時代・南北朝期）にかけての遺物が少量出土している。また、瑞光寺にかかる中津薬師堂に伝わった薬師如来坐像⁴⁶⁾は、南北朝期の京都を中心に活躍した院派系仏師⁴⁷⁾により製作されたものと考えられている。史料の上でも「石国荘」の記載が13世紀前半代には現われ⁴⁸⁾、岩国の荘園を支配した勢力の形跡がたどられる。錦川河口の三角州が形成され始めると考えられる11世紀頃には、居館が立地する中州地帯およびその周辺で、平安時代後期から鎌倉時代にかけて人々の活動の形跡が史料や物的資料に留められるようになる。さらに南北朝期から室町時代にかけても引き続き居館近隣では「白崎御宝殿棟札」⁴⁹⁾等の地元史料に記載されたような歴史事象が展開する。

発掘調査の所見からも、河床礫からなる自然堆積層や砂層を除き、その上層のシルト堆積層の上面あたりから部分的な造成や遺物などの人的活動の形跡をたどることができ、やがて安定した中世生活面（遺構面）が検出されることが層序的に確認された。堆積学による土壤の分析によても、発掘調査で安定した中世生活面の広がりとして捉えた遺構面以前の下層においても部分的に人の搅乱の痕跡がうかがわれるとの所見が示されており、両者の調査結果が整合性を持つことが検証されている。

②史料から見た弘中氏および加陽（賀屋・賀陽）氏との関連性

発掘調査の所見から築造開始時期として最も妥当とみられる14世紀前半代に、岩国地域に拠点を置き、築造者および居館主を務めた候補者となり得る有力氏族として、史料にその名が見られるのは弘中氏である。なお、以下の弘中氏および加陽（賀屋・賀陽）氏⁵⁰⁾についての詳細は本報告書所収の和田秀作氏報告（V関連分野報告・分析）を参照されたい。

もともと岩国地域は、平安時代末期、平氏に属して岩国（石国）氏⁵¹⁾を名乗った一族が勢力を誇っていたが、源平合戦後に勢力を失った岩国（石国）氏に代わって岩国地域で急速に勢力を伸ばしたのが弘中氏⁵²⁾である。

弘中氏は、もとは清繩氏を名乗ったが、兼胤の時に弘中と称するようになった。貞和4年（1348年）に弘中兼胤が遠石八幡宮から勧請した社殿を現在地に移して整備し、その後白崎八幡宮となってからも、岩国荘の鎮守として歴代、弘中氏が官司を務めた⁵³⁾。

一方、瀬戸内海に面する地域では関税徵収により多くの利益を得ていたことをうかがわせる史料もあり、荘園からの収入と合わせて他地域の有力氏族に比べても相当の経済力を有していたことが想像される。15世紀初頭には、大内氏の氏寺興隆寺の「供養勧進帳」や「一切經勧進帳」の大口寄進者に弘中氏一族の名前が10名程度記載⁵⁴⁾されており、この時期、大内氏の有力家臣として、政治的にも経

済的にも繁栄していた様子がうかがえる。

その後、戦国期の文明10年（1478年）、15世紀後半にも大内政弘から弘中氏一族の多くに所領が与えられた⁵⁵⁾ことが記録に残されている。16世紀代に入り、弘中氏の惣領家を継いだ家系に連なる弘中隆兼の代には、亀尾城を居城とし岩国の総鎮守である白崎八幡宮の宮司を引き続き世襲するとともに、大内義隆の時、安芸国守護代として毛利氏ら国人勢力の管轄にも務めた⁵⁶⁾。隆兼父子は大内氏勢力方に忠誠を尽くし、弘治元年（1555年）巌島の合戦で最後まで毛利元就方の軍勢に抵抗して討死を遂げた。

このように、弘中氏一族は、大内氏の有力家臣として14世紀中頃から16世紀半ばにかけて、継続的に岩国地域を管轄していたことが史料的にたどられる。

以上、弘中氏が岩国地域を継続的に管轄していたことを示す史料と中津居館跡が同一時期に継続的に機能していたことをうかがわせる発掘調査による所見とを照合して検討すると、中津居館跡の築造と運営に何らかの形で関わった勢力として、弘中氏を筆頭候補者に挙げることに対して、異存が生じる可能性はきわめて低いと考えられる。

弘中氏は、近世以降、周防・長門地域を治めた毛利氏に最後まで対抗して敗れた敗者であり、歴史の必然として、敗者の歴史的資料は残りにくいくことを勘案すれば、中世の岩国地域における弘中氏の政治的支配力や経済力が歴史の表舞台に現れにくく、当時の実態よりも過小評価されている側面があるかもしれない。周防・長門地域において、勝者毛利氏の近世史料に比べ、敗者大内氏の中世史料が残りにくく詳細な実態がつかみにくいのと同様の歴史現象が弘中氏の場合にも反映されている可能性も考慮する必要があろう。

これに対して、加陽（賀屋・賀陽）氏は、弘中隆兼父子の滅亡により岩国地域での政治的支配権を失った弘中氏一族に代わり、近世初頭の吉川氏入府までの16世紀中頃から末期にかけて岩国地域の管轄を担当し、中津居館跡を管理下に置いた可能性が近世の史料で指摘されているが、この時期の中津居館跡の状況を具体的に伝える同時代の直接的な史料は残されていない。ただし、毛利氏配下の川内警固衆の一員である加陽（賀屋・賀陽）和泉守武頼が、巌島の合戦（1555年）を経て鞍掛城の戦後、一時期、この居館跡に駐留したことを示す近世以降の史料が存在する。これを典拠に、当地が「加陽（賀屋・賀陽）和泉守の屋敷」と呼ばれる経緯となった。つまり、加陽氏はあくまでも中津居館跡の直接の築造者や居館主ではなく、居館廃絶前後に初めてこの居館との直接的関わりが生じた一族としての位置づけとなる。

③近世以降の中津居館跡の変遷

近世の岩国は、毛利氏の周防・長門入府に伴い、毛利氏一族と姻戚関係に当たる吉川氏が慶長5年（1600年）に入封して領内支配が行われるようになったことにより、政治拠点が横山地区に置かれる。錦川右岸に吉川家の政治機関と上級・中級家臣の家臣地を配し、左岸に中下級武士の屋敷と町屋を置き、その両岸を結ぶ錦帯橋が架けられた。2代岩国領主吉川広正は自身の隠居に伴い、万治3年（1660年）中津で隠居所の造営に着手し、寛文元年（1661年）に完成し家臣と共に移り住んでいる。翌年の寛文2年（1662年）に廃絶後の中津居館跡を整備し、横山の永興寺の石翁に命じて居館跡内に瑞光寺を再興した。寛文7年（1667年）に、3代領主広嘉が吉川興経の位牌を瑞光寺に安置すると共

に寺領17石を寄付した。元禄12年（1699年）に、興経の150年忌法要に伴って寺領13石を加増して計30石となり、幕末まで吉川家の手厚い庇護を受けた。慶応2年（1866年）興経の位牌を永興寺に移し瑞光寺は廃寺となり、明治2年（1869年）には境内地が民間に払い下げられた。

以上のように、中津居館跡は近世段階において吉川氏の庇護を受けた瑞光寺の境内域として保全されたため、居館内部・土壘とも大規模な損壊を被らず旧状を良く留めながら現地に残ることになったのである。

（3）居館の築造時期と変遷についての総合的検討

①発掘調査の所見

これまで見てきたように、大型総柱建物跡、一括廃棄土坑、土壘基底部最下層の盛土状況と基盤造成面との関係、さらにはこれらと共に伴する土師器・陶磁器の年代観からは、少なくとも室町時代前期、14世紀前半代には初期居館内での活動や土壘の築造が行われたと考えられる。その他の遺構や造成層・遺物包含層出土の中世土師器等を含めて、遺物の傾向として、14世紀代を中心とする室町時代前期ものが多く、大内氏居館跡等で見られる器高が低く、器壁が薄手の土師器類（杯・皿）など15～16世紀代の室町時代後期～戦国期のものは少ない。発掘調査地点が限られた中での所見ではあるが、こうした出土遺物の状況からは、居館の築造や活動は、14世紀代の室町時代前期を中心として、室町時代後期には、居館内での営みの形跡がやや薄れていく傾向がうかがわれる。

居館の廃絶時期を検証するうえで資料となる調査成果としては、TR0901・TR1001での発掘調査範囲では、廃絶後、居館内建物の礎石撤去・整地作業が行われた形跡が確認された。その上層で近世前期の瑞光寺境内域としての活動痕跡が検出されたが、その過渡期に対応するのが以下のようない加陽（賀屋・賀陽）氏による岩国地域管轄時期の居館跡の状況に重なるのかもしれない（Ⅷ資料編 年表等）。

- ・16世紀半ばの中世末期、毛利氏の侵攻以前に周防国を支配していた大内氏の重臣として岩国地域に拠点を置いていたのは弘中氏である。
- ・弘治元年（1555年）に安芸国を拠点とする毛利氏の軍勢が「厳島の合戦」で陶晴賢を破り、もともと大内氏の勢力下にあった周防国内に侵攻し、鞍掛城（現岩国市玖珂町）で杉隆泰を討って、岩国に凱旋した。この際に、毛利氏方の吉川元春が、加陽（賀屋・賀陽）氏の駐留地（「かや和泉所」）に宿陣⁵⁷⁾したという史料が残っている。
- ・このことから、中津居館跡の発掘調査で検出されたTR0901・TR1001の中世末期遺構面は、大内氏方の弘中隆兼父子（中津居館跡が弘中氏に関連する居館跡であったことを前提とした場合）が、弘治元年（1555年）の厳島の合戦で敗戦し自刃した直後、毛利氏方の加陽氏が中津居館に進駐し占拠地とした段階以降のある時期の状況を示している可能性がある。
- ・つまり、弘治元年（1555年）の厳島の合戦後、新たに加陽（賀屋・賀陽）和泉守が居館を占拠してから近世初期の吉川氏の岩国入府後に瑞光寺境内域となるまでの時期に当たると思われる。
- ・よって、発掘調査で検出された一定程度の搅乱・整地状況は、同時代の史料には明確に記録としては残されていない居館廃絶後（1550年代後半）から近世初期（1600年代初め）までの時期における居館跡の状況を反映しているのではないかと推定される。

周辺地域における状況として、大内氏館跡の設置年代については、土師器編年に基づく考古学的所見により、15世紀中頃とする説（古賀信幸氏）⁵⁸⁾と14世紀後半～末さらには14世紀中頃～後半にまで遡る可能性を指摘する説（北島大輔氏）⁵⁹⁾が提示されている。いずれにしても、考古学的所見によれば、大内氏が周防国・長門国の守護職に任命され（14世紀中後半）、政治的中心地として山口盆地で本格的守護所の経営に着手する以前の14世紀前半代には、周防国東部の岩国の方に山口に設置された後の守護所に匹敵する規模の居館が営まれたことになる。

以上、中津居館跡は、発掘調査の所見によれば、14世紀前半代の築造開始から16世紀半ばの廃絶まで（鎌倉時代末期から室町時代）の約250年間にわたり変遷をたどった中世の平地居館跡と考えられる。

②平地居館の変遷観

居館の築造主体について、中津居館跡発掘調査前の現地踏査に当たった千田嘉博氏は、次のような指摘をしている（本報告書V関連分野報告・分析参照）。

「（1）毛利氏台頭以前に有力な武士が拠点を構え、それが改修されて戦国期に継承された、（2）自治的・惣村的自治による自立的な施設として「惣構え」土壘が構築された、（3）地域に根付いた権力ではなく、合戦などを契機とした臨時施設「陣」として建設された、（4）輪中堤のような防水施設として築かれた土壘で、城館とは関係ない、といった可能性をあげうる。」

こうした指摘と発掘調査の成果によれば、現時点において、築造主体としては、（1）の可能性が高く、土壘構造の特徴については、（4）の防水施設として築かれた土壘としての性格が強いと考えられる。

また、戦国期（15世紀後半）以降の平地居館は、一般的に单一の曲輪規模はせいぜい一辺50～100m程度であったのに対して中世前期から室町期にかけては一辺100mを超える居館がしばしば築造されたこと、室町前期の居館は単郭構造が多く戦国期以降に複郭構造が見られる傾向があること、などが中世居館の規模や構造の型式変化として、千田嘉博氏⁶⁰⁾によって指摘されている。中津居館跡についても、このように規模が大きく、単郭（現時点での所見）である点において室町前期の平地居館に見られる全国的様相と合致している。加えて、中州に立地するという条件が反映されて、築造主体者は、防水施設の機能を強化した特徴的機能を備えた大規模な土壘を持つ居館を築造したと推定される。

③史料から推定される築造時期と変遷

中津居館跡の築造と運営に何らかの形で関わった勢力として、弘中氏が筆頭候補者に挙げられることはすでに述べたとおりである。弘中氏の出自に関する文献史料は少ないが、弘中氏の先祖とされる清縄氏が建長2年（1250年）に室木（岩国市室の木）に白崎八幡宮の前身となる神社を建立した記録がわずかに残っている⁶¹⁾。これが、岩国地域における弘中氏一族の存在を示す最も古い年代である。また同史料によると、貞和4年（1348年）に弘中兼胤が岩国荘の鎮守として白崎八幡宮に社領を寄進して境内を整備したとされ、14世紀半ばの時点で弘中氏による岩国地域での支配が一定程度確立していた蓋然性が高い。なお、白崎八幡宮は当居館と現今津川を挟んで至近距離の対岸に位置する。

一方で貞治6年（1309年）に大内弘幸が岩国に横山に永興寺を建立しており、14世紀代には大内氏

の影響力が一定程度岩国地域に及んでいたことがうかがえる。弘幸の子の大内弘世⁶²⁾は正平13年（1358年）南朝方の長門守護に任命され、貞治2年（1363年）北朝方に転じ、幕府から周防・長門両国の守護職に任命されており、この頃には周防・長門両国における大内氏の影響力は強固に安定的なものになったと思われる。史料の年代は不詳ながら、『東大寺文書』⁶³⁾の中に「大内介知行所領」として「本庄」「横山」「由宇郷」「通津郷」などが記載されており、鎌倉前期には大内氏の勢力が既に岩国地域に及んでおり、弘中氏は大内氏の命により岩国地域を治めた役人であると、考える向きもある。

大内氏と弘中氏がいつ頃から主従関係にあったかを残された文献史料から現時点で明らかにすることはできないが、応永14年（1407年）の興隆寺勧進帳には杉氏・陶氏らとともに弘中氏一族が名を連ねていることからも、15世紀前半には大内氏家臣団における地位が確立していたと見られる。

以上の点を踏まえ、発掘調査の所見によって居館の築造開始時期の一つの目安となった14世紀前半代における岩国地域の政治情勢を勘案した場合、文献史料から現時点で推定できることとして、中津居館跡の築造主体について少なくとも次の3つの場合が想定される。①弘中氏が主体となって築造・運営に当たりつつも大内氏が一定の関与をした場合、②弘中氏が主体的に築造・運営に当たった場合、③大内氏による居館の直轄的運営による場合、などである。各場合においても弘中氏と大内氏の関係のあり方によって、内容の上でさまざまなバリエーションがあり得よう。

いずれの場合にしても、弘中氏および大内氏が中津居館跡の造営に直接あるいは間接的に何らかの形で関わった可能性は極めて高いと見られる。しかし、居館の築造時期や築造者に結びつく直接的証拠を史料の中から導き出すまでには現時点では至っていない。

④放射性炭素年代測定（AMS測定）法による年代観

放射性炭素年代測定（AMS測定）法による分析および暦年較正年代（ 1σ ）として、以下のとおりの結果が得られた（本報告書V関連分野報告・分析参照）。

試料①（堀状遺構出土土器付着炭化物） 1400～1426cal ADの範囲

試料②（土墨基底部出土木炭） 1304～1393cal ADの間に3つの範囲

試料③（一括廃棄土坑隣接の土坑出土炭化物） 1279～1380cal ADの間に2つの範囲

試料①は堀状遺構の存続期間に基底部に沈んだと理解される出土状況にあった瓦質土器鍋（225）に付着した炭化物の年代を示し、15世紀前半に堀状遺構が存続していたことを推定する資料になる。

試料②は、中世整地面に盛られた最初期工程の盛土最下層直下の土器集積100401の共伴土に含まれた木炭であることから、南土墨の築墨開始時期を推定する資料になる。14世紀初期、中頃、終末の3範囲を示し、木炭と共に14世紀代と見られる土師器杯（71～80）の編年観とも概ね一致する年代を示す。南土墨の最初期の築造開始年代を14世紀代のいずれの時期と見るかは、今後のさらなる発掘調査などによる検証を踏まえて判断する必要があるが、少なくとも14世紀代には土墨築造が行われていたことを土器の年代観とも大きな隔たりなく推定させる分析結果として意義深い。

試料③は、遺構の切り合い関係を伴って隣接し、共に比較的近い時期のものと推定される検出状況にある大型掘立総柱建物跡（SK100301－SP03）・一括廃棄土坑（SK100310）の年代を推定する資料となる土坑（SK100309）出土の炭化物である。年代は、13世紀末、14世紀後半の2範囲を示す。廃棄

土坑に伴う吉備系土師器（14・15）が14世紀前半に比定されることから、現時点での遺構の新旧切り合い関係からは、炭化物は14世紀後半に近いと見られるが、測定の誤差や切り合い関係の再検討の可能性を考慮した場合には、13世紀末から14世紀初頭の年代を採用することを排除するものではない。

このように、放射性炭素年代測定（AMS測定）法による3試料の測定からは、いずれも発掘調査による考古学的年代観と矛盾せず、整合性が取れる分析結果が得られている。

⑤総合的検討

以上、発掘調査をはじめ各分野の検討結果から、居館の築造が開始される時期は14世紀前半である可能性が現時点でも最も高い。14世紀前半代とした場合、中津居館跡の築造および変遷について現在考えられる3つの可能性を挙げておく。

①岩国地域の実質的な統治者として勢力基盤を確立していた弘中氏が主体者となり、同地域に一定の影響力を持っていた大内氏の関与のもとで築造・運営した可能性、②史料によると13世紀中頃には岩国を拠点としていたと見られる弘中氏が、独立的支配力を強化し直接的主体者となって独自の居館として築造・運営した可能性、③大内氏が主体者となり、周防東部地域の直轄的拠点として築造した可能性、の3つである。

①については、岩国地域に勢力をもっていた弘中氏が築造主体となり、自らの居館として築いたものではあるが、岩国地域に一定の影響力を及ぼしていた可能性のある大内氏にとっても、周防東部地域の重要な拠点であったことから大内氏の一定の影響力のもとで大規模に築かれたとする考え方である。領国支配の周防東部地域の拠点という政治的目的以外に、流通拠点として経済的利点からも大内氏の関与のもとで大規模な居館築造が可能となった面も考えうる。

②については、14世紀前半時点の弘中氏と大内氏の主従関係については現時点で明らかになっていないが、弘中氏が14世紀前半代に、ある程度独立的な立場を持ち、大内氏の影響力が岩国地域に強く及ぶ以前に弘中氏自らの経済力等を基に居館を築いたとする考え方である。一般的に中世の居館の規模は館主の社会的地位に制約されるため、館の規模において主従が逆転することは考えにくい。このため、岩国の地に後の守護所である山口の「大内氏館跡」に匹敵する大規模な居館が築かれたのは、現時点での考古学的所見からは早くても14世紀中後半代に本格的な築造が開始される⁶⁴⁾「大内氏館跡」に先行して、大内氏による強力な規制や制約が及ぶ以前に地域有力者によって主体的に居館が築造されたのではないかとする考え方である。史料では大内氏が周防・長門両国の守護職に任命されるのは貞治2年（1363年）の14世紀後半である。それ以前の14世紀前半代にこれほど大規模な居館の築造に要する経済的基盤を弘中氏が単独で持ち合わせていたとすれば、弘中氏を単に一地域の支配者としてではなく、強力な経済的基盤を備えた有力者として再評価する必要も出てくるであろう。

③については、築造主体はあくまでも大内氏であり、弘中氏は地元の有力氏族として築造に関わりそこに在駐したとする考え方である。14世紀初頭の延慶2年（1309年）に横山の永興寺が大内弘幸の手で開基されたように、安芸・石見をはじめとする東の諸国を見据えて大内氏支配地域の東の要衝である岩国を重要視した結果、ここに大内氏が直轄で拠点を築き弘中氏に運営を任せたとしても不思議ではない。この場合、弘中氏の関わり方として、現地の築造責任者あるいは在駐者として運営を任せられるなど様々なあり方が想定される。

ただし、14世紀前半代の時点で現存する規模と変わらない程度の巨大な居館が築造されたのか、居館の規模が漸次増改築を繰り返して現存の規模に発展したのか、については、今後さらなる検証が必要と考える。今後の調査によって、館の変遷に関わる新たな成果がもたらされた場合、異なる考え方がある余地が出てくる。

以上、いずれも発掘調査によって新たに居館の築造年代が14世紀前半代に推定されることをもとにした検討である。これまでの史料を中心とした弘中氏と大内氏の関係や居館の館主についての考察には史料の少なさや制約による限界があった中で、発掘調査という方法により新たな情報がもたらされたことはきわめて意義深いことといえよう。考古学的方法や文献史学の方法をもとに新たな視点から居館の築造に関わった筆頭候補に挙げられる弘中氏、および周防地域に広く勢力を伸ばしつつあった大内氏の動向や岩国地域への影響力についてさらに検討を深め、居館築造の時期や変遷を多角的に捉えていくことが、今後の大きな課題となるであろう。

最後に、①発掘調査による考古学的所見、②平地居館の規模や構造に関する型式編年観、③史料に見られる居館築造筆頭候補者の弘中氏および守護大名大内氏の動向、④放射性炭素年代測定（AMS測定）法に基づく自然科学分析の結果等を総合的に検討すると、現時点では、「中津居館跡は、周防地域に影響力を持った大内氏の関わりがどの程度であったかは未だ不明な点があるものの、14世紀前半代に岩国地域の中心勢力であった弘中氏との強い関わりの中で築造・運営され、その後15～16世紀代の室町時代後期～戦国期まで居館での活動が一定程度維持されたものの16世紀半ばの大内氏の滅亡および弘中氏の敗死とともに中世居館としての機能を終えた」と考えられる。

4 まとめ

（1）発掘調査成果のまとめ

第1次調査（平成20年度）、第2次調査（平成21年度）、第3次調査・第3次追加調査（平成22年度）の3年度での調査成果は、次のとおりである。

主な遺構は、掘立総柱建物跡（地下式礎石）1棟、土器一括廃棄土坑1基、土坑29基、溝4条、柱穴74個、土壘（砂・礫・山石の盛土）3ヵ所、堀状遺構2ヵ所、建物基礎石積（近世）1基などである。主な遺物は、土師器、瓦質土器、陶器、輸入磁器（青磁・白磁）、近世国産陶磁器、弥生土器、須恵器、土錘、近世瓦、鉄製品、鉄滓、銭貨、貝殻、人骨である。

次に、発掘調査を通じて得られた重要な成果として確認できる点をまとめておく。

①居館内部では広域にわたる近世の造成層の下に中世の生活遺構面（造成層）が広がっていることが確認されたことから、居館は中世の時期のものであることが明らかになった。

②居館内部で地下式礎石を伴う4間×4間（9.6m×9.6m）の大型掘立総柱建物跡（SB100301）が発見され、館に関連すると見られる施設の存在が初めて明らかになった。隣接して、時期的に近い切り合い関係が認められる14世紀前半頃と見られる中世土師器を含む一括廃棄土坑（SK100310）が検出されたことから、建物跡や居館築造時期もこれに近いと見られる。なお、放射性炭素年代測定（AMS測定）法による隣接する土坑（SK100309）出土の炭化物分析によってもこれと整合性の取れる年代の同定結果が得られている。

- ③土壘と中世遺構面との関係を土壘断ち割り調査により確認したところ、層序的には土壘は中世遺構面から盛土されていることが判明し、土壘と中世遺構面の一体性・同時性が検証された。
- ④土壘については、シルトや川砂を盛り上げて椀を伏せたような山状を呈する盛土層（第1段階）、第1段階の盛土の外側に厚く堆積した氾濫堆積砂層（第2段階）、第1段階の盛土層と第2段階の氾濫堆積砂層の上を覆うように内側に砂礫、外側に大型の花崗岩質の山石を充填して土壘を補強した盛土層（第3段階）の少なくとも3段階の構築工程が確認された。なお、こうした工程が長期間での土壘増改築の時期差にともなうものか（時期差説）、短期間内での一連の築造の工程差によるものか（工程差説）は今後の検討を要する。
- ⑤土壘の外側に山石を充填し基底部外側に山石を貼り付ける構造は、錦川河口の三角州で洪水氾濫を受けやすい環境に立地する居館を自然災害から防御するために、土壘外壁が崩落せず基底部が洗い流されないように補強防護する大規模な河川土木工法が採用されたことを示す。
- ⑥南土壘盛土の最下層直下面で中世の土器集積100401（14世紀代に比定される）が検出され、土壘造成の上限時期を押さえる重要な資料となった。
- ⑦北土壘の外側に堀状遺構が確認されたことから、初期段階には堀が巡っていた可能性が考えられ、他の箇所での調査によってその所在の有無を検証していく手がかりが得られた。
- ⑧一括廃棄土坑（SK100310）出土の土師器類は、山口県の14世紀代土師器編年の基準資料となり得るもので、これまで年代観に幅のあった基準資料である長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土の一括資料の年代についても、14世紀初頭までは遡らず、14世紀中葉ないし後半代以降の14世紀代に収まる可能性が高くなってきたといえよう。
- ⑨居館廃絶後に瑞光寺境内として使用された時期の良好な近世陶磁器資料が出土し、岩国地域における近世期の基準資料を提示した。
- ⑩これまで地上に残存する土壘や史料・伝承によってしか知られていなかった居館跡について、建物跡・土壘構造・堀状遺構の検出や土器などの遺物の発見により、中世居館としての構造や時期に関する情報が、考古学的発掘調査方法により初めて一定程度明らかになった。

以上の発掘調査成果および史料、絵図、自然科学的分析（放射性炭素年代測定法・堆積学）等による検討結果を総合すると、現時点で次のような点が判明した。

「中津居館跡は、中世前期の14世紀前半頃に錦川河口の三角州に築かれ、室町時代後期（戦国期）の16世紀半ばまで存続した、特徴的な構造を持つ土壘に囲まれた周囲約120m～170m規模の台形状の平面形を呈する中世の平地居館跡であり、内部に大型掘立総柱建物跡等の施設を有し、守護大名の大内氏館跡に匹敵する山口県内最大級の規模を誇るとともに保存状態が良好な全国的にも稀少な価値を持つ遺跡である。」

（2）今後の課題と展望

発掘調査は、土壘を含む居館面積約20,000m²のうちの限定されたわずかの面積で実施したのみである。このため、居館について多くの未解明の問題点が存在する。今後取り組むべき課題について、以下に列挙しておきたい。

- ①発掘調査の課題

- a 居館内の構造と全体配置について、正式な対面儀礼を行う主殿、日常的な居住建物、宗教施設、広場、庭園、倉庫・貯蔵施設などの所在の有無確認の観点から追究を行う。
- b 土壘構造について、築造工程や時期差および変遷過程（増改築・補修）のさらなる検証。北西隅の高台部や西側土壘の断ち割り調査。土壘と居館内部との同時性や関連性の検証。
- c 堀の有無についてのトレンチ調査等による確認。
- d 居館の建築者と築造時期について、調査箇所を増やして遺構や遺物のデータを蓄積し、考古学的手法から可能な限りのアプローチを行う。
- e 居館の特徴・性格について、発掘調査により他の居館との類似・相違点を比較対照し、独自性・地域性・普遍性を見出し、地域および全国的な中世城館の中での歴史的位置づけを行う。
- f 居館周辺について、港湾施設（船着場）、家臣団屋敷、商人・職人の工房・店舗・倉庫、寺社などの建物・施設に関連する遺跡が広がっていないか、可能な限り分布・確認調査を行う。
- g 調査方法については、発掘調査以外の地中レーダー探査・ボーリング調査等の手段を用いて効率的・広域的にデータを得ることも検討していく。
- h 平成23年度から実施されている山口県内約300ヵ所あるとされる中世城館の悉皆調査に関連して、周辺地域の城館遺跡と発掘調査成果との比較により、当該居館の新たな価値を見い出す。

② 関連学問諸分野との連携調査

- a 史料調査や分析をさらに深め、居館の建築者や築造時期について可能な限りの考証を進める。中津居館跡を中心に据えて、弘中氏をはじめ山口県内および周辺地域での古代末から中世期の地域有力氏族の動向や大内氏ほか有力大名との関係等を念頭に置いて史料の再調査・検討を行う。中世前後の時代における岩国地域の政治勢力や九州・中四国・畿内など広域にわたる大内氏ほか諸大名にまつわる史料を中津居館跡の館主を探る視点から検証していく。
- b 絵図・航空写真・地名考証を通じて、居館およびその周辺の配置や広がりをさらに検索する。
- c 有形文化財（寺社の神仏像・石碑・奉納品等）として伝承されてきたものに中世居館にまつわる資料や情報につながるものがないか調査を行う。
- d 民俗学的方法（民間伝承、地域住民への聞き取り調査等）により、居館の由来や過去の居館の残存状況についての情報を得る。
- e 自然科学的分析方法（放射性炭素年代測定法、堆積学、土壤学、地質学、岩石学、動植物遺存体分析、人類学、古環境学等）による新たな視点から、遺跡を取り巻く立地環境や出土品についての情報を探究する。

（3）おわりに

近世の江戸時代に吉川広家が築いた岩国城とその城門橋である錦帯橋きんたいきょう（国指定名勝）⁶⁵⁾の存在は全国的にも広く知られている。こうした近世以降の岩国の歴史やそれにまつわる史跡や文化財については、これまで一定の理解や認識がなされてきたものの、一般市民にとって、吉川氏の統治時代以降が岩国の本格的な歴史として取り上げられ、語られるに過ぎず、中世以前の歴史はあまり顧みられなかったように思われる。今回の発掘調査を通じて、史料ではあまり知られていなかった吉川氏入府以前の中世段階に、既に錦川下流域の中州地帶において、周防国内はもとより全国的に見ても大規模な

平地居館が営まれていたことが明らかになったことで、岩国の歴史は、近世以降を出発点として語られるべきものではなく、弘中氏を含めた中世の歴史にも光を当て、この時期の歴史的展開を踏まえてこそ、近世から現在につながる地域的特性や政治的・経済的・地理的・文化的なアイデンティティが浮かび上がってくることを再認識することになった。

専門家からも、中津居館跡は中世の平地居館としての状態を良く保ち、大内氏館跡（国史跡）に匹敵する山口県内最大級の規模を誇る遺跡であり、岩国市の中世の歴史上極めて重要であるとともに、全国的にも高い価値を有する遺跡であるとの一定の評価を得ている⁶⁶⁾。こうした点から考えて中津居館跡は、岩国地域における独自の特質を持った歴史資産として岩国市域における過去から現在を経て未来へと結ぶ新たな歴史像や地域像を構築していく上で地域のシンボルになり得る存在といえよう。また、中津居館跡は、合併を経て誕生した広大な岩国市内各地域の中世以前の歴史を掘り起こす触媒の役割を果たし、既によく知られた近世以降の歴史とを結ぶ、まさに岩国を象徴する「錦帯橋」のような架け橋となる可能性を持つ、岩国市にとってかけがえのない貴重な歴史遺産であるといえるのであるまい。

およそ700年の時を経て残った中津居館跡はこれまで一般にはあまり知られていなかったが、岩国の中世の歴史を伝える物言わぬ証人として静かに錦川河口の三角州に現存している。居館跡の周辺には、地元住民によって立てられた史跡看板が見られ、「朝日長者」・「椿長者」の屋敷と呼ばれる伝承が残るなど地元住民の関心の高さと愛着に支えられ護られてきたことがうかがわれる。

このような状況のもとで、現況の地上景観においては、四周を取り巻く土塁と居館内部が平地の市街地区域に所在しながらも良好な状態で保存されており、加えて、今回の発掘調査により、近世および下層の中世以前の遺構についても良好な状態で地下に保存されている状況が改めて実証された。

こうした中、今回の発掘調査の成果を踏まえ、地域住民や関係機関とも連携して遺跡をどのように保護し、将来の活用に向けて取り組んでいくかが、今後の課題として求められる。各方面の叡智を結集して、過去の先人から受け継がれてきた文化遺産を現在に生きる岩国市民の手で、どのような形で未来へと継承していくことが望ましいのかをこれからしっかりと考えていくことが大切ではなかろうか。

註)

- 1) 以下、居館での土壤の堆積状況等については、本報告書所収の松田氏による堆積学的所見を参考とし、発掘調査における考古学的所見との総合的判断に基づいて記載している。
- 2) 文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』2010年 P175～176
上記てびきの記載にない、礎石を地表面上ではなく、掘り込んだ柱穴の基底部に据える構造を「地下式礎石」と呼ぶこととした。
- 3) 岩国市史編さん委員会『岩国市史 通史編一』岩国市 2009年 P47～P51
- 4) 文化庁編『発掘された日本列島2011新発見考古速報』朝日新聞出版 2011年
財團法人徳島県埋蔵文化財センター「現地説明会資料」
- 5) 宇治市教育委員会『宇治川太閤堤跡発掘調査報告書』2009年
宇治市教育委員会『史跡宇治川太閤堤跡発掘調査報告書』2010年
- 6) 『御用所日記』寛延二年二月二十七日の項 岩国徵古館蔵
- 7) 山本悦世「吉備系土器師碗の成立と展開」(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5集 1993年)
- 8) 尾上実・森島康雄・近江俊秀「瓦器碗」(中世土器研究会『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年)
- 9) 下関市教育委員会『長門国府・長門国府周辺遺跡調査報告書II』1979年
- 10) 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター『奥正権寺遺跡II 大崎岡古墳群 大崎遺跡』1985年
- 11) 古賀信幸「山口県における中世後期の土器師」山口県史編年会議発表資料 2001年
小南裕一「長門地域の中世土器師編年試案」財團法人山口県教育財團山口県埋蔵文化財センター・豊北町教育委員会『上太田遺跡・市の瀬遺跡・南ヶ畑遺跡』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第45集、山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第31集) 2004年
佐々木達也「防府市域における中世前半代の土器に関する考察」(近藤喬一先生退官記念事業会『山口大学考古学論集』2003年)
- 12) 中原周一「長門国府跡忌宮神社地区出土中世土器の評価－土師器の杯・皿の分類を通して－」(武末純一先生還暦記念事業会『還暦?・還暦!－武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集－』 2010年)
長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土一括資料のうちで報告書掲載資料以外の未報告資料を含めて、杯・皿の分類や法量比較が行われている。その結果、一括性資料としての安定性は確保できるとの所見が示されている。こうした所見も踏まえ、従来、一括資料として編年の基準とされてきた報告書掲載資料をまずは、今回の比較対象資料として取り上げることにした。
- 13) なお、同じく、当該一括資料全体を実見した藤原彰久氏よりこれら資料についての内容や特徴に関するご教示を得た。
中原氏によって未報告資料も含む法量分析で得られた杯の口径と器高の割合の分布傾向と報告書掲載資料のみをもとに杯の口径と器高の割合の分布傾向

- を分析した今回の結果は、ほぼ一致する。すなわち直線的に立ち上がり器高が高い杯A-1類（中原氏分類）の杯の口径11.0~12.5cm、器高3.5~4.0cmと報告されており、当方での法量分析により得た口径平均11.4cm、器高平均3.5cmと大きな隔たりはない。したがって、当方の分析結果の資料としての精度は一定程度保証され、これをもとに3遺跡出土の杯の型式や時期的前後関係を比較検討することは、有意性を持つ資料分析と考えられる。
- 14) 註11) の古賀資料に同じ
 15) 註11) の小南文献に同じ
 16) 岩崎仁志「山陽西部における中世の土製煮炊具－周防・長門を中心にして－」（日本中世土器研究会編『中世土器の基礎研究』21 2007年）
 岩崎仁志「防府地域の足鍋について」（山口考古学会『山口考古』17号 1988年）
 岩崎仁志「足鍋再考」（財團法人山口県教育財團山口県埋蔵文化財センター『陶壇』第12号 1999年）
 註7) に同じ
 18) 鈴木康之「第Ⅲ章 遺物 1 土器類」（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』1996年）
 19) 財団法人山口県ひとづくり財團山口県埋蔵文化財センター『伊領原遺跡・木焼遺跡・松ヶ谷遺跡』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第58号）2006年
 20) 財団法人山口県教育財團山口県埋蔵文化財センター『向田遺跡Ⅱ』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第28集）2002年
 21) 財団法人山口県ひとづくり財團山口県埋蔵文化財センター『吉毛遺跡』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第63集）2008年
 22) 註12) の中原論文に、杯や皿の一定量に底部の回転ヘラ切り痕が認められている。なお、長門国府跡忌宮地区B地点LW001出土一括資料の中に、回転ヘラ切り痕を持つ土器があることは、古賀信幸氏が「山口県における中世後期の土師器」山口県史編年会議発表資料（2001年）において既に指摘している。
 23) 橋本久和「吉備系土師器碗の分布」（立命館大学考古学論集刊行会『立命館大学考古学論集1』 1997年）
 24) 宮原孝典「中世前期の流通の諸相－吉備地域における－」（広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、東広島市教育委員会『シンポジウム安芸地方の中世を探る－中世前期を中心として－』 2012年）
 25) 大橋康二「肥前陶磁」ニュー・サイエンス社 1993年
 26) 広瀬喜運「錦見 往古ノ川筋」p75（広瀬喜運著 カガワ樹校訂『玖珂郡志』マツノ書店 1975年）
 27) 古賀信幸「周防国・山口の戦国期守護所」（内堀信雄他編『守護所と戦国城下町』高志書院 2006年）
 山口市教育委員会『大内氏館跡XII』2010年
 28) 大分県教育委員会『大分の中世城館 第4集 総論編』（大分県文化財調査報告書 第170輯）2004年
 29) 文化庁文化財保護部史跡研究会『図説日本の史跡第6巻中世』株式会社同朋舎出版 1991年
 註29) に同じ
 31) 徳島県教育委員会『徳島県の中世城館』2011年
 32) 財団法人山口県教育財團・山口県教育委員会『冷泉家北遺跡』（山口県埋蔵文化財調査報告第184集）1997年
 33) 山口県教育委員会『下関市三太屋敷跡』（山口県埋蔵文化財調査報告書第41集 主要遺跡遺構確認調査No.4）1978年
 34) 新南陽市教育委員会『勝榮寺』（新南陽市埋蔵文化財調査報告 第1集）1984年
 35) 鹿野町教育委員会『鹿野町の遺跡～鹿野町遺跡詳細分布調査の結果から～』1993年
 36) 財団法人山口県教育財團山口県埋蔵文化財センター『岡田・江良遺跡 - 平成9年度山口北部農地整備事業に伴う発掘調査報告 -』（山口県埋蔵文化財センター調査報告 第5集）1998年
 37) 林屋辰三郎編『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版社 1981年
 橋本久和・市村高男編『中世西日本の流通と交通』高志書院 2004年
 38) 河合正治『瀬戸内海史上における厳島合戦』（岸田裕之編『戦国大名の研究』（戦国大名論集6）吉川弘文館 1984年）
 39) 広瀬喜運『岩邑若干集』 安永8年（1779年） 岩国微古館藏
 40) 宮庄親輔『岩邑志』 享保3年（1718年） 岩国微古館藏
 41) 益田市教育委員会『三宅御土居跡II』1992年
 42) 広島市役所『佐東町史』1980年
 43) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』 1996年
 44) 桂芳樹「災害に関する資料」：『岩国市史』編纂のための『御用所日記』からの抜粋
 45) 三浦圭一「中世の土木と職人集団」（永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史 第6巻 土木』日本評論社 1984年）
 46) 岩国市横山興寺蔵
 47) 不動山永興寺編『不動山永興寺の寺宝（仏像・扁額編）』 2010年 所収の岩井共二氏の所見に拠る。
 48) 岩国市史編さん委員会『岩国市史 通史編一』岩国市 2009年 P381『吉田経房处分状案』
 49) 「白崎御宝殿棟札」（岩国市史編纂委員会『岩国市史 史料編一』岩国市役所 2002年 p575）
 50) 山田 豊「賀屋一族について」（『岩国郷土史研究』第5号 岩国微古館友の会発行 2006年）
 51) 岩国市史編纂委員会『岩国市史 上』岩国市役所 1970年 p84
 52) 岩国市史編さん委員会『岩国市史 通史編一』岩国市 2009年 p392
 53) 宮田伊津美編『享保増補 村記』「錦見村」p47 岩国微古館 1989年
 54) 御生翁甫『大内氏史研究』山口県地方史学会 1959年 第八章「盛見時代の大内家家中」p356~358
 55) 「正任記」文明十年十月八日の項（山口県『山口県史 史料編 中世1』1996年）
 56) 東京大学史料編纂所編『毛利家文書』大日本古文書家わけ 第八 1997年復刻
 57) 「其日、岩国永興寺まで御打入候。隆景様琥珀院、元春様中津かや和泉所御宿陳候。」（『森脇覚書』防長進軍の事）
 58) 古賀信幸「大内氏遺跡出土土師器の編年」（山口市教育委員会『大内氏館跡Ⅷ・大内氏関連町並遺跡I』1991年）
 古賀信幸「大内氏館跡」（山口県『山口県史 資料編 考古2』2004年）
 59) 北島大輔「大内式の設定」・「大内氏館の変遷再編」（山口市教育委員会『大内氏館跡XII』2010年）
 60) 千田嘉博『織豊系城郭の形成』財團法人東京大学出版会、2000年。本報告書掲載の千田氏現地踏査所見および現地指導でのご教示に拠る。
 61) 註49) に同じ
 62) 小川国治編『山口県の歴史』山川出版社 1998年
 63) 御生翁甫『大内氏史研究』山口県地方史学会 1959年 第十章「防長の豪族」p147
 64) 註58) ・ 註59) に同じ。
 65) 延宝元年（1673年）第三代岩国領主吉川広嘉によって創建された5連の木造アーチ橋。橋の長さは直線で193.3m。幅5m、橋台の高さ6.64m。国指定名勝。創建翌年の延宝2年（1674年）春一部流失したがその年のうちに再建され、以来276年間秀麗な姿を誇ったが、昭和25年9月当地方を襲ったキジア台風により惜しくも流失した。昭和28年1月に再建され、現在の橋は、平成13~15年度に行われた工事により架替えられた橋である。
 （岩国市教育委員会『岩国市の文化財』2010年より一部抜粋）
 66) 本報告書所収の千田嘉博氏の現地踏査所見に述べられているように、発掘調査以前の平成19年（2007年）7月23日時点での現地踏査において、中世城館研究の専門家としての全国的・客観的見地から特筆すべき遺跡であるとの指摘を受けていた。こうした指導を受けて実施した平成20~22年度の発掘調査の結果、上記の指摘内容を追試する事実や数多くの新しい発見がもたらされた。

〔挿図出典〕

- 第58図 一括廃棄土坑（SK100310）と他の遺跡出土土器の法量分布図
 ① 中津居館跡SK100310 本報告書所収
 ② 奥正権寺遺跡第IV地区SD-2 岩崎仁志「集成図 瓦質土器」（山口県『山口県史 資料編 考古2』2004年より転載）
 ③ 長門国府跡忌宮地区B地点LW001 同上
- 第59図 中世平地城館跡の比較図
 ① 中津居館跡 岩国市道路台帳を基に作成
 ② 大内氏館跡 小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』財団法人東京大学出版会 2001年
 ③ 冷泉氏館跡 財団法人山口県教育財團・山口県教育委員会『冷泉家北遺跡』（山口県埋蔵文化財調査報告第184集）1997年
 ④ 江良氏館跡 鹿野町教育委員会『鹿野町の遺跡～鹿野町遺跡詳細分布調査の結果から～』1993年
 ⑤ 三太屋敷跡 山口県教育委員会『下関市三太屋敷跡』（山口県埋蔵文化財調査報告書第41集 主要遺跡遺構確認調査No.4）1978年
 ⑥ 勝栄寺土塁 新南陽市教育委員会『勝栄寺』（新南陽市埋蔵文化財調査報告 第1集）1984年
 ⑦ 岡田・江良遺跡 財団法人山口県教育財團山口県埋蔵文化財センター『岡田・江良遺跡 - 平成9年度山口北部農地整備事業に伴う発掘調査報告 -』（山口県埋蔵文化財センター調査報告 第5集）1998年
 ⑧ 大友氏館跡 大分市教育委員会提供
 ⑨ 武田氏館跡 史跡武田氏館跡指定地1:1000現況図 甲府市（甲府市教育委員会提供）
 ⑩ 勝瑞館跡 徳島県教育委員会『徳島県の中世城館』2011年
 ⑪ 朝倉氏館跡 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡IV』1972年
 ⑫ 三宅御土居跡 益田市教育委員会『三宅御土居跡II』1992年
- 註) 江良氏館跡については、調査報告書記載の土塁内敷地推定復元規模（東西65m、南北65m）をもとに縮尺を換算した。

VII 資 料 編

資料編では中津居館跡に関する資料の中から、今回調査で参考にしたものを中心に、文献、絵図、写真、地籍図、関連年表の順に収録する。

史料の掲載にあたっては、次のように編集を行った。

- 1 底本の体裁を原則としたが、史料の意味を変えない範囲で形式の統一をはかった。
- 2 欠損で判読できなかった文字は、〔 〕でその状態を示し、用字が推定できる場合は校訂者の註記を付した。
- 3 本文以外の部分を「 」で括り、（端裏書）（捻封）などと註記した。
- 4 墨引きは（墨引）とし、封式等について註記した。花押は（花押）とした。
- 5 絵図・写真・地籍図の掲載方向は北が上になるように統一した。
- 6 関連年表は中津居館跡に関する事項について特に重要と思われる事柄を選択し作成した。
- 7 収藏先について断りの無いものはすべて岩国歴古館所蔵である。
- 8 史料の概要は以下のとおり。

文 献

- 1 「白崎御宝殿棟札」・・・岩国市今津町所在の白崎八幡宮所蔵の棟札。文亀3年（1503年）願主は弘中右衛門尉源弘信とあり、白崎八幡宮の縁起や再建について記されている。白崎八幡宮は清綱良兼（後の弘中氏の祖か）が建長2年（1250年）に建立したと伝えられ、弘中氏が代々宮司を務めた。
- 2 「徳山毛利家文庫 諸家文書」・・・徳山毛利家文庫の中に、賀屋氏に関する文書が17点存在し、その内11点を収録した。賀屋氏と白崎八幡宮との関わりを示す文書が含まれる。山口県文書館蔵。
- 3 「萩藩閥閱録」・・・萩藩が家臣の所蔵する文書写や家系図を提出させ、編さんしたもの。巻54入江七郎左衛門に喜楽寺に関する文書が含まれる。山口県文書館蔵。
- 4 「寺社由来記」・・・元禄8年（1695年）成立。岩国領内の寺社が所蔵する文書や由来を編さんしたもの。瑞光寺は「寺領御寄附并方角無縁寺目録」に収録される。
- 5 「古村記」・・・寛文8年（1668年）完成の岩国領内で最も古い地誌。資料編 絵図1の「御領内之図」はこの地誌と同時に作成されたものと考えられる。
- 6 「享保増補村記」・・・享保11年（1726年）に岩国領内一村ごとの絵図と村記の作成が命じられ、元文3年（1738年）御蔵元に納められた。古老の聞き取りなども収録し、寛文の「古村記」に比べ格段に詳細になった。同時に作成された絵図は、資料編 絵図2に掲載した。
- 7 「玖珂郡志」・・・享和2年（1802年）吉川家家臣の広瀬喜運が記した地誌。「享保増補村記」の内容に、自身がこれまで調べた資料や情報を加えて再整理したもの。「享保増補村記」より幅広い内容となっている。
- 8 「森脇覚書」・・・吉川広家の武将森脇飛驒守春方が毛利元就の合戦に関する覚書を記し、元和7年（1621年）に広家から毛利輝元に提出された。万治3年（1660年）の「陰徳記」をはじめ、以後の軍記の作成に際して基礎史料とされている。山口県文書館蔵。

この他にも関係する記述が見られる文献が複数あるが、内容が類似または重複するため、以下に史料名を紹介し、本書への収録は見送る。

- ・『老翁物語』 佐々部元茂 寛永元年（1624年）山口県文書館蔵
- ・『陰徳記』 香川正矩 万治3年（1660年）
- ・『陰徳太平記』 香川景継 正徳2年（1712年）
- ・『岩邑志』 宮庄親輔 享保8年（1723年）
- ・『岩邑若干集』 広瀬喜運 安永8年（1779年）
- ・『御用所日記』 江戸時代 ※御用所は現在の議会に相当する岩国領の機関
- ・『證記抜粋類聚』 江戸後期
- ・『岩邑年代記』 江戸後期
- ・『岩国沿革志』 藤田葆 明治～大正

絵図

- 1 『御領内之図』… 寛文8年（1668年）に岩国領主吉川広嘉によって作成が命じられ同8年（1668年）12月完成。同時期に完成した領内の地誌「古村記」（資料編 文献5）と対をなすと考えられる。居館跡の土塁が紺色の帯状に表記され、内部には「瑞光寺」・「薬師堂」の文字と2棟の建物が描かれる。居館跡の西及び南に見られる街路は、吉川広正が中津に隠居所を造営したことに伴う家臣団の屋敷地である（屋敷地は寛文12年に廃止）。三角州の頂部から居館跡付近まで、中州を取り囲むように設けられた堤防が紺色で描かれる。
- 2 『享保増補村記 附図 向今津・中津・車村』… 岩国領内の地誌「享保増補村記」（資料編 文献6）の作成時に村毎に作成された絵図。居館跡の土塁を他より太く薄い線で表現し、「築地 東西四十九間半 南北六十二間半」「ヤクシ 瑞光寺 荒神」と記される。
- 3 『旧岩国領地（岩国藩全図）』… 慶応3年（1867年）完成の絵図。地形が正確で、旧地名や旧道・水路を現在の地形と正確に比較できる。絵図中では、村毎に色分けされ、中津村は白、隣接する車村は薄い黄色に彩色される。瑞光寺を取り巻く土塁は一定の幅で明瞭に描かれている。
- 4 『中津瑞光寺付近図』… 絵図4点と綴り1点から成る。絵図4点はいずれも、廃絶後の居館跡を、瑞光寺の寺領として描き、一部には寺領の外まで書き込まれる。内訳は下記のとおり。

① 「中津瑞光寺築地之図」	寛保元年（1741年）	紙本着色	84×57 cm
② 「中津瑞光寺築地之図」	文化8年（1811年）	紙本着色	80×53 cm
③ 「中津瑞光寺築地之図」	嘉永6年（1853年）	紙本白描	89×68 cm
④ 「旧瑞光寺境内図」	明治2年（1869年）	紙本着色	110×80 cm

綴り「旧瑞光寺境内図 付属綴り」 明治2年（1869年） 紙本墨書 13×35 cm (11頁)

①②③は近世中期～後期に描かれ、土塁形状・建物配置の他、南土塁→東土塁→北土塁の順に土塁外周に杭を打ちながら測量を実施した成果が記入される。文化8年の「諸証文帳¹⁾」によると「一 中津瑞光寺築地外東南平ラ地方物境不分明相成候得者境立被仰付候様申出依之此内寛保元年之大格を以傍に杭打境迄被仰付候事」の記述があり、②の作成の経緯を示す。①には作成時期が記されて

1) 岩国領の役人が後任に引継ぎ事項を記したもの。岩国歴史館蔵。

いないが、文中の「寛保元年之大格」が①のことを指すとみられる。②の付箋には、土墨の東南部で百姓による土墨の侵食が確認された経緯が記されることからも、①②③は、土墨（当時「築地」と呼んだ）の形状を測量し、旧状を保つ目的で作成されたとみられる。④は、瑞光寺廃寺後に、岩国藩の命で境内地の測量および払い下げを行った際の測量図面である。付属の綴りはこの測量の台帳である。測量担当者の戸田治作は鉄砲組に属した。これらの絵図は、廃絶の中津居館跡を詳細に記録した史料として貴重であり、原本を保存すると同時に、利用環境を整える必要があるため、平成23年8月に高精細カメラによる撮影を行いデジタル化した。撮影条件は以下のとおり。

・撮影場所…写真撮影専用スタジオ　・撮影方法…俯瞰撮影　・使用カメラ…4×5カメラ（6050万画素デジタルバック）　・分割合成等…絵図の大きさに応じ2～4分割で撮影後合成

4点の絵図とともに絵図に記された文字等を再現した図を収録した。文字の大小は原本に忠実になるよう大きさに差を付けた。

空中写真

『昭和22年航空写真』・・・昭和22年（1947年）終戦直後に米軍によって撮影された全12枚の内、遺跡周辺が含まれる写真の一部を拡大した。

地籍図

明治20年（1887年）作成の『中津村地限字引図』を基に作図した。原図は縮尺600分の1。居館跡は大字「背戸場」と「河本」の2頁にまたがる。地目は現在使われる地図記号で表した。

1 文 献

1 「白崎御宝殿棟札」

防州岩国白崎八幡宮者、中古当國遠石八幡化白鷺垂迹宇堂木矣、爰有清繩左衛門尉息男、弯弓欲射暴死、亦蘇、自託宣曰、我是八幡大菩薩、當堺旺化濟度衆生、故於彼琵琶頸、建長二年庚戌正月廿日、願主清繩左衛門尉、大工藤原元國、建立小社、奉致薄尊祭祀也、厥后貞和四年成子九月十七日願主弘中堂内源兼胤遷宮于白崎山寄進社領定社役等、巍々宮殿堂々奇麗鳥居表字空門、緋玉垣者字形也、出入者、必消滅無始罪障也、其後、山名細川之弓箭、天下二分之兵乱也、両家不遑劍鋒、然応仁元年五月十日多々良政弘上洛也、弘信致供奉為公私歸國之祈念上葺焉、文明四年壬辰四月初二日、源左エ門尉弘信、堂内五代子孫也、同修造司、瑞光寺住持喜豈藏主、俗姓源氏也、大工平兼宣也、百年后罹明應第五年六月二十七夜之火災神宮焼燼、（中略）

文亀三年癸亥四月二十八日 大工 平信家

願主 弘中右衛門尉源弘信 法名源忍同嫡男興輔

2 「徳山毛利家文庫 諸家文書」

① 毛利元就書状

（武頼）

白崎御祭相調從賀屋和泉守所御供御久米指越候、頂戴祝着候、仍両種到来、是又喜悅之至候、此由相心得可申遣候、謹言

八月十八日 元就（花押）

（端裏捺封ウワ書）（元通）
「（墨引）粟屋縫殿允殿
粟屋木工允殿 元就」
（就方）

② 毛利隆元書状

(武頼)
從賀屋和泉守所、白崎八幡宮御久米御供到来、令頂戴候、并一折送越悅入候、相心得可申聞候、謹言
八月廿日 隆元 (花押)

(端裏捻封ワフ書) (就方)
「(墨引) 粟屋木工允殿 隆元 」

③ 小早川隆景書状

(端裏書)
「御判」
(景頼)
賀屋市助愁訴之儀、最前之首尾申上儀候間、被遂御披露、被成御分別候様御取成肝要候、恐々謹言
十二月十九日 隆景 (花押)

(捻封ワフ書) (児玉元兼)
「(墨引) 児小次まいる 左衛門佐 申給へ 隆景 」

④ 毛利輝元継目安堵状

(賀屋武頼)
周防国岩国白崎社家之事、父和泉守為手次申付畢、御神前并公役等之事、無緩可相勧者也、仍狀如件
永祿十二年八月廿九日 輝元 (花押)
(景頼)
賀屋市介殿

⑤ 毛利輝元袖判同奉行人連署状(折紙)

(毛利輝元)
(花押)

白崎八幡御社領今度之検地辻七十五石四斗足二仕候、并修理田畠錢二十四貫兩代官裁判之由、賀屋伊豆守差出候前、
一右之半濟事、岩国之内八十六石六斗五升足・小瀬之村五十石足諸給人ニ被宛行候条、今度半濟之儀、
不申懸候、自然重而半濟之儀、被仰付候者、御方御給地ニ可被申請候、恐々謹言

天正十
四月一日 小方
児七右
元信 (花押)
井助左
元安 (花押)
就正 (花押)

(景頼)
賀屋市佐殿

⑥ 毛利輝元書状

連々警固向馳走付而、於岩国両所梅子立現寺五拾七石足之事、雖遣之置候、有出入儀、于今不知行
由言上承知候、今程究儀申付半候之条、右相當可遣置候、弥警固馳走肝要候、猶児小次可申聞候、
謹言

(天正十一年)
後正月廿二日 輝元 (花押)

(端裏捻封ワフ書) (景頼)
「(墨引) 賀屋市介殿 輝元 」

⑦ 毛利輝元書状

陣僧洞悦給究之儀、堅固申付候由、可然候、於于今者為新給遣置之条、可引渡候、猶兩人可申候、謹言

二月三日 輝元（花押）

(捺封ウワ書) (元信)
「(墨引) 小方兵部丞殿
井上助左衛門尉殿 輝元 」
(就正)

⑧ 毛利氏奉行人連署状(折紙)

(元武)
賀屋八右衛門尉拘〔 〕八幡領之事〔 〕御檢地辻百拾三石余御座候、其内半分御社領半分五拾六石余之事、可為給地之由〔 〕渡候、然者御〔 〕目之儀、為可申伺候、參上候、數年抽自余御警固役之馳走之仁候之間、此節少被成 御感候様ニ、御取合尤ニ候、恐々謹言

六月一日 内余三〔栄(花押)]
元〔 〕
長右太
元親 (花押)

(佐世元嘉)
佐余
まいる

⑨ 毛利輝元書状

(賀屋景頼)
岩国白崎八幡宮御久米御供并一折到来、祝着候、此由対市介可申与候、謹言

八月廿三日 輝元（花押）

(端裏捺封ウワ書) (元通)
「(墨引) 粟屋備前守殿
粟屋豊後守殿 輝元 」
(就方)

⑩ 毛利輝元書状

(景頼)
為歲暮之儀、從賀屋市介所祈念之卷数并蜜柑一折到来、祝着候、相心得可申聞候、謹言

十二月廿三日 輝元（花押）

⑪ 毛利輝元受領書出

受領 和泉守

慶長四年閏三月十五日

(毛利輝元)
(花押)
(元武)
賀屋八右衛門尉殿

3 「萩藩闕閱録 卷 54 入江七郎左衛門」

毛利輝元書状写

「入 与三 てる元」

尚 少も相支事候ハヽ可注進候 、かしく

喜樂寺本堂之儀、洞春寺へ引上候、爲其調其方下候、粟縫・粟惣も不罷下候条、賀屋伊豆守・久兵衛二調之儀申付候、地下中難渋之儀共候者堅申付候て、年内ニ小屋までつミのほせ候様、急度の気遣肝要候 謹言

十月十九日 てる元 御判

4 「寺社由来記」

紫野龍光院末

寺領高拾七石

瑞光寺

- 一 当寺ハ御当家当国御打入已前ヨリ雖有之旧記記録世牌等依無之何ノ世何ノ時建立ト云フヲ不知 瑞光寺殿立峯建公大禪尼ト有之位牌裏應永十二年二月廿一日逝去卜書付有之候トモ系図無知人年久寺トハ相見候ヘトモ常住物無一物
- 一 当寺昔八門前喜楽寺ノ末寺ト申伝候ヘトモ喜楽寺破滅之後永興寺ノ末寺ト成貞享年中住持石翁代廣紀公ノ命ヲ請テ大徳寺内龍光院ノ末寺トナル
- 一 廣家公御打入之砌ノ住持ハ祖等ト云其弟子悦蔵主短世ニ付テ暫住持モ断絶二間四面ノ茅屋斗残本尊モ無之年来淨土ノ道心者住居仕候事
- 一 薬師堂昔ヨリ有來候事
薬師如來 座像御長二尺五寸 行阿弥ノ作
- 一 当寺再興之事 廣正公中津へ御隠居之節寺御再興有テ石翁住持ニ被仰付寺領御寄附也
- 一 廣正公御逝去已後至廣嘉公御代寛文八年秋瑞光寺被召出年来洞泉寺ニ被建置候興経公ノ御位牌瑞光寺ニ命有御建旨被仰渡寺領薬師免加ヘ被加賜都而拾七石御寄附此時ヨリ御菩提所ト成其後廣紀公御代今田主計職事ノ時向後修理破損等横山五ヶ寺同前ニ命有沙汰旨被仰出

桃源院殿安叟常仙大居士

天文十九年庚戌九月廿七日

御俗名吉川治部少輔興経公

- 一 当寺一旦住僧モ断絶故本尊モ無之付テ石翁代觀音像ヲ求テ其後理竟院殿ヨリ彩色被仰付候事
但此觀音ハ河内寺山長福寺ト申候古跡ノ本尊ヲ當寺ヘ以御支配安置之也
- 一 当寺住持之事
中興 石翁 年久永興宥司相勤其後隨廣正公命ニ瑞光ニ住
二世 正首座
- 一 寺造立之間数
本坊 四間半ニ九間
薬師堂
柴屋
湯殿雪隱
- 一 当寺末菴 牛屋村地藏堂
此堂昔ヨリ有之十二三年已前牛屋庄屋源十郎ヨリ瑞光末菴之儀相願其ヨリ属瑞光寺其時ノ堂守宗西今其弟子自空住居
- 一 寺領之外 常仙様御為御施餓料米四斗御斎料一石六斗上ル
- 一 当寺間数
客殿 七間十間 瓦葺
庫 四間六間 同
方丈 三間四間半 檜皮

5 「古村記」

中津村

- 一、 瑞光寺ト云禪寺アリ。寺中ニ薬師堂アリ。此寺地ノ廻り大成堤築竹木ヲ植、堤ノ内、堅ノ間東西ヘ六拾弐間半、南北ヘ四拾九間半程有之。
- 一、 大藪ニ元清公御屋敷ト云大成構アリ。石垣堀ノ形今ニ有之。

6 「享保増補村記」

中津村

- 一、 寺社。

瑞光寺　臨濟派　紫野大徳寺末寺　寺領高卅石

桃源院様御位牌、当寺ニ被建置候付て、元より有来れる薬師免七斗三升を加、寺領十七石御寄附なり。是、寛文八年、石翁住職の中也。其後、元禄十二年二十三石御加増あって、高卅石也。当寺開基の年月等分明ならず、応永十二年瑞光寺と記せる位牌有。是、大内弘世の息女にして、弘中氏の妻なりと申伝う。此菩提の為に建立して牌名を寺号に用たりと見ゆるといえども、貞和四年白崎八幡再興の棟札に修造司瑞光寺と有。応永十二年よりハ五十余年以前也。弘中氏の妻女不幸以前より此寺ありし事明けし。

境内薬師堂、本尊、安阿弥作。

(朱) 慶応二年丙寅三月廿四日御達しニ（中略）

- 右、此度御吟味ヲ以、桃源院様御父子様御位牌之儀ハ永興寺へ御移し被成、跡解払被仰付。瑞光寺号之儀も追て御再興迄ハ永興寺兼帶ニ被仰興候。右ニ付、左ニ
 - 一、本堂其余御手掛之建物ハ大抵より解払、築地内祿地共ニ御引上げ被仰付候。
 - 一、土蔵・物置、其外御寺持之場相、勝手ニ取仕舞致候事。
 - 一、薬師堂之儀ハ在來之通ニして被差置。（後略）
- 一、築地。東西、四十九間半。南北、六十二間半。いつの時代、いかなる者の築しや、分明ならず。郷俗之説に、御三家当国御打入之時、隨浪院様ハ中津加陽和泉守といへる者の所に御在陳也。加陽ハ此築地の内に居住せしものなるべしといへり。築地内、高五石弐升九合也。悉ク瑞光寺給也。
- 一、大川 昔は当村と門前との中間を流れるに、御打入之後、本川筋、今津工堀川被仰付たると申伝。
- 一、中村に宮代といえる所有。是昔白崎八幡御幸の御旅所なりと郷俗伝来之説。附、此所に宮代の荒神とて森ありしを、御隠居御普請之時、築地工遷之。
- 一、昔は柳原より中村まで市ありしと也。中村ニ古市といへる所有。御打入の後、錦見町エ引ケ申たると也、郷俗伝来之説。

7 「玖珂郡志」

中津村

- 一、護国山瑞光寺。寺領十七石。紫野龍光院末。当寺ハ御打入以前ヨリ雖有之、旧記依無之、

何之時建立ト云コト不知。瑞光寺殿立峰建公大禪尼卜有之位牌ノ裏ニ、応永十二年二月廿一日逝去ト有之。

- 一 昔ハ門前喜楽寺ノ末寺ト申伝候ヘドモ、彼寺破滅后、永興寺ノ末寺ト成。貞享年中石翁住持時、広紀公ノ命ヲ請テ、大徳寺内龍光院末寺トナル。
- 一 広嘉公御代、寛文八年、被召出、年来洞泉寺ニ被建置候興経公御位牌、可有御建立旨被仰渡、寺領薬師免加ヘ、被加賜、都テ拾七石御寄附、此時ヨリ御菩提所ト成。
- 一 本尊無之付テ、石翁代、觀音像ヲ求テ、其後、理竟院殿ヨリ彩色被仰付。但、此觀音ハ、河内寺山ノ長福寺ト申古跡ノ本尊、当寺工御支配。喜按ニ、瑞光寺ハ大内弘世ノ息女ニシテ、弘中氏妻也ト申伝。此菩提ノ為ニ建立ト雖、貞和四年、白崎八幡宮再興ノ棟札ニ、修造司瑞光寺アリ。応永十二年ヨリ五十余年以前也。然バ、往古ヨリ有之ト見ヘタリ。
- 一 薬師堂。昔ヨリ有来ル。薬師坐像、御長二尺五寸。行阿弥作。広正公御隠居之節、御再興、寺領御寄附也。俗説ニ、昔当所朝日長者、一人ノ娘ニ離レ、菩提ノ為ニ此尊像ヲ安置也。堂ノ下ニ黃金千両、朱砂漆各千盃埋置ト也。堂ノ下、今金精顯ルト云リ。此築地、往古長者、土一盃ニ米一盃、石一パイニ銀一パイ可遣トノ事ニテ築キショシ。然ニ、成就ノ後、不遣由。故ニ長者モイツシカ衰ケルト也。歌ニ、

朝日さす夕日かゞやく其下に金千盃うるし千ばい

一説ニ、金ヲ埋タルハ姫ヶ子島ト云。此所、朝日夕日輝也。

- 一 大川、昔ハ当村ト門前トノ中間ヲ流タリ。今津ハ地繞也シニ、御打入ノ后、本川筋今津ヘ、寛文六年御掘ラセ被成候。
- 一 中村ヨリ柳原迄、昔ハ市アリシト也。中村ニハ古市ト云ヘル所アリ。御打入ノ后、岩国町ヘ引ケ申タル由。
- 一 築地。東西四十九間半、南北六十二間半。築地ノ上、悉ク椿ヲ植。郷俗ノ説ニ、此築地ハ、昔椿長者ノ住シ旧跡ナリ。中古以来、加陽伊豆守近安ト云者居住ス。御旧記『七巻書』ニ云、玖可鞍掛城被成御責、弘治元年、元春公ハ中津加陽伊豆守ト云者ノ方ニ被成御座タルト有之。今、門前村源十郎先祖也。長者トハ、彼ガ先祖ノ事ニヤト『岩邑志』ニハ有之。此築地ハ、今ハ畠(高五石武升九合也。寺領高ノ内也)ニテ、瑞光寺而已有リ。加陽ハ十八万石ノ大名ノ由。

8 「森脇覚書」

防長進軍の事

- 一、大内義長ハ吉見押に渡川御陳候。内藤隆世ハ右田が嶽ニ、陶五郎殿ハ富田の若山居城候。玖珂蓮花山にハ柵杜、くら懸には杉治部太夫、此兩人之儀ハ此方へ懇望申付て、宮之御陳迄人質を出し、御味方ニ被参候。然処ニ、治部太夫富田ヘ之通路人を遣被申候。柵杜さす川二人を出し、待伏仕候て、數度之状を取、元就様へ上ヶ被申候。就夫河内のだん、元就様・隆元様御陳替候。元春様・隆景様御庄之町御陣取候。其曉くらかけへ被寄懸、治部太夫被打果、頸八百余打取候。其日、岩国永興寺まで御打入候。隆景様琥珀院、元春様中津かや和泉所御宿陳候。

2 絵 図

『御領内之図』(部分) 寛文 8 年 (1668 年) 418×479 cm 紙本着色

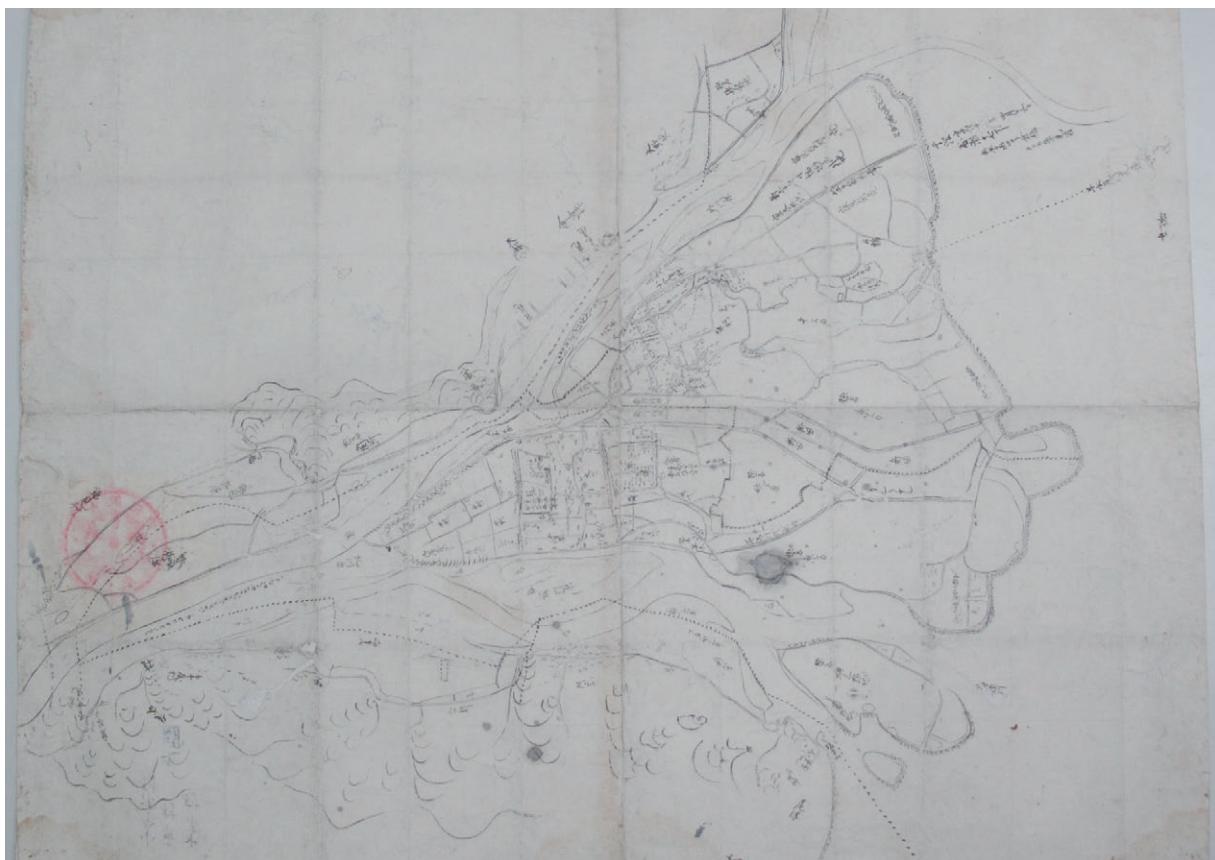


中津村と周辺地域 (中心の黄色く着色された地域が中津村)



居館跡周辺拡大 (中心の紺で表わされる矩形が土塁。土塁内の建物は「薬師堂」および「瑞光寺」。対岸の「八幡」は白崎八幡宮。)

『享保増補村記 附図 向今津・中津・車村』 享保 17 年（1732 年） 54×42.5 cm 紙本白描



三角州全域



居館跡付近拡大（居館跡内の文字は「ヤクシ」「瑞光寺」「荒神」「築地 東西四十九間半 南北六十二間半」）

『旧岩国領地（岩国藩全図）』（部分）慶応3年（1867年） 428×460cm 紙本着色



三角州全域

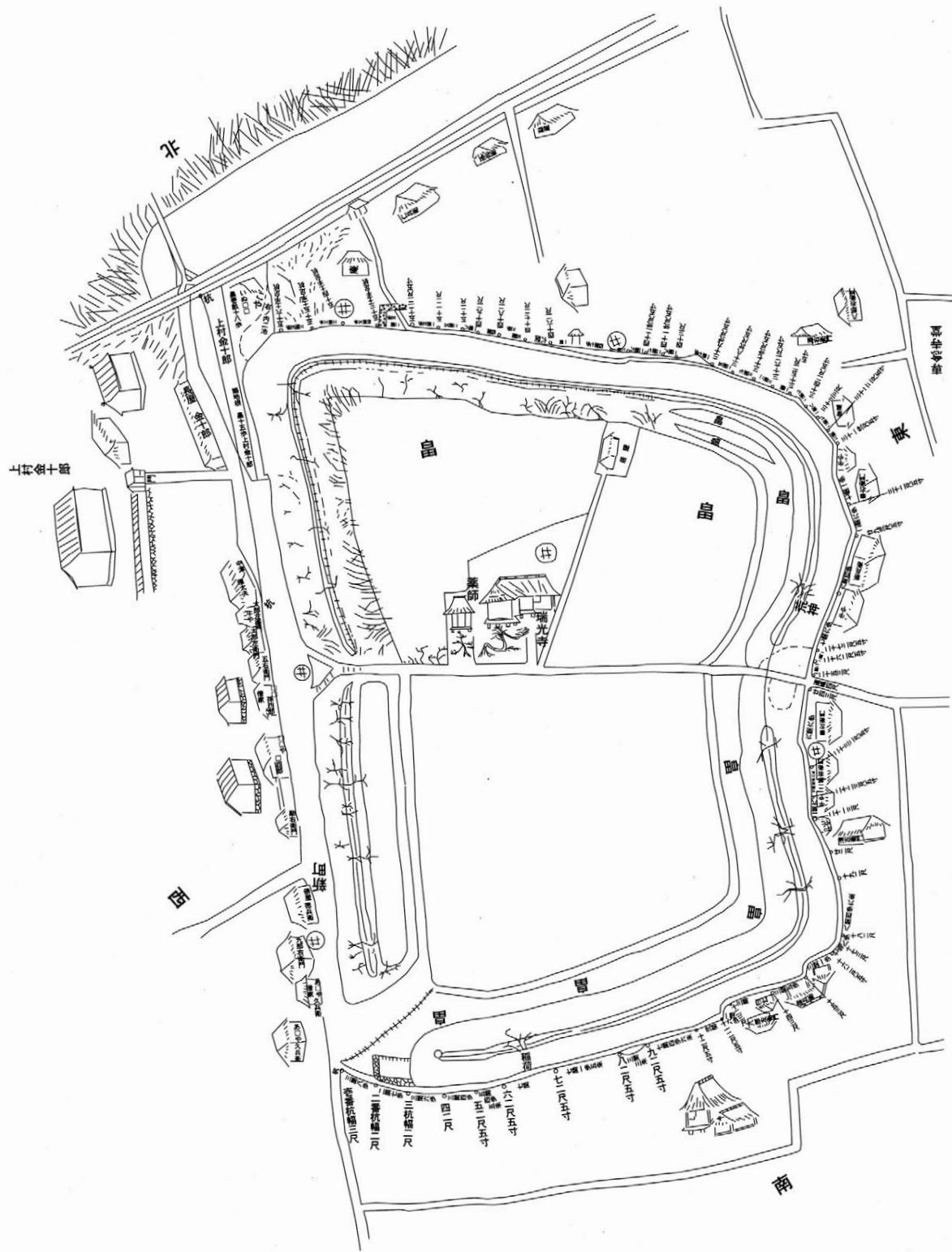


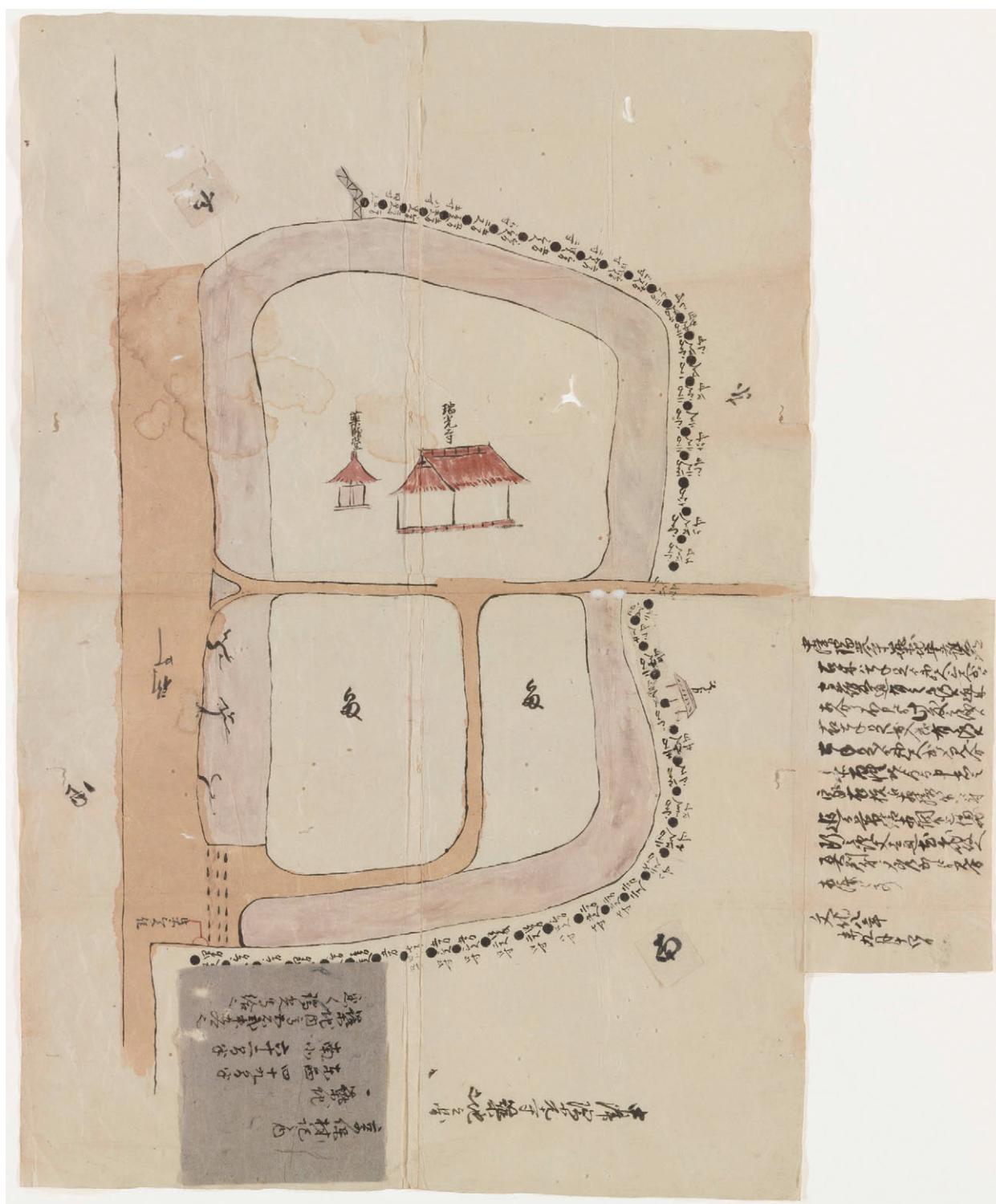
居館跡周辺拡大（中心に瑞光寺と記される場所が居館跡）



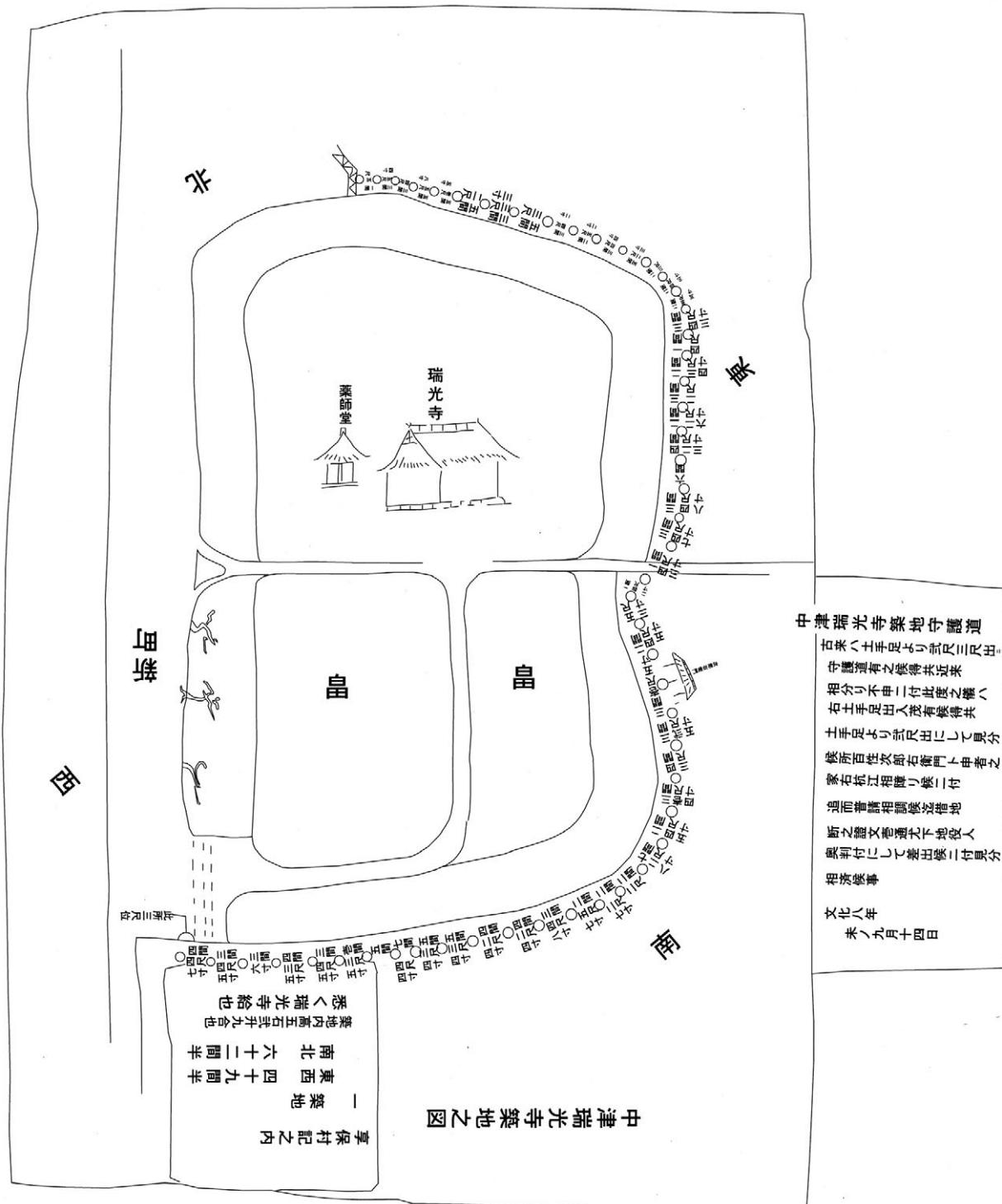
「中津瑞光寺附近図」 絵図① 「中津瑞光寺築地之図」 寛保元年（1741年） 84×57cm 紙本着色

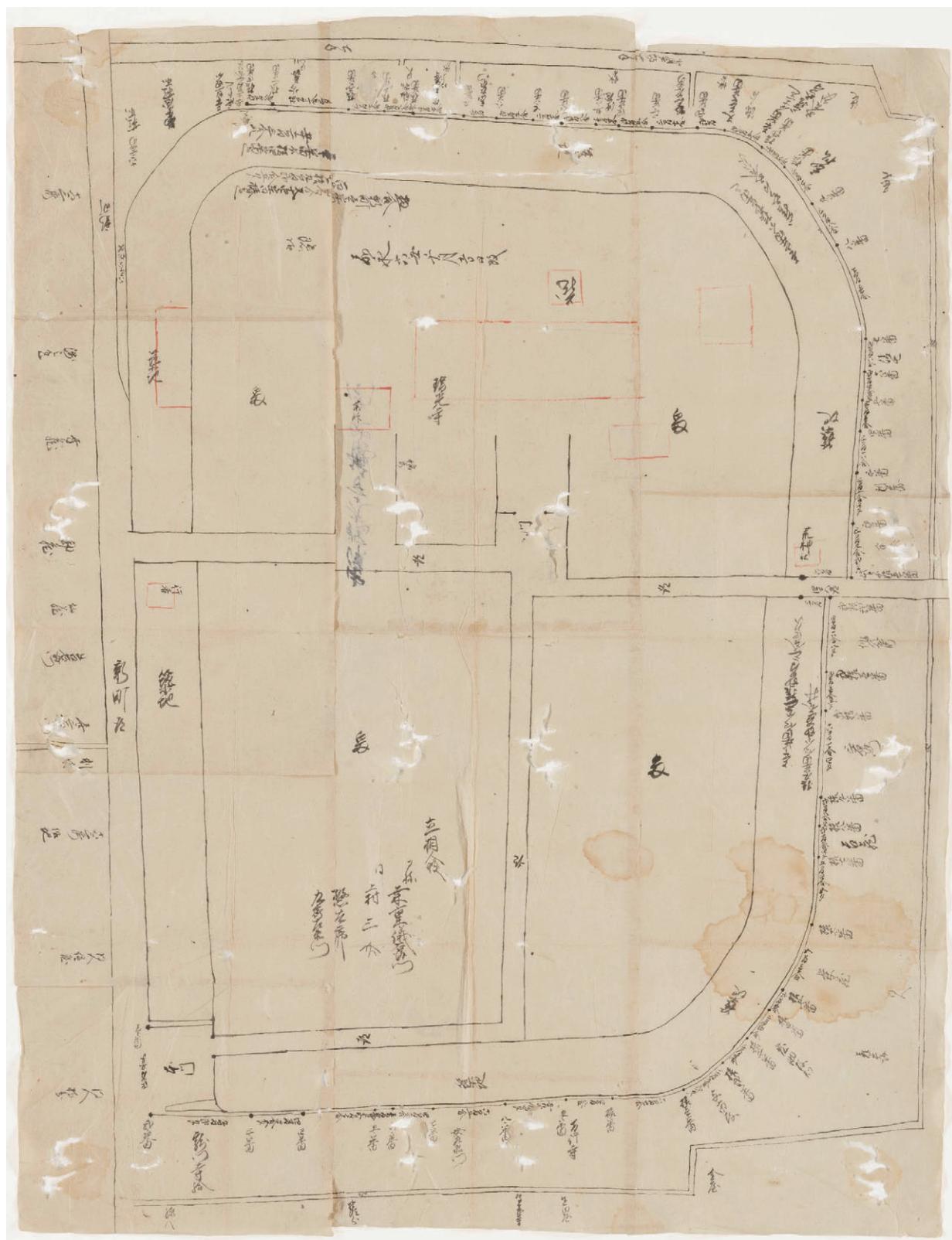
中津瑞光寺築地之図



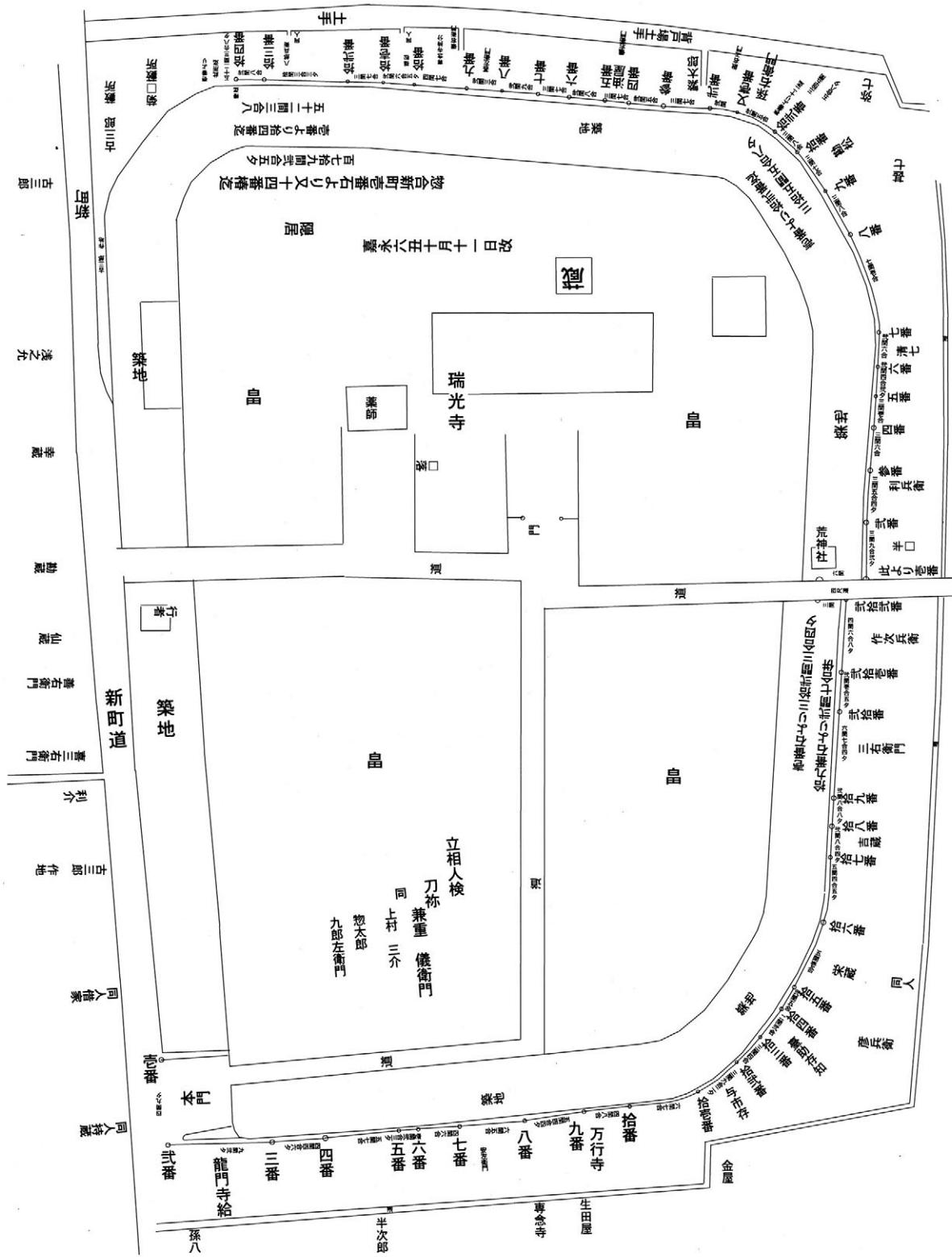


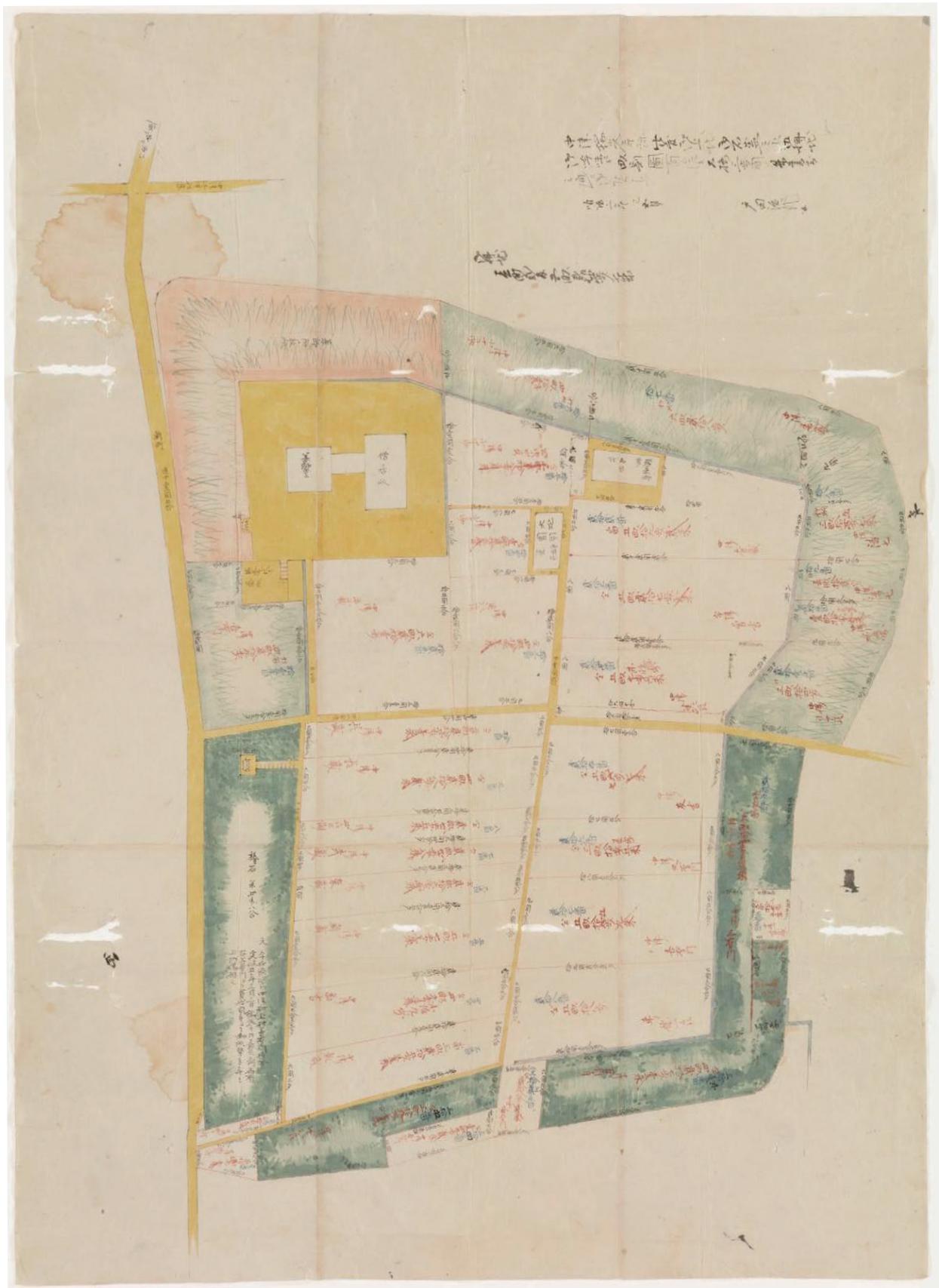
「中津瑞光寺附近図」絵図②「中津瑞光寺築地之図」 文化8年（1811年）80×53cm 紙本着色





「中津瑞光寺附近図」 絵図③「中津瑞光寺築地之図」 嘉永 6 年（1853 年） 89×68 cm 紙本白描





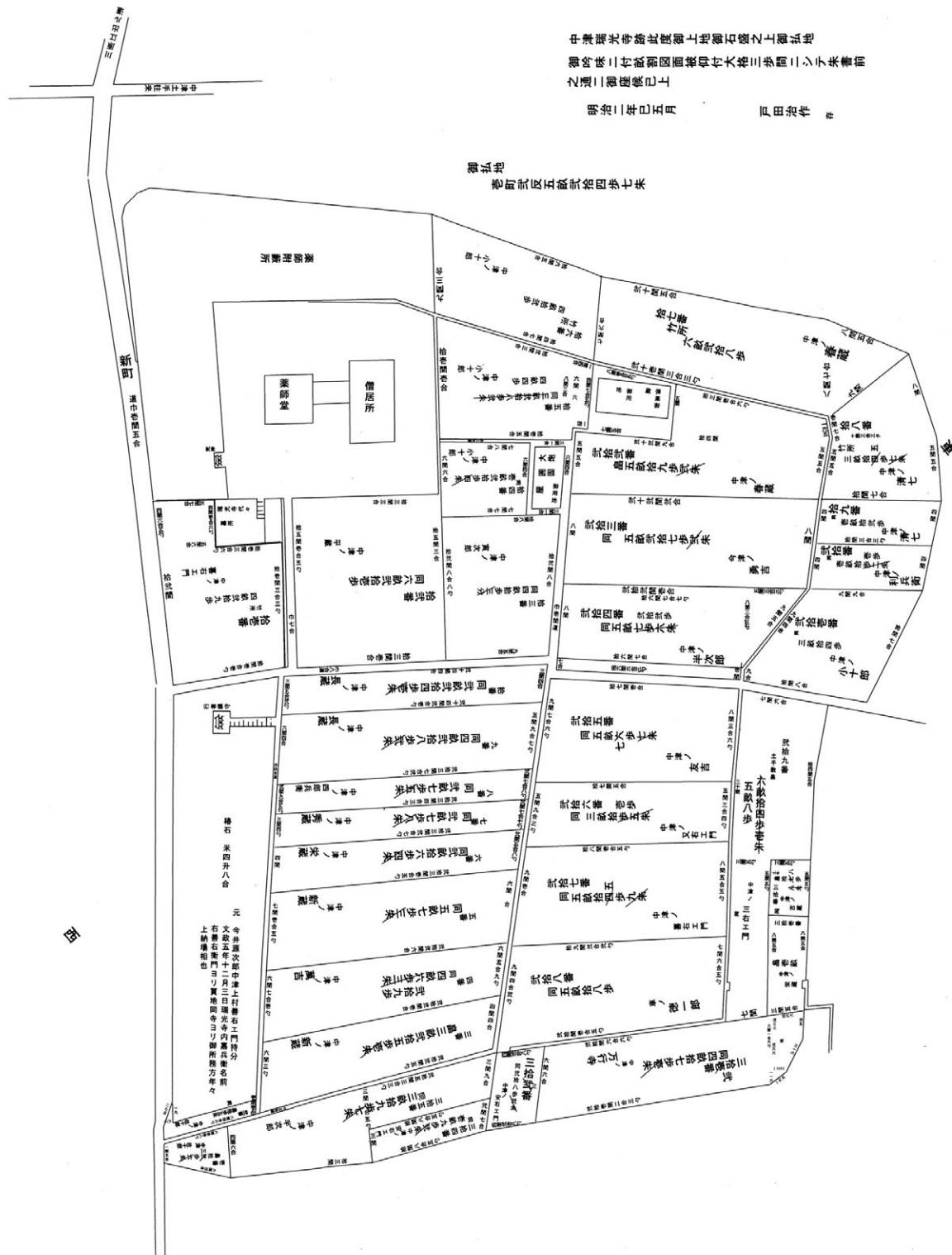
「中津瑞光寺附近図」 絵図④ 「旧瑞光寺境内図」 明治 2 年（1869 年） 110×80cm 紙本着色

中津瑞光寺跡此度御上地御石壁之上御私地
御吟味二付畠割圖面帳仰付大格三歩間ニシテ朱書前
之通二一御座候已上

明治二年己五月

戸田治作

御私地
壱町弐反五畝弐拾四歩七朱



3 空中写真・地籍図



昭和22年（1947年）米軍撮影航空写真（居館跡は写真中央）



明治20年（1887年）『中津村地限字引図』より作図

4 関連年表

年号	西暦	月・日	事項	典拠
11世紀頃			中州が姿を現し始める。	『岩国市史上』
元暦元	1184	2・	一の谷の戦いで平家方の武士に、石国源太維道の名が見える。	『源平盛衰記』
文治元	1185	3・	壇の浦の戦いで平家方に、岩国二郎兼秀・同三郎兼末の名が見える。	『吾妻鏡』
建長2	1250	1・20	清綱良兼、今津琵琶頸に小社を建立。(白崎八幡宮創建)	『白崎御宝殿棟札』
延慶2	1309		大内弘幸が横山に永興寺を創建。	『岩国市史上』
貞和4(正平3)	1348	9・17	弘中兼胤、今津琵琶頸にあった八幡宮を白崎山に遷宮し社領を寄進。	『白崎御宝殿棟札』
正平13(延文3)	1358		大内弘世、南朝方の長門国守護職に任命される。	『大内氏實錄』
貞治2(正平18)	1363		大内弘世、北朝方に転じ室町幕府から周防・長門両国の守護職に任命される。	『大内氏實錄』
貞治6(正平22)	1367		大内弘世、横山永興寺を整備し、普明国師を推戴。	『岩国市史上』
応永12	1405		弘中氏、妻の菩提を弔うため瑞光寺を建立か。	『享保増補村記』
文明4	1472	4・2	弘中弘信が大内政弘上洛の供に際し白崎八幡宮上葺。	『白崎御宝殿棟札』
天文10	1541	5・	安芸武田氏が滅亡。武田氏に属していた賀屋氏がのちに毛利氏の直轄水軍に編入される。	『陰徳記』 『岩国市史通史編一』
天文20	1551	9・1	大内義隆、陶隆房(晴賢)らに背かれ、長門深川大寧寺で自刃。	『岩国市史上』
弘治元	1555	10・1	毛利元就、安芸国厳島で陶晴賢を討つ(厳島の合戦)。	『森脇覚書』
	10・3		弘中隆兼父子、厳島の竜之馬場で自刃。	『房顕覚書』
	10・27		毛利軍、周防国鞍掛城で杉隆泰を討った後、岩国に戻り、吉川元春が中津の「かや和泉所」に宿陣。 (この後、弘治3年(1557年)まで岩国が毛利氏の防長経略拠点となる)	
永禄12	1569		毛利輝元、賀屋景頼に白崎八幡社家の相続を命じる。	『徳山毛利家文庫』
天正5	1577	7・	毛利輝元、栗屋元重に弘中氏の旧居城亀尾城の管理を命じる。	『岩国市史通史編一』
天正16頃			門前の喜楽寺、毛利輝元の命により解体され広島に運ばれる。実務担当者として賀屋伊豆守の名が見える。	『萩藩閥閱録』
慶長6	1601	8・	吉川広家、毛利氏防長移封にともない岩国に入る。	『岩国市史上』
万治3	1660	2・29	2代領主吉川広正の中津隠居所起工。	『岩邑年代記』
寛文元	1661	10・18	中津隠居所完成。吉川広正が士卒二百余人とともに移り住む。	『岩邑年代記』
寛文2	1662		吉川広正により、瑞光寺が再興される。 吉川広嘉の発病により吉川広正の隠居が延期。中津がしばし藩政の中心となる。	『享保増補村記』 『岩邑年代記』
寛文6	1666	5・5	吉川広正死去。葬儀を瑞光寺で執行。	『岩邑年代記』
寛文7	1667	7・9	吉川興経(桃源院)の位牌を瑞光寺に移して菩提寺とし17石寄附。	『寺社由来記』
貞享3	1686	5・20	瑞光寺、京都紫野龍光院の末寺となる。	『寺社由来記』
元禄12	1699	9・7	瑞光寺で桃源院百五十年忌の法事。13石の加増を受け計30石となる。	『寺院雑記』
寛延2	1749	2・2	老朽化と桃源院二百回忌に伴い、瑞光寺の建替が決定。	『岩邑年代記』
	9・16～		桃源院二百回忌が執行される。	『御用所日記』
慶応2	1866	3・24	瑞光寺廃寺。吉川興経の位牌を永興寺に移し、薬師堂以外の建物を解体。	『享保増補村記』
	6・14～		四境戦争 芸州口の戦い	
明治元	1868	6・6	吉川経幹を城主格にするとの奉書により、岩国藩となる。	『岩国市史上』
明治2	1869	5・	旧瑞光寺境内地が測量され払い下げられる。	『中津瑞光寺附近図』



中津居館跡周辺地域の地形（南から）



中津居館跡周辺地域の地形（西から）

図版 2



中津居館跡全景（北から）



中津居館跡全景（南から）



TR0901 中世遺構面検出状況（東から）



TR0901 近世の瑞光寺関連建物遺構 SB090101（北東から）



TR0901 SS090103 硏石痕・根石痕検出状況（南から）



TR0901 SS090102 根石痕検出状況（北から）



TR0901 石090105 根石痕・遺物出土状況（南から）



TR0901 SK090107 (東から)



TR0901 SK090105 (近世) (東から)



TR0901A 近世遺構面検出状況（東から）



TR0901C 近世遺構面検出状況（北から）



TR0901D・E 近世遺構面検出状況（東から）



TR1001 全景（北西から）



TR1001 東壁深掘り（北西から）



TR1001 SK090105 および SS100101（西から）



TR0903 全景（南から）



TR0805 全景（東から）



TR1003 全景（北から）



TR1003 全景（南西から）



TR1003 全景（北西から）

○は建物跡の柱穴および地下式礎石（SB1003-SP01～SP11）



TR1003-2 全景（南東から）



TR1003-2 全景（東から）



TR1003 SB100301-SP01 (西から)



TR1003 SB100301-SP02 (西から)



TR1003 SB100301-SP03 (西から)



TR1003 SB100301-SP04 (南から)



TR1003 SB100301-SP05 (南東から)



TR1003 SB100301-SP06 (南から)



TR1003 SB100301-SP07 (南から)



TR1003 SB100301-SP07 (手前)・SP08 (奥) (北から)

図版 10



TR1003 SB100301-SP09 (東から)



TR1003 SB100301-SP10 (東から)



TR1003 SB100301-SP11 (東から)



TR1003-2 SB100301-SP12 (東から)



TR1003-2 SB100301-SP13 (東から)



TR1003-2 SB100301-SP14 (東から)



TR1003-2 SB100301-SP15 (南から)



TR1003-2 SB100301-SP16 (南から)



TR1003 SK100309・SK100310・SB100301-SP03 検出状況（西から）



TR1003 SK100310 土器出土状況（東から）



TR1003 SK100313 鉄滓出土状況（東から）



TR1003 近世遺構面検出状況（北から）



TR0902 全景（南東から）



TR0902 西壁（北東から）



TR0902 南端近世遺構検出状況（南から）



TR0902 上層集石および北端集石（南から）



TR0902 土壌充填石・北端集石（南から）



TR0902 北端深掘りおよび北端集石（南東から）



TR0902 西壁（北から13～17.5mの範囲）（東から）



TR0902 西壁（北から7～13mの範囲）（東から）



TR0902 西壁（北から3～9mの範囲）（東から）



TR0902 西壁（北から0～5mの範囲）（東から）



TR1004 土壙断ち割り西壁（北東から）



TR1004 土壙断ち割り東壁（北西から）



TR1004 西壁（北から 12～15m の範囲）（東から）



TR1004 西壁（北から 10～13m の範囲）（東から）



TR1004 西壁（北から 7～11m の範囲）（東から）



TR1004 西壁（北から 4～9m の範囲）（東から）



TR1004 東壁（北から 8～14m の範囲）（西から）



TR1004 土器集積 100401 検出状況（東から）



TR1004 南壁および南端上面集石（北から）



TR1004 SK100401（東から）



TR0802 全景（北から）



TR0802 西壁（北から 0 ~ 4.5m の範囲）（東から）



TR0802 集石上層（南から）



TR0802 集石上面（北東から）



TR0802 西壁（北から 3 ~ 6m の範囲）（東から）



TR0802 土壙断ち割り（北から 5 ~ 10m の範囲）
(北から)



TR0802 西壁および土壙断ち割り（南から）



TR1002 全景（北から）



TR1002 土墨基底部検出状況（北から）



TR1002 土墨基底部検出状況（東から）



TR1002 東壁（北から18～21mの範囲）（西から）



TR1002 土墨基底部・南壁・残存土墨（北から）



TR1002 東壁（南西から）



TR1002 東壁（北から0～6.5mの範囲）（南西から）



TR0803 全景（西から）



TR0803 土壙基底部検出状況（南から）



TR0803 土壙基底部検出状況（南から）



TR0803 土壙基底部断ち割り状況（南西から）

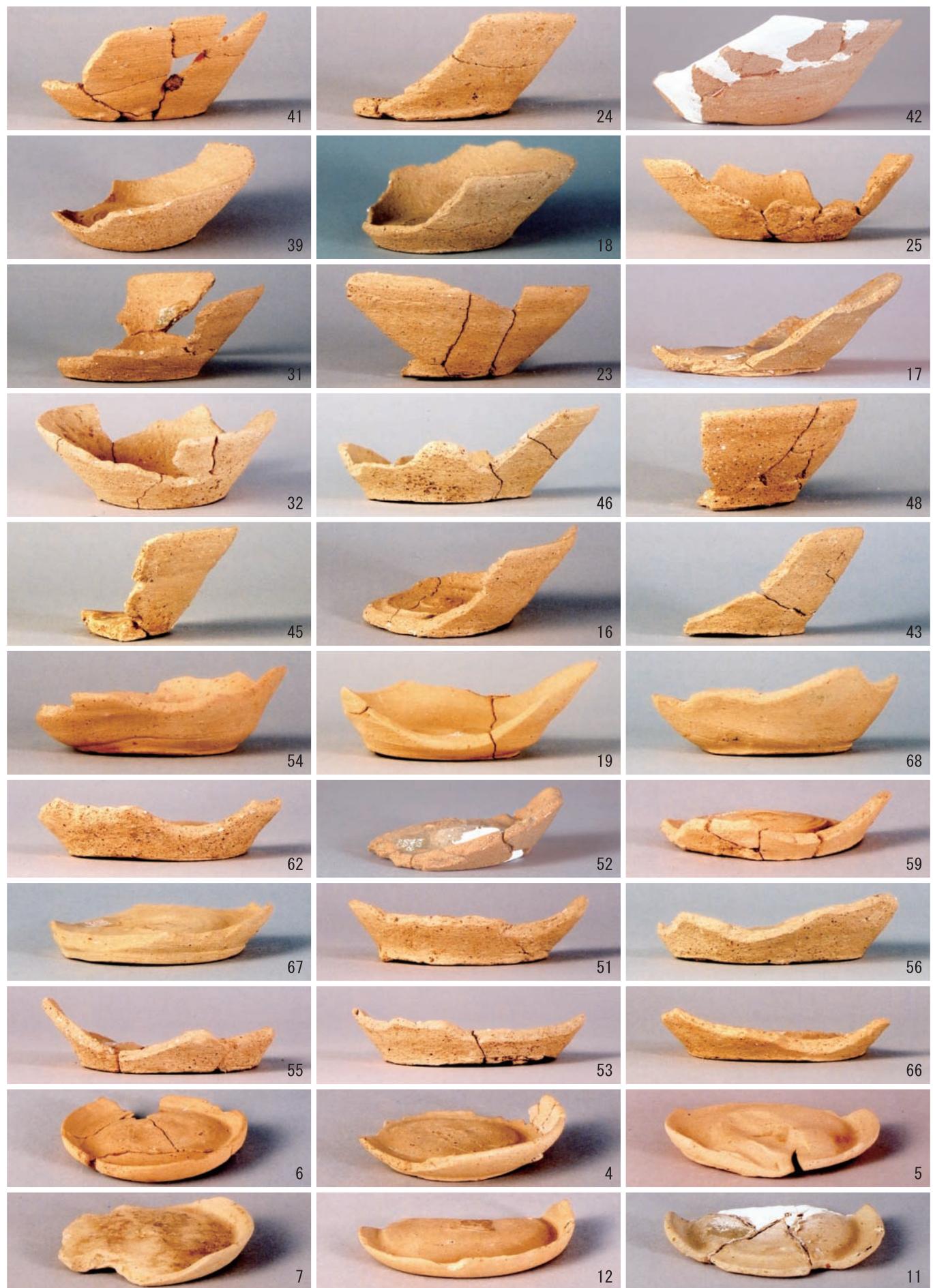


TR0804 全景（南東から）

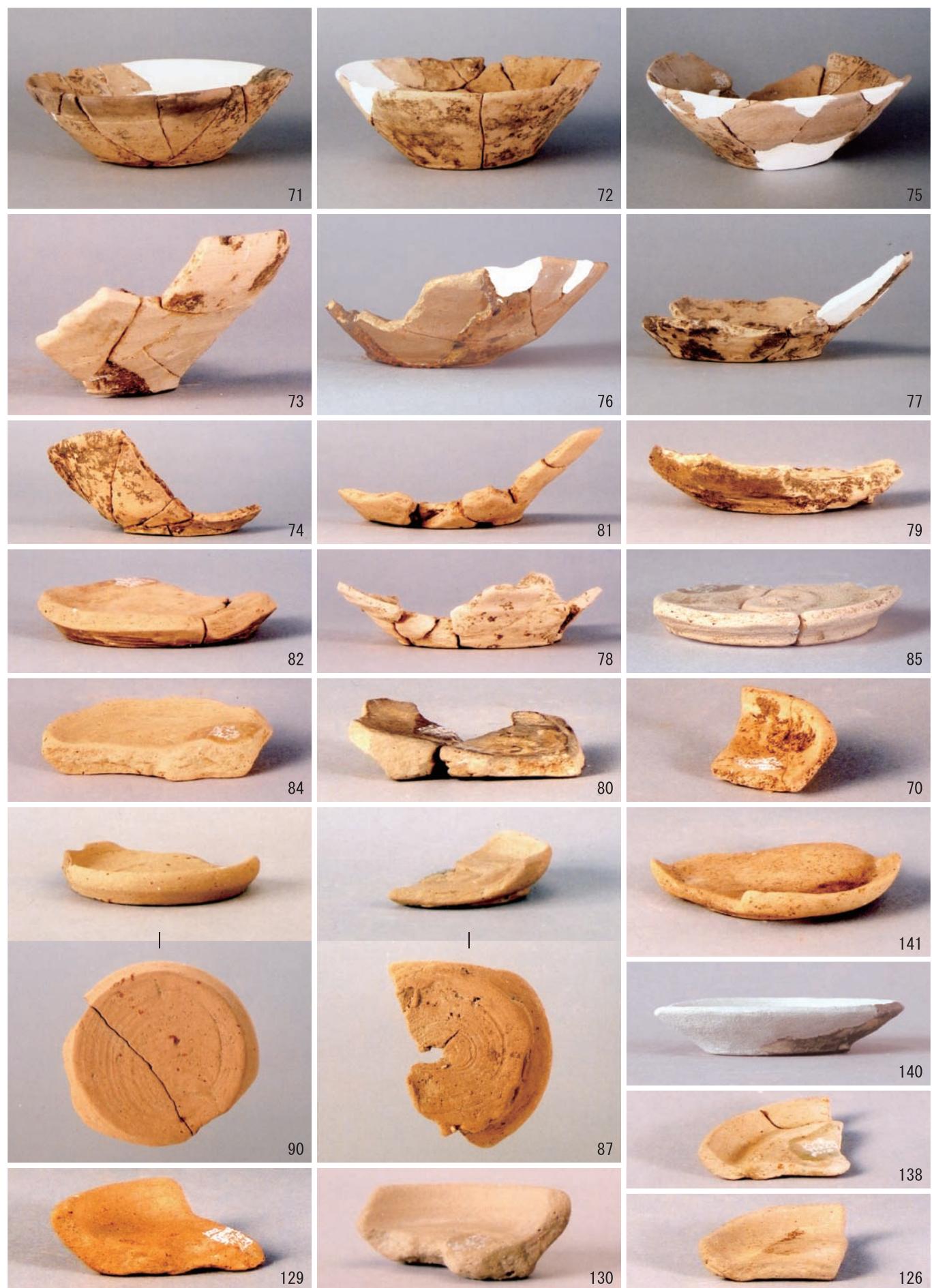


出土遺物 1 SK100310 出土土師器

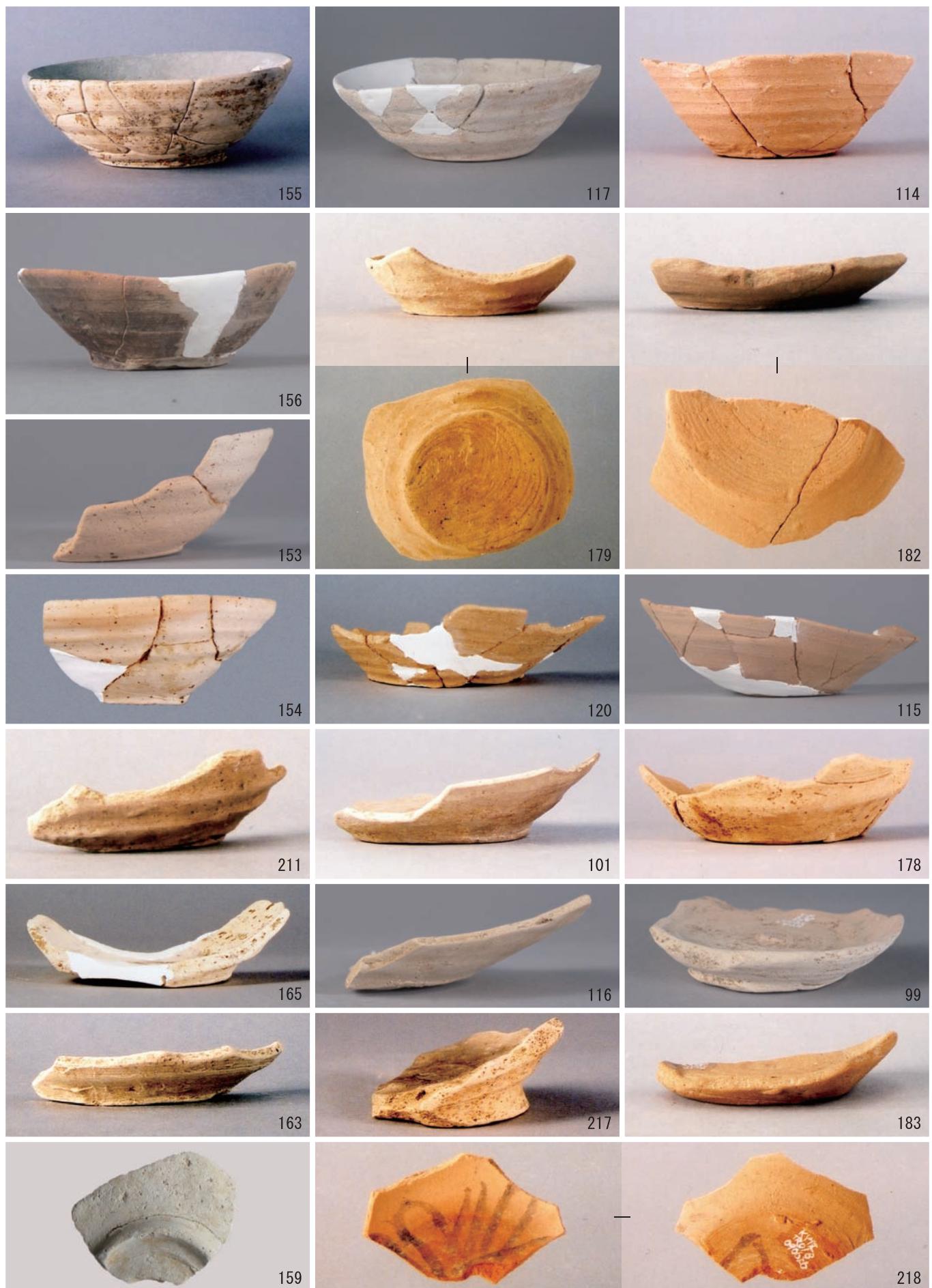
図版 22



出土遺物 2 SK100310 出土土師器



出土遺物 3 土器集積 100401 出土土師器・その他土師器

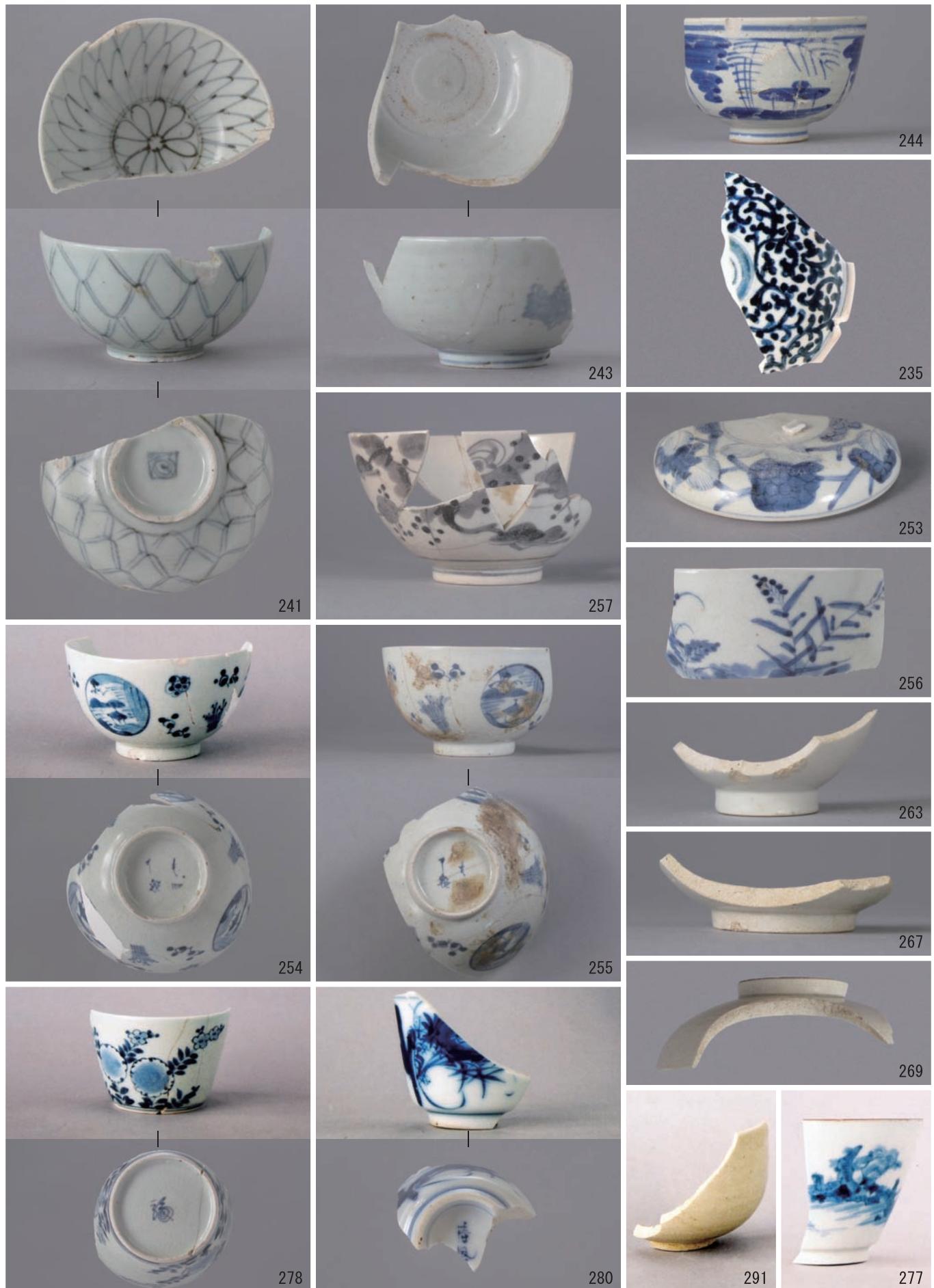


出土遺物 4 その他土師器



出土遺物 5 鍋・貿易陶磁器・甕・擂鉢・火鉢 ほか

図版 26



出土遺物 6 近世陶磁器



出土遺物 7 近世陶磁器



出土遺物 8 擂鉢・甌・土製品・瓦（近世）



出土遺物 9 瓦（近世）・鉄製品・鉄滓・銭貨

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかづきよかんあと(きゅうかやいすみのかみきよかんあと)							
書名	中津居館跡(旧加陽和泉守居館跡)							
副書名								
シリーズ名	岩国市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	神崎前 蔵中庸夫 上山佳彦							
編集機関	岩国市教育委員会							
所在地	〒741-0081 山口県岩国市横山二丁目7-19 TEL 0827-41-0452 FAX 0827-41-0478							
発行年月日	2012年3月30日(平成24年3月30日)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	。	、	。	、			
なかづきよかんあと 中津居館跡	やまぐちけんいわくにし 山口県岩国市 くすのきまちさんちょうめ 楠町三丁目	35208		34° 9' 23"	132° 12' 38"	①20080728～ 20081002 ②20090525～ 20090904 ③20100607～ 20101026 ④20110207～ 20110329	①58.0 ②255.5 ③229.3 ④101.5 計644.3	試掘・確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中津居館跡	城館跡	中世	大型堀立総柱建物跡 土器一括廃棄土坑 土坑 溝 柱穴 土器集積 土壘 堀状遺構 近世建物基礎石積 集石	1棟 1基 29基 4条 74個 1カ所 3カ所 2カ所 1基 7カ所	土師器、瓦質土器、陶器、 輸入青磁・白磁、近世陶磁器、 弥生土器、須恵器、近世瓦、 土錐、土製品、鉄製品、鉄滓、 銭貨、貝殻、人骨	居館内部で柱間2.4m、少なくとも4間四方(9.6×9.6)の規模を有する大型堀立総柱建物跡が確認された。 14世紀前半代と見られる土師器約70点の一括廃棄土坑が検出された。 特徴的な土壘構造および堀状遺構を確認した。		
要約	<p>中津居館跡は、14世紀前半頃に錦川河口の三角州に築造され、室町時代後期(戦国期)の16世紀半ばまで存続した中世の平地居館であることが調査を通じて明らかになった。</p> <p>居館は一辺約120～170m規模の土壘が周囲を囲み台形状の平面形を呈する。土壘の断ち割り調査により、シルトや川砂の盛土層、氾濫堆積砂層、花崗岩質の山石を外側に充填して補強した盛土層の3段階の築造工程からなる特徴的な土壘の構造が確認された。居館内部では、地下式礎石を伴い柱間2.4m(8尺)で4間×4間(9.6m×9.6m)の規模を有する大型堀立総柱建物跡1棟が発見された。この建物は、隣接する一括廃棄土坑出土の土師器の年代観や放射性炭素年代測定(AMS測定)法による分析結果から14世紀前半代のものと見られる。なお、これらの土師器は山口県内の土師器編年の基準となる一括資料ともなった。土壘の外側では堀状遺構が検出され、初期段階に堀が巡っていた可能性もあるが、所在や規模の確認は今後の課題である。</p> <p>中津居館跡の築造主を示す直接的史料は確認できないものの、周防・長門国(山口県域)を統治した大内氏の影響を一定程度受けながら、中世の岩国地域で勢力を持った弘中氏の関与のもとで築造・運営されたと考えられる。</p> <p>以上、中津居館跡は、現存する土壘とともに地下の遺構の保存状態が良好であり、守護所大内氏館跡に匹敵する規模を有し、中世の平地居館としては全国的に見ても特筆すべき希少な遺跡といえる。</p>							

岩国市埋蔵文化財調査報告 第1集

中津居館跡

(旧加陽和泉守居館跡)

発行年月 2012年3月

編集・発行 岩国市教育委員会

〒741-0081 山口県岩国市横山二丁目7-19

印 刷 大村印刷株式会社

〒747-8588 山口県防府市西仁井町一丁目21番55号